

総持寺遺跡

古墳時代中期の小規模古墳群の調査

2005年3月

大阪府教育委員会

總持寺遺跡

古墳時代中期の小規模古墳群の調査

2005年3月

大阪府教育委員会

序 文

総持寺遺跡の所在する三島地域は、古墳時代前期から後期にかけての多数の古墳が存在する地域であることから、数多くの調査・研究がなされており、古墳時代を研究する上で全国的に見て重要な地域であります。

総持寺遺跡は、安威川の左岸、阿武山の南に広がる広大な富田台地の西南辺部に位置し、同一台地上の北側には、古墳時代中期に築造されたとされる全長約226mを測る太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵古墳）が存在しています。

大阪府教育委員会では、茨木市三島丘2丁目に所在する府営茨木三島丘住宅の建替え工事に先立ち、平成6・7・8・10・11・12年度の6カ年度にわたり、面積約23,000m²にもおよぶ総持寺遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、弥生時代後期から中世に至る膨大な数の遺構を確認しました。検出した遺構は、弥生時代後期では、4基の周溝墓と住居跡群、古墳時代中期では43基の小規模な古墳、飛鳥・奈良時代では建物群、中世では溝と道に囲まれた集落跡と墓などであります。

今回は、それらの中で古墳時代中期の古墳について報告を行ないました。検出した古墳からは、須恵器、紡錘車、鉄鎌、ガラス小玉などの副葬品、古墳の上に配置されたと推定される円筒埴輪、朝顔形埴輪、馬などを模った形象埴輪などの遺物が多数出土しました。

特に古墳から出土した埴輪は、太田茶臼山古墳に供給するために築造されたとされる国史跡である新池埴輪窯跡群から供給されたことが、分析および研究の結果判明し、三島地域内での埴輪の供給関係の一端が明らかになりました。地方の盟主とされる大規模古墳の太田茶臼山古墳と小規模な古墳の集まりである総持寺古墳群をはじめとする小規模墳の成立を考える上で重要な手掛かりになるものであり、この成果は、今後の古墳時代研究において極めて重要な資料になるものと思われます。

なお、引き続き、弥生時代、飛鳥・奈良時代、中世編として2冊目を刊行する予定で整理作業を進めております。

最後になりましたが、発掘調査、整理作業、報告書作成にあたりご協力いただきました大阪府建築都市部住宅整備課、茨木市教育委員会をはじめとする地元住民の皆様ほか関係者の方々に深く感謝するとともに、今後とも文化財行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成17年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 向井正博

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府建築部住宅建設課（現・建築都市部住宅整備課）より依頼を受け、府営三島丘住宅建替え工事に先立って実施した茨木市三島丘2丁目所在、総持寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、総持寺遺跡で検出した、弥生時代後期から中世までの遺構の内、古墳時代中期を中心として報告する。
3. 現地調査は、平成6年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師奥和之、平成7年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師酒井泰子、平成8年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師山上弘、平成10・11・12年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係・調査第一グループ技師阿部幸一を担当者として実施した。それに伴う遺物整理は、平成15年度から開始し、平成15年度は、調査管理グループ技師林日佐子、小浜成、平成16年度を調査管理グループ技師竹原伸次、林日佐子、藤田道子が担当した。
なお、各年度の調査概要については、『総持寺遺跡発掘調査概要』I・IIが刊行されている。
4. 本調査の写真測量は、平成6年度を、株式会社ジェクト、平成7年度を東武計画株式会社、平成8年度を株式会社パスコ、平成10年度をアジア航測株式会社、平成11年度を三和航測株式会社、平成12年度を株式会社かんこうと富士測量株式会社に委託した。なお、写真撮影フィルムについては、各受託会社において保管している。
5. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房、出土した鉄製品の処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 第4章第2節出土埴輪の蛍光X線分析の成果については、三辻利一氏（大谷女子大学）から分析成果および原稿を賜り、掲載した。
8. 本書の編集は、奥が担当し、執筆は、各調査担当者である奥、山上、阿部および整理担当者である小浜の他に、第2章第2節、第4章第3節・第6節を田中智子（立命館大学大学院博士前期課程）が行った。なお、執筆者名を文末ないしは文頭に記した。また、英文抄録については、文化財保護課指定文化財グループ技師有井宏子が行った。

9. 府営住宅建替え工事に伴う発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。

10. 現地での発掘調査、遺物整理および本書作成にあたっては、下記の方々、機関から助言および協力を得た。記して感謝いたします。

奥井哲秀、宮脇薰、濱野俊一（茨市教育委員会）、富成哲也、森田克行、橋本久和、鐘ヶ江一郎（高槻市教育委員会）、有馬伸、加藤一郎、清喜裕二、徳田誠志（宮内庁書陵部）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、免山篤（茨市文化財保護委員）、藤原学（吹田市博物館）、福岡澄男、岡本圭司（財団法人大阪府文化財センター）、高橋克壽（独立行政法人奈良文化財研究所）朴天秀（韓国 慶北大学校）、和田晴吾（立命館大学）、茨市教育委員会、高槻市教育委員会、大谷女子大学、宮内庁書陵部
(敬称略・順不同)

11. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は5,132円である。

凡　　例

1. 座標については、航空測量に用いた座標が、日本測地系平面直角座標（第VI系）であったため、全て世界測地系平面直角座標（第VI系）に変換し用いた。

例としては

X = -129,500、Y = -38,100 (日本測地系平面直角座標 (第VI系))

→ X = -129,153.3463、Y = -38,360.9061 (世界測地系平面直角座標 (第VI系)) となる。

2. 方位については、座標北で示し、標高については東京湾平均海水面 (T. P.) を基準とした。

3. 土色については、基本的に小山正忠・竹原秀夫編 『新版土色帖』 日本色彩研究所 1992年版に準拠した。

4. 遺構番号については、基本的に年度ごと、ないしは調査区ごとに番号を付けた。しかし、今回報告する古墳のように各調査区に跨って存在するものについては、検出順に通し番号を付けた。また、建物、住居跡のように複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、検出順に建物1のように検出順に番号を付けた。

5. 遺物については、挿図、図版の番号を一致させた。

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査の方法	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 古墳の調査	12
1. 概要.....	12
2. 1号墳.....	12
3. 2号墳.....	13
4. 3号墳.....	14
5. 4号墳.....	14
6. 5号墳.....	17
7. 6号墳.....	17
8. 7号墳.....	18
9. 8号墳.....	27
10. 9号墳.....	33
11. 10号墳.....	36
12. 11号墳.....	39
13. 12号墳.....	45
14. 13号墳.....	56
15. 14号墳.....	64
16. 15号墳.....	66
17. 16号墳.....	73
18. 17号墳.....	78
19. 18号墳.....	80
20. 19号墳.....	80
21. 20号墳.....	84
22. 21号墳.....	86
23. 22号墳.....	87
24. 23号墳.....	89
25. 24号墳.....	98
26. 25号墳.....	103
27. 26号墳.....	106
28. 27号墳.....	107
29. 28号墳.....	111
30. 29号墳.....	115
31. 30号墳	122
32. 31号墳	125
33. 32号墳	129
34. 33号墳	131
35. 34号墳	131
36. 35号墳	133
37. 36号墳	134
38. 37号墳	134
39. 38号墳	135
40. 39号墳	140
41. 40号墳	147
42. 41号墳	148
43. 42号墳	153
44. 43号墳	153
45. 区画溝・空閑地	154
第4章 考察—総持寺古墳群の諸問題—	
第1節 太田茶臼山古墳及び陪冢出土の埴輪（小浜）	155
第2節 総持寺古墳群出土埴輪の化学的特性（三辻利一）	170
第3節 考古学的にみた胎土分析の成果について（田中）	189
第4節 総持寺古墳群出土須恵器からみた古墳の築造順について（奥）	194
第5節 総持寺古墳群出土埴輪の編年と意義（小浜）	199
第6節 総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給（田中）	207
第5章 まとめ	219
英文抄録	225
抄録	

挿 図 目 次

第1図	大阪府と調査地点	1	第41図	12号墳出土遺物3	51
第2図	調査区位置図	2	第42図	12号墳出土遺物4	52
第3図	調査区地区割概念図	4	第43図	12号墳出土遺物5	53
第4図	周辺の遺跡	6	第44図	12号墳出土遺物6	54
第5図	三島地域古墳群分布図	7	第45図	13号墳平面・断面図	55
第6図	基本層序図	10	第46図	13号墳周溝土層断面図	56
第7図	古墳及び弥生時代周溝墓配置図	11	第47図	13号墳出土遺物1	57
第8図	1号墳平面・断面図	12	第48図	13号墳出土遺物2	60
第9図	2号墳平面・断面図	13	第49図	13号墳出土遺物3	61
第10図	3号墳平面・断面図	14	第50図	13号墳出土遺物4	62
第11図	4号墳平面・断面図	15	第51図	14号墳平面・断面図	63
第12図	4号墳出土遺物	16	第52図	14号墳出土遺物	64
第13図	5号墳平面・断面図	17	第53図	15号墳平面・断面図	65
第14図	6号墳平面・断面図	18	第54図	15号墳周溝土層断面図	66
第15図	7号墳平面・断面図	19	第55図	15号墳出土遺物1	68
第16図	7号墳出土遺物1	22	第56図	15号墳出土遺物2	69
第17図	7号墳出土遺物2	23	第57図	15号墳出土遺物3	70
第18図	7号墳出土遺物3	24	第58図	15号墳出土遺物4	71
第19図	7号墳出土遺物4	25	第59図	15号墳出土遺物5	72
第20図	7号墳出土遺物5	26	第60図	16号墳平面・断面図	74
第21図	7号墳出土遺物6	26	第61図	16号墳周溝土層断面図	75
第22図	8号墳平面・断面図	27	第62図	16号墳出土遺物	76
第23図	8号墳周溝土層断面図	28	第63図	17号墳平面・断面図	77
第24図	8号墳出土遺物1	30	第64図	17号墳周溝土層断面図	78
第25図	8号墳出土遺物2	31	第65図	17号墳出土遺物	79
第26図	8号墳出土遺物3	32	第66図	18号墳平面・断面図	80
第27図	8号墳出土遺物4	33	第67図	19号墳周溝土層断面図	81
第28図	9号墳平面・断面図	34	第68図	18号墳出土遺物	81
第29図	9号墳周溝土層断面図	35	第69図	19号墳平面・断面図	82
第30図	9号墳出土遺物	36	第70図	19号墳出土遺物	83
第31図	10号墳平面・断面図	37	第71図	20号墳平面・断面図	84
第32図	10号墳出土遺物	38	第72図	21号墳平面・断面図	85
第33図	11号墳平面・断面図	40	第73図	21号墳出土遺物	87
第34図	11号墳出土遺物1	42	第74図	22号墳平面・断面図	88
第35図	11号墳出土遺物2	43	第75図	22号墳出土遺物1	89
第36図	11号墳出土遺物3	44	第76図	22号墳出土遺物2	89
第37図	12号墳平面・断面図	45	第77図	23号墳平面・断面図	90
第38図	12号墳周溝土層断面図	46	第78図	23号墳出土遺物1	92
第39図	12号墳出土遺物1	47	第79図	23号墳出土遺物2	94
第40図	12号墳出土遺物2	50	第80図	23号墳出土遺物3	95

第81図	23号墳出土遺物 4	96	第122図	39号墳出土遺物 1	144
第82図	23号墳出土遺物 5	97	第123図	39号墳出土遺物 2	146
第83図	24号墳周溝土層断面図	98	第124図	40号墳平面・断面図	147
第84図	24号墳平面・断面図	99	第125図	41号墳東周溝北側遺物出土状況図	148
第85図	24号墳出土遺物 1	101	第126図	41号墳平面・断面図	149
第86図	24号墳出土遺物 2	102	第127図	41号墳出土遺物 1	150
第87図	25号墳平面・断面図	103・104	第128図	41号墳出土遺物 2	152
第88図	25号墳出土遺物	106	第129図	42号墳平面・断面図	153
第89図	26号墳平面・断面図	107	第130図	43号墳平面図	154
第90図	27号墳平面・断面図	108	第131図	太田茶臼山古墳周辺古墳位置図	155
第91図	27号墳出土遺物	110	第132図	太田茶臼山古墳と宅地造成時の状況 写真（1972年当時）	156
第92図	28号墳周溝土層断面図	111	第133図	埴輪列検出状況	157
第93図	28号墳平面・断面図	112	第134図	埴輪列近景	157
第94図	28号墳出土遺物	114	第135図	埴輪列布掘確認状況	157
第95図	29号墳周溝土層断面図	115	第136図	A号陪冢（宮内庁に号）	158
第96図	29号墳平面・断面図	116	第137図	B号陪冢（宮内庁ほ号）	158
第97図	29号墳東周溝遺物出土状況図	117	第138図	C号陪冢（宮内庁と号）	138
第98図	29号墳出土遺物 1	118	第139図	D号陪冢（旧民有地）	158
第99図	29号墳出土遺物 2	120	第140図	太田茶臼山古墳出土埴輪 1	161
第100図	29号墳出土遺物 3	121	第141図	太田茶臼山古墳出土埴輪 2	162
第101図	30号墳平面・断面図	123	第142図	太田茶臼山古墳出土埴輪 3	163
第102図	30号墳周溝土層断面図	124	第143図	C号陪冢（宮内庁と号）出土埴輪 1	166
第103図	30号墳出土遺物	125	第144図	C号陪冢（宮内庁と号）出土埴輪 2	167
第104図	31号墳平面・断面図	126	第145図	C号陪冢（宮内庁と号）出土埴輪 3	168
第105図	31号墳出土遺物	128	第146図	総持寺4号墳の埴輪の両分布図	175
第106図	32号墳平面・断面図	129	第147図	総持寺7号墳の埴輪の両分布図	175
第107図	33号墳平面・断面図	130	第148図	総持寺8号墳の埴輪の両分布図	175
第108図	33号墳出土遺物	131	第149図	総持寺9号墳の埴輪の両分布図	175
第109図	33号墳周溝土層断面図	131	第150図	総持寺10号墳の埴輪の両分布図	175
第110図	34号墳平面・断面図	132	第151図	総持寺11号墳の埴輪の両分布図	175
第111図	35号墳平面・断面図	133	第152図	総持寺12号墳の埴輪の両分布図	175
第112図	35号墳出土遺物	134	第153図	総持寺13号墳の埴輪の両分布図	175
第113図	36号墳平面・断面図	134	第154図	総持寺14号墳の埴輪の両分布図	175
第114図	37号墳平面・断面図	135	第155図	総持寺15号墳の埴輪の両分布図	176
第115図	37号墳出土遺物	135	第156図	総持寺16号墳の埴輪の両分布図	176
第116図	38号墳平面・断面図	136	第157図	総持寺17号墳の埴輪の両分布図	176
第117図	38号墳出土遺物 1	138	第158図	総持寺21号墳の埴輪の両分布図	176
第118図	38号墳出土遺物 2	139	第159図	総持寺23号墳の埴輪の両分布図	176
第119図	39号墳平面・断面図	141	第160図	総持寺24号墳の埴輪の両分布図	176
第120図	39号墳周溝土層断面図	142	第161図	総持寺27号墳の埴輪の両分布図	176
第121図	39号墳東周溝南東コーナー付近遺物 出土状況図	142	第162図	総持寺28号墳の埴輪の両分布図	176

第163図	総持寺29号墳の埴輪の両分布図	176	第178図	西福井9号墳の埴輪の両分布図	178
第164図	総持寺30号墳の埴輪の両分布図	177	第179図	応神陵古墳の埴輪の両分布図	178
第165図	総持寺31号墳の埴輪の両分布図	177	第180図	ハケメパターン一致例	192
第166図	総持寺38号墳の埴輪の両分布図	177	第181図	太田茶臼山C号陪冢古墳にみられる 2種類の胎土の埴輪	192
第167図	総持寺39号墳の埴輪の両分布図	177	第182図	総持寺古墳群から太田茶臼山古墳までの 円筒埴輪 規格・器高関係図	205
第168図	総持寺41号墳の埴輪の両分布図	177	第183図	法量分布図	207
第169図	太田茶臼山古墳の埴輪の両分布図	177	第184図	新池窯・小型品との比較	208
第170図	太田茶臼山C号陪冢の埴輪の両分布図	177	第185図	同一個体での複数工具の使用例	209
第171図	ツゲノ1・2号墳の埴輪の両分布図	177	第186図	ハケメパターン一致例1	210
第172図	ツゲノ3号墳の埴輪の両分布図	177	第187図	ハケメパターン一致例2	211
第173図	ツゲノSE04の埴輪の両分布図	178	第188図	ハケメパターンを共有するまとまり1	212
第174図	西福井1号墳の埴輪の両分布図	178	第189図	ハケメパターンを共有するまとまり2	213
第175図	西福井2号墳の埴輪の両分布図	178	第190図	総持寺古墳群築造変遷図	220
第176図	西福井3号墳の埴輪の両分布図	178			
第177図	西福井6号墳の埴輪の両分布図	178			

表 目 次

表1	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ1	179	表9	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ9	187
表2	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ2	180	表10	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ10	188
表3	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ3	181	表11	総持寺古墳群出土須恵器編年表	195・196
表4	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ4	182	表12	総持寺古墳群出土埴輪編年表	201・202
表5	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ5	183	表13	生産地・供給地間における ハケメパターンとヘラ記号の共有関係	214
表6	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ6	184	表14	須恵器編年に基づく ハケメパターンの共有関係	215
表7	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ7	185			
表8	総持寺古墳群出土埴輪胎土分析データ8	186			

付 図 目 次

付図1 古墳及び弥生時代周溝墓配置図

付図2 総持寺遺跡遺構平面図

図 版 目 次

図版表紙 調査地区全景（空中写真）

図版1 1. A地区全景（空中写真）
2. B地区全景（空中写真）

図版2 1. C地区全景（空中写真）
2. D地区全景（空中写真）

図版3 1. E地区全景（空中写真）
2. F-1地区全景（空中写真）

図版4 1. F-2地区全景（空中写真）
2. G地区全景（空中写真）

図版5 1. A地区基本断面⑥（西より）
2. A地区基本断面⑤（東より）
3. A区基本断面③（南より）

4. B地区基本断面⑩（東より）
5. B地区基本断面⑯（東より）
6. C地区基本断面⑨（南より）
7. C地区基本断面⑭（北西より）
8. D地区基本断面⑯（北より）
9. D地区基本断面⑯（東より）
10. E地区基本断面⑰（東より）
11. E地区基本断面⑯（北より）
12. E地区基本断面⑦（南より）
13. G地区基本断面④（西より）
14. G地区基本断面②（南より）
15. I地区基本断面①（南より）

16. J 地区基本断面② (北より)
17. J 地区基本断面① (西より)
- 図版6 1. 1・2・3号墳 (空中写真)
2. 1号墳 (東より)
3. 1号墳南周溝断面 (東より)
4. 2号墳南周溝断面 (西より)
- 図版7 1. 2号墳 (北より)
2. 3号墳 (空中写真)
3. 3号墳 (B地区) (北より)
4. 3号墳北周溝断面 (西より)
- 図版8 1. 4・6・7・8号墳 (西より)
2. 4号墳 (西より)
3. 4号墳東周溝断面 (南より)
4. 4号墳北周溝断面 (西より)
- 図版9 1. 4・5・6号墳 (西より)
2. 6号墳 (東より)
3. 6号墳東周溝断面 (南より)
4. 6号墳南周溝断面 (東より)
- 図版10 1. 7号墳 (空中写真)
2. 7号墳 (B地区) (東より)
3. 7号墳 (D地区) (北より)
- 図版11 1. D地区 7号墳周辺 (東より)
2. 7号墳北周溝遺物出土状況 (東より)
3. 7号墳紡錘車出土状況
4. 7号墳東周溝断面 (南より)
5. 7号墳西周溝断面 (南より)
6. 7号墳南周溝断面 (東より)
7. 7号墳北周溝断面 (東より)
- 図版12 1. 8号墳周辺 (西より)
2. 8号墳 (北より)
3. 8号墳東周溝断面 (北より)
4. 8号墳西周溝断面 (南より)
5. 8号墳南周溝断面 (西より)
6. 8号墳北周溝断面 (東より)
- 図版13 1. 8号墳遺物出土状況 (北より)
2. 9号墳 (空中写真)
3. 9号墳西周溝断面 (南より)
4. 9号墳遺物出土状況 (東より)
- 図版14 1. 9号墳 (B地区) (東より)
2. 9号墳 (D地区) (南より)
3. 10・11号墳 (空中写真)
- 図版15 1. 10号墳 (南より)
2. 10号墳遺物出土状況 (西より)
3. 10号墳西周溝断面 (南より)
4. 10号墳南周溝断面 (西より)
5. 11・12号墳 (西より)
- 図版16 1. 11号墳周辺 (東より)
2. 11号墳 (西より)
3. 11号墳東周溝断面 (北より)
4. 11号墳西周溝断面 (南より)
5. 11号墳南周溝断面 (東より)
6. 11号墳北周溝断面 (東より)
- 図版17 1. 11号墳西周溝 (北半)
遺物出土状況 (南より)
2. 11号墳東周溝遺物出土状況 (南より)
3. 11号墳西周溝遺物出土状況 (西より)
4. 11号墳西周溝遺物出土状況細部 (北より)
5. 11号墳南周溝遺物出土状況細部 (西より)
6. 11・12・13号墳 (東より)
- 図版18 1. B地区全景 (南より)
2. 12号墳 (北より)
3. 12号墳東周溝断面 (北より)
4. 12号墳西周溝断面 (北より)
5. 12号墳南周溝断面 (東より)
6. 12号墳西周溝遺物出土状況 (南より)
- 図版19 1. 13号墳 (北より)
2. 13号墳東周溝断面 (北より)
3. 13号墳西周溝断面 (南より)
4. 13号墳南周溝断面 (西より)
5. 13号墳北周溝断面 (西より)
6. 14号墳 (空中写真)
- 図版20 1. 14号墳 (B地区) (西より)
2. 14号墳 (C地区) (南西より)
3. 14号墳東周溝断面 (南より)
4. 14号墳西周溝断面 (南より)
5. 14号墳南周溝断面 (西より)
- 図版21 1. 15号墳 (空中写真)
2. 15号墳 (B地区) (西より)
3. 15号墳 (C地区) (西より)
- 図版22 1. 15号墳北周溝遺物出土状況 (東より)
2. 15号墳東周溝断面 (南より)
3. 15号墳南周溝断面 (西より)
4. 15号墳北周溝断面 (東より)
5. 16号墳 (空中写真)

6. 16号墳（B地区）（北より）
- 図版23 1. 17号墳（空中写真）
 2. 17号墳（B地区）（西より）
 3. 17号墳（C地区）（東より）
- 図版24 1. 17号墳東周溝断面（南より）
 2. 17号墳西周溝断面（北より）
 3. 17号墳南周溝断面（東より）
 4. 17号墳北周溝断面（東より）
 5. 18号墳（空中写真）
 6. 18号墳（B地区）（東より）
- 図版25 1. 19・20号墳（東より）
 2. 19号墳（東より）
 3. 19号墳東周溝断面（北より）
 4. 19号墳西周溝断面（北より）
 5. 19号墳北周溝断面（東より）
 6. 19号墳北周溝遺物出土状況（北より）
- 図版26 1. 20号墳（西より）
 2. 20号墳西周溝断面（北より）
 3. 20号墳南周溝断面（北西より）
 4. 21号墳（空中写真）
- 図版27 1. 21号墳（A地区）（北より）
 2. 21号墳（E地区）（南西より）
 3. 21号墳東周溝断面（南より）
- 図版28 1. 22号墳（北より）
 2. 22号墳東周溝断面（南より）
 3. 22号墳西周溝断面（南より）
 4. 22号墳南周溝断面（東より）
 5. 22号墳北周溝断面（東より）
 6. C地区北側全景（東より）
- 図版29 1. 23号墳周辺（北西より）
 2. 23号墳（北西より）
 3. 23号墳東周溝断面（南より）
 4. 23号墳南西辺部断面（南より）
 5. 23号墳南周溝断面（西より）
 6. 23号墳北周溝断面（西より）
- 図版30 1. 23号墳東周溝遺物出土状況（南東より）
 2. 23号墳南周溝遺物出土状況（西より）
 3. 23号墳東周溝遺物出土状況細部（西より）
 4. 23号墳東周溝遺物出土状況細部（北より）
 5. 23号墳東周溝遺物出土状況細部（西より）
 6. 23号墳南周溝遺物出土状況細部（北より）
- 図版31 1. 24号墳（西より）
 2. 24号墳東周溝遺物出土状況（南より）
 3. 24号墳東周溝遺物出土状況（北より）
 4. 24号墳東周溝遺物出土状況細部（東より）
 5. 24号墳西周溝断面（南より）
 6. 24号墳南周溝断面（東より）
 7. 24号墳北周溝断面（西より）
- 図版32 1. 25号墳（空中写真）
 2. 25号墳（C地区）（東より）
 3. 25号墳東周溝断面（南より）
 4. 25号墳南周溝断面（東より）
 5. 25号墳北周溝断面（東より）
- 図版33 1. 26号墳（南より）
 2. D地区全景（北より）
 3. 27号墳（空中写真）
- 図版34 1. 27号墳（北東より）
 2. 27号墳東周溝断面（南東より）
 3. 27号墳西周溝断面（北西より）
 4. 27号墳南周溝断面（南西より）
 5. 27号墳北周溝断面（南西より）
 6. 28号墳（南東より）
- 図版35 1. 28号墳東周溝断面（南東より）
 2. 28号墳西周溝断面（北西より）
 3. 28号墳南周溝断面（南西より）
 4. 28号墳北周溝断面（南西より）
 5. 29号墳（北東より）
 6. 29号墳東周溝遺物出土状況（東南より）
 7. 29号墳南周溝遺物出土状況（南西より）
- 図版36 1. 29号墳東周溝遺物出土状況（北西より）
 2. 29号墳南東辺付近遺物出土状況（北東より）
 3. 29号墳東周溝断面（北西より）
 4. 29号墳西周溝断面（南東より）
 5. 29号墳南周溝断面（南西より）
 6. 29号墳北周溝断面（北東より）
- 図版37 1. 30号墳（西より）
 2. 30号墳東周溝断面（南東より）
 3. 30号墳西周溝断面（南東より）
 4. 30号墳南周溝断面（北東より）
 5. 30号墳北周溝断面（北東より）
 6. 31号墳（西より）
- 図版38 1. 31号墳南周溝遺物出土状況（東より）
 2. 31号墳西周溝断面（北西より）
 3. 31号墳南周溝断面（南西より）

4. 31号墳北周溝断面（南西より）	15号墳 308
5. 32号墳（空中写真）	図版48 出土遺物 2 須恵器
6. 32号墳（D地区）（西より）	13号墳 242
図版39 1. 32号墳東周溝断面（南東より）	15号墳 304
2. 32号墳西周溝断面（南東より）	16号墳 381
3. 32号墳南周溝断面（南西より）	19号墳 391～393
4. 32号墳北周溝断面（北東より）	23号墳 411・415
5. 33号墳（空中写真）	25号墳 474
6. 33号墳（D地区）（西より）	図版49 出土遺物 3 須恵器
図版40 1. 33号墳（E地区）（東より）	27号墳 478・479・481
2. 33号墳東周溝断面（北西より）	28号墳 490・491
3. 33号墳西周溝断面（北より）	29号墳 506・507
4. 33号墳南周溝断面（北東より）	38号墳 545
5. 33号墳北周溝断面（東より）	図版50 出土遺物 4 須恵器
6. 34・35号墳（西より）	38号墳 547～549・552～554
図版41 1. 34号墳（西より）	39号墳 569・571～573
2. 34号墳東周溝断面（南東より）	図版51 出土遺物 5 須恵器
3. 34号墳西周溝断面（南東より）	39号墳 575～578・580
4. 34号墳南周溝断面（南西より）	41号墳 593～595・598
5. 35号墳（西より）	図版52 出土遺物 6 須恵器
図版42 1. 36号墳（南東より）	12号墳 148・150～156
2. 37号墳（東より）	13号墳 243～249
3. 38号墳（北より）	14号墳 298
図版43 1. 38号墳西周溝遺物出土状況（南より）	15号墳 305
2. 38号墳西周溝断面（南より）	図版53 出土遺物 7 須恵器・その他
3. 39号墳（空中写真）	7号墳 43
図版44 1. 39号墳（G地区）（西より）	8号墳 96
2. 39号墳東周溝遺物出土状況（南西より）	15号墳 306・307
3. 39号墳東周溝断面（南より）	17号墳 388
4. 39号墳南周溝断面（西より）	19号墳 394
5. 39号墳北周溝断面（東より）	21号墳 406
図版45 1. 40号墳（北西より）	23号墳 413・414
2. 41号墳（空中写真）	25号墳 475
3. 41号墳（東より）	27号墳 480・482
図版46 1. 41号墳東周溝遺物出土状況（南東より）	29号墳 500～503・505
2. 41号墳南周溝断面（東より）	30号墳 529
3. 42号墳（南東より）	37号墳 544
図版47 出土遺物 1 須恵器	図版54 出土遺物 8 増輪
9号墳 102～104	4号墳 1～5
10号墳 105～109	7号墳 6・7・9～12・16～18
12号墳 146・147	14号墳 299～303
13号墳 240	図版55 出土遺物 9 増輪

7号墳	13~15・19~27・29・30・33・34	16号墳	373~380
図版56 出土遺物10 増輪		17号墳	382~386
7号墳	34~41	18号墳	389
8号墳	45~47・49・50	19号墳	395・396
12号墳	44	21号墳	397~404
図版57 出土遺物11 増輪		22号墳	408・409
8号墳	48・51~72	図版70 出土遺物24 増輪	
図版58 出土遺物12 増輪		23号墳	416~429・431・434・438
8号墳	73~80・82・85~94	図版71 出土遺物25 増輪	
9号墳	97~101	23号墳	430・432・433・435~437・440・ 441・442・444~450
図版59 出土遺物13 増輪		図版72 出土遺物26 増輪	
10号墳	110~113	24号墳	451~466・859
11号墳	114~130	図版73 出土遺物27 増輪	
図版60 出土遺物14 増輪		24号墳	467~473
11号墳	131~145	25号墳	476・477
12号墳	157~159・161・164・166・850・ 851	27号墳	483~489・900
図版61 出土遺物15 増輪		28号墳	492~499
12号墳	160・162・163・165・167~182・ 185・187	図版74 出土遺物28 増輪	
図版62 出土遺物16 増輪		29号墳	508~522
12号墳	183・184・186・188・189~208・ 211・212・214・852	図版75 出土遺物29 増輪	
図版63 出土遺物17 増輪		30号墳	523~528
12号墳	209・210・213・215~234・236・ 853~857	31号墳	530~541
図版64 出土遺物18 増輪		33号墳	542
12号墳	235・237~239	35号墳	543
13号墳	250・251	図版76 出土遺物30 増輪	
図版65 出土遺物19 増輪		38号墳	555~568・901
13号墳	252~264・266~274・276・277	39号墳	585~592
図版66 出土遺物20 増輪		図版77 出土遺物31 増輪	
13号墳	275・278~284・287・288 290~297	41号墳	600~610
15号墳	309~312・314・315・317	太 田	611~613・615~619・621・624
図版67 出土遺物21 増輪		図版78 出土遺物32 増輪	
15号墳	313・316・318~336・338~340・ 858	太 田	614・620・622・623・625~631
図版68 出土遺物22 増輪		図版79 出土遺物33 増輪	
15号墳	337・341~351・353~358・ 360~367・369~372	太 田	632~643・645・646・648・649・ 652・654~657
図版69 出土遺物23 増輪		図版80 出土遺物34 増輪	
		太 田	647・650・651・653・658~663
		C号陪冢	664~673
		図版81 出土遺物35 増輪	
		C号陪冢	674~702

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

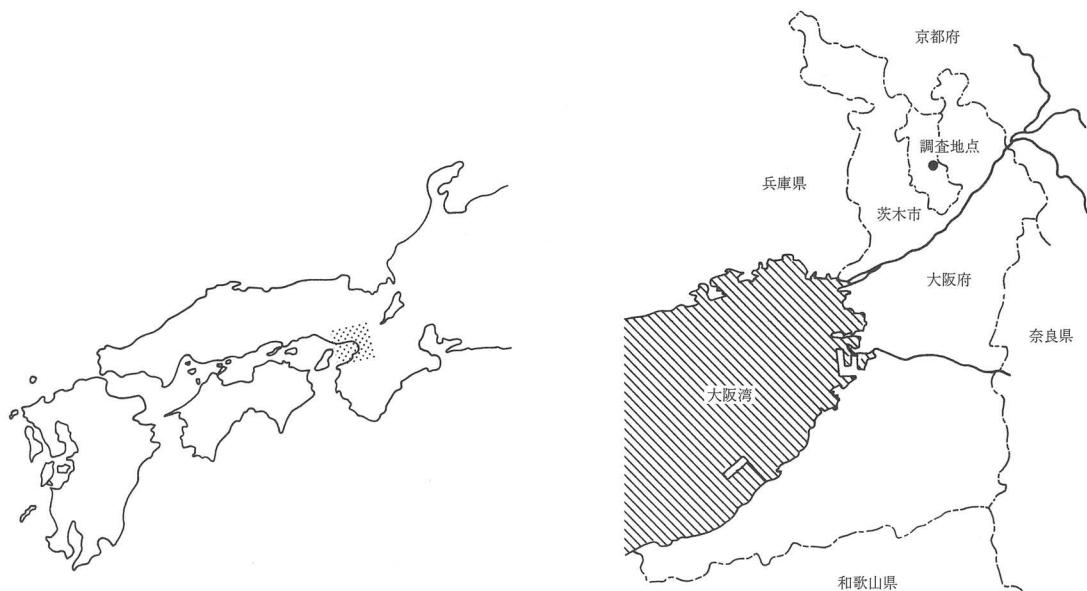
大阪府建築部では、現在老朽化の著しい木造平屋建ての府営住宅を土地の有効利用と住宅環境の改善のため、中・高層住宅に建て替える計画を推進している。昭和26年に建設された茨木市三島丘に所在する府営茨木総持寺住宅も古くから建て替え計画の候補に挙がっていた。

そのため昭和49年に大阪府教育委員会が、大阪府建築部の依頼を受け、本住宅敷地内において遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。その結果、埴輪、須恵器、土師器、瓦器等が出土し、その周辺が、遺跡であることが確認され、遺跡名を総持寺遺跡と名付けた。

平成2年に本住宅の建て替え計画が具体化したとの通知を、本府建築部から受けた本府教育委員会は、本府建築部との協議を重ね、平成4年度に本府教育委員会文化財保護課技師阿部幸一を担当者として住宅敷地内全域の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、住宅敷地内の全域にわたって、地表下約0.2mから0.6m付近において古墳時代から中世にかけての遺構が多数存在する可能性が高いという結果を得た。

この試掘結果に基づいて本府教育委員会は、本住宅の敷地全域を建て替えるのに際して、発掘調査を実施する必要があり、また、表土から遺構面までの深度が浅いため、建築工事や埋管、付ある旨属施設などで、遺跡が破壊される可能性が十分にあるため、発掘調査区域は、敷地全域に及ぶとの判断を示した。

この結果を本府建築部に伝え、本府教育委員会と本府建築部は、府営総持寺住宅建て替えの建築実施計画の見直しと発掘調査の時期と期間について協議した。その結果、発掘調査を本府教育

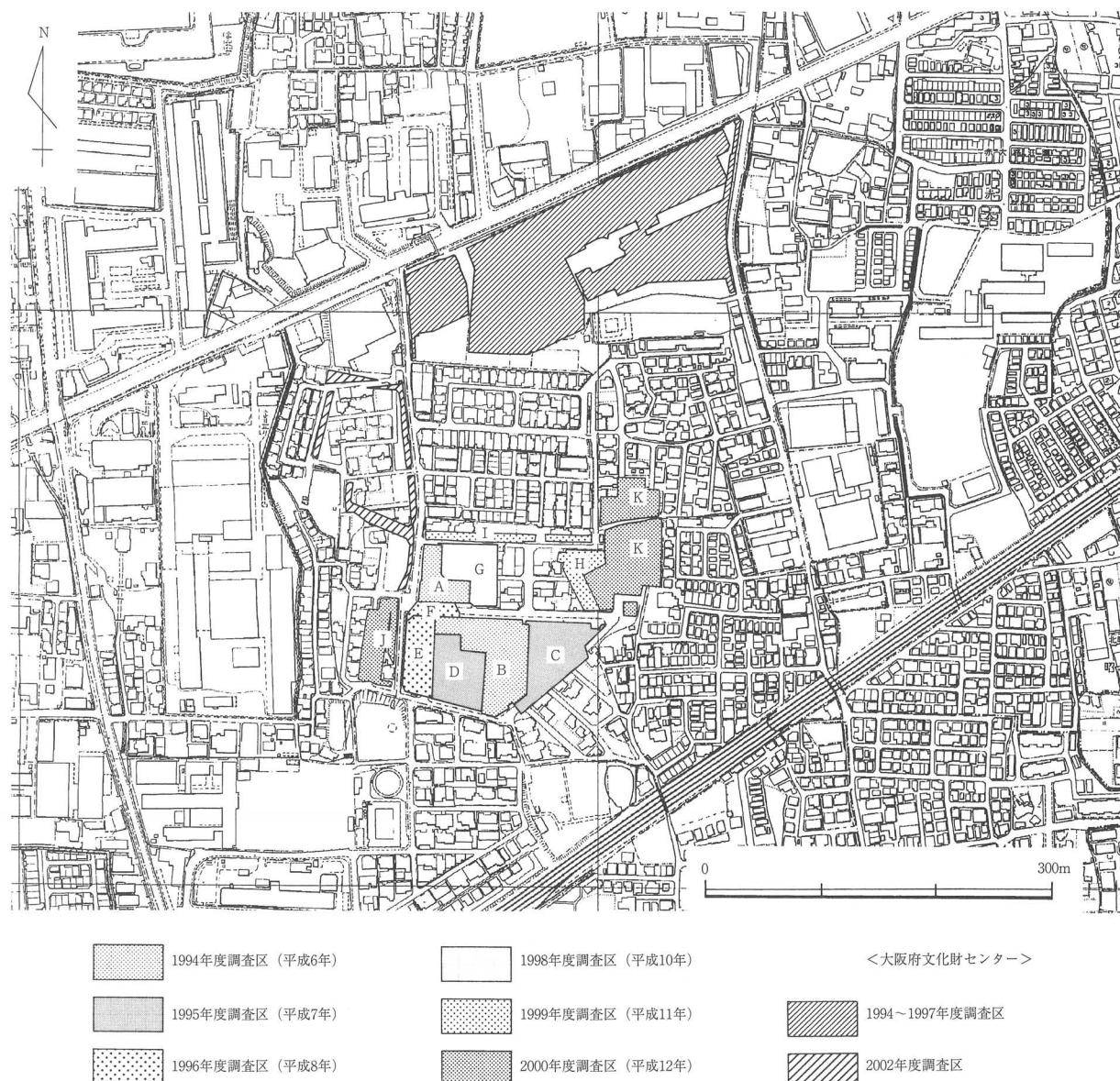


第1図 大阪府と調査地点

委員会によって平成6年度から開始することとなった。また、発掘調査によって検出された遺構を保護し後世に残していくために、住棟建築部分、埋管などによって破壊される区域を除き、約0.2mの真砂土で養生して埋め戻すこととなった。

発掘調査は、平成6年度は、本府教育委員会技師奥和之によってA、B地区（面積約4,980m²）、平成7年度は技師酒井泰子によってC、D地区（面積約5,400m²）、平成8年度は、技師山上弘によってE、F地区（面積約2,200m²）、平成10年度から平成12年度については、技師阿部幸一が担当し、平成10年度はG地区（面積約1,850m²）、平成11年度はH、I地区（面積約3,700m²）、平成12年度はJ、K地区（面積約5,400m²）の調査を実施し、総調査面積は、23,530m²にもおよぶ。

平成7年2月21日には、1回目の総持寺遺跡発掘調査現地説明会を開催し、地元住民および府民の方々に発掘調査の成果を公開した。阪神大震災の直後にも拘わらず、500人を越える多数の



第2図 調査区位置図

参加を得た。また2回目の現地説明会を平成8年10月19日に開催し、多数の参加を得た。

報告書作成に伴う遺物整理事業については、本府教育委員会と本府建築都市部と協議の上、平成15年度から開始することとした。

総持寺遺跡で検出された遺構の時期は、弥生時代から中世を中心に検出し、遺構、遺物の量も膨大な数におよぶ。そのため、報告書を2分冊に分けて刊行することとした。第1冊目は、古墳時代中期の古墳と遺物。第2冊目は、弥生時代後期、飛鳥・奈良、平安、中世の遺構、遺物を中心的に刊行することとした。

(奥)

第2節 調査の方法

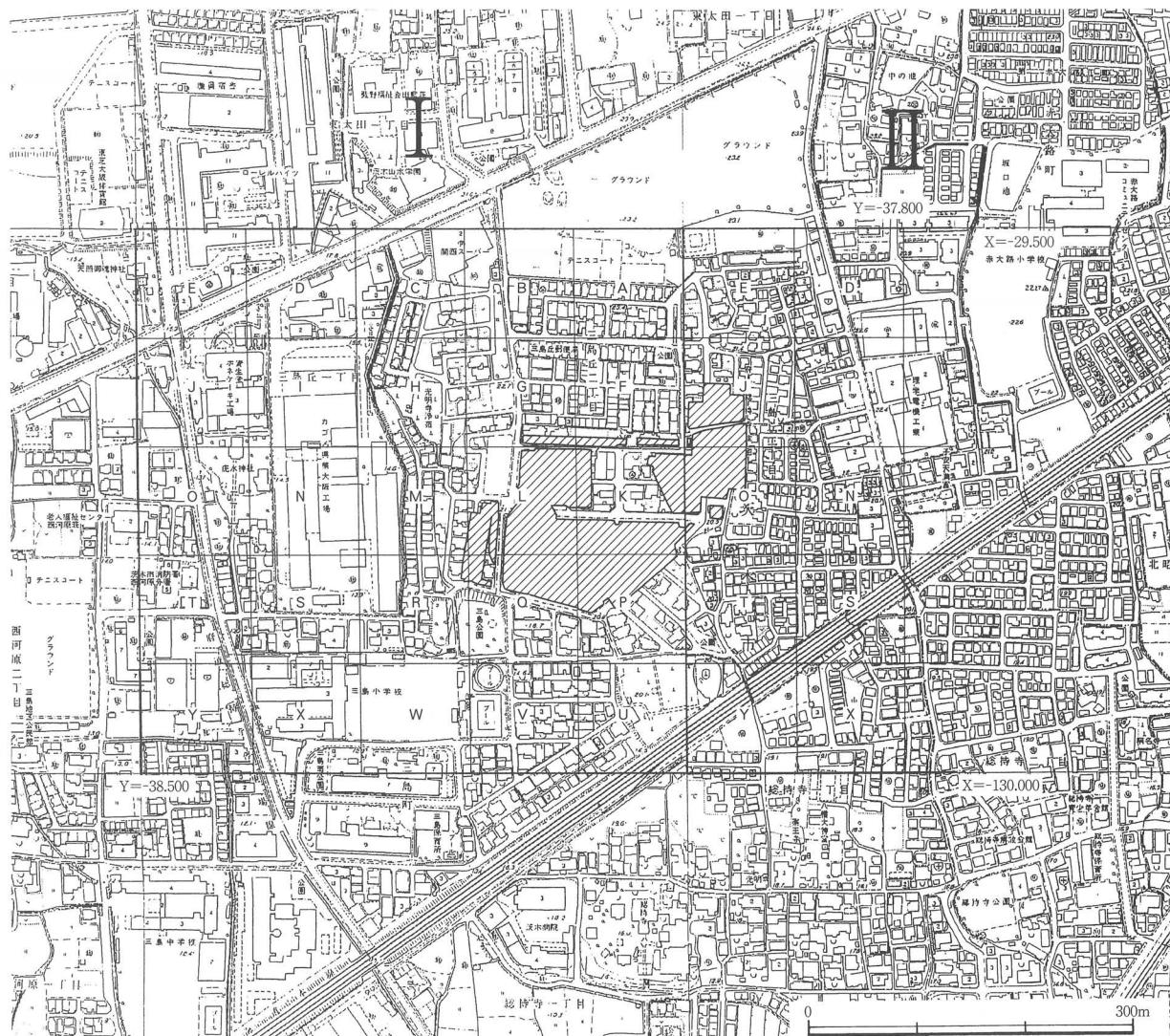
総持寺住宅の建替えに伴う発掘調査は多年度にわたって行われたため、各年度との調査の混乱を防ぎ、また調査を円滑に進めるため、発掘調査地域全域を網羅する地区割（第3図）を行った。地区割の方法は、日本測地系平面直角座標（第VI系）を基準とし、X=−129.5km、Y=−37.8km（世界測地系平面直角座標（第VI系）X=−129,153.35m、Y=−38,060.91m）を北東端、X=−129.5km、Y=−38.5kmを北西端（同X=−129,153.35m、Y=−38,760.91m）、X=−130.0km、Y=−37.5kmを南東端（同X=−129,653.34m、Y=−37,760.92）、X=−130.0km、Y=−38.5kmを南西端（同X=−129,653.34m、Y=−38,760.92）とする東西500m、南北500mの区画を作り、Iとした。また、その区画の東側は、IIの呼称を与えることとした。それを更に100m四方の区画に分割し、25区画を作り、この区画にAからYまでの呼称を与えた。この区画を更に10m四方の区画に分割し、100区画を作った。この区画の東西をaからj、南北を1から10で表した。そして、これらの区画に従って出土遺物を取り上げた。

また、検出した遺構については、1個の遺構に対して、調査区ないしは年度毎に番号を与えた。また、古墳、建物、住居跡のように集まってひとつの遺構となすものについては、1号墳のように別の呼称を与えた。

調査区の名称については、発掘調査を行った11調査区に、調査順にAからKまでの呼称を与えた。

発掘調査の方法は、盛土および表土層を機械掘削によって除去した後、遺物包含層および検出した遺構を人力により掘削した。また、調査の迅速化と省力化をはかるため、基本的にヘリコプターによる写真測量を実施した。なお、遺物の出土状況、土層断面については、適宜図面を作成した。

(奥)



	j	i	h	g	f	e	d	c	b	a
1										
2										
3										
4										
5										
6										
7										
8										
9										
10										



第3図 調査区地区割概念図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

総持寺遺跡は、大阪府の北東部、茨木市と高槻市との市境付近に所在し、行政区画でいえば茨木市三島丘1丁目から2丁目、三島町、総持寺1丁目一帯に広がり、遺跡の範囲は、東西約450m、南北約750mを測る。今回調査を行った地区は、茨木市三島丘2丁目にあたる。

総持寺遺跡は、地理的に見れば、北摂山地から派生する舌状に延びた丘陵である富田台地上の南西側に展開する遺跡である。富田台地は、北摂山地から派生する奈佐原丘陵の南端から南方へ突出している標高10mから30mの舌状台地で、古くは藍野とも呼ばれ、北西端には太田茶臼山古墳、南西端には総持寺、南東端には富田の古い町並みをのせている。台地の西辺は明瞭な急崖で限られ、崖の高さは太田茶臼山古墳西方で約7mを測る。台地の南辺と東辺南半部は、西辺ほど明瞭ではないが、それでも比高差3m程度の斜面で画されている。しかし東辺の北半部は、女瀬川の堆積物に覆われ、台地の輪郭がはっきりしない。

北方の奈佐原丘陵先端に付着している塚原段丘面と富田台地北西端との間には、約350mの幅を有する東北東から西南西方向の凹地がみられ、この凹地は北摂山地と千里山丘陵とを分つ地溝の東方延長と考えられ、太田茶臼山古墳北側には明瞭な構造線が認められる。

台地面の大部分は、ほとんど起伏のみられない平坦面で、安威川の谷口に近い北西端がもっとも高く、南東方へ向って緩やかに傾斜している。この台地面は、安威川によって形成された扇状地が段丘化したもので、大阪国際空港をのせる伊丹台地などとともに洪積段丘下位面に対比され、厚さ4m以上の砂礫層からなる段丘堆積物におおわれている。
(奥)

第2節 歴史的環境

今回報告する総持寺古墳群を考えるにあたり、ここでは、当遺跡を包摂する三島古墳群の動向について概観していきたい。淀川北岸に位置する三島古墳群は、高槻市全域と茨木市東域にあたる、桧尾川東岸から茨木川西岸にかけての丘陵・段丘平坦面に展開する古墳時代有数の古墳群である。この地域に初めて確認される古墳は、「青龍三年」鏡を有していたことで有名な安満宮山古墳である。当古墳は古墳時代初頭に桧尾川東岸の丘陵上に単独で築かれたもので、三島古墳群の初源として位置付けられる古墳だが後続する古墳は見受けられず、次の段階になると、芥川西岸の奈佐原丘陵で弁天山古墳群の築造が開始する。郡家川西遺跡といった芥川流域を基盤とする勢力の墓域である弁天山古墳群では、まず岡本山古墳(A1号墳)や弁天山古墳(B1号墳)が築かれ、その後弁天山C1号墳を経て、丘陵裾部の郡家車塚古墳、前塚古墳といった古墳が前期から中期にかけて築造される。これらの一連の古墳は、当地域における首長系譜として捉えられる。

前期中葉から後半にかけては、前段階に見られた桧尾川東岸、芥川西岸以外の地域でも古墳が認められるようになり、その数は増加する。高槻市域においては、桧尾川東岸の萩之庄1号墳、芥川東岸の慈願寺山古墳、芥川西岸の弁天山C1号墳、郡家車塚古墳、闘鷄山古墳が、茨木市域

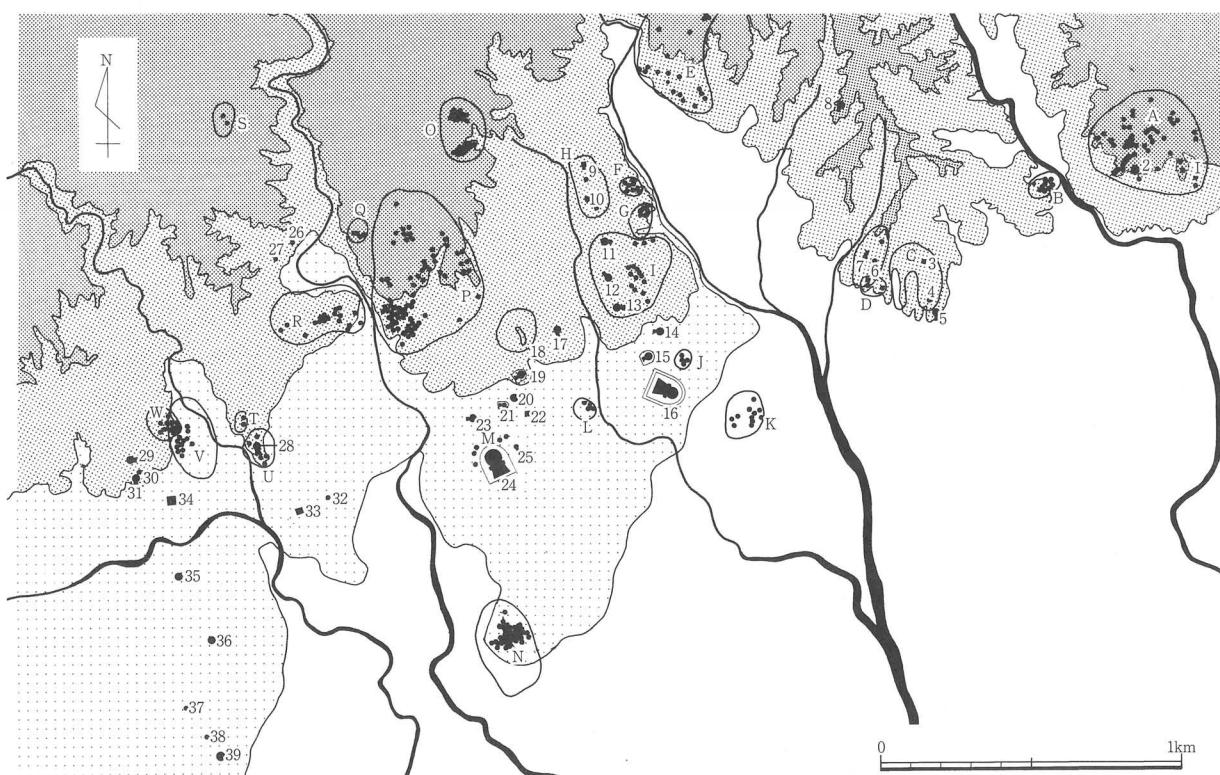


1. 大藏司遺跡
2. 尼ヶ谷古墳群
3. 弁天山古墳群
4. 弁天山C 1号墳
5. 弁天山C 2号墳
6. 弁天山C 3号墳
7. 大藏司古墳群
8. 弁天山B 1号墳（弁天山古墳）
9. 弁天山 B 2号墳
10. 弁天山 B 3-a号墳
11. 弁天山 B 3-b号墳
12. 弁天山 B 4号墳
13. 岡本山東古墳
14. 弁天山 A 1号墳（岡本山古墳）
15. 岡本山古墳群
16. 岡本山 A 3号墳
17. 御坊山古墳
18. 上野遺跡
19. 芥川廃寺瓦窯跡
20. 群家本町遺跡
21. 群家川西遺跡
22. 狐塚川西遺跡
23. 群家車塚古墳
24. 前塚古墳
25. 上水室遺跡
26. 皇子塚遺跡
27. 闘鶴山古墳
28. 關鶴山古墳群
29. 水室瓦器散布地
30. 新池埴輪製作遺跡
31. 「国」史 今城塚古墳附新池窯跡
32. 塚原古墳群
33. 塚原遺跡
34. 桑原古墳群
35. 安威古墳群
36. 長ヶ淵古墳群
37. 安威砦跡
38. 安威城跡
39. 安威遺跡
40. 「府指」史 耳原古墳
41. 上土室遺跡
42. 土室遺跡
43. 番山古墳
44. 石塚古墳
45. 土保山古墳
46. 二子山古墳
47. 石山古墳
48. 高櫛古墳
49. ツゲノ遺跡
50. ツゲノ古墳群
51. 水室遺跡
52. 水室塚古墳
53. 「国」史 今城塚古墳
54. 群家今城遺跡
55. 宮田遺跡
56. 東五百住遺跡
57. 太田茶臼山古墳陪塚
58. 太田茶臼山古墳
59. 太田北遺跡
60. 太田廢寺跡
61. 太田遺跡
62. 太田城跡
63. 耳原遺跡
64. 五日市東遺跡
65. 五日市遺跡
66. 郡遺跡
67. 倍賀遺跡
68. 総持寺遺跡
69. 総持寺北遺跡
70. 中城遺跡 慶瑞寺
71. 富田寺内町
72. 富田遺跡
73. 教行寺跡

第4図 周辺の遺跡

では安威川西岸の安威1号墳、茨木川東岸の將軍山古墳、同西岸の紫金山古墳などが挙げられる。

しかし、中期に入ると、弁天山古墳群の流れを汲む前塚古墳と、弁天山古墳群の背後の丘陵に築かれた墓谷古墳群(円墳・前方後方墳・前方後円墳から成る1～4号墳)を除いて、前期にみられた墓域には古墳の築造がみられなくなり、代わって安威川東岸や芥川東岸といった新たな墓域に古墳が出現してくるようになる。こうした中、安威川東岸の段丘上に突如として現れるのが、全長226mの規模を誇る太田茶臼山古墳(伝継体陵古墳)である。太田茶臼山古墳の周辺には7基の小規模墳が陪冢として点在し、そのうちC号陪冢は、太田茶臼山古墳の東方約50mの地点に位置する約25mの前方後円墳である。さらに太田茶臼山古墳と陪冢群の周辺には、塚廻り古墳(方墳・約20m)、土保山古墳(円墳・約30m(1))、二子山古墳(前方後円墳・約52m)、番山古墳(帆立貝式古墳・約56m)といった古墳から成る土室古墳群が所在する。このうち土保山古墳は、昭和34年の調査で主体部と副葬品用の粘土櫛が検出され、主体部からは乳文鏡、櫛、直弧文柄頭、横矧板鉢留短甲、馬具、鉄鋤などが出土し、粘土櫛からは、衝角付冑、草摺、肩甲、鞍、弓、鉄鏃、矢柄の漆膜、鉄鎌などの豊富な武器が確認されている。太田茶臼山古墳を含めたこれらの古



A. 安満山古墳群	(M. 太田茶臼山古墳陪冢群)	1. 萩之庄古墳	14. 郡家車塚古墳	27. 初田2号墳
B. 紅葦山古墳群	N. 総持寺古墳群	2. 安満宮山古墳	15. 前塚古墳	28. 將軍山古墳
C. 天神山古墳群	O. 片ヶ谷古墳群	3. 中将塚古墳	16. 今城古墳	29. 紫金山古墳
D. 慈願寺山古墳群	P. 塚原古墳群	4. 宿弥塚古墳	17. 關鶴山古墳	30. 青松塚古墳
E. 塚脇古墳群	Q. 桑原古墳群	5. 星神車塚古墳	18. 新池埴輪窯	31. 南塚古墳
F. 塚穴古墳群	R. 安威古墳群	6. 慈願寺山2号墳	19. 番山古墳	32. 耳原古墳
G. 尼ヶ谷古墳群	S. 大門寺古墳群	7. 慈願寺山1号墳	20. 土保山古墳	33. 鼻摺古墳
H. 墓谷古墳群	T. 真龍寺古墳群	8. 芝谷古墳	21. 二子山古墳	34. 海北塚古墳
I. 弁天山古墳群	U. 將軍山古墳群	9. 弁天山D1号墳	22. 高埴古墳	25. 郡山古墳
J. 狐塚古墳群	V. 西福井古墳群	10. 弁天山D2号墳	23. 太田石山古墳	36. 郡神社古墳
K. 川西古墳群	W. 新屋古墳群	11. 弁天山C1号墳	24. 太田茶臼山古墳	37. 上穂積山古墳
L. ソゲノ古墳群		12. 弁天山B1号墳(弁天山古墳)	25. 太田茶臼山古墳陪冢群	38. 上穂神社西古墳
		13. 弁天山A1号墳(岡本山古墳)	26. 初田1号墳	39. 見付山古墳

第5図 三島地域古墳群分布図

墳は、ほぼ同時期に築造されており、太田茶臼山古墳を頂点とした中期古墳の階層秩序が、この安威川東岸域に展開されることとなる。こうした古墳群の動向に密接に関係しているのが新池埴輪窯である。太田茶臼山古墳への供給を目的として開窯したと考えられている新池窯は、太田茶臼山古墳と今城塚古墳とのほぼ中間にあたる丘陵上に位置し、埴輪窯18基と工房3基、工人集落が確認されている。窯はA～C群窯の3群で構成され、A・B群窯の埴輪は川西編年Ⅳ期に、C群窯はV期に相当する。供給先としては、A群窯は太田茶臼山古墳、B群窯は土室古墳群、C群窯は今城塚古墳や昼神車塚古墳などが、従来から想定されている。

中期以降に確認される総持寺古墳群以外の三島地域における小古墳群について触れておくと、まずツゲノ古墳群が挙げられる。新池窯の丘陵を下った地点に所在し、1基の円墳と2基の方墳が確認され、円墳は直径約16m、方墳はいずれも一辺7m前後である。これらは削平や重複によって時期は多少不鮮明であるが、周溝で確認される須恵器と埴輪から、古墳築造の上限はおよそ5世紀中頃であることが想定され、太田茶臼山古墳と併行する可能性が考えられる。安威川東岸域においては、將軍山古墳の裏手に広がる西福井古墳群で、総数12基からなる小規模な円墳3基と方墳6基が存在し、須恵器からは5世紀後半の時期が相当する。また、この同一丘陵上には、後期に入って新式群集墳である新屋古墳群が展開するようになる。

古墳時代後期で特筆されるのは、今城塚古墳の存在である。三島の平野中央部に築かれたこの古墳は、二重周濠をもつ墳長190mの規模を有し、外堤の張り出し部において大規模な埴輪祭祀区が確認されている。墳丘形態や埴輪の様相から6世紀前半の築造とされ、真の繼体陵と目されている古墳である。これと近接した時期に、昼神車塚古墳(前方後円墳・約56m)や南塚古墳(前方後円墳・約50m)が築造されるが、この時期を以って、三島における前方後円墳の築造は終わりを迎えると同時に、梶原古墳群や塚原古墳群、塚脇古墳群、新屋古墳群などの横穴式石室を採用する小型円墳から成る群集墳の造営が活発化していく。こうした群集墳の造墓活動が7世紀に入って衰退の兆しを見せた後、7世紀後半になると塚原古墳群が密集する奈佐原丘陵の最高所に藤原鎌足墓とされる阿武山古墳が築かれ、後の律令国家の時代の流れの中で、三島地域は新たな時代を迎えることとなる。

(田中)

《註》

(1) 名神高速道路内遺跡調査会の調査で、外堤を区画して張り出すような溝が検出されているが、その溝が古墳築造時の遺構であるかや想定される突出部の性格についてはよくわかっていない。

《参考文献》

- 奥和之 『みかん山古墳群』 大阪府教育委員会 1998
- 高槻市史編纂委員会 『高槻市史』 第6巻 考古編 1973
- 原口正三 「考古学からみた原始・古代の高槻」 『高槻市史』 第1巻 1977
- 名神高速道路内遺跡調査会 『土室古墳群発掘調査報告書』 1998
- 森田克行 『新池』 高槻市文化財調査報告書 第17冊 1993
- 和田晴吾 「三島古墳群と今城塚古墳」 『発掘された埴輪群と今城塚古墳』 2004

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

調査地域は、東西約2km、南北約0.6kmを測る低位段丘上の南側に位置する。調査地域の西から南西側にかけては、比高差7m前後を測る段丘崖が存在し、沖積段丘との境になっている。

調査地域周辺は、調査前において大半は宅地として利用され、標高は、20.2mから21.0mを測る比較的平坦な面を有している。

基本層序については、各地区毎に調査中に作成した土層断面図を参考に精査し、各地点ごとの標準的な土層堆積を抽出し、模式図的に図示した。

以下、確認した遺構・遺物に基づく層序を上層から記述する。

第I層 調査地区全域にわたって認められる最上層土で、本府営住宅建設直前までの耕作土である。住宅敷地内では現代まで庭などに利用され、敷地内の道路下では住宅建設前の耕作土として観察される。地点によって多少は色調が異なるが、灰白色砂質土を基本とする。層厚は、0.1mから0.3mを測る。

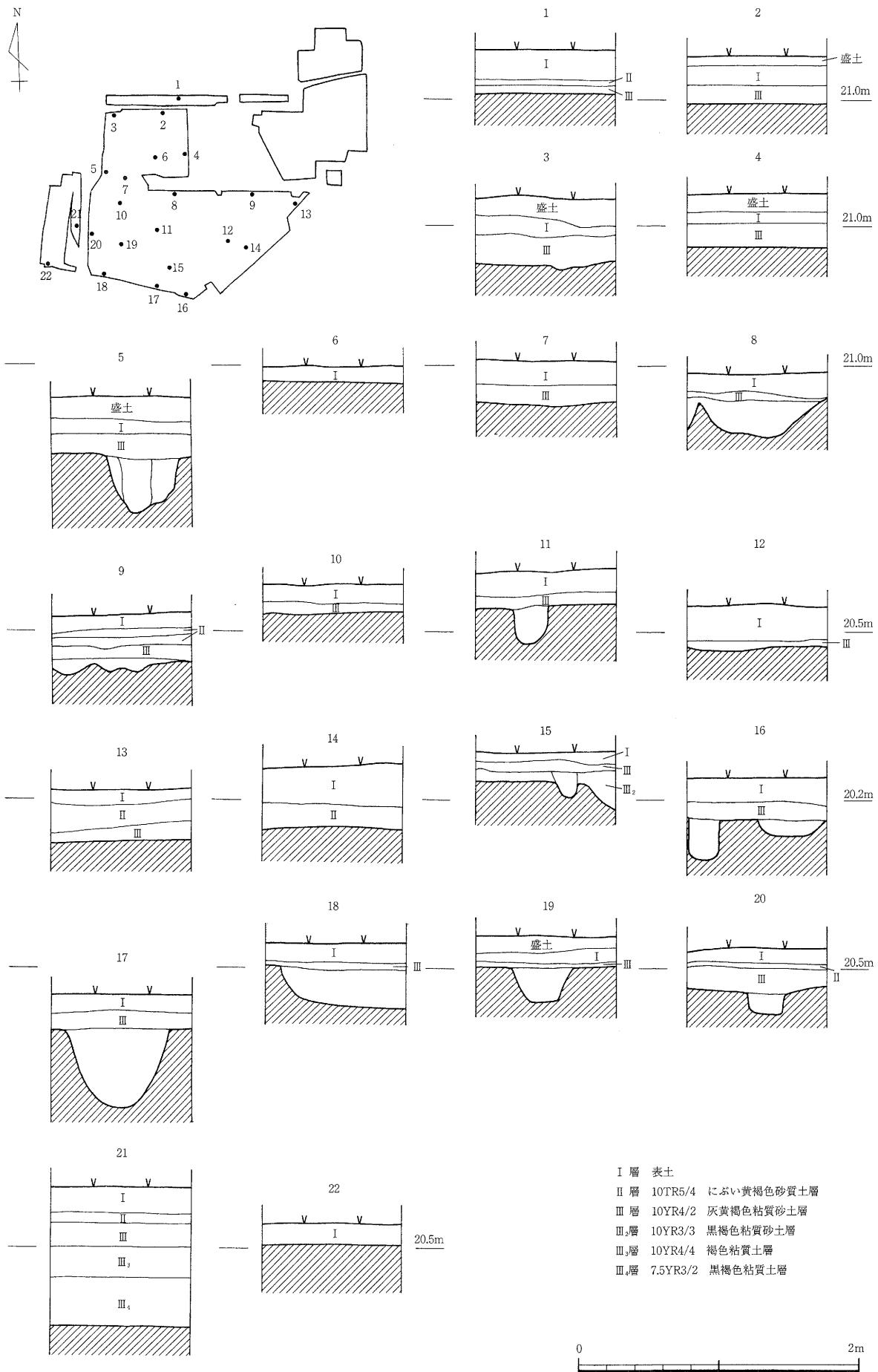
第II層 にぶい黄褐色砂質土を基本とする層で、表土の床土である。調査地域により若干の土質、色調の違いが認められる。部分的に複数に分層できる箇所、存在しない地域も存在する。層厚は、大半は0.1m前後を測るが、0.2mの地点もある。近世以降の遺物を若干含む。

第III層 灰黄褐色粘質砂土を基本とする層で、調査地域により若干の土質、色調の変化が認められるものの、中世を中心にそれ以前の遺物を多く包含する。ほぼ調査地域全域に広がるが、地山が高い地域を中心に削平を受け存在しない地区もある。層厚0.05mから0.2mを測る。

第III₂層 黒褐色粘質砂土を基本とする層で、B、C、J地区における標高の低い地域で部分的に認められる。奈良・平安時代を中心にそれ以前の遺物を包含し、上面から中世の遺構が掘り込まれている。層厚0.05mから0.2mを測る。

第III₃層 褐色粘質土を基本とする層で、J地区の一部のみで認められる。弥生・古墳時代の遺物を若干含む。層厚0.3m前後を測る。

地 山 検出した遺構は、第III層上面より検出した。それ以下の層には全く、遺構・遺物が検出しなかったことから本遺跡の地山であると判断した。本遺跡は、地形分類上下位段丘に位置し、基本的に地山は、赤褐色ないしは黄褐色を呈する粘質土の洪積層であるが、部分的に拳大以上の礫を多量に含む段丘礫層が顔を覗かせている。(奥)



第6図 基本層序図



第7図 古墳及び弥生時代周溝墓配置図

第2節 古墳の調査

1. 概要（第7図、付図1）

今回の調査で確認した古墳の総数は、可能性の高いものも含め総数43基を数える。検出した古墳の形状は、方墳が大半を占め、円墳は1基のみである。古墳は、全て墳丘が削平され、周溝のみが残存していた。埋葬施設についても、墳丘の盛土内に存在していたものと推定され、痕跡すら検出出来なかった。

古墳は、標高20.00mから20.80mを測る低位段丘の頂部を中心に検出された。41号墳を除き古墳のほとんどは、C地区のY=-38,280付近を東端、E地区のY=-38,410付近を西端、X=-129,390付近を北端とし、南端については調査区外にあるため不明である。これらから古墳は、東西約130m、南北約110m以上の範囲に密集している。

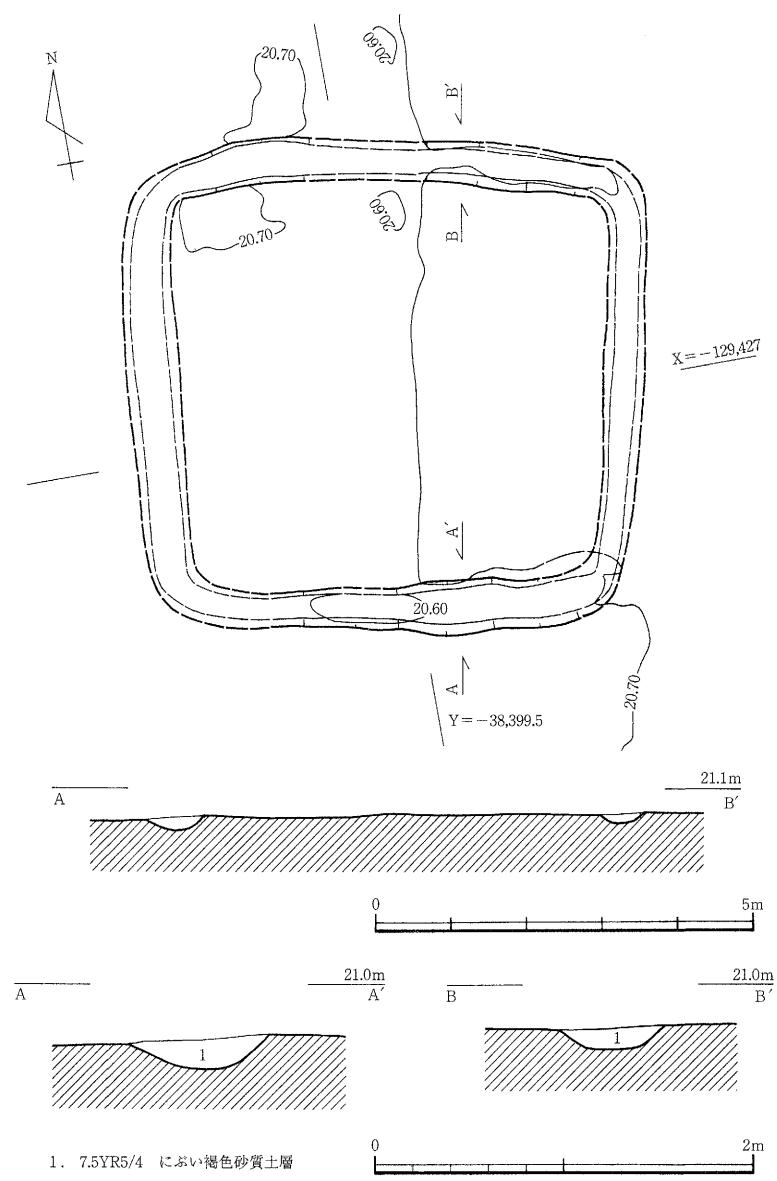
また、古墳に伴う遺構としては、B、D地区南側の丘陵頂部付近に、内部に古墳が全く存在しない区画溝がある。
(奥)

2. 1号墳（第8図、図版6-1~3）

B地区のX=-129,426.4、Y=-38,399.2付近を中心として検出した。古墳の東側にはほぼ接するように2号墳が存在する。北側約7m離れて21号墳、古墳の西側と南側には、古墳は全く検出されなかった。

古墳の東側と西側は、検出面が削平を受け周溝が欠失している。墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈していたものと推定され、南北長約5.5m、東西長は平面の形状から5.4m前後と推定される。全長は南北長約6.5m、東西長は古墳の形状から6.8m前後と推定される。方位はN-11°-Eである。

周溝は、前述したように検出面が削平を受けているものと推定され浅い。各周溝の計測値は



第8図 1号墳平面・断面図

南周溝幅約0.74m、深さ約0.15m、北周溝幅約0.55m、深さ約0.1mを測る。周溝の埋土は、にぶい褐色砂質土が1層のみ堆積している。周溝内から遺物は、全く出土しなかった。
(奥)

3. 2号墳(第9図、図版6-1・4、7-1)

古墳は、B地区で検出した。古墳の東側には4号墳、西側には1号墳、南側には3号墳が接するように存在し、北側には南北約8mを測る空閑地域の先の東側に38号墳、西側に21号墳が位置する。

古墳の中心は、X=-129,427、Y=-38,391.4付近にある。古墳は、検出面および古墳の北西側が後世の柱穴、土坑などによって削平を受けていたため、残存状態は極めて悪い。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈していたものと推定され、東西長約4.74m、南北長は北周溝が欠失しているため不明であるが、古墳の形状から6.0m前後と推定される。全長は、欠失している部分が多いため不明

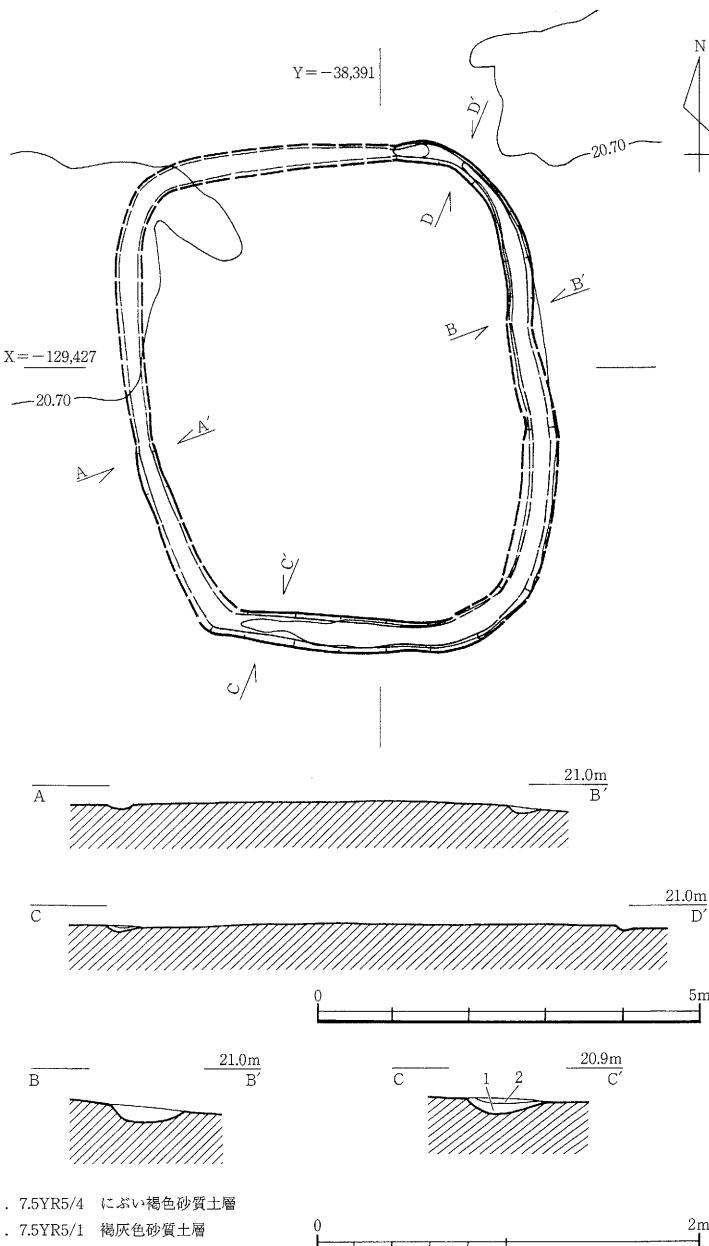
の点が多いが、東西長5.5m前後、南北長6.8m前後と推定される。

方位はN-7°-Wである。

周溝は、前述したように検出面が削平を受けており浅い。各周溝の計測値は、東周溝幅約0.4m、深さ約0.1m、西周溝幅約0.3m、深さ約0.05m、南周溝幅0.4m、深さ約0.1m、北周溝幅約0.25m、深さ約0.05mを測る。

周溝の埋土は、東、南周溝で確認した。南周溝は、上層に褐灰色砂質土層がレンズ状に堆積し、下層ににぶい褐色砂質土層が堆積する。東周溝はにぶい褐色砂質土のみが堆積している。

周溝内から遺物は全く出土しなかった。
(奥)



第9図 2号墳平面・断面図

4. 3号墳（第10図、図版

6-1・7-2~4)

古墳は、B、D地区の両地区で検出した。古墳の東側には4号墳と7号墳、北側には2号墳が存在する。西側と南側は空閑地域となり、古墳は検出しなかった。

古墳の中心は、D地区のX=-129,436、Y=-38,391.5付近にある。古墳は、検出面および古墳の南側が飛鳥時代と推定される住居跡によって削平を受けていたため、周溝の残存状態は極めて悪い。検出したのは、南周溝の西南辺部付近から周溝中央付近と東南辺部付近、北周溝の西北辺部を除き北東辺部付近までの区域である。残存していた周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、南北長約6.7m、東西長4.8m前後、全長は、南北長約7.5m、東西長6.1m前後のものと推定される。方位はN-6°-Wである。

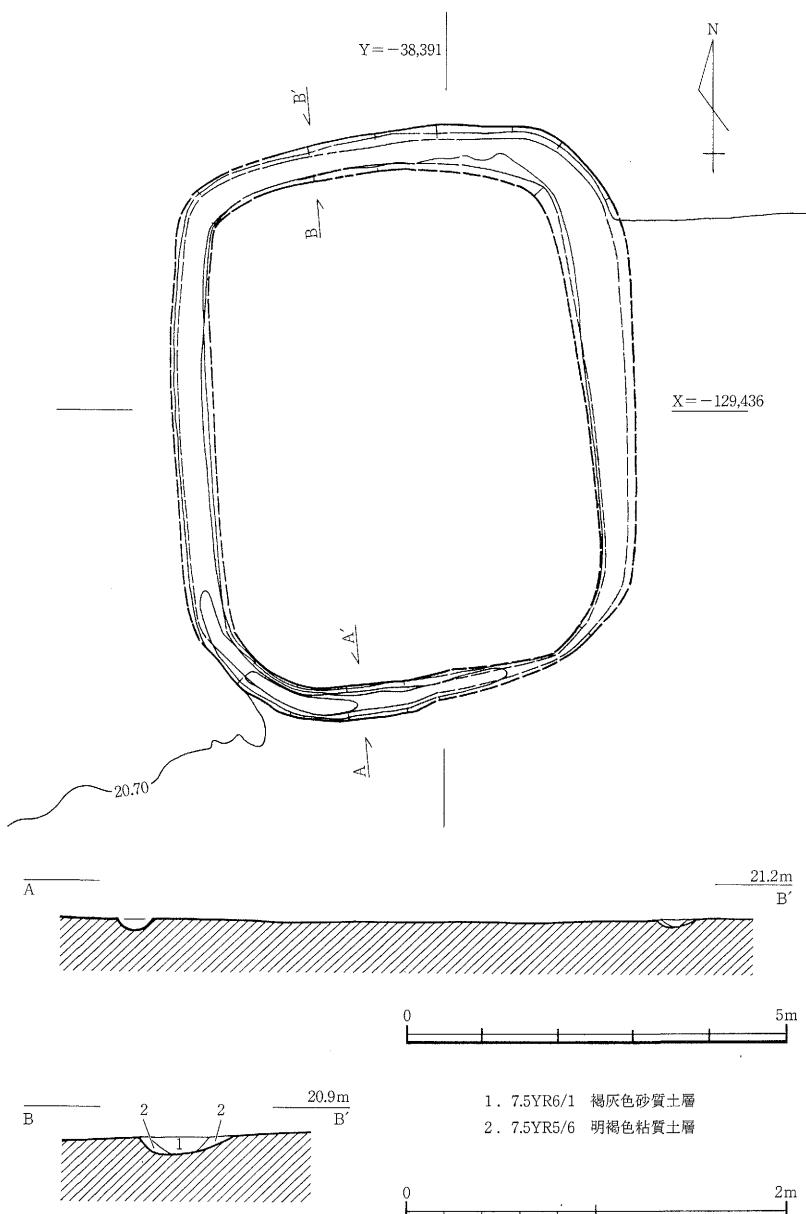
周溝は、前述したように検出面および後世の遺構によって削平を受けており浅い。各周溝の計測値は南周溝幅約0.48m、深さ約0.05m、北周溝幅約0.48m、深さ約0.09mを測る。周溝の埋土は、北周溝のみで確認し、周溝中央付近に褐灰色砂質土層が、周溝上部から底部にかけて「U」字状に堆積し、両肩部との間に明褐色粘質土が堆積している。

周溝内から出土した遺物は、弥生時代後期と推定される土器のみであった。

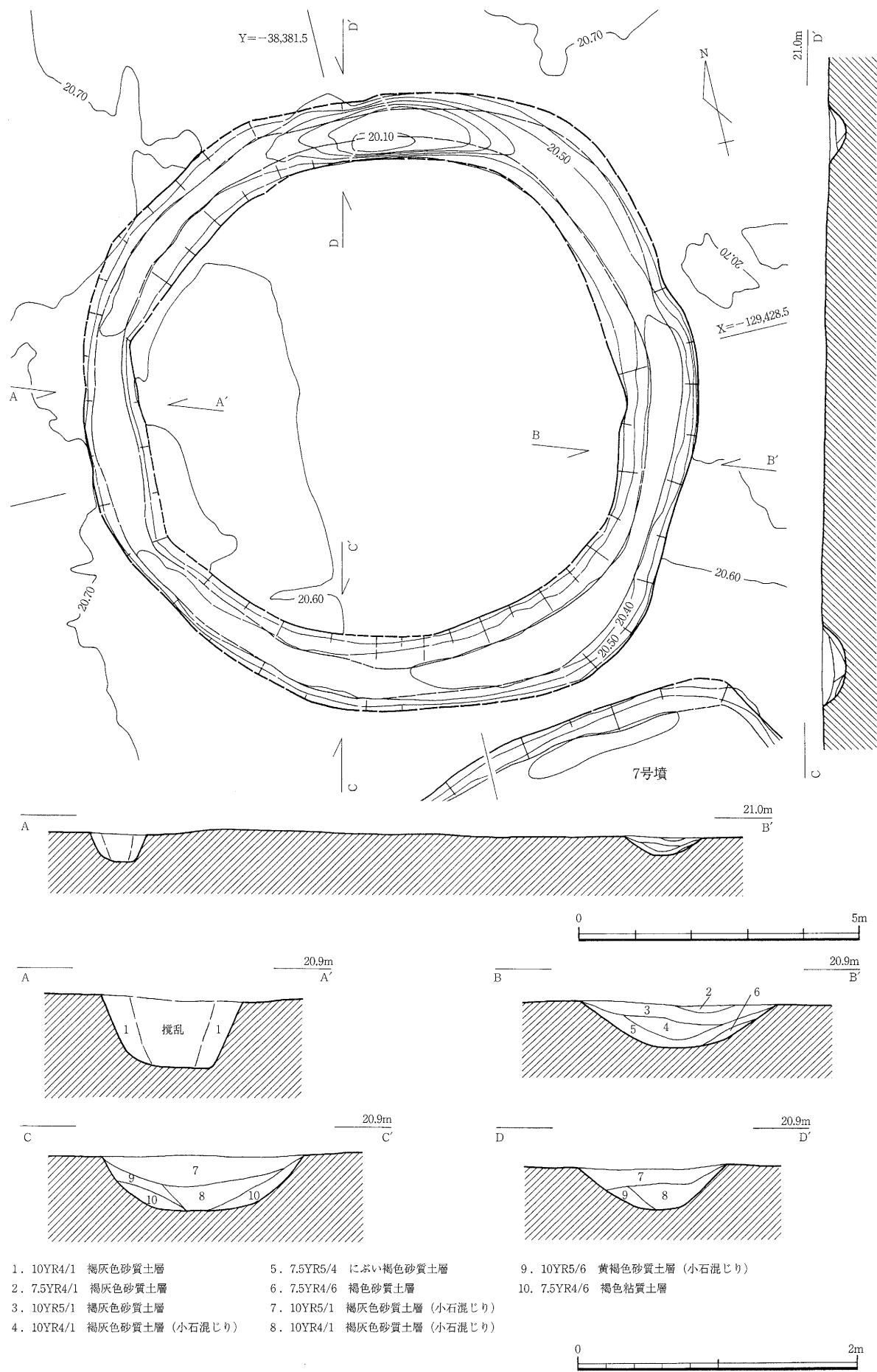
(奥)

5. 4号墳（第11図、図版8・9-1）

古墳はB地区に存在し、中心は、X=-129,428.5、Y=-38,381.5付近にある。古墳の北東側に6号墳、南東側に8号墳、南側に7号墳、南西側に3号墳、西側に2号墳、北側に38号墳に囲まれて存在する。古墳は、北東側が近代の土坑および西側を埋管により削平を受けている。



第10図 3号墳平面・断面図



第11図 4号墳平面・断面図

古墳は今回の調査において検出された古墳の中で唯一、平面形で円形を呈し、東西長約8.30m、南北長約8.56m、全長は、東西長約10.90m、南北長約11.05mを測る。

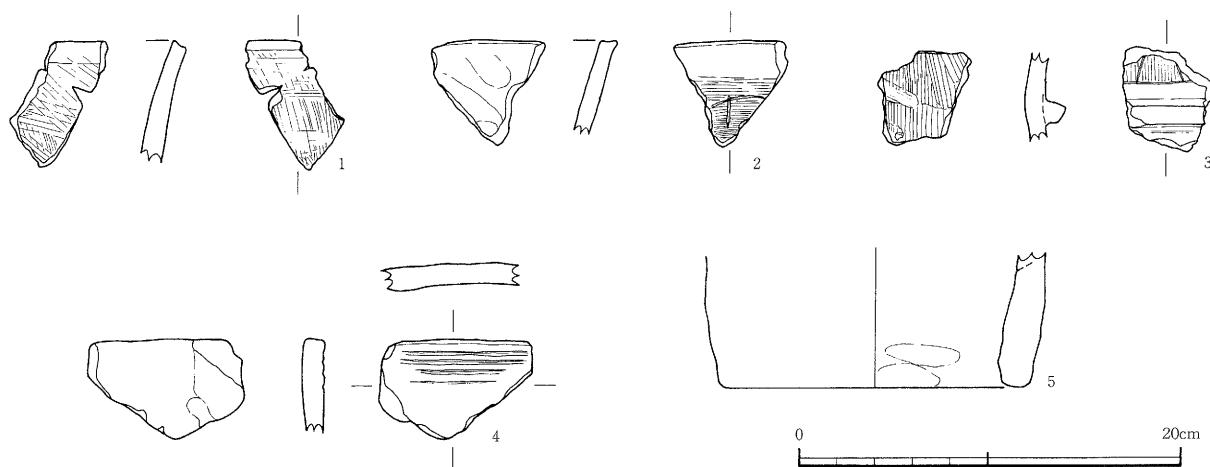
周溝は、断面「U」字形に近く、東側が幅約1.40m、深さ約0.30m、西側が幅約9.6m、深さ約0.5m、南側が幅約1.44m、深さ約0.39m、北側が幅約1.05m、深さ約0.30mを測る。周溝の埋土は、数層の土砂が凹レンズ状に堆積するものが多く認められる。基本的には、上層に褐色系砂質土、下層に褐色系の粘質土が堆積している。

周溝内から円筒埴輪、形象埴輪、須恵器壺が出土しているが、全て小片で少量であること、集中して出土していないことなどから、周辺の古墳からのものと判断している。 (奥)

出土遺物

埴輪（第12図、図版54） 1から3・5は円筒埴輪、4は形象埴輪である。1・2は、ともに口縁部の小片であるが、1は外面に粗いナナメハケを、内面に外面と同様な粗いナナメハケを施すものであり、その後に外面・内面ともユビナデを行っている。また、口縁端部は強いヨコナデによって外反し、端面は外傾している。これに対し、2は外面にヨコハケを、内面にナデを施しており、端部はヨコナデで仕上げるが平坦面を水平にもつ。プロポーションはやや開き気味に直立すると推測される。1・2とも、端部調整の際に端部付近を広くヨコナデするのが特徴である。2は、横の円弧状線と縦の直線が組み合わさったヘラ記号の一部が認められる。3は体部片で、外面・内面ともタテハケ調整である。突堤は、断面方形で、しっかりと貼り付けられている。横方向の直線1本と傾斜方向を違えた斜め方向の直線2本が組み合わさったヘラ記号の一部が認められる。5は底部片で、摩滅により調整は不明である。底部径は16.6cmと推定できる。色調・焼成は、1・3が褐色・硬質系、2・5が褐色・軟質系であり、円筒埴輪に少なくとも2種が認められる。

4の形象埴輪片は、摩滅のため調整等不明であり、4本の沈線が刻まれた面を外側にして、内弯するようであるが、詳細は不明である。色調・焼成は、褐色・軟質系である。 (小浜)



第12図 4号墳出土遺物

6. 5号墳（第13図、図版9-1）

古墳は、B地区で検出した。古墳の大半は、北側の調査区外にあり、検出したのは南西辺部の周辺のみである。古墳の東側には10号墳、西側には38号墳、南側には6号墳が存在する。北側は調査区外であるため不明である。

古墳の中心は、古墳の形状から北の調査区外のX=-129,417、Y=-38,373.5付近と推定される。調査区内にある周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈していたものと推定され、一辺5.5m前後、全長7m前後と推定される。方位はN-25°-Wである。

周溝は、検出面が削平を受けていたものと推定され浅い。周溝は南周溝の一部のみ確認し、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。周溝の埋土は、黒褐色砂質土で、1層のみ堆積している。

周溝内からは全く遺物が出土しなかった。

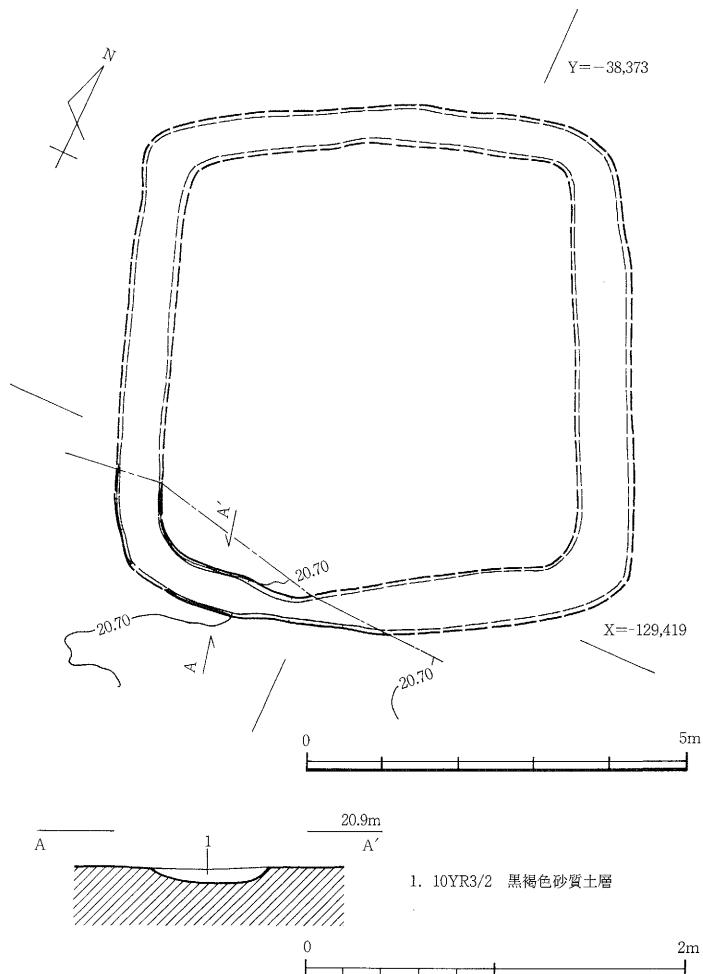
7. 6号墳（第14図、図版8-1、9）

古墳は、B地区のX=-129,424.5、Y=-38,373付近を中心として存在する。古墳の西側には4号墳、南側には8号墳、北側には5号墳が接するように位置する。東側には約4m離れて、10号墳が存在する。

古墳は、検出面が削平を受けており、残存状態は極めて悪い。墳丘は、平面形では隅丸方形に近く、南北長約5.6m、東西長5.4m、全長は、南北長約7m、東西長約6.6mを測る。方位はN-25°-Wである。

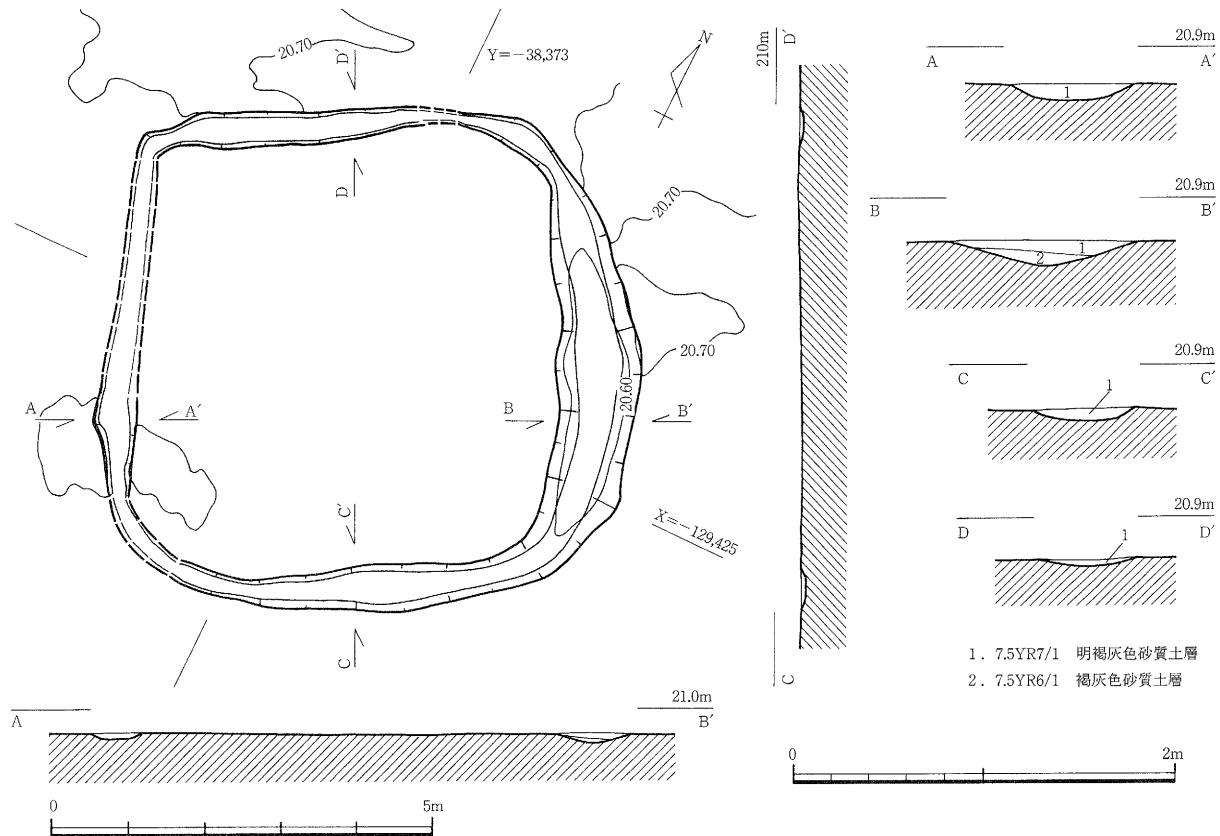
周溝は、前述したように検出面が削平を受けており浅い。各周溝の計測値は東周溝幅約1.0m、深さ約0.1m、西周溝幅約0.6m、深さ約0.1m、南周溝幅約0.5m、深さ約0.1m、北周溝幅約0.45m、深さ約0.05mを測る。周溝の埋土のほとんどは、明褐灰色砂質土層が1層のみであるが、東周溝の一部には下層に褐灰色砂質土が堆積する。

周溝内からは、弥生時代後期に比定される土器、古墳時代後期に比定される須恵器などで、古墳に伴うと推定される遺物は全く出土しなかった。



第13図 5号墳平面・断面図

(奥)



第14図 6号墳平面・断面図

古墳の埋没時期は、周溝内の出土遺物から古墳時代後期以降と推定される。 (奥)

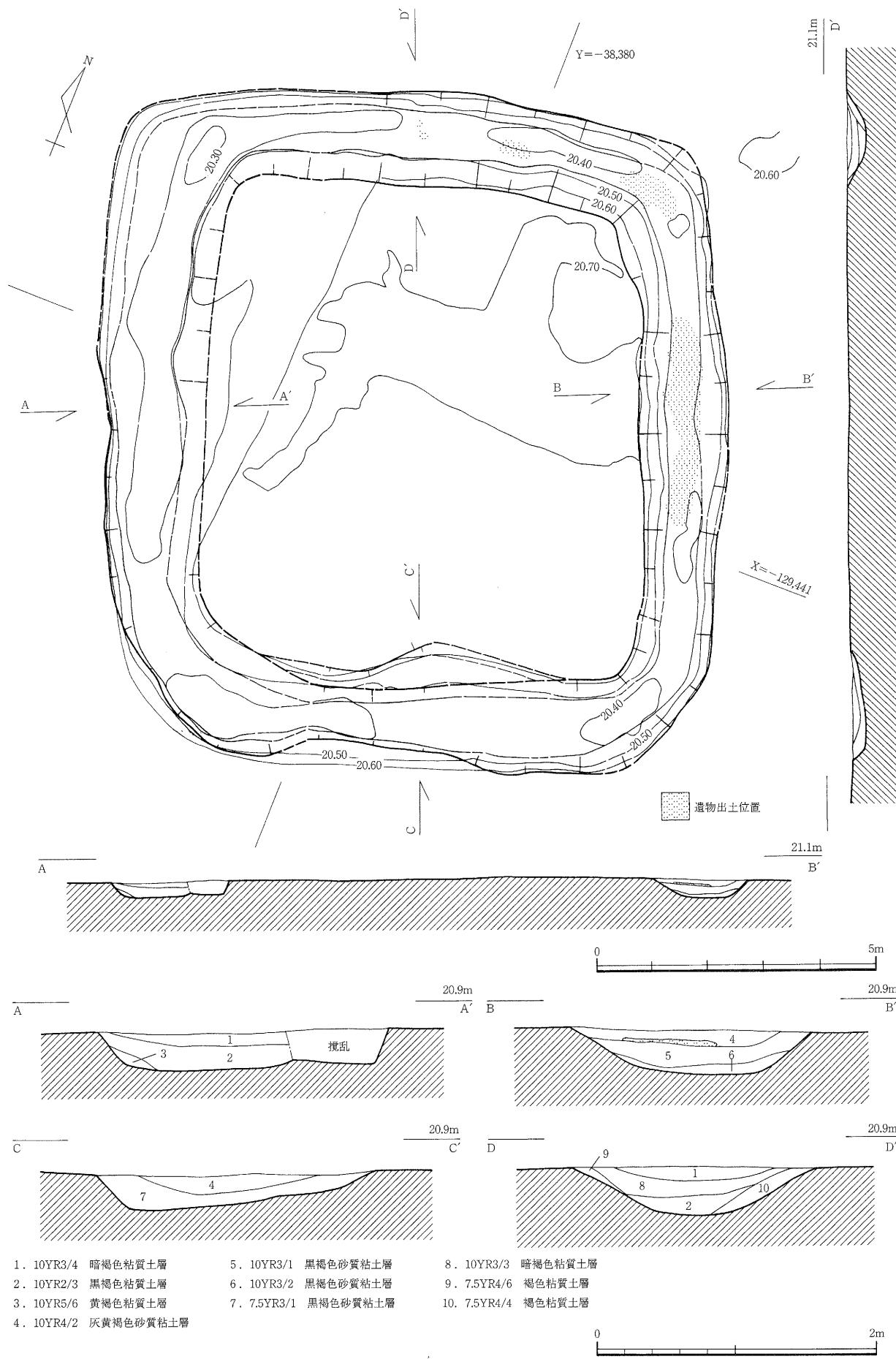
8. 7号墳 (第15図、図版10・11)

B、D地区に存在し、 $X = -129,440.3$ 、 $Y = -38,380$ 付近を中心に検出した。古墳は、北東側8号墳、南東側を9号墳、北西側を3号墳、南側を27号墳、北側を4号墳に囲まれている。古墳の南西側は、古墳が存在しない空閑区域となっている。古墳の北西側は、後世の遺構によって削平を受け欠失している。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約7.7m、南北長約8.8m、全長は、東西長約11.1m、南北長約12.2mを測る。方位はN-20°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.7m、深さ約0.3m、西周溝は周溝東側が欠失しているため幅1.4m以上（推定1.8m前後）、深さ約0.25m、南周溝幅約2.0m、深さ約0.25m、北周溝幅約1.75m、深さ約0.35mを測る。周溝の埋土は、上層には暗褐色粘質土ないしは灰黄褐色砂質粘土、中層から下層には黒褐色の粘質土ないしは砂質粘土が回レンズ状に堆積している。

遺物は、周溝中層上面からほとんどが出土している。下層からのものは極めて少ない。遺物の出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、東周溝中央南付近から北周溝中央付近にかけて集中している。周溝内から出土した古墳に関する遺物は、須恵器、埴輪、蛇紋岩製紡錘車などである。出土したほとんどの埴輪は小片で、後世に墳丘を壊した際、墳丘上に存在していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝中層上面に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形



第15図 7号墳平面・断面図

象埴輪で、形象埴輪は、馬、盾、家、不明1点などの小片がある。初期須恵器は、壺の体部と推定される小片で、埴輪の中に混じって出土した。小片であるため、時期の決め手には欠ける。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、7世紀前半に比定される杯蓋、甕片、轍の羽口などが出土した。これら周溝内上層の遺物から7世紀前半まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

出土遺物

埴輪（第16～19図、図版54～56） 6から15・19から28は円筒埴輪、16から18は朝顔形円筒埴輪、29から33はヘラ記号を有する資料、34から41は形象埴輪である。

11は、底部から口縁部まで残る良好な資料である。2条3段構成であり、2段目に円形透かしを一对、対面するように穿っている。プロポーションは、焼けひずみがあるものの、底部から直立氣味に立ち上がり、口縁部付近でやや外反する。器高は37.6cmから39.3cmである。各段では、底部（1段目）高が12.2cm前後、2段目突帯間隔が12.5cm前後、口縁部（3段目）高が13.6cmから14.5cmとなり、1・2段目がほぼ同間隔なのに対し、口縁部高がより長いタイプである。また径は、底部径18.0cm前後、2段目体部径17.8cmから19.3cm、口縁部径24.6cm前後と推定される。外面調整は、ハケ目工具の静止痕を垂直に残すB種ヨコハケである。ヨコハケに関しては、ハケ目工具を底端部から丁寧に巡らせ始めてはいるものの、器壁の平滑化は十分でなく、一次調整のタテハケをかなり残している。B種ヨコハケは、各段とも1周巡らせているのみで、工具幅は約10.4cmと推定できる。また、B種ヨコハケの静止痕間隔は、1.6cmから2.0cm程度の短い部分と4.5cm以上のやや長い部分が認められる。内面調整は、1段目から2段目までタテハケ、3段目はナナメハケである。ただし、底端部内面は、ユビオサエ・ユビナデによって調整されている。口縁部は、外面・内面とも端部下の広い範囲をヨコナデ調整しており、その際に外面・内面のハケ調整を消している。突帯の断面形状は、しっかりととした台形状を呈しているが、上辺のナデが強いために上辺がやや突出する。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

6から7は、口縁部を含む上部2段分の資料である。6は、口縁部高16.0cmから16.5cm、体部径は下段で18.2cmから20.0cmである。口縁部径は、推定で24.2cmである。外面調整は下段が一次タテハケのあとヨコハケ、上段はタテハケのみである。ハケ目工具の静止痕は認められない。内面調整は、下段はタテハケ、上段はナナメハケである。下段の外面調整は、器壁の凹凸の平滑化が十分でないために、かなり雑なヨコハケとなっている。また、ハケ目条数の粗い工具を使用している。これは内面の工具の特徴と同じであり、外面ヨコハケと内面のハケ目工具は同一である可能性が高い。口縁端部の調整は、7・11と同様、外面・内面とも端部下の広い範囲をヨコナデ調整しており、その際に外面・内面のハケ調整を消している。端面は凹面でかつ外傾している。突帯の断面形状は、しっかりと突出した方形状を呈するが、貼り付け時のナデの力が不均等なために突帯全体が波打っている。下段には円形透かしを有しており、×字を上下2つ合わせたようなヘラ記号を同一段に記している。色調・焼成は、褐色・硬質系だが、かなり須恵質化している。

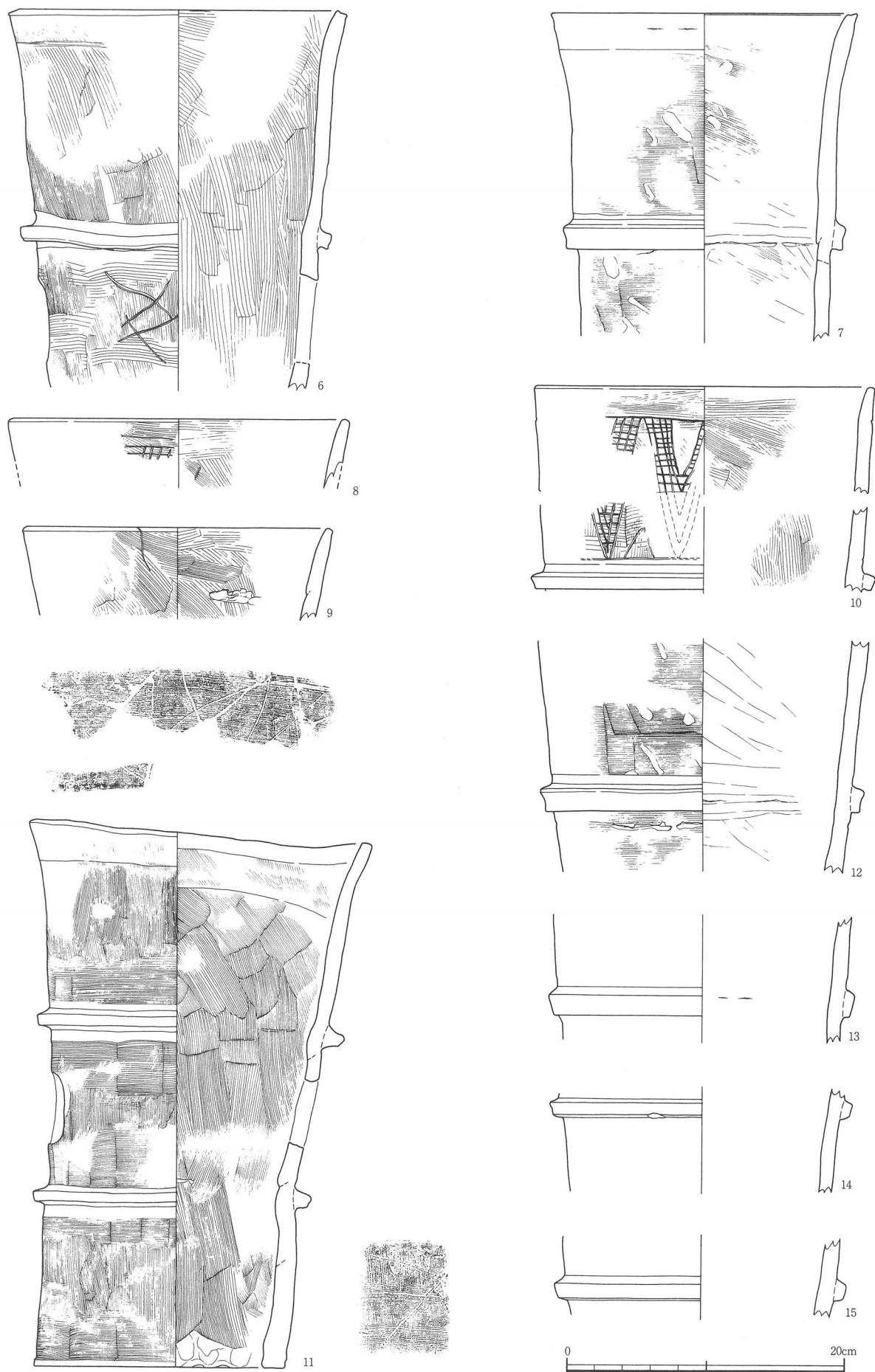
7は、口縁部高16.3cm、体部径は下段で17.8cmである。口縁部径は推定で22.0cmである。外面調整はヨコハケを施す。ハケ目工具の静止痕が部分的に認められ、B種ヨコハケと考えられるが、摩滅による不明瞭さのため、単位や工具幅は不明である。内面調整はハケ目を見せる部分もあるが、基本的に板状工具による斜め方向のナデである。下段には円形透かしの一部が残存している。口縁部は、11と同様外面・内面とも端部下の広い範囲をヨコナデ調整しており、その際に外面・内面調整を消している。また、端面はつまみあげながらのヨコナデ調整のため、凹面をなしている。突帯の断面形状は、幅広でやや低いM字状を呈する。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

8から10は、口縁部片である。外面調整は、9はナナメハケ、10は一次タテ・ナナメハケののちヨコハケを施す。10のヨコハケには、ハケ目工具による静止痕が認められ、B種ヨコハケである。8は小片であり不明瞭だが、後述するように10と同一の可能性がある資料であることから、ナナメハケののち二次調整のヨコハケを施すものと考えられる。内面調整は、すべてタテ・ナナメハケであり、口縁端部付近にはヨコハケを施している。この内面調整のハケ目は、6と同様粗い。口縁端部の形状は、端面がわずかに丸みを帯びる共通した特徴が認められる。口縁部のプロポーションについては、小片のため不確かだが、8・9はやや開き気味であるのに対し、10は直立し、端部がヨコナデ調整のため、器厚が薄くなり、わずかに外反する。口縁部径は、8が24.6cm、9が22.2cm、10が24.6cmと推定される。また、10の口縁部段には4重から5重の鋸歯文で内部を格子状にした沈線文様を連続させており、8の口縁部段に認められる沈線文様も10と同じものと考えられる。8は、この文様や調整、色調、焼成などの特徴から、10と同一個体である可能性が高い。色調・焼成は、すべて褐色・硬質系だが、8・10はかなり須恵質化している。

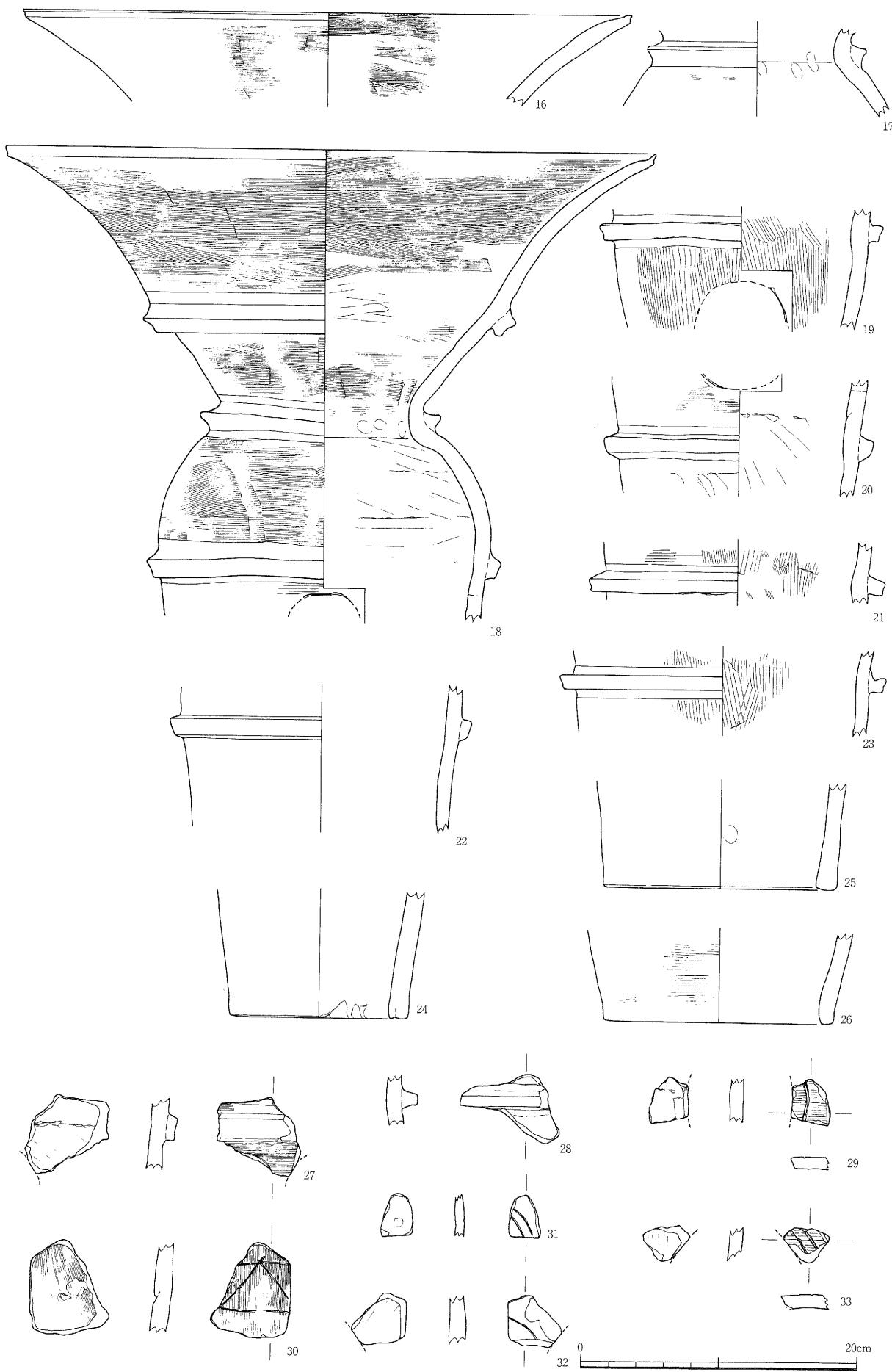
12から15・19から23・27・28は、体部片である。調整については、摩滅により不明なものも多いが、外面調整は12・20・21ではヨコハケ、19・23ではタテハケを施しており、内面調整は12・20が工具・ユビナデ、19・21・23がタテハケと、外面調整の差とほぼ対応する。ただし、ヨコハケ調整のものは2段目以上、タテハケ調整のものは底部を含む資料である可能性がある。また、19から21・23で認められるハケ目は口縁部資料で認められたのと同様に粗く、特徴的である。体部径は最小で16.8cm、最大で23.8cmと推定され、底部から口縁部までの資料が含まれていることを考慮すると、すべて小型で、わずかに外開き気味に立ち上がるプロポーションであることがわかる。突帯の断面形状は、幅広で扁平な台形状から台形状、やや突出した方形形状を呈するものなどさまざまである。色調・焼成は、褐色・軟質系と硬質系の2種がある。

24から26は、底部片である。外面・内面調整は、摩滅によりほとんど不明であるが、26において外面にわずかにヨコハケが認められる。底部径は、24が13.0cm、25が17.0cm、26が16.8cmと推定される。色調・焼成は、すべて褐色・軟質系である。

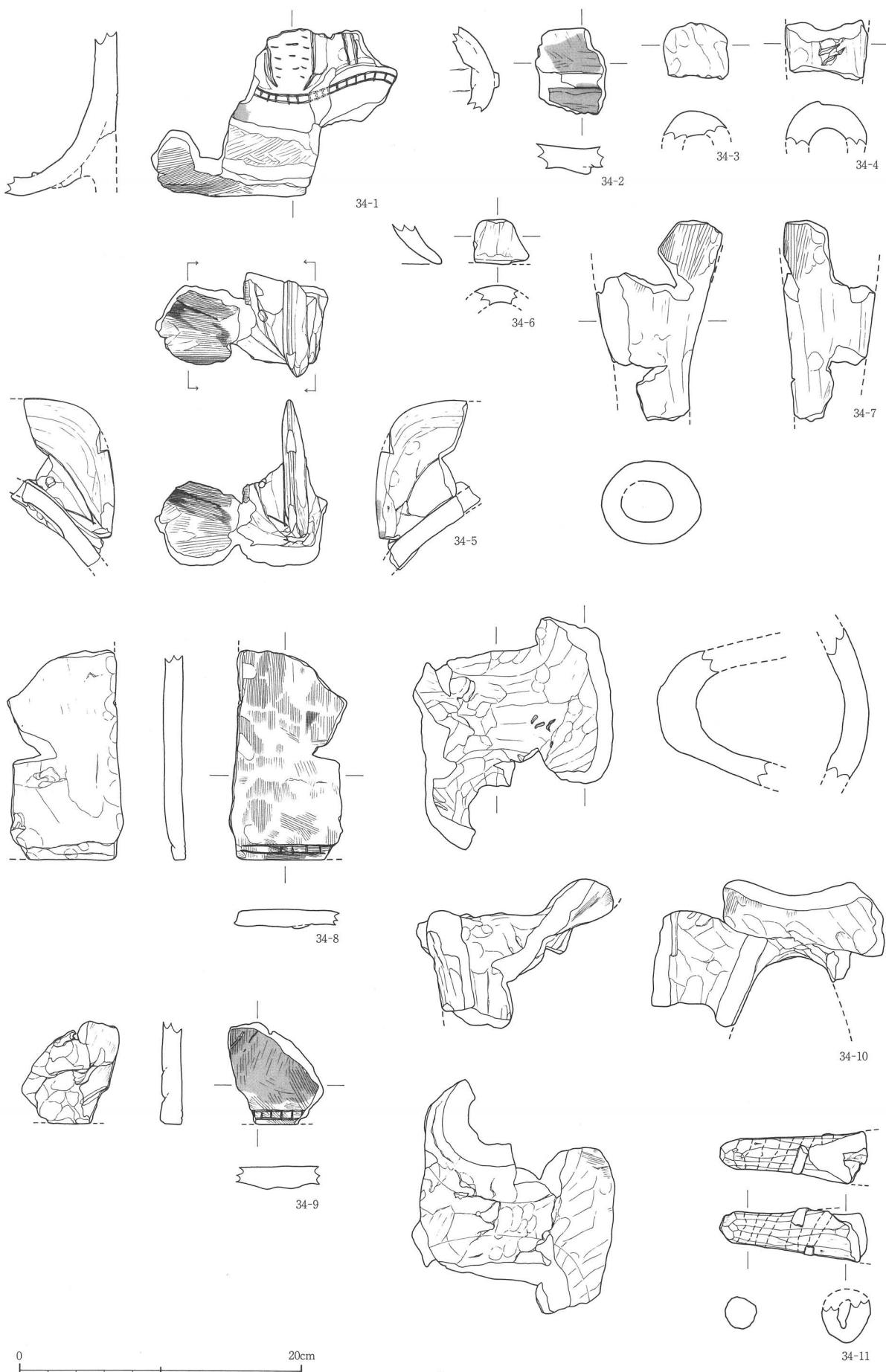
16から18は、朝顔形円筒埴輪であるが、16は口縁部片、17は肩部から頸部にかけての破片資料、18は肩部から口縁部にかけての資料である。16・18では外面調整にハケ目工具の静止痕をほぼ垂直にもつB種ヨコハケを施しており、内面調整もヨコハケである。ただし、18の肩部の内面調整



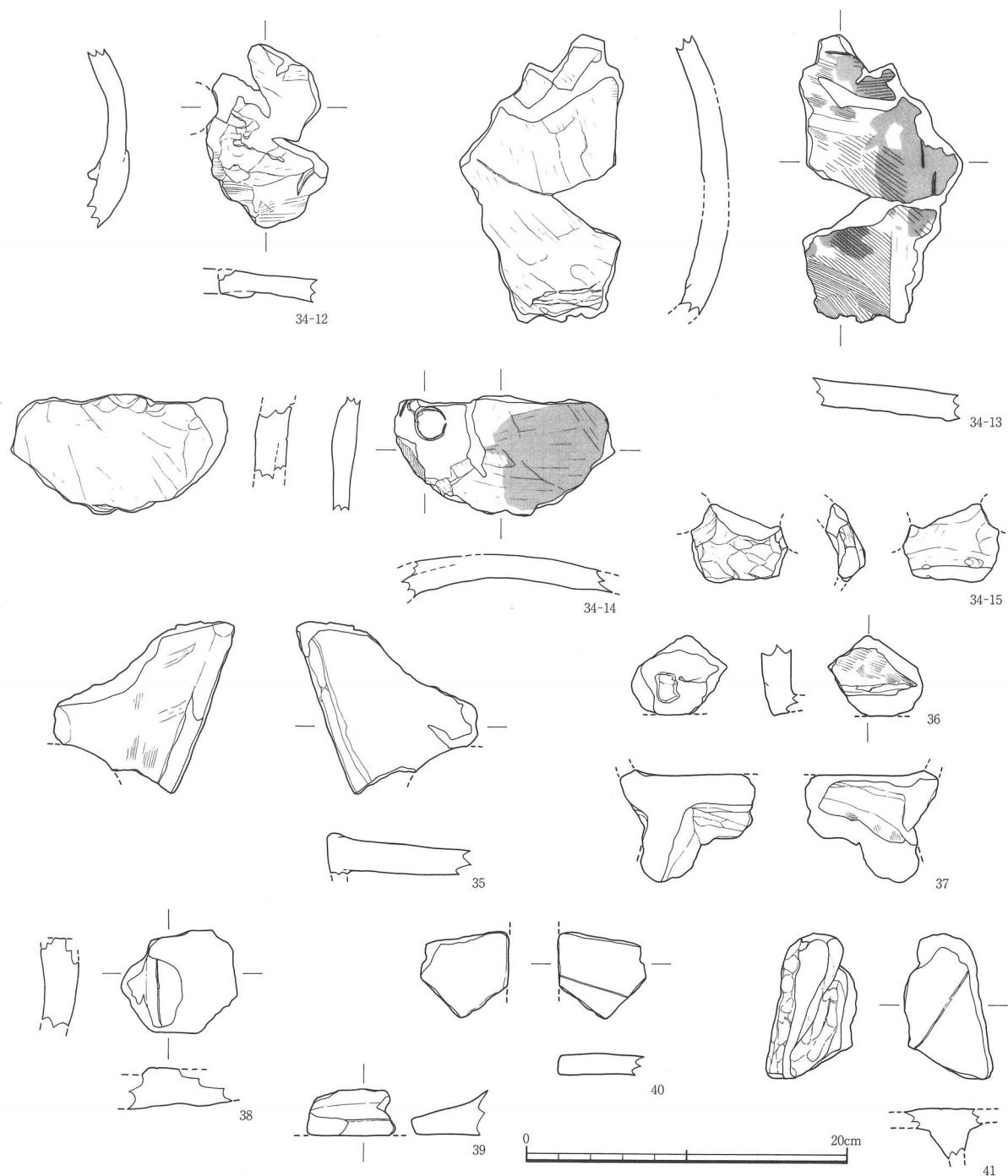
第16図 7号墳出土遺物1



第17図 7号墳出土遺物 2



第18図 7号墳出土遺物 3



第19図 7号墳出土遺物 4

は、17も合わせて、斜め方向のユビナデである。口縁部径は、16が44.0cm、18が47.2cmと推定される。また、18の体部径は推定で23.0cmである。口縁端部は、16・18ともつまみあげながらヨコナデ調整されている。18は、肩部直下の段に、円形透かしの一部が残存している。色調・焼成は、16が褐色・硬質系、17が褐色・軟質系、18が黄褐色・硬質系と、すべて異なる。

29から33は、ヘラ記号を有する資料である。30を除くと、すべて円弧状の1条ないし2条の沈線が残る資料である。円筒埴輪の体部片である可能性が高い。30は、2条の平行する沈線内に鋸歯文を入れる文様部分である。円筒埴輪片、形象埴輪片両方の可能性が残る。

34は、馬形埴輪である。34-1は、鞍袴および障泥にあたる部分である。鞍袴は、中央が下方

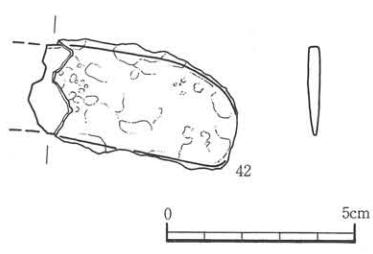
により突き出た逆山形になるものと思われ、その中央部分が残存している。縁は斜め横方向からの刺突をほぼ等間隔に連続させて縫い目を表現している。障泥は、上部の縁側を平行する2条の線とその内部を直交する刻み線を組み合わせて表現している。馬体と離れて下方に垂れる下部は剥離をしてしまっている。また、障泥を吊り下げる吊り革が鞍轡の横に表現されている。34-2は、馬面の側面にあたり、面繫と環板鏡板付轡を表現した部分と考えられる。34-3・4・6・7は、脚にあたる部分である。34-6は、足先にあたり、裾広がりの形状を呈する。この形状は、後述する12号墳の馬形埴輪の足先表現と共通する。34-7は、左右対称ではなく、一方が直線的でなくゆるやかなカーブを描いていることから、前脚にあたる部分と考えられる。34-5は、後輪および尻にかけての部分である。後輪の磯部分には綏金具が取り付く部分を四角い突起で表現している。尻部分には赤色顔料が全面に塗布されていた痕跡が窺える。34-8・9は、障泥の下部にあたる部分である。下端の縁には、34-1でみられたのと同様の表現がある。34-10は、腹にあたる部分である。脚2本の位置も確認できる。腹部分から体部の一方が大きく反り上がる形状から、頭部へ向かう部分と考えられ、脚は前脚に該当すると思われる。34-11は、尻尾にあたる部分である。尾を巻いた部分も残存あるいは剥離して痕跡をとどめている。以上の馬形埴輪片は、焼成も良好で、褐色・硬質系であり、尻尾などやや須恵質化しているものも認められる。34-12から41は、形状不明の形象埴輪片である。ただし、34-12および34-14にみられる円孔は、馬形等動物埴輪の腹部分によく認められる特徴であり、34-13・14では赤色顔料を塗布している点や色調・焼成が先にみた馬形埴輪と類似していることから、馬形埴輪の体部に該当する可能性が高い。

(小浜)

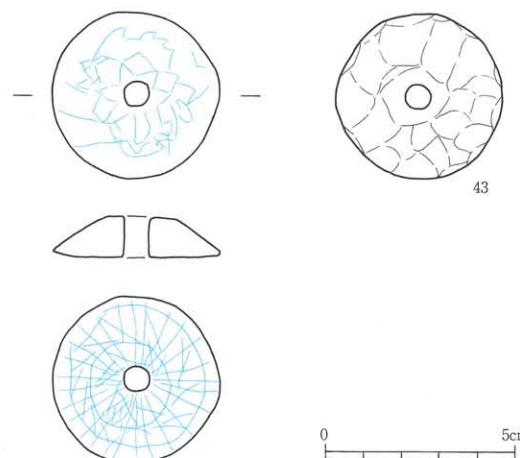
鉄製品（第20図） 42は鉄鎌の刃先と推定される小破片である。刃先から約6.5cmまで残存し、残りの部分は欠損している。幅約2.3cm、最大厚さ0.3cmを測る。

石製品（第21図、図版53） 43は、蛇紋岩製の紡錘車である。円錐台形を呈し、底面径は約4.3cm、上面径約1.8cm、高さ約1.0cmを測り、ほぼ中央部に径約0.6cmの円孔を穿く。外表面は、面取りを行った後、表面を丁寧に磨きあげている。外表面および裏表面には線刻が刻まれている。なんらかの形状を示しているものと推定されるが、現在の所不明である。色調はオリーブ灰色を呈する。

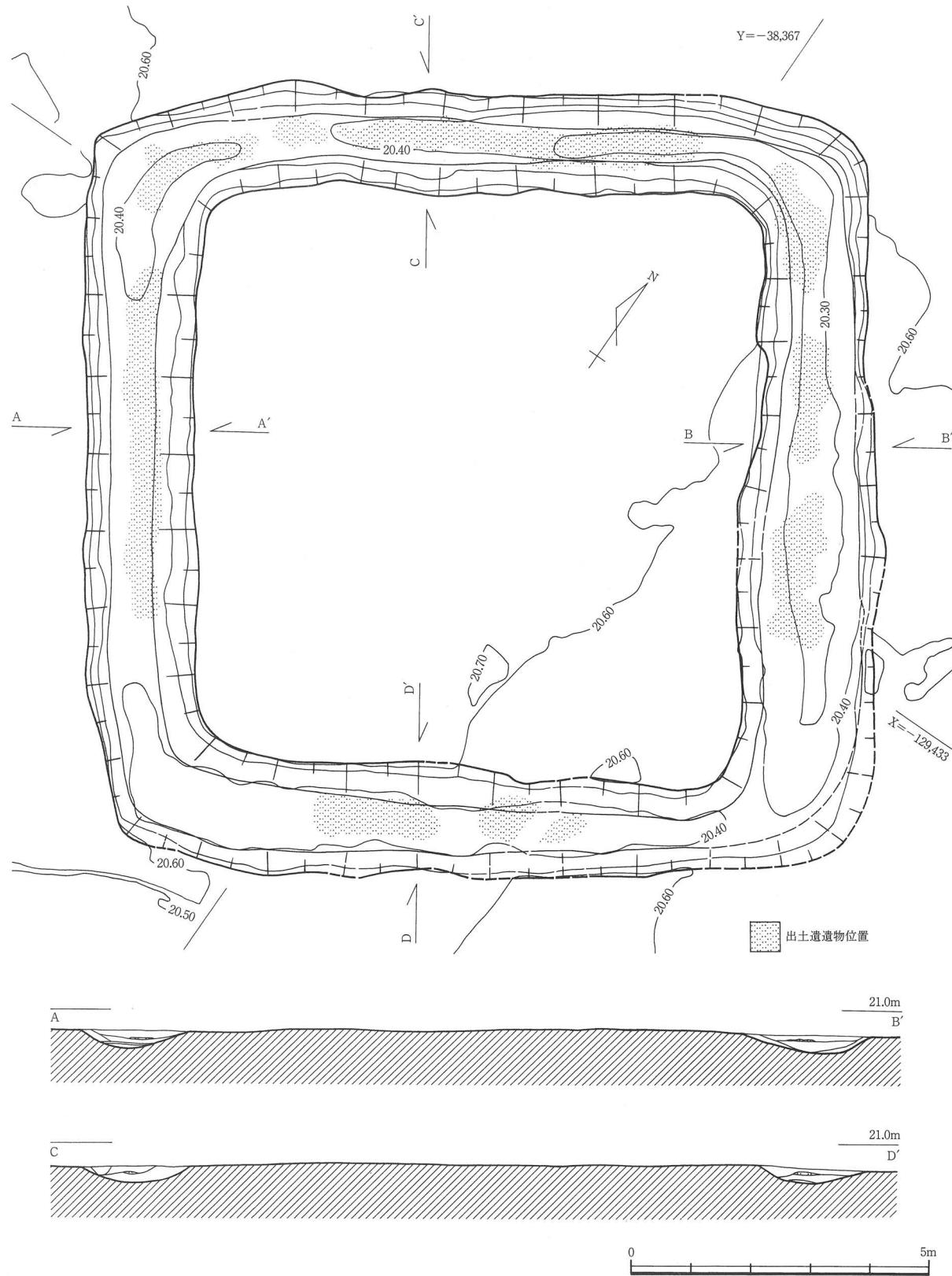
(奥)



第20図 7号墳出土遺物5



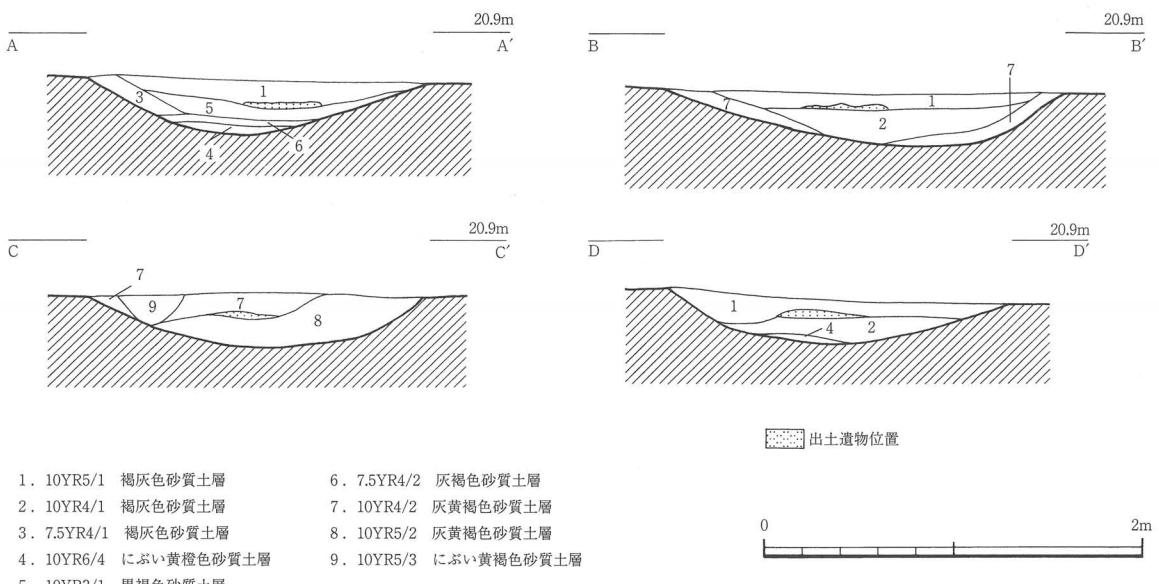
第21図 7号墳出土遺物6



第22図 8号墳平面・断面図

9. 8号墳（第22・23図、図版12・13-1）

B地区に存在し、X = -129,433.3、Y = -38,367.5付近を中心として検出した。古墳は、北東側に幅約10mの古墳空闊区域を挟んで11号墳、北西側を6号墳、北側を10号墳、西側を4号墳、南西側を7号墳、南東側を9号墳に囲まれている。



第23図 8号墳周溝土層断面図

墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約9.2m、南北長約9.6m、周溝を含めた全長は、東西長約13.2m、南北長約13.2mを測る。方位はN-34°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約2.1m、深さ約0.3m、西周溝幅約1.8m、深さ約0.3m、南周溝幅約1.85m、深さ約0.25m、北周溝幅約1.7m、深さ約0.3mを測る。周溝の埋土は、上層には褐灰色ないしは灰黄褐色の砂質土、中層には褐灰色ないしは黒褐色の砂質土、下層にはにぶい黄橙色砂質土が凹レンズ状に堆積している。また、周溝の墳丘肩部に沿って墳丘盛土と推定される灰黄褐色ないしは褐灰色の砂質土が堆積している箇所も認められる。

遺物は、周溝中層上面からほとんどが出土し、下層からのものは極めて少ない。遺物の出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、周溝のほぼ全域におよぶ。

周溝から出土した古墳に関係する遺物のほとんどは、埴輪で須恵器は極少量である。出土したほとんどの埴輪は小片で、後世に墳丘を壊した際、墳丘上に存在していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝中層上面に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪は、家、草摺と推定されるもの1点、不明4点などの小片がある。初期須恵器は、埴輪に混じって出土し、図化したもの以外に壺、甕、小型壺、把手付鉢と推定される小片がある。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、甕片、壺片などが出土している。これら周溝内上層の遺物から6世紀後半以降まで周溝が存在していた可能性がある。(奥)

出土遺物

土器 (第26図) 95は須恵器短頸壺と推定される口縁部である。口縁部は短くやや外側に直立気味に立ち上がる。口縁端部は、断面三角形に近く端部は丸い。口径9.9cm前後、残存高1.8cmを測る。(奥)

埴輪 (第24~26図、図版56~58) 45から49・51から77は円筒埴輪、44・50は朝顔形円筒埴輪、78から84はヘラ記号を有する埴輪、85から94は形象埴輪である。

45から48、74・75・77は、口縁部片および口縁部を含む資料である。外面調整は、摩滅により不明瞭なものを除き、ヨコハケを施している。ハケ目工具の静止痕を有するB種ヨコハケであるが、静止痕はやや斜めに傾く。46では、同一段に少なくとも2周巡らせていている。内面調整は、ヨコ・ナナメハケが主体であり、その後部分的にユビナデを施している。プロポーションは、47が外側に大きく開くのに対し、48はほぼ直立する。口縁端部の形態は、外面・内面調整後のヨコナデ時の力により、器厚がわずかに薄くなり、端面は水平か外傾している。口縁部高は47が15.0cmから15.6cm、48が15.0cmであり、プロポーションは異なるがともに近接した高い数値を示している。突帶の断面形状は、47が強いM字状を呈するのに対し、48は台形状である。47は下段に円形透かしの一部が残存しており、上方の突帶下端にまで穿孔が及んでいる。口縁部径は推定で、45が17.6cm、46が24.4cm、47が26.4cm、48が24.2cmである。すべて小型か中型の範疇に収まるものである。45は残存率が悪い小片であるため、かなり小さい値が出ているが、若干の誤差はあると思われる。ただし、45のみハケ目の粗い工具を外面・内面ともに用いていることで、他と異なっていることは注意される。色調・焼成は、46・47・48・75が褐色・軟質系、45・74・77が黄褐色・硬質系で、大きく2種に分けることができる。

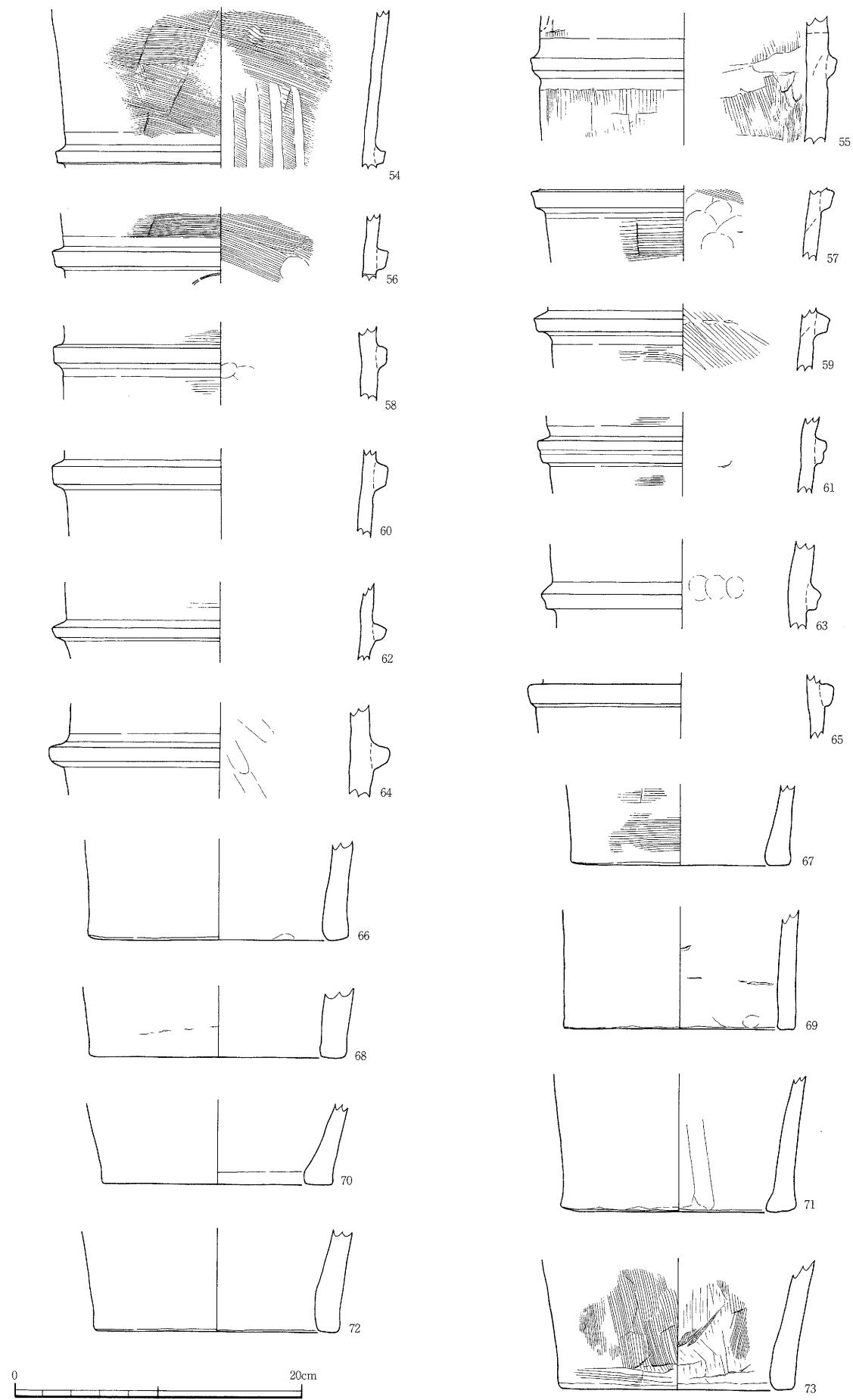
49・51から65は、体部片である。外面・内面調整とも摩滅により不明瞭な資料も多いが、観察しうる資料では、55の外面・内面調整がタテハケであるほかは、外面調整にヨコハケあるいはハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケ、内面調整はナナメハケおよびユビナデを施すものである。B種ヨコハケの板状工具の静止痕は、朝顔形円筒埴輪の体部と同様、斜めに傾く場合が多い。ただし、51では上段は斜めに傾き、下段ではほぼ垂直になっているように、同一個体内での静止痕の傾きにはらつきが認められる。また、B種ヨコハケは、52・54では少なくとも2周以上巡らされている。工具の幅は、54で8.4cm以上あることがわかる。体部径は、18.0cmから19.0cm前後となるものと、22.0cmから24.0cm前後となるものの大きく2つに分けられる。しかし、体部片がどの段に属するかによって外開する円筒埴輪の径はかなり差が生じると考えられることから、法量を異にするタイプを設定するのは妥当ではないであろう。突帶の断面形状は、突出度に差はあるものの台形状を呈するものが多く、しかも貼り付け時の力により突帶上辺が下辺より突出するものが多い。色調・焼成は、褐色・軟質系が大半を占める。例外としては、49が褐色・硬質系、67が淡黄・軟質系、73が黄褐色・硬質系である。

なお、図化しうる破片ではなかったが、突帶の設定技法としての方形刺突が観察できる破片が存在した。

66から73・76は、底部片である。外面・内面調整とも摩滅により不明瞭な資料が多いため、傾向を把握することは困難であるが、67では外面にB種ヨコハケを、71では内面調整に縦方向のユビナデ、73・76では外面・内面にタテハケを施している。ただし、73は底部外面下端約1.5cmの幅にのみ、器面調整のためと考えられるヨコハケを行っている。また、76の内面ハケ目は、口縁部片の45で観察したのと同様に粗い。外面にはX状のヘラ記号が認められる。底部径は、すべて



第24図 8号墳出土遺物 1



第25図 8号墳出土遺物 2



第24図 8号墳出土遺物 3

15.5cmから17.0cmの範囲に収まり、小型の範疇である。底部高のわかる資料はなく、最も残存度の高い71で、9.5cmを測る。底部の立ち上がりの形状は、器厚を変えずにほぼ直立する66・68・69と、器厚は大きく変わらないが緩やかに外反する72・73、底部端が加重でつぶれ2cm以上の器厚になり大きく外反しながら立ち上がる70・71がある。色調・焼成は、わずかに褐色・硬質系のものが含まれるが、大半は褐色・軟質系である。

44・50は、朝顔形円筒埴輪である。44は朝顔部分である。外面調整は、ハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケであり、口縁部には少なくとも3周めぐらされている。工具幅は4.1cm以上である。内面調整はヨコ・ナナメハケで、部分的にユビナデが施されている。口縁部径は、推定で46.4cmである。50は、体部から肩部・頸部にかけての資料である。外面調整は、44と同様B種ヨコハケであり、板状工具の静止痕は斜めに傾いている。また、静止痕間隔は、体部で2.0cmから2.5cm、朝顔部で2.0cmから4.5cmを測る。工具幅は5.8cm以上である。

内面調整は、朝顔部でヨコ・ナナメハケであり、肩部から体部にかけては斜め方向のユビナデである。色調・焼成は、ともに褐色・硬質系であり、同一個体の可能性もある。

78から84は、いずれもヘラ記号であると考える小片資料である。しかし、形象埴輪の文様部分になる可能性も残る。78・80・82・83・84は2条の弧状沈線、79は2条の直線、81は1条の直線を刻む。また、80・81は、円形透かしの一部が残存している。

85から94は、形象埴輪と思われる破片資料である。具象物を特定できるものは少ない。86は、綾杉文様を線刻しており、おそらく草摺形埴輪であろう。91・92は、家形埴輪の屋根の軒先部分および裾廻り部分にあたると考えられる。94も三角状にやや強く湾曲する破片であり、家形埴輪の屋根部分に相当する可能性はあるが、総持寺古墳群中から出土する他の家形埴輪とは屋根表現が類似しないため、断定はできない。85・87はともに外面にハケを施した板状部分と円筒部への接続部分が観察される。89は、単なるヘラ記号か線刻文様か断定しがたいが、横断面の器厚が均一でないことから、円筒埴輪ではなく、形象埴輪になると考えられる。90・93は、外面にハケを斜めや横方向に施しており、端部から内弯しながら立ち上がる。

(小浜)

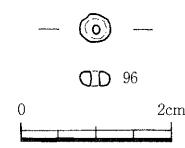
装身具（第27図、図版53） 96はガラス製小玉である。径約0.4cm、厚さ約0.2cmを測る。玉の中央部に0.1cmの円孔を穿いる。色調は淡い碧色を呈する。

(奥)

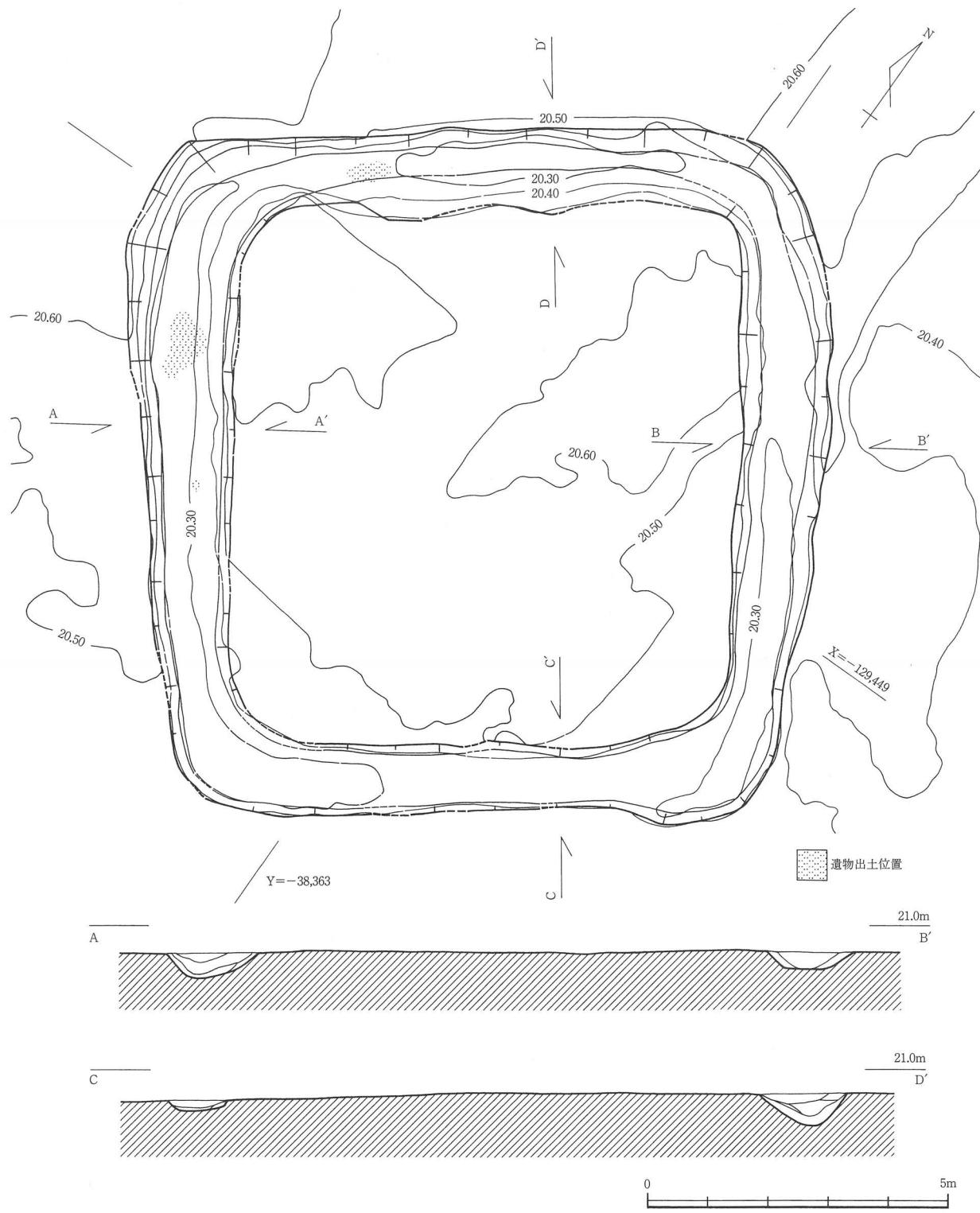
10. 9号墳（第28・29図、図版13-2～4・14-1・2）

B、D地区にかけて存在し、X=-129,449.7、Y=-38,363.5付近を中心として検出した。古墳は、四方に存在する幅2mから5mを測る古墳空闊区域を挟んで東側に12号墳、北側を8号墳、北西側を7号墳、西側を27号墳、南西側を28号墳、南東側約5m離れて18号墳が存在する。

墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約8.4m、南北長約8.9m、周溝を含めた全長は、東西長約11.2m、南北長約11.3mを測る。方位は 第27図 8号墳N-35°-Wである。



出土遺物 4



第28図 9号墳平面・断面図

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.4m、深さ約0.3m、西周溝幅約1.5m、深さ約0.4m、南周溝幅約1.15m、深さ約0.2m、北周溝幅約1.4m、深さ約0.5mを測る。周溝の埋土は、おおまかに2層に分かれ、上層にはにぶい褐色ないしは灰黄褐色、黒褐色を呈する砂質土ないしは粘質土、下層には褐色ないしは暗褐色を呈する粘質土が凹レンズ状に堆積している。

また、周溝の墳丘肩部に沿って墳丘盛土と推定される灰褐色ないしは褐色の粘質土が堆積している箇所も認められる。

遺物は、周溝中層上面からほとんど出土し、下層からのものは極めて少ない。遺物の出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、周溝のほぼ全域におよぶ。

周溝から出土した古墳に関係する遺物は、埴輪と土器で量は少ない。埴輪は、円筒埴輪、形象埴輪で、形象埴輪は鶏、不明1点である。土器は、須恵器杯蓋、須恵器壺、土師器手づくね土器などである。古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、須恵器甕片、壺片などが出土している。これら周溝内上層の遺物から6世紀後半以降まで周溝が存在していた可能性がある。

(奥)

出土遺物

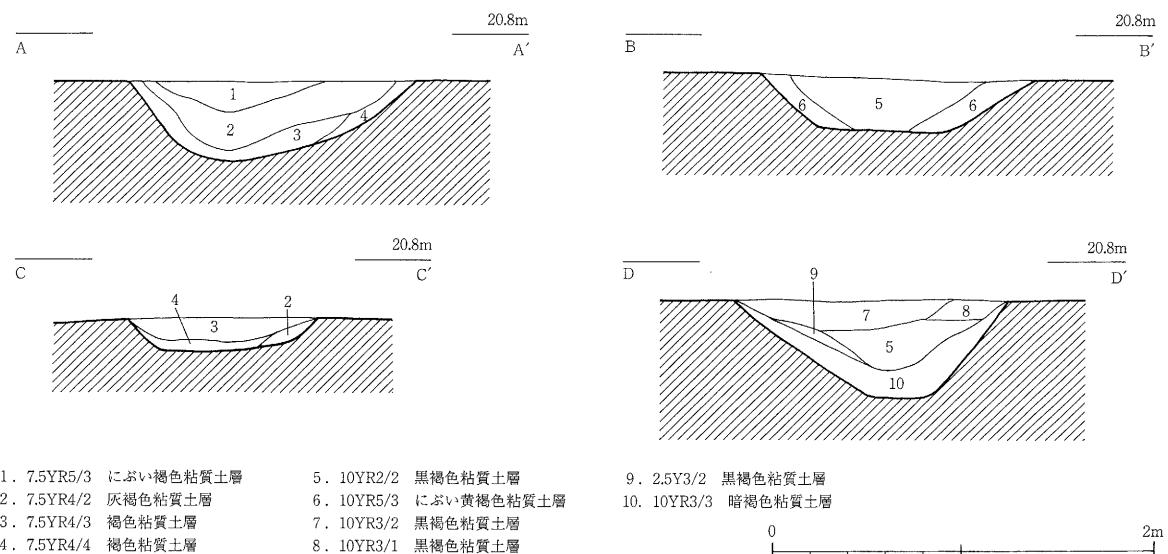
土器（第30図、図版47） 102は、須恵器杯蓋である。稜部から口縁端部にかけて若干開き気味に下り、端部は断面三角形気味に丸く収める。稜は、断面三角形に近い。天井部は丸みを帯びる。天井部の外面稜部から0.4cm上から回転ヘラケズリ、それ以外の内外面は回転ナデによって仕上げている。口径12.4cmと推定され、残存高3.7cmを測る。

103は須恵器壺である。口縁部および肩部を欠損している。底部は丸く、壺の最大径から底部にかけて円形に近い。壺外面の最大径から上はカキ目、体部の2分の1は回転ヘラケズリ、外面の中央付近と内面は回転ナデによって仕上げている。最大径15.4cm、残存高約9.2cmを測る。

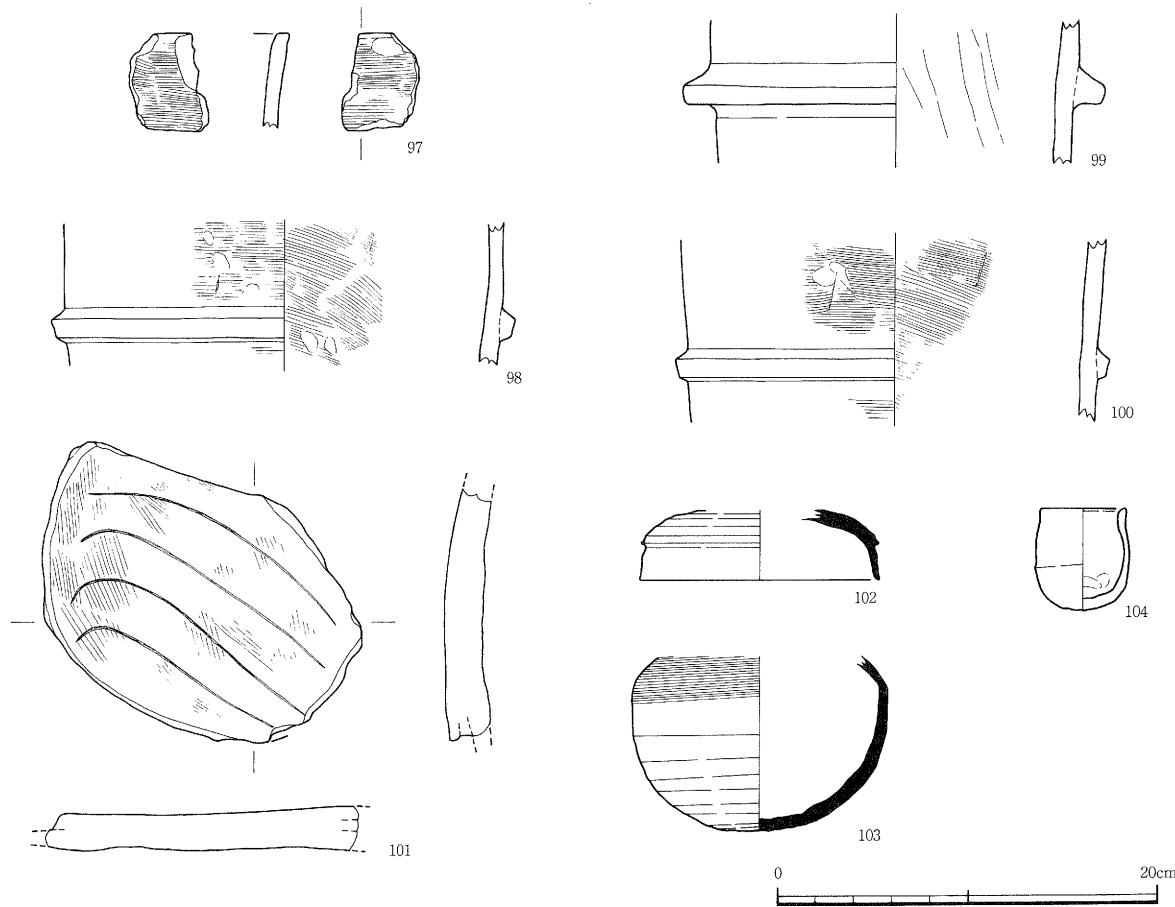
104は土師器の手づくね土器である。口縁端部から体部にかけてほぼ直線的に延び、底部は丸い。調整は、土器の表面が摩滅しているため不明な点が多いが、口縁部周辺は横ナデ、外側と内側の底部周辺には指頭圧痕が認められる。口径4.4cm、高さ5.4cmを測る。

(奥)

埴輪（第30図、図版58） 97・98・100は円筒埴輪、99・101は形象埴輪である。97は口縁部片で、外側・内側ともヨコハケを施す。端部はヨコナデを行っており、端面は平坦面で水平を保つ。98・100は体部片で、体部径はそれぞれ22.4cmから23.2cm、21.4cmから22.4cmである。ともに外側



第29図 9号墳周溝土層断面図



第30図 9号墳出土遺物

にB種ヨコハケを施し、内面はナナメハケを施す。突帯の断面形状は、やや低い台形状である。色調・焼成は、黄褐色・硬質系である。

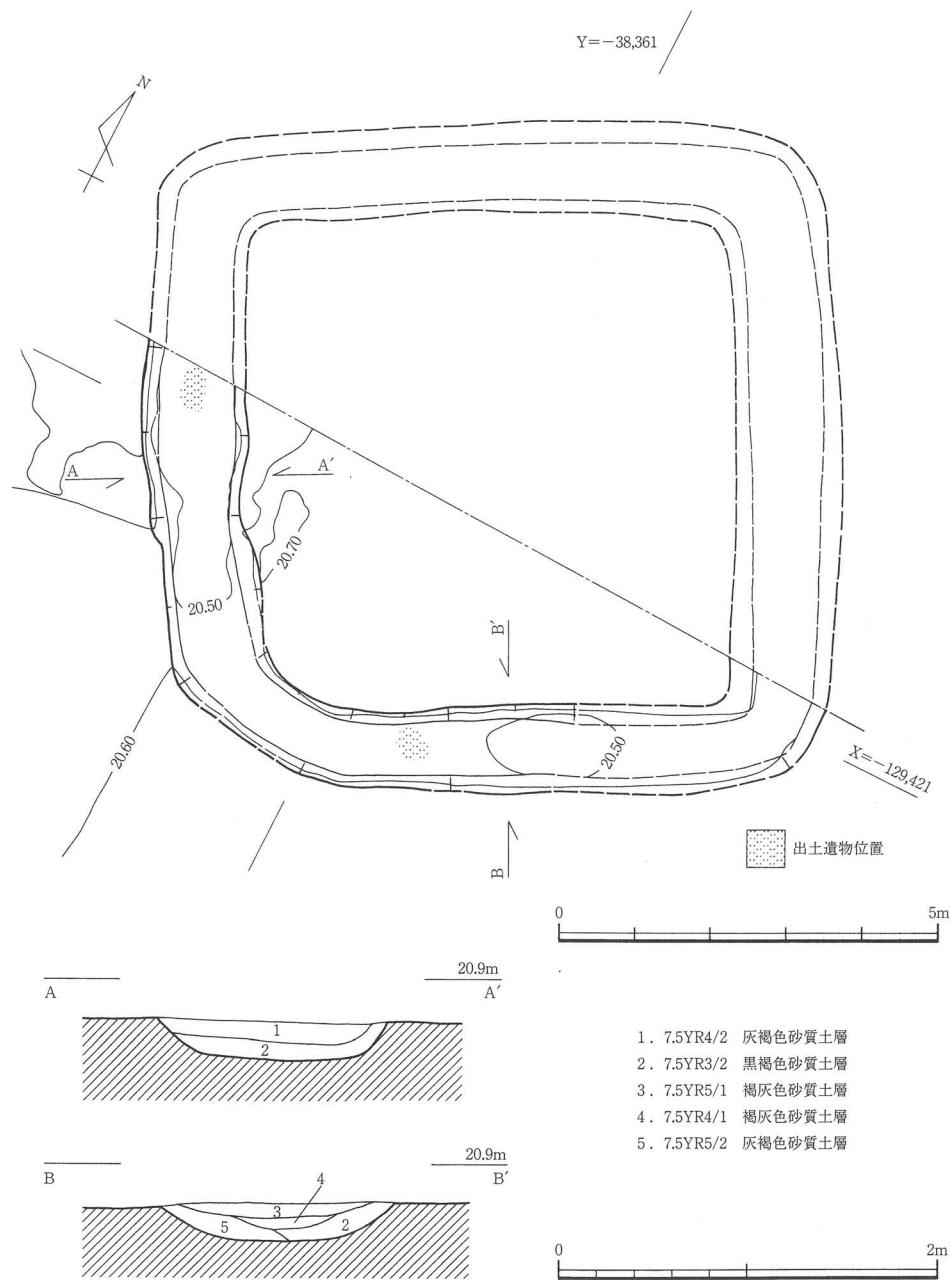
99は、外面調整は摩滅により不明であるが、内面は縦方向のユビナデである。突帯上面の傾斜が強く、下面が直線状である形態と、98・100にみられた調整との差から、円筒埴輪ではなく、形象埴輪の基部となる円筒部分であると考えられる。体部径は18.6cmから19.6cmであり、これも円筒埴輪片と比べてやや小ぶりである。101は、鶏の羽を表す部分と推測される。色調・焼成は、褐色・軟質系であり、円筒埴輪と異なる。

(小浜)

11. 10号墳（第31図、図版14-3・15-1～4）

古墳はB地区で検出した。古墳の約5分の3は、北側の調査区外にある。検出したのは周溝の南東辺部から西周溝の3分の2付近である。古墳の南東側5m前後離れて11号墳、西側には6号墳、南西側には8号墳が存在する。北西側は5号墳、北側と北東側は、調査区外になるため不明である。

古墳の中心は、古墳の形状から北の調査区外のX=-129,419.5、Y=-38,360.5付近と推定される。調査区内にある周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈していたものと推定され、東西長4.2m以上（推定6.5m前後）、南北長4.2m以上（推定6.5m前後）、全長9m前後と推定される。方位はN-26°-Wである。



第31図 10号墳平面・断面図

埴輪は小片で少量であるが、南周溝の中央より西側で下層上面から集中して出土した。埴輪の器種は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪である。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、須恵器などが出で、これらの遺物から6世紀後半以降まで周溝が存在していたものと推定される。
(奥)

出土遺物

土器（第32図、図版47） 105・106は、須恵器杯蓋である。105は107の杯身とセットになるものと推定されるものである。口縁部から天井部にかけてやや内側に延び、口縁部と天井部との界に存在する屈曲部のやや上には、緩やかな稜が認められる。天井部は平らに近い。口縁端部は角張り、内面にやや上がる。焼成がやや不良のため調整が不明の点もあるが、外面と内面の天井部に近い地点までは荒い回転ナデによって仕上げ、内面の天井部付近は、ナデによって仕上げてい

周溝は、南周溝と西周溝の一部のみ確認し、南周溝は1.2m、深さ約0.2m、西周溝は幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。周溝の埋土は、凹レンズ状に堆積し、基本的には上層に灰褐色ないしは褐灰色系の砂質土、下層に黒褐色系の砂質土が堆積している。

周溝から出土した古墳に関する遺物は須恵器、埴輪である。須恵器は杯2セット、把手手鉢1個体で西周溝中央より北側の下層上面から集中して出土した。

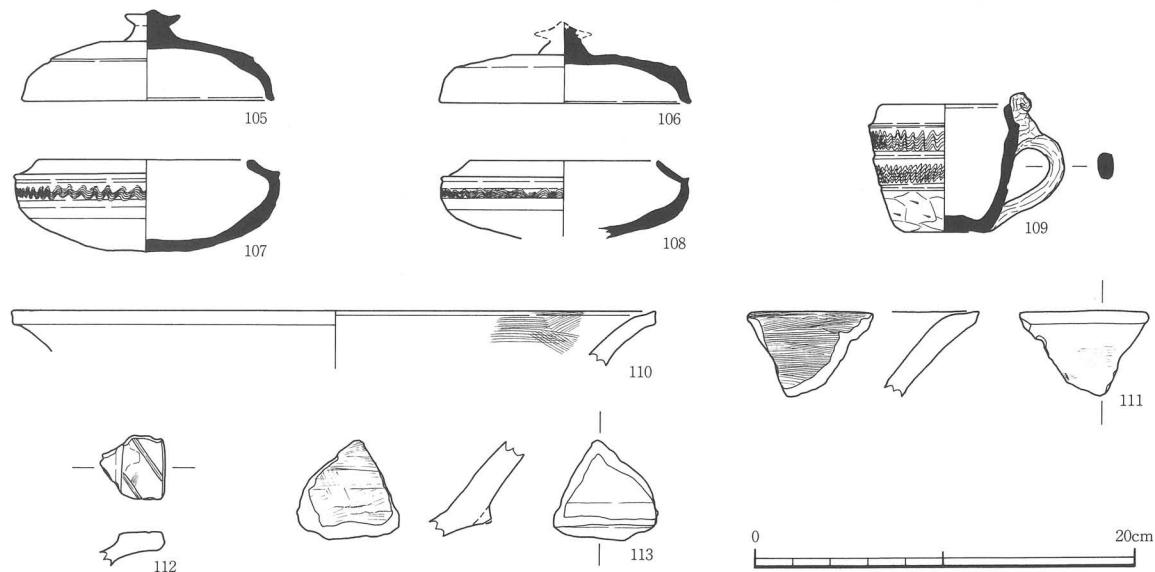
る。天井部の中央付近にあるつまみは、天井部から「ハ」の字形に延び、屈曲部から内弯気味に外側に大きく開く。つまみ中央には乳頭状の高まりが認められる。杯部は、荒い成形方法であるが、つまみ部は丁寧に仕上げていることから製作者が異なる可能性が高い。口径約13.0cm、器高約4.9cmを測る。

106は108の杯身とセットになるものと推定されるもので、口縁部から天井部にかけてやや内側に延び、天井部は105より平らである。口縁端部は角張り、内面にやや上がる。焼成が不良のため調整が不明の点があるが、外面と内面の天井部に近い地点までは荒い回転ナデによって仕上げている。天井部の中央付近にあるつまみは、上部が欠損しているため不明であるが、天井部から「ハ」の字形に延びる形状が105と同様であるため、105と同種のものと推定される。口径約13.5cm、残存高約4.1cmを測る。

107・108は杯身である。107は105とセットになるものと推定されるものである。受部は短く外上方に延び断面三角形に近い。受部から口縁端部にかけて外反気味に鋭く内傾する。受部から底部にかけて橜円状に内弯する。受部下の体部には2条の沈線を施し、その内に波状文を巡らす。口縁部内面下から外面体部下までは回転ナデ、外面底部は手持ちヘラケズリの後ナデ、内面底部はナデによって仕上げている。口径11.05cm、器高4.9cmを測る。

108は106とセットになると推定されるものである。107と同様な形態、手法であるがやや平たい。口径9.8cm（前後）、器高約4.1cmを測る。

109は、把手付鉢である。受部から口縁端部にかけてやや内傾気味に延び、端部は丸い。受部は短く断面三角形に近い。受部から底部にかけてやや斜め方向に直線的に延びる。底部は中央部が約1mm程度上がる。外面の受部下から体部下半を2条の沈線によって区切り、その内に2条の波状文を施す。内面底部付近から外面体部下半までを回転ナデ、体部下半から底部までを手持ちヘラケズリ、底部をナデによって仕上げている。把手は底部から耳状に婉曲し、1条目の沈線付



第32図 10号墳出土遺物

近で繋がる。断面は橢円に近い。その上部には、渦巻き状の装飾を施す。口径約8.7cm、器高約5.8cmを測る。

10号墳から出土した須恵器は、胎土、焼成が似ており、同じ窯、同一工人によって同時期に製作された可能性が強い。

埴輪（第32図、図版59） 110から113は、すべて朝顔形円筒埴輪である。

110・111はともに口縁部片で、端部をつまみあげながらヨコナデを施している。110は外面にナデ、内面にヨコ・ナナメハケを、111は外面に不明瞭ながらヨコハケ、内面にヨコハケを施す。また、110は口縁部径33.6cmと推定される。

112・113はともに擬口縁部（屈曲部）にあたり、112では口縁部の段を接続する際に接合部を強化するために沈線を規則的に刻んでいたことが剥離面の状況から窺える。色調・焼成は、褐色・硬質系と黄褐色・硬質系に分けられるが、外表面のわずかな焼成差のように観察される。

そのほか、資料化し得ない破片であるが、形象埴輪片と考えられる破片が認められた。（小浜）

12. 11号墳（第33図、図版14-3・15-5・16・17）

古墳は、B地区のX=-129,427.5、Y=-38,347付近を中心として検出した。古墳は、南東側を13号墳、南側を12号墳、北西側を10号墳、東側は幅17m前後を測る古墳空閑地区、西側は幅約10m前後を測る古墳空閑地区に囲まれて存在する。なお、北側については調査区外にあるため不明である。

周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西約7.5m、南北約8.2m、全長東西約10.0m、南北約10.5mを測る。方位はN-11°-Wである。

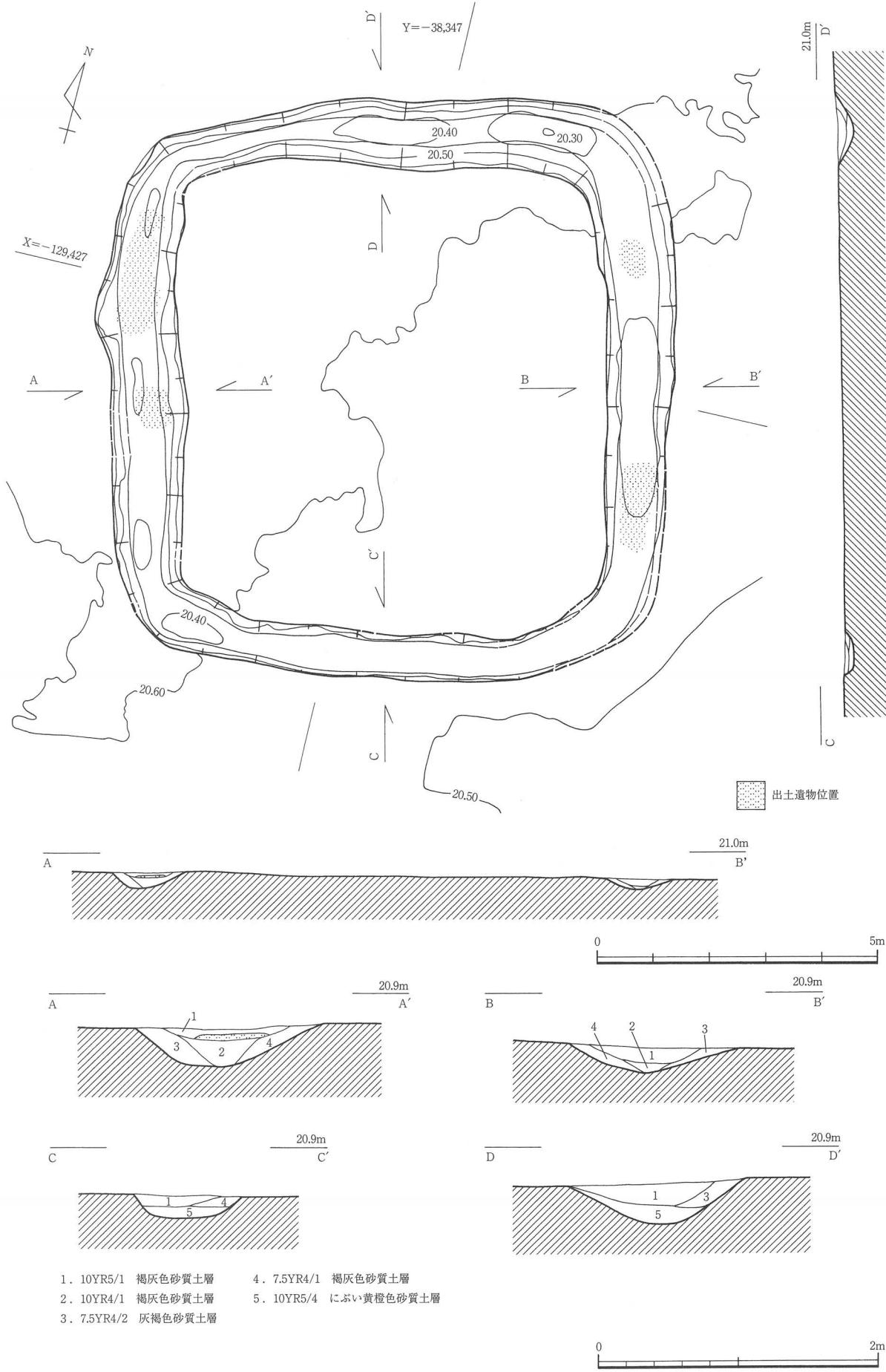
周溝は、検出面が削平を受けていたものと推定され浅い。東周溝幅約1.2m、深さ約0.2m、西周溝幅約1.3m、深さ約0.3m、南周溝幅約0.75m、深さ約0.15m、北周溝幅約1.3m、深さ約0.3mを測る。埋土は、地点によっては若干の違いはあるものの、上層には褐灰色系の砂質土、下層にはにぶい黄橙色砂質土がほぼレンズ状に堆積している。また、部分的に墳丘の盛土と推定される褐灰色砂質土が墳丘裾部付近に堆積しているのが認められる。

遺物は、周溝下層上面からほとんどが出土している。下層からのものは極めて少ない。遺物出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、東西周溝に集中している箇所が何箇所かに認められる。周溝内から出土した古墳に関係する遺物は、埴輪、須恵器などである。ほとんどの埴輪は小片で出土したことから、後世に墳丘を壊した際、墳丘に配置していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝上層に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪は、家の一部と鞍、船と推定される小片、不明が6点ある。

初期須恵器は、埴輪の中に混じって壺、甕の小片が極少量出土したが、図化出来なかった。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から奈良時代と推定される須恵器、土師器などが出土している。

これら周溝内上層の遺物から奈良時代以降まで周溝が存在していた可能性がある。 （奥）



第33図 11号墳平面・断面図

出土遺物

埴輪（第34～36図、図版59・60） 114から124は円筒埴輪、125から132は朝顔形円筒埴輪、133から136はヘラ記号を有する資料、137から145は形象埴輪である。

114・134は、口縁部片である。114は、外面・内面調整とも摩滅によりほとんど不明であるが、外面にはわずかにヨコハケが残る。口縁部の形態は、わずかに外反しており、端面は水平である。口縁部径は、推定で30.2cmである。色調・焼成は、褐色・軟質系である。134は、かなりの小片であり、外面調整は不明であるが、口縁端部には幅広くヨコナデ調整を施している。内面調整はヨコハケで、工具はハケ目の条数が粗いものと密なものの2種を用いている。口縁端部の形態は、最終的に端部を強くつまんだ状態でヨコナデしているため、器厚が薄くなり、外面に凹みが生じている。また、外面には口縁と平行する1条の沈線が認められ、ヘラ記号の可能性がある。径は不明である。色調・焼成は、黄褐色・硬質系である。

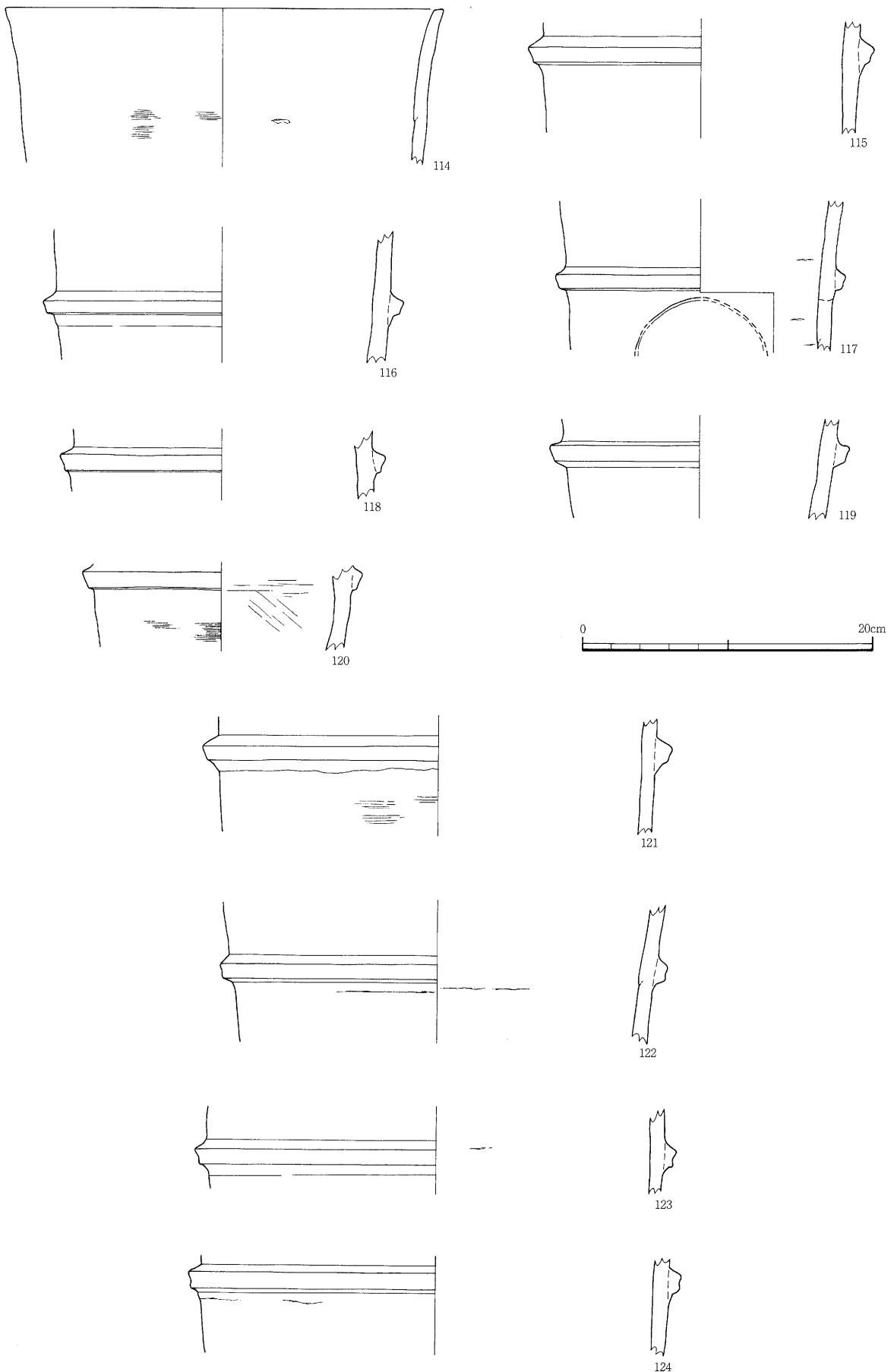
115から124は、体部片である。外面・内面調整とも摩滅により不明のものが大半を占める。わずかに120・121の外面に、かすかにヨコハケが認められる。117では、下段に円形透かしが一部残存している。透かし径は推定で9.0cmであり、突帯直下まで透かしが及ぶ。体部径は、体部片がどの段に属するかによってかなり差が生じると考えられるが、おおまかに18.0cmから23.0cm程度の小型と28.5cmから32.5cm程度の中型の2種に分けられる。これに対し、突帯の断面形状は、上辺が下辺よりも突出する台形状のものが小型、M字状のものが中型と、ほぼ対応関係にある。さらに、色調・焼成は、小型が褐色・軟質系、中型が淡黄色・軟質系にほぼ対応する。

朝顔形円筒埴輪では、125・126が体部から口縁部まで復元できる資料である。

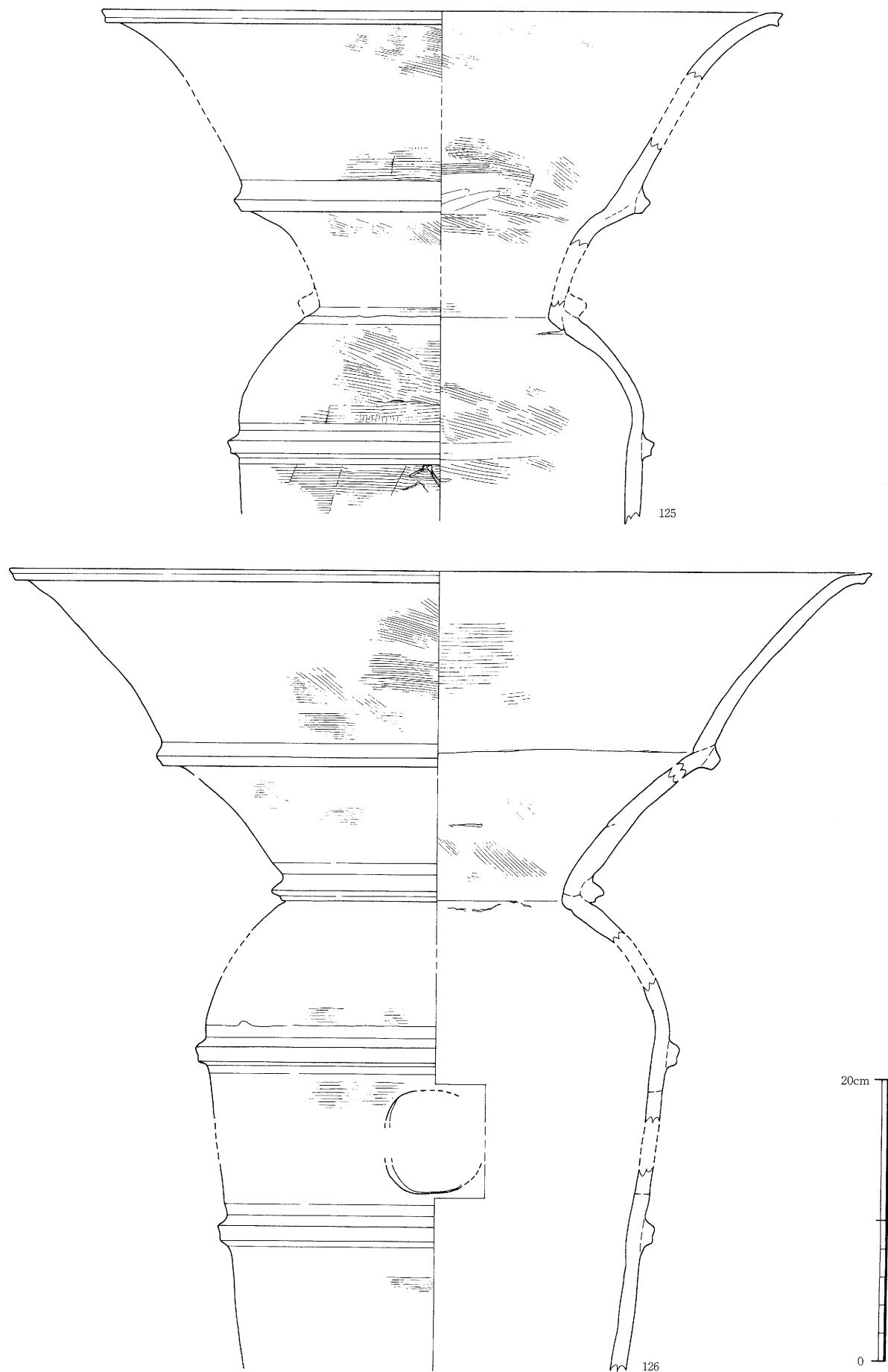
127から132はいずれも小片資料である。調整は、摩滅により不明な資料も多いが、外面調整にヨコハケあるいはハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケを施している。内面調整は、ナナメ・ヨコハケである。口縁部径は、48.0cmから49.0cmを測る125・127と59.0cmを測る126がある。口縁部のみの資料では、焼けひずみのある破片での径復元値に誤差を見込まなければならないが、125と126で生じる径の差は、体部片と接合あるいは同一個体とほぼ特定できる関係から法量差と捉えてよいものである。125は、体部最上段にへの字状のヘラ記号が線刻されている。126の復元から、体部最上段に円形透かしをもつことがわかる。

上述した125・134以外のヘラ記号資料では、133・135・136の小片に円・円弧・直線などのヘラ記号あるいは文様の一部が認められる。とくに、133はやや複雑な文様を描いているようであるが、抽象的である。調整や形状から、すべて円筒埴輪片であると考えられる。

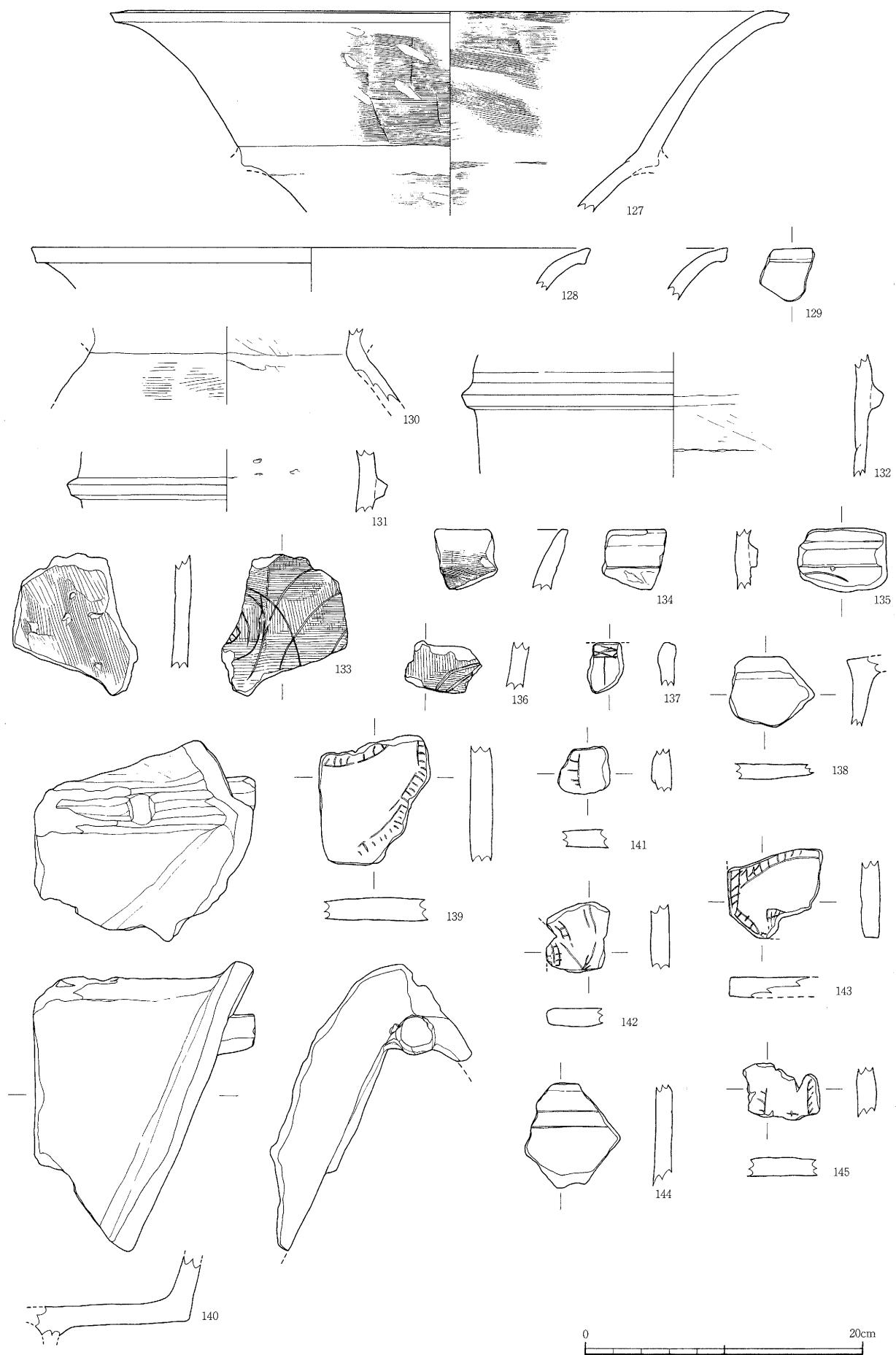
形象埴輪では、139が鞍形埴輪であると考えられ、同じ文様帶と色調から141・142・143・145も同一個体片である可能性が高い。140は、家形埴輪の屋根部分である。破風板や棟柱、鰐木の剥離痕などが認められる。文様等は摩滅により不明である。137は図面上端が破損していない面であり、それに沿う綾杉文と直交する1条の直線文が残存している。おそらく、草摺の上端部を表現したものであり、大きさから草摺形埴輪あるいは武人形埴輪の草摺部分であると考えられる。



第34図 11号墳出土遺物 1



第35図 11号墳出土遺物 2



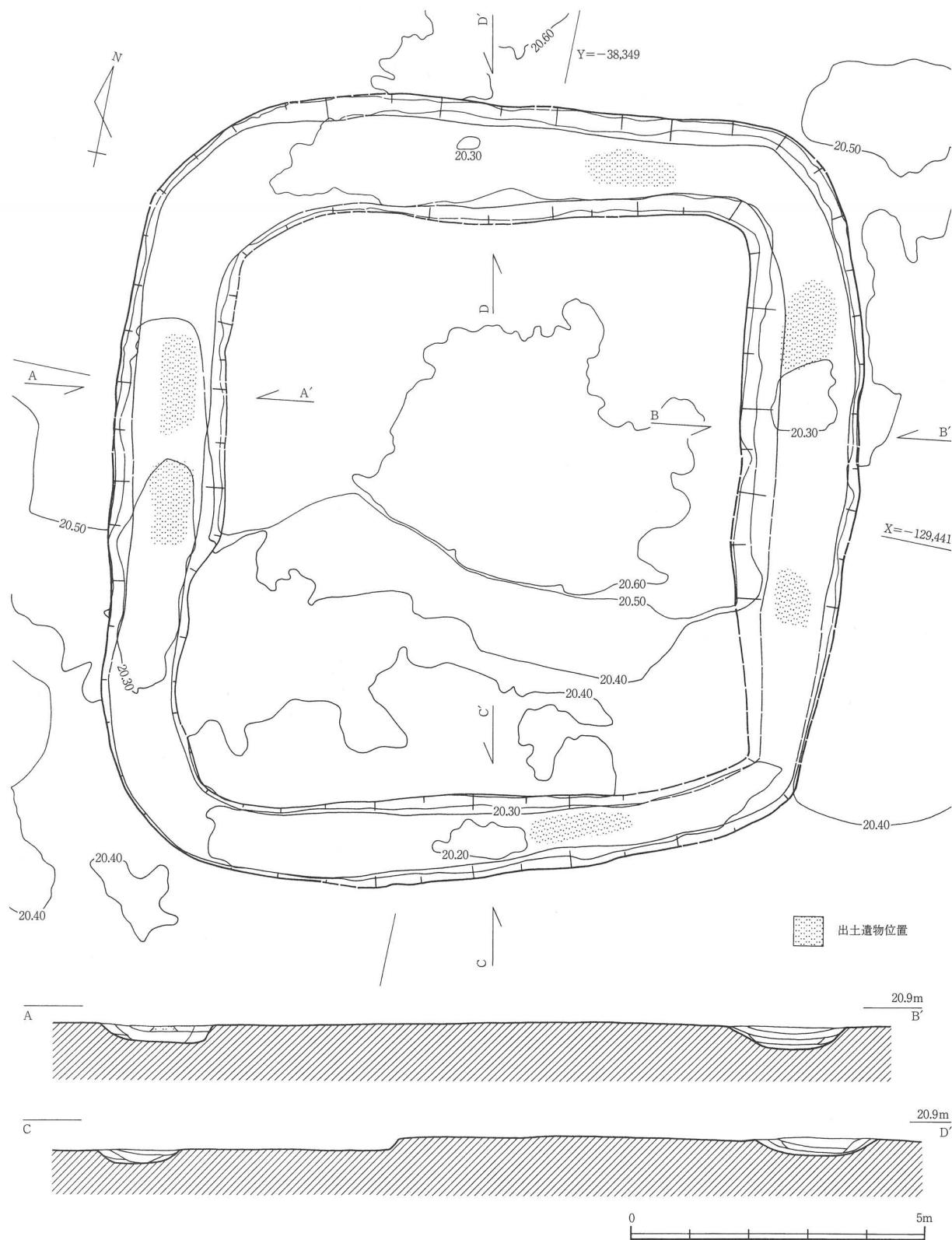
第36図 11号墳出土遺物 3

その他は、不明である。色調・焼成は、ほとんどが淡黄色・軟質系である。

(小浜)

13. 12号墳（第37・38図、図版15-5・17-6・18-2～6）

古墳は、B地区のX=-129,441.2、Y=-38,348.9付近を中心として検出した。古墳は、東側を13号墳、北西側を8号墳、南西側を9号墳、南側を19号墳、北側を11号墳に囲まれて存在する。



第37図 12号墳平面・断面図

古墳の南側約3分の1は、府営住宅造成時に検出面が東西方向に0.1m程度削平を受け、段となり低くなっている。また、南東辺部は、府営住宅造成時の埋管などにより削平を受け、欠失している。

墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約8.7m、南北長約9.7m、全長は、東西長約12.6m、南北長約13.7mを測る。方位はN-11°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約2.05m、深さ約0.39m、西周溝幅約1.9m、深さ約0.23m、南周溝幅約1.4m、深さ約0.22m、北周溝幅約2.03m、深さ約0.3mを測る。埋土は、地点によっては若干の違いはあるも

の、上層には灰褐色系の砂質土、下層には黒褐色系の砂質土、最下層にはにぶい黄橙色砂質土がほぼレンズ状に堆積している。また、土層断面観察により、部分的に墳丘の盛土と推定される土砂が、墳丘裾部付近に堆積しているのが認められる。

遺物は、周溝上層の褐灰色砂質土層からほとんどが出土している。下層からのものは極めて少ない。遺物出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、各周溝に集中している箇所が認められる。

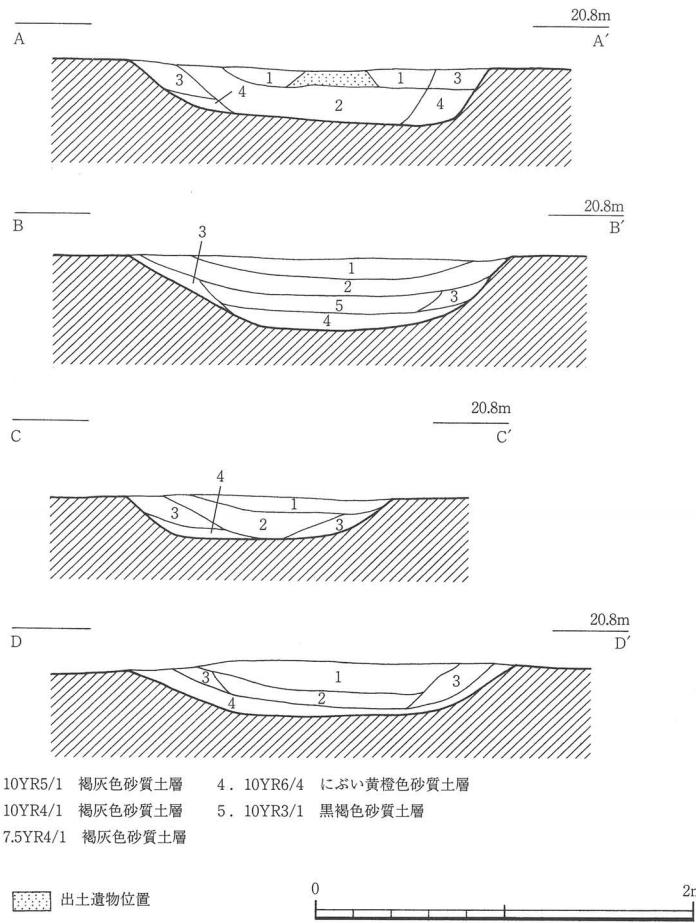
周溝内から出土した古墳に関する遺物は、埴輪、須恵器などである。出土したほとんどの埴輪は小片で、後世に墳丘を壊した際、墳丘に配置していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝上層に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪は、馬、盾、家、人物の腕と推定される小片がある。

須恵器は、埴輪の中に混じって出土し、器種は、高杯セット、甕、壺、把手付椀、器台などで、いずれも小片である。これらの他に図化できなかった小片に杯蓋などがある。

上層埋土から出土した遺物の中には、中世の遺物も含まれていることから、中世まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

出土遺物

土器（第39図、図版47・52） 146は、147の有蓋高杯とセットになるものと推定される高杯蓋である。稜部から口縁部にかけて外反気味に大きく開き、丸味を帯びる。口縁端部内面に沈線を

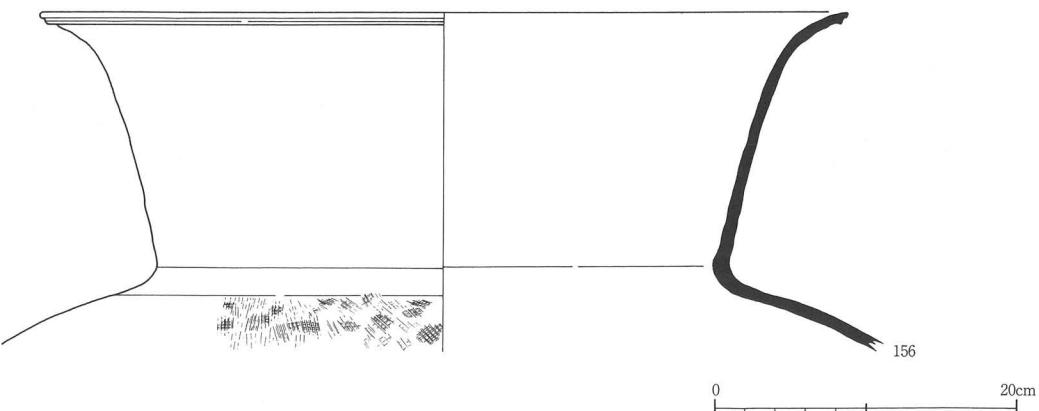
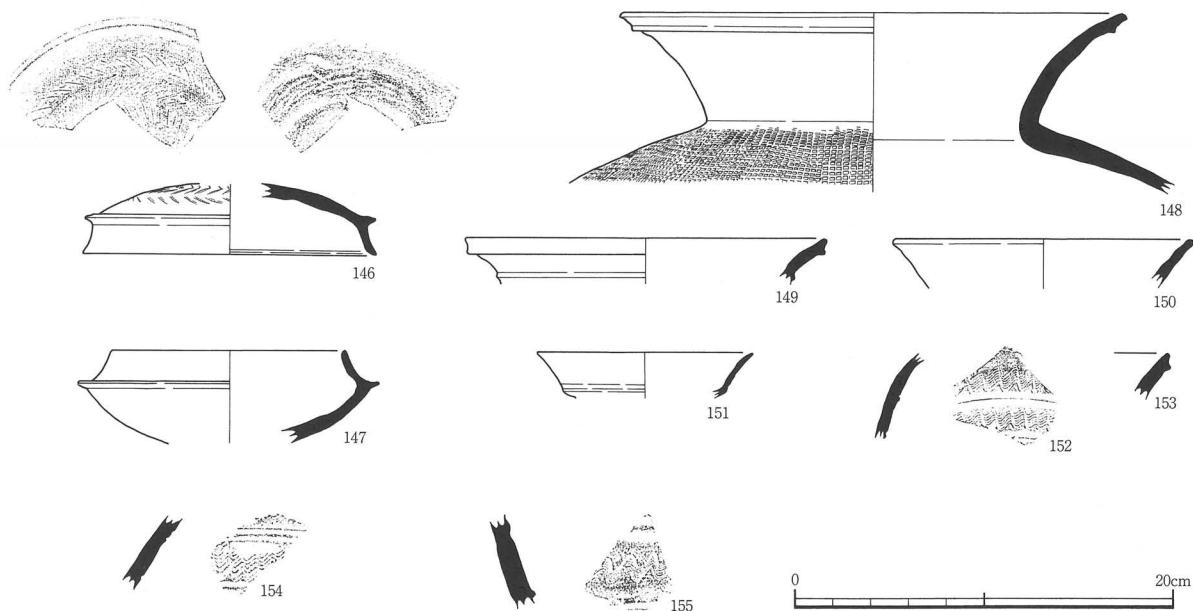


第38図 12号墳周溝土層断面図

施す。稜は、長く断面三角形に近い。天井部は、低くやや内弯する。つまみ部は欠損している。天井部外面には、櫛書によって「ハ」の字状に連続する文様が同心円状に刻まれている。外面天井部から内面の天井部の3分の2までは、回転ナデ、それより上には、同心円の工具と推定されるタタキが認められる。口径15.5cmと推定され、残存高約3.75cmを測る。

147は、146の高杯蓋とセットになるものと推定される有蓋高杯である。受部から口縁部にかけて大きく内傾し、外反しながら口縁端部に至る。口縁端部は丸く收める。受部は外側に大きくつまみ出し、端部は丸い。体部から脚部にかけて、内弯気味に下り、低い。内面から体部の約2分の1までは回転ナデ、それより下は手持ちヘラケズリの後回転ナデによって仕上げている。口径12.2cmと推定され、残存高約5.0cmを測る。

148から153は、須恵器甕である。148は、口縁と体部の界から内弯気味にラッパ状に大きく開き、口縁端部に至る。口縁端部下に断面三角形に近い突帯が付き、端部はやや角張る。体部の肩部は、口縁部と体部の界からやや内弯気味に大きく開く。口縁部内外面共回転ナデ、体部外面は格子目タタキ、体部内面はナデによって仕上げている。口径26.4cmと推定され、残存高約9.6cmを



第39図 12号墳出土遺物1

測る。

149は、残存しているのが口縁部のみであるため不明な点が多いが、頸部から口縁端部にかけてラッパ状に開く。断面三角形に近い口縁端部は、外面がやや内弯する。端部は丸く仕上げる。口縁部と頸部の界には、断面三角形に近い突帯を持つ。口縁部の調整は回転ナデによって仕上げている。口縁径19.0cmと推定され、残存高約2.4cmを測る。

150は、口縁のみ残存し、体部から口縁端部にかけて、ラッパ状に開く口縁部と推定される。端部は丸く収めている。口縁部の調整は回転ナデによって仕上げている。口径15.8cmと推定され、残存高約2.7cmを測る。

151は、口縁部のみ残存し、いわゆる二重口縁をなす壺と推定されるものである。口縁部は、くびれ部から外側に外反気味に大きく開き、端部は丸い。くびれ部には緩やかな段を有する。口縁部の調整は回転ナデによって仕上げている。口径11.4cmと推定され、残存高約2.4cmを測る。

152は、口縁端部が欠損している。口縁部と体部の界から内弯気味に開き、外面中央および下部に断面三角形に近い突帯を有し、それにより外面を区画し、その内に波状文を施す。調整は、回転ナデによって仕上げている。残存高約4.55cmを測る。

153は、口縁端部の小片で、断面三角形に近い端部を有し、外面がやや内弯する。端部は丸い。

154・155は器台と推定される小片である。154は、杯部の底部付近と推定されるもので、外面上部には2条の沈線により、突帯を作り出している。その下方に1条の沈線により区画し、その内に波状文を施している。残存高約3.9cmを測る。

155は、脚部の一部と推定されるもので、上下に断面三角形に近い突帯を有し、その内に6条から7条の波状文を施している。残存高約5.0cmを測る。

156は、大甕の口縁部である。図化出来たのは口縁部と肩部の一部だけであるが、体部ないしは底部と推定される破片が多数出土している。口縁部は、肩部から外側に開き気味に直線的に延び、端部付近から外側に大きく開く。口縁端部は断面三角形に近く、外面がやや内弯する。端部は丸い。肩部はやや下方に向けて大きく開く。口縁部は内外面とも回転ナデ、肩部外面は平行タタキ、肩部内面はナデによって仕上げている。

口径53.4cmと推定され、残存高は約22.0cmを測る。

(奥)

埴輪（第40～44図、図版60～64） 157から196・203から216は円筒埴輪、197から202は朝顔形円筒埴輪、234から239は形象埴輪、217から233はヘラ記号等を有する資料である。

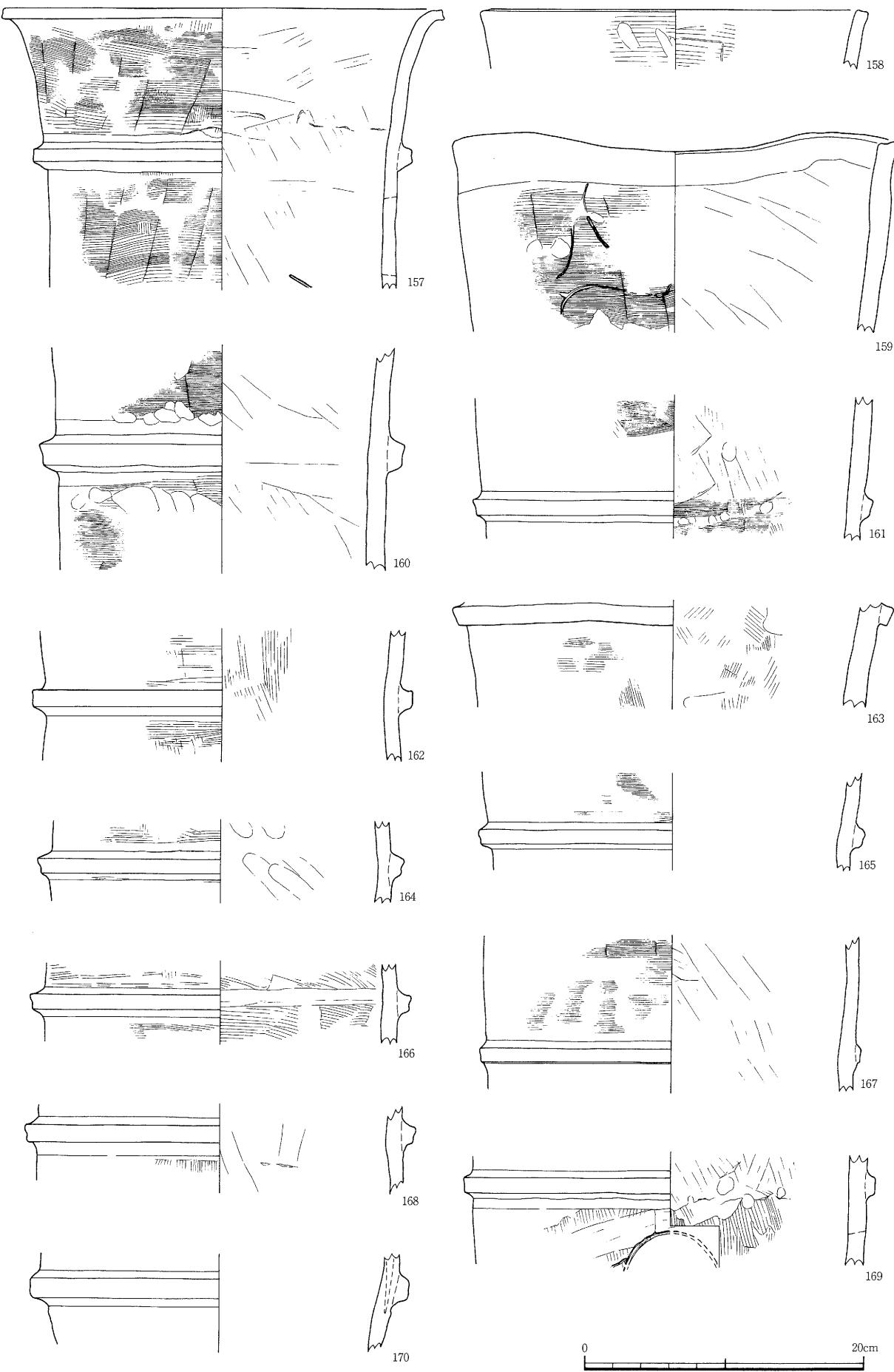
157から159・203から207は、口縁部片および口縁部を含む資料である。157は、口縁が大きく外反し、端面を外側に向ける、いわゆる折り曲げ口縁の形態をとる。外面調整は、B種ヨコハケであり、内面調整は板状工具による不定方向のナデである。B種ヨコハケは、ハケ目工具の静止痕をやや傾けており、少なくとも口縁部の段では2周、下段では1周巡らせている。工具幅は、口縁部で5.6cm、下段で7.7cm以上あることがわかる。静止痕間隔は、2.0cmから3.5cmと短い。口縁部の段では、2条の直線によるヘラ記号が認められる。下段には、円形透かしの一部が残存して

いる。口縁部径は推定で31.2cm、口縁部高は10.6cmである。203から205・207は、157のように口縁部全体が大きく外反することはないが、端部を外側に折り曲げる口縁形態であり、わずかに口縁端面を外側に向けて張り出させている。159は、焼けひずんでいるが、ほぼ直立する口縁形態をとり、外面にはB種ヨコハケ、内面にはユビナデを施している。外面には、円弧状の曲線を数条組み合わせたヘラ記号が認められる。口縁部径は、推定で31.5cmであり、折り曲げ口縁の157とほぼ同じである。しかし、口縁部高は、残存状況から14.3cm以上あることがわかり、157と大きく異なる。色調・焼成は、157に代表される折り曲げ口縁のタイプには黄褐色・硬質系が多く、直立口縁の159は須恵質化している。

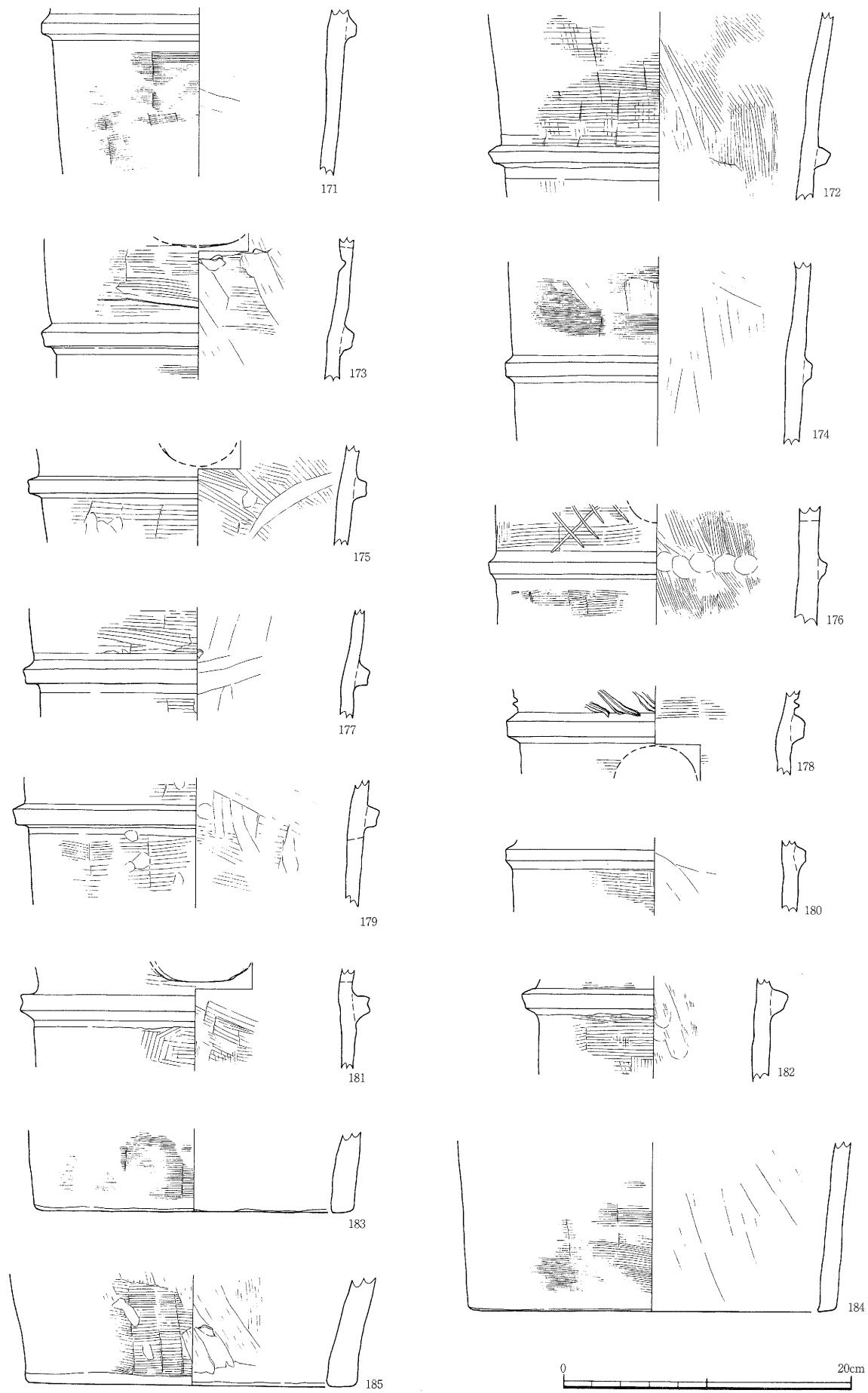
160から182・208から212・214は、体部片である。外面調整はほとんどがヨコハケあるいはB種ヨコハケであり、内面調整はユビナデ、板状工具によるナデ、ヨコハケ、タテ・ナナメハケなどさまざまである。169は、外面にタテハケを施したのち、幅約2.3cmの板状工具を横方向にらせん状に巡らせてているようであり、特異である。同一段におけるハケ目工具の施文回数は、171・172・173などで少なくとも2回以上施されていることがわかる。173の内面調整では、ヨコハケを施した後にタテハケを行っているが、透かし直下の粘土のつなぎ目を境にヨコハケは途切れ、タテハケは境目をまたいで施されている。このことから、乾燥の小工程があり、ヨコハケは下部の工程で施され、タテハケは上部を足した後に行われたものと考えられる。突帯の断面形状は、台形状かM字状を呈する。また、小片のため図化し得ていないが、突帯を設定するための1条沈線が2点の資料において認められた。体部径は、20.0cmから30.0cmの間で収まるものであり、後述する底部片から伺える小型および中型円筒埴輪の体部片とみて、齟齬をきたさない。色調・焼成は、褐色・軟質系が最も多く、黄褐色・硬質系および須恵質化したものが若干含まれる。

183から196・213・215・216は、底部片である。外面調整は、191がタテハケである以外は、すべてヨコハケあるいはハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケである。B種ヨコハケは、187では少なくとも2周以上めぐらされている。内面調整は、縦・斜め方向のユビナデが大半を占めるが、タテハケ、ヨコハケのものも例外的に認められる。また、外面のヨコハケも、185・187のような底部下端から丁寧に施すものから、189・190・194のように一次調整のタテハケを多く残す雑なものまで存在する。また、187・213は、底部下端直上で外面調整時のハケ目工具を強く外面に押し付けるために凹み、底部断面がL字状になる特徴をもつ。この特徴は、後述する23号墳ほかでも見受けられ、個性的な特徴かと捉えられる。底部の形態は、底端部をやや厚くさせてほぼ直立させるものも認められるが、大半はやや反り気味に開いて立ち上がる形態である。底部高がわかる資料はないが、残存状況から12.0cm以上あることがわかる。底部径は、復元値であるため多少の誤差が含まれるが、15.0cmから18.0cm程度の小型と、22.5cmから25.5cm程度の中型に分けられる。色調・焼成は、191が須恵質である以外は、大半が褐色・軟質系である。

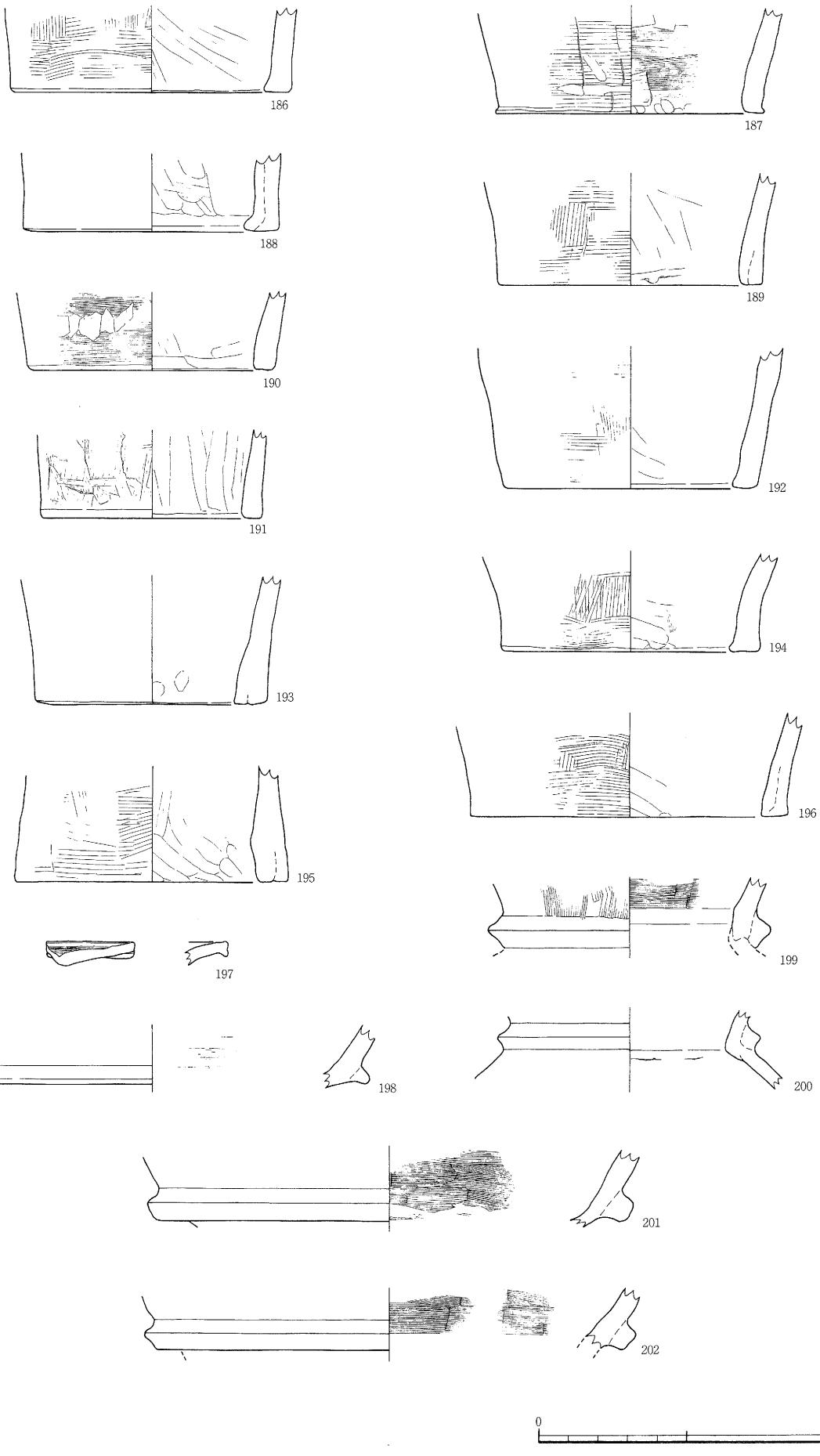
197から202は、朝顔形円筒埴輪の肩部・頸部から口縁部にかけての破片資料である。摩滅により調整が不明瞭なものが多い。外面調整は、199でわずかにタテハケが認められる。内面調整は



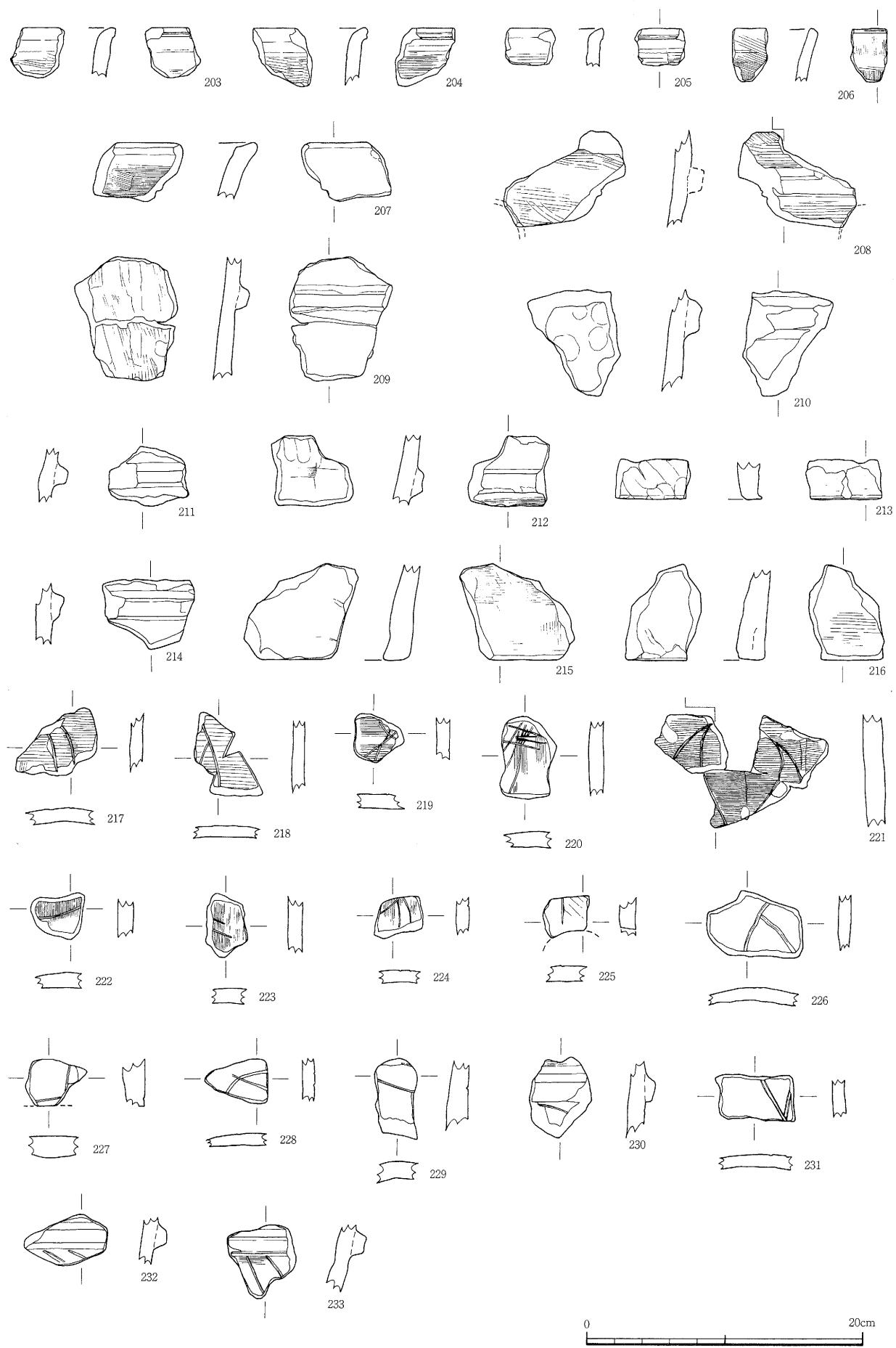
第40図 12号墳出土遺物 2



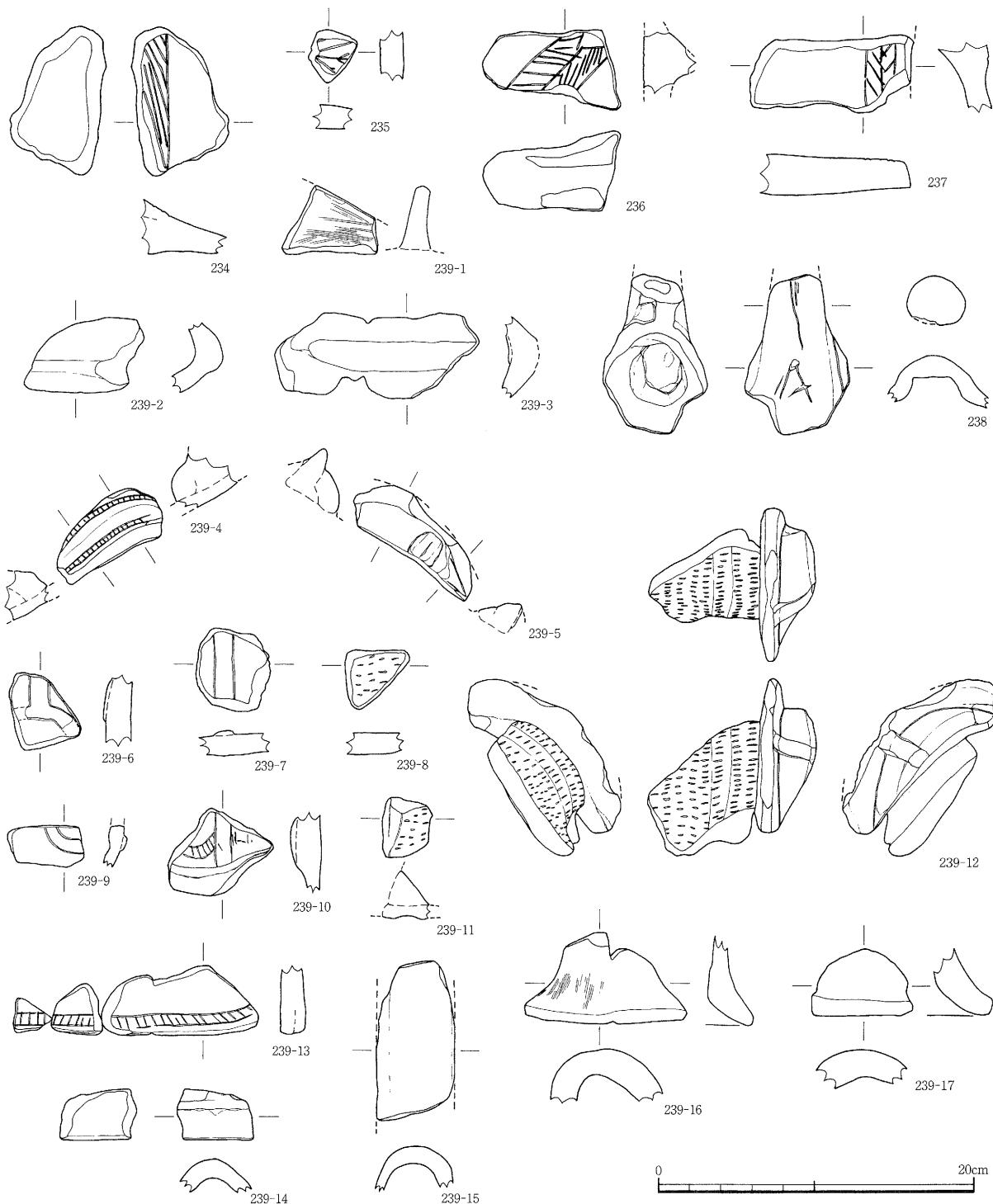
第41図 12号墳出土遺物 3



第42図 12号墳出土遺物 4



第43図 12号墳出土遺物 5

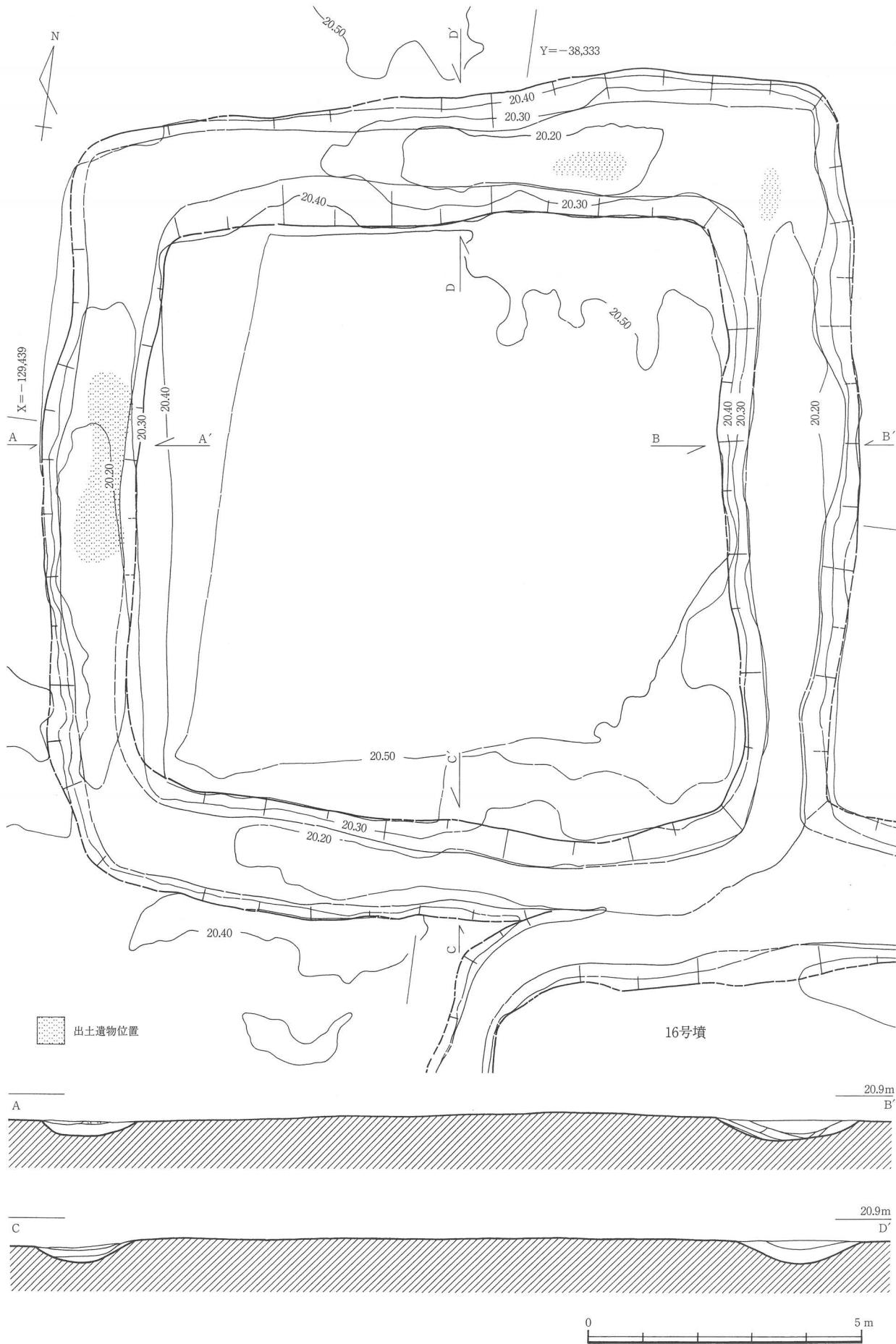


第44図 12号墳出土遺物 6

ヨコハケである。色調・焼成は、褐色・軟質系および硬質系である。

217から233は、ヘラ記号を有する資料であるが、小片が多く全体がわかるものはない。2条の直線あるいは曲線を用いたものが比較的多く認められる。221は、4条の曲線で左右対称の図形を表しているようである。

234から239は、形象埴輪と考えられる資料である。234から237は、綾杉文様を施しており、草摺形埴輪の可能性のものもあるが、縦・横断面から伺える形状からは円筒部に取り付く盾形埴輪なども考慮する必要がある。238・239は、馬形埴輪と考えられる資料である。239-4・5・



第45図 13号墳平面・断面図

8・11・12は、鞍および鞍褥にあたる部分である。239-12では、鞍褥を刺突を連続的に整列させて、丁寧に表現している。また、鞍から繋げられた革の表現も見られる。239-5では鞍に取り付けられた綏金具の表現が見られる。239-6・9は、輪鎧を表現した部分であり、239-7も鎧を取り付けるための力革を表現する部分であろう。239-13は、障泥の縁部にあたり、239-10は障泥の上端縁部および鎧に取り付く力革が表現されている。239-15・16・17は、脚にあたる部分であり、先端の形態は、7号墳出土資料でも認められたように裾広がりになっている。238は、断定はできないが、形状から耳の部分にあたる可能性があろう。そのほか、確定できない資料で、239-1はたてがみにあたる部分、239-2・3は、湾曲等の形状の特徴から馬顔の側面にあたる部分ではないかと考えている。馬形埴輪の色調・焼成は、淡黄色・軟質系であり、7号墳出土馬形埴輪の資料とはまったく異なる。

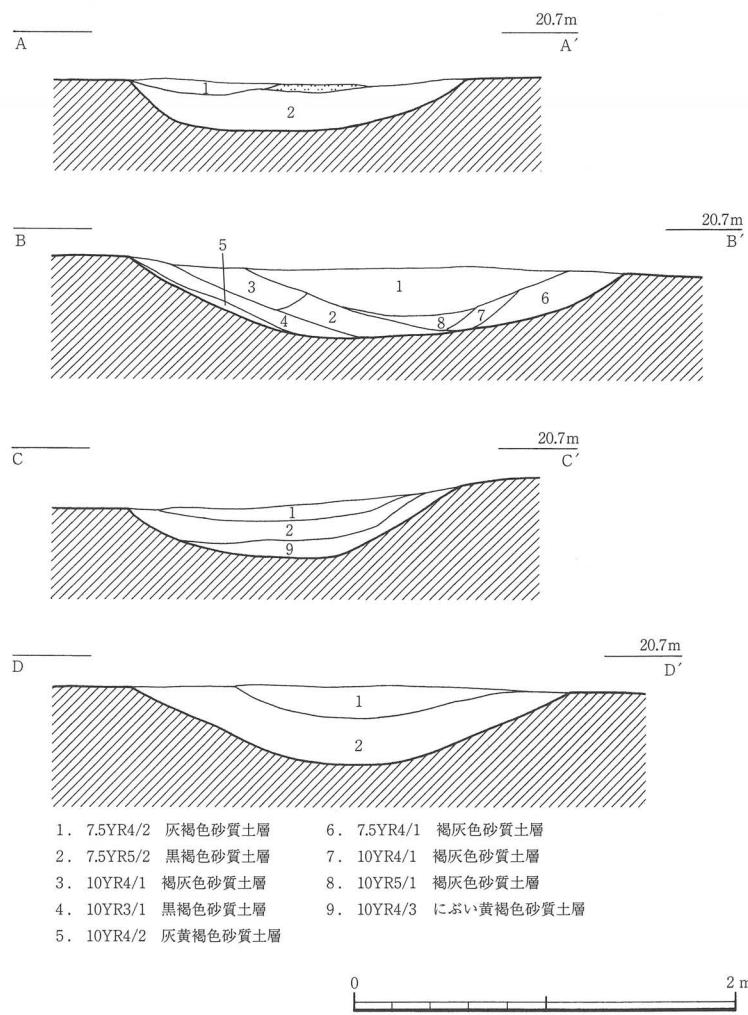
(小浜)

14. 13号墳（第45・46図、図版17-6・19-1～5）

古墳は、B地区のX=-129,439.4、Y=-38,333.5付近を中心として検出した。古墳は、東側を15号墳、西側を12号墳、南東側を16号墳の北側周溝を一部共有、北側には幅約16mの古墳空閑区域に囲まれている。

墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約10.5m、南北長約10.9m、周溝を含めた全長は、東西長約14.8m、南北長約15.0mを測る。方位はN-11°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約2.6m、深さ約0.4m、西周溝幅約1.8m、深さ約0.3m、南周溝幅約1.8m、深さ約0.3m、北周溝幅約2.3m、深さ約0.4mを測る。周溝の埋土は、上層には灰褐色の砂質土、下層には黒褐色の砂質土が基本的に凹レンズ状に堆積しているが、土層断面観察により、部分的に墳丘の盛土と推定される褐灰色ないしはにぶい黄褐色



第46図 13号墳周溝土層断面図

色の砂質土が墳丘裾部下から溝底部かけて堆積しているのが認められる。

遺物は、周溝中層上面からほとんどが出土し、下層からのものは極めて少ない。遺物の出土地点は、周溝の北東辺部から北周溝の3分の1にかけて集中し、周溝中央部を中心に出土している。

周溝から出土した古墳に關係する遺物のほとんどは、埴輪で須恵器は極少量である。出土したほとんどの埴輪は小片で、後世に墳丘を壊した際、墳丘上に存在していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝中層上面に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪は、草摺と推定されるもの1点、不明3点などの小片がある。初期須恵器は、埴輪に混じって杯身、杯蓋、壺、把手付鉢、器台が出土し、これ以外に図化出来なかった壺、甕と推定される小片がある。

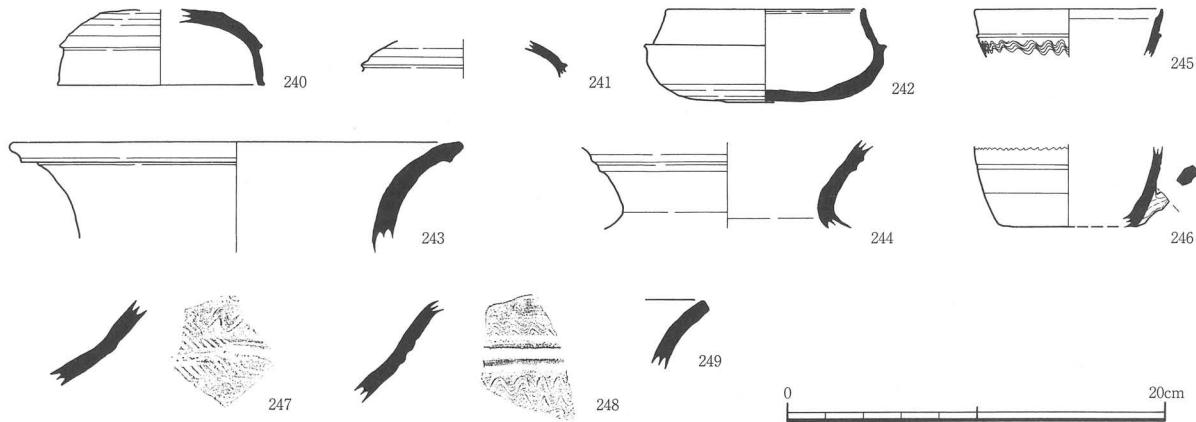
古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後半から末にかけての須恵器、奈良時代の土師器、最上層からは瓦器などが出土地点は、これら周溝内上層の遺物から奈良時代まで周溝が存在していたものと推定され、一部には中世まで周溝の残欠が上層に存在していた可能性がある。
(奥)

出土遺物

土器（第47図、図版47・48・52） 240・241は須恵器杯蓋である。240は、天井部の上部が欠損している。口縁端部から稜部にかけてやや内傾気味に立ち上がり、端部は角張る。稜部は、断面三角形を呈する。天井部は丸みを持つ。調整は、稜部のやや上を除き、天井部外面のほとんどは、回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ナデによって仕上げている。口径約10.9cm、残存高約3.95cmを測る。241は稜部から天井部の一部のみ残存している。形状から240と同様な形態を持つものであろう。

242は須恵器杯身である。立ち上がり部は、受部から口縁端部にかけて内傾し、やや直線的に立ち上がる。口縁端部は丸みを持ち、端部内面下には緩やかな沈線を施す。受部は外方にやや張り出す。体部は比較的深く、受部から底部にかけて内弯し底部は平らに近い。調整は、体部から底部の3分の2が回転ヘラケズリ、残りは回転ナデを施す。口径約10.4cm、器高約4.95cmを測る。

245は須恵器壺の口縁部と推定される小片である。口縁端部は丸みを持ち、端部内面下に段を



第47図 13号墳出土遺物 1

有する。口縁端部から欠損部にかけてやや内弯気味に内傾する。口縁端部から約2cmの付近に断面三角形の突帯によって区画し、下部に文様帯を作り、緩やかな波状文を施す。口縁径9.9cm前後、残存高約2.6cmを測る。

243は須恵器甕の口縁部の破片である。口縁部は、頸部の欠損部から外側に開き気味に直線的に延び、端部付近から外側に大きく開く。口縁端部は断面三角形に近く、端部は丸い。端部外面下がやや垂れ下がる。口縁部は内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径23.6cm前後、残存高約5.9cmを測る。

244は須恵器壺の頸部の小片である頸部と体部の界から外反気味に口縁部へ延びる。頸部と口縁部の界には2条の断面三角形の突帯を巡らす。内外面とも回転ナデによって仕上げている。頸部径11.1cm、残存高4.5cmを測る。

246は、把手付鉢の小片であり、口縁部、底部が欠損し、体部下のみ残存している。体部下から底部にかけて内弯気味に延びる。欠損部上部から約1cmの付近に沈線を施し、上部欠損部付近に波状文が認められる。把手は底部と体部の界付近において、下部の取り付け部のみ残存している。把手の断面の形状は、隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約1.2cm、短辺約0.5cmを測る。体部外面下はヘラケズリの後ナデ、残りの内外面とも回転ナデによって仕上げている。底径7.2cm前後、残存高約3.3cmを測る。

247・248は器台の杯部の小片である。247は口縁部下から底部上部までの小片で、外面の口縁部と体部の界に緩やかな突帯を有し、断面「く」の字形に屈曲する。口縁部外面には6条からなる波状文2本、底部には平行タタキが認められる。残存高約4.5cmを測る。248は、口縁上部の端部から下の小片である。端部は欠損しているが、上部欠損部付近の形状から大きく外側に開く口縁端部を持つものと推定される。残存部は内弯し、外面のほぼ中央部に断面三角形に近い2条の突帯を有し、上下を区画し波状文を施す。残存高約5.4cmを測る。

249は、須恵器壺口縁部の小片である。口縁端部は角張り、端部から下方に外反し斜めに下る。口径は小片なので不明。残存高約3.6cmを測る。
(奥)

埴輪（第48～50図、図版64～66） 250から280は円筒埴輪、281から283・288は朝顔形円筒埴輪、290・293から297は形象埴輪、284・285から287・289・291・292は円筒埴輪小片資料およびヘラ記号を有する資料などである。

250は、完形復元資料である。器高41.4cm、口縁部径28.8cm、底部径15.9cmを測る。底部高11.6cmから12.1cm、突帯間隔12.4cmから13.0cm、口縁部高16.0cmから16.4cmである。2条3段構成であり、底部からゆるやかに外開しながら立ち上がる。口縁端部は、一度大きく外反して立ち上がり、受け口状のようになっている。外面調整は各段ともB種ヨコハケであり、ハケ目工具を2周巡らせている。ハケ目の条数が粗く、特徴的である。工具の静止痕間隔は、1.5cmから4.0cmと短い。底部下端から丁寧にヨコハケを施している。工具の幅は、約7.0cmである。内面調整は、3段目途中までタテハケ、口縁部付近のみナナメハケを施している。突帯の断面形状は、しっかりと突出し

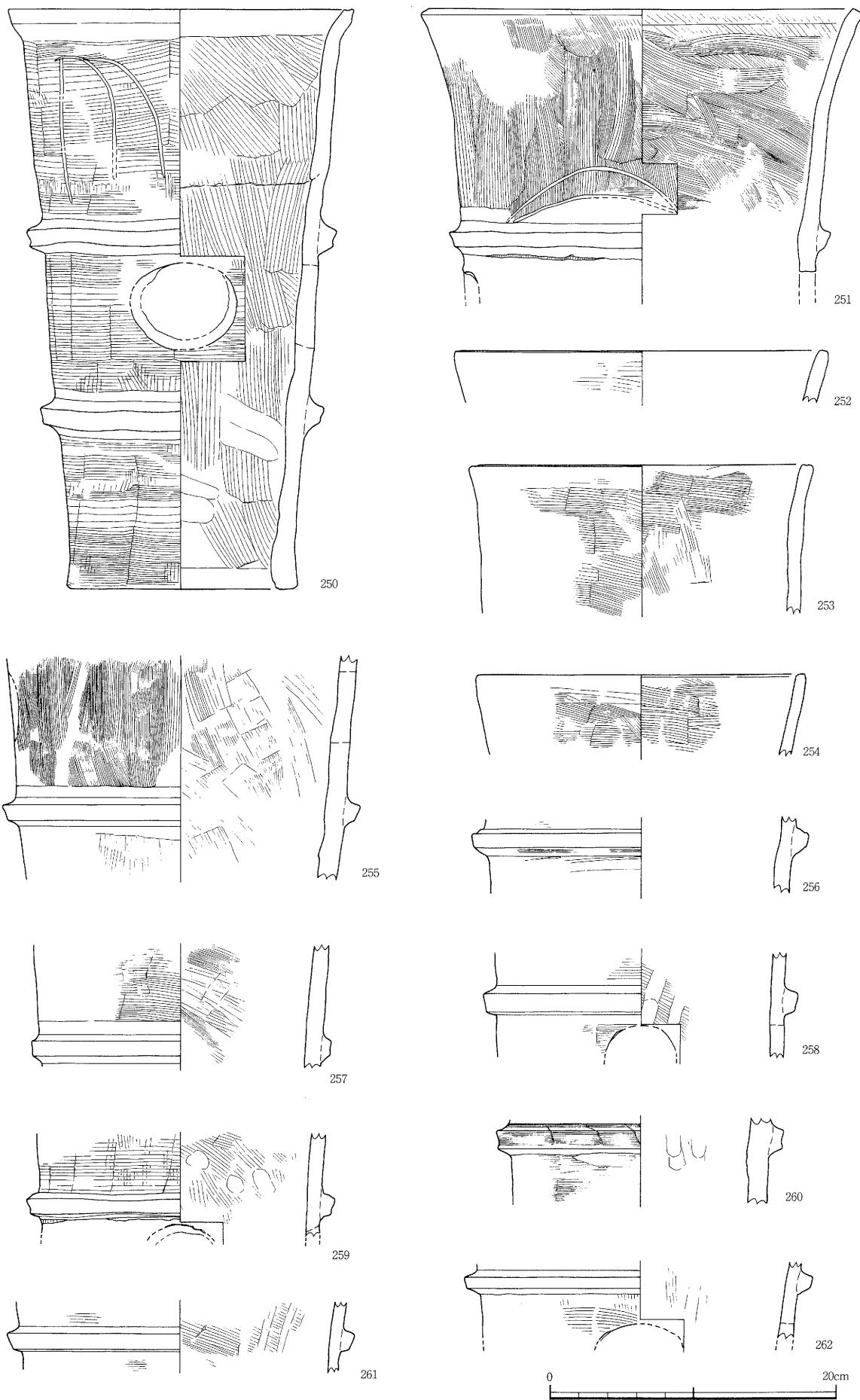
たM字状を呈している。透かしはやや不整形の円形であり、径は約6.0cmから7.0cmである。口縁部段にm字状のヘラ記号を有する。2条目突帯の上4cmの内面に、粘土紐の境目が顕著な部分がみられるが、これは小工程の乾燥単位であろうと考えられる。この粘土紐境目の外面側では、B種ヨコハケが途切れ一次調整のタテハケが見える部分がある。この場合は、おそらく上段を積み上げた後に外面調整を継ぎ足した際に起きた不連続であろうと考えられる。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

251から254・284は、口縁部片および口縁部を含む資料である。251から253の口縁形態は、ゆるやかに外反しており、254・284はほぼ直立している。外面調整は、251のみ一次調整タテハケのみであり、その他はヨコハケあるいはB種ヨコハケである。内面調整は、ナナメ・ヨコハケである。口縁部径は、254の22.0cmから251の31.0cmまで多少のばらつきが認められるが、250の法量から推測するに小型円筒埴輪の範疇である。251は、口縁部高16.2cmを測る。また、口縁部段に2条の円弧によるヘラ記号、下段には円形透かしの一部が残存している。色調・焼成は、251が褐色・硬質系であるほかは、253・254が褐色・軟質系、252・284が淡黄色・軟質系であり、色調・焼成もばらつきが認められる。

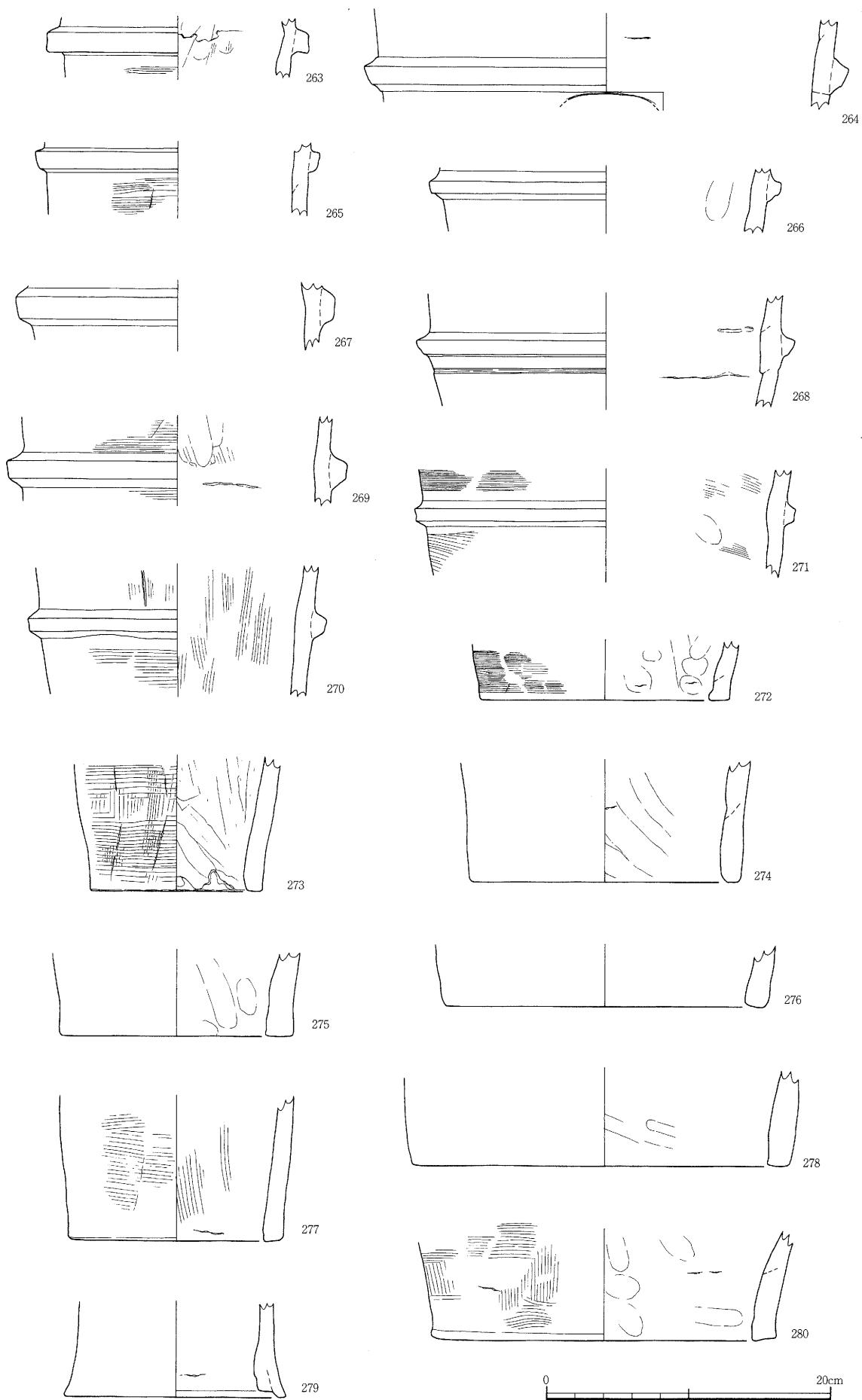
255から271・285から287・289は、体部片である。摩滅により調整が不明瞭なものも多いが、ほとんどの外面調整はヨコハケあるいはB種ヨコハケである。255のみ一次調整タテハケのみの資料である。内面調整は、縦・斜め方向のユビナデあるいはタテ・ナナメハケである。258、259、262、264では、下段に円形透かしの一部が残存している。体部径は、17.0cmから22.0cm前後のものが多く、小型円筒埴輪に属するものである。32.0cm前後の264は、後述する底部片でも径の大きいものがあることから、それと対応する中型円筒埴輪に属する可能性がある。突帯の断面形状は、扁平の257を除くと、上辺が突出した台形状のものが多い。色調・焼成は、260と271の2点のみ須恵質であり、その他は褐色・軟質系か淡黄色・軟質系である。

272から280は、底部片である。体部片と同じく、摩滅により調整不明な資料も多いが、観察しうるものは、外面調整がヨコハケあるいはB種ヨコハケ、内面調整が縦・斜め方向のユビナデである。272・273では、ヨコハケを底部下端から丁寧に施そうとはしているが、下端部にはヨコハケが及んでいない。底部の立ち上がりは、ほぼ直立するものが多く、外反度は低い。底部径は、15.0cmから16.0cmのものが比較的多いが、273の12.2cmから278の24.0cmや278の26.0cmまであり、ばらつきがみられる。小片資料による復元値のため、誤差を多く含むと考えられるが、小型と中型の2種が存在すると考えられる。色調・焼成は、274・278が黄褐色・硬質系であり、その他は褐色・軟質系か淡黄色・軟質系である。

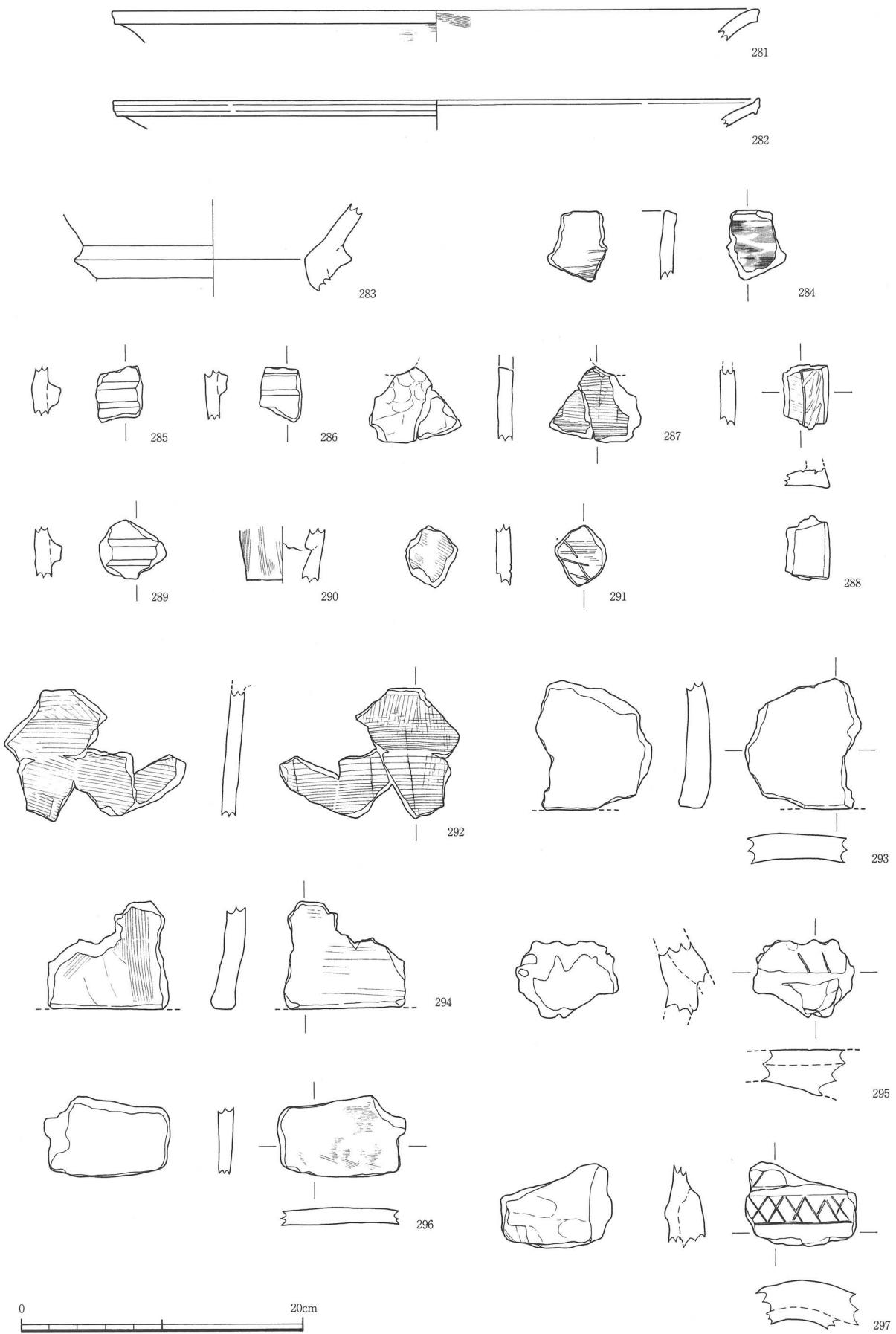
281から283・288は、朝顔形円筒埴輪の朝顔部分にあたる小片資料である。摩滅によりほとんど調整不明であるが、281の外面でかすかにヨコハケが観察できる。288は、朝顔擬口縁部の剥離痕であり、剥離面には連続する刻線を入れている。色調・焼成は、褐色・軟質系、淡黄色・軟質系、黄褐色・硬質系などばらばらであり、複数個体の破片が混在しているといえる。



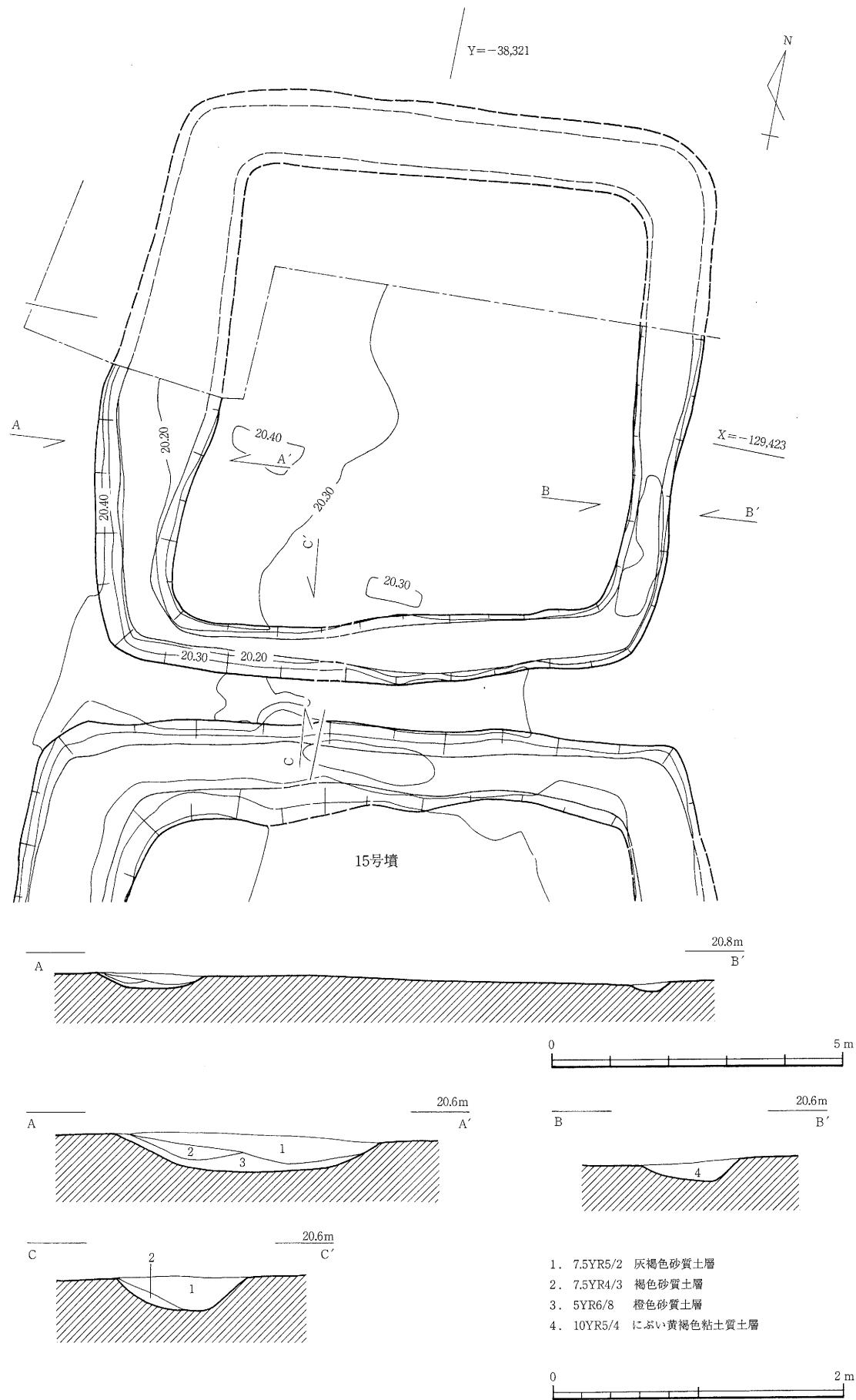
第48図 13号墳出土遺物 2



第49図 13号墳出土遺物 3



第50図 13号墳出土遺物 4



第51図 14号墳平面・断面図

291は、ヘラ記号を有する資料であり、3条の直線を組み合わせた文様が刻まれている。

290・293から297は、形象埴輪と考えられる資料である。ただし、具体的に特定できるものはない。290は、残存部で径5.1cmから6.0cmの円筒状でタテハケを外面に施している。293・294は、円筒埴輪底部にも考えられたが、293は外面・内面ともナデ調整であり、297は一部にタテハケを施した後ユビナデを行うもので、13号墳出土の円筒埴輪底部とは異なるものである。295は、笠状になるもので、縁部に近いと思われる部分に2条の平行する直線文が刻まれている。296は、平らな形状であり、不定方向のハケ目が残る。また、赤色顔料の塗布が認められる。297は、X字状の連続文様が施され、一段すぼまった上部にも線刻がみられる。冑形埴輪あるいは甲冑・武人型埴輪の腰部分などが候補として挙げられよう。

(小浜)

15. 14号墳 (第51図、図版19—6・20)

古墳は、B地区とC地区で検出した。古墳の北側3分の1は、北側の調査区外にある。南側には15号墳、西側には幅17m前後を測る古墳空闊区域が存在する。北側は調査区外であるため不明である。また、古墳より東側の調査区内においては、全く古墳を検出しなかった。

古墳の中心は、古墳の形状からX=-129,423、Y=-38,320.5付近と推定される。調査区内にある周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈していたものと推定され、東西約7.4m、南北6.1m以上、全長東西約10.0m、南北7m以上を測る。全長は10m前後と推定される。方位はN-7°-Wである。

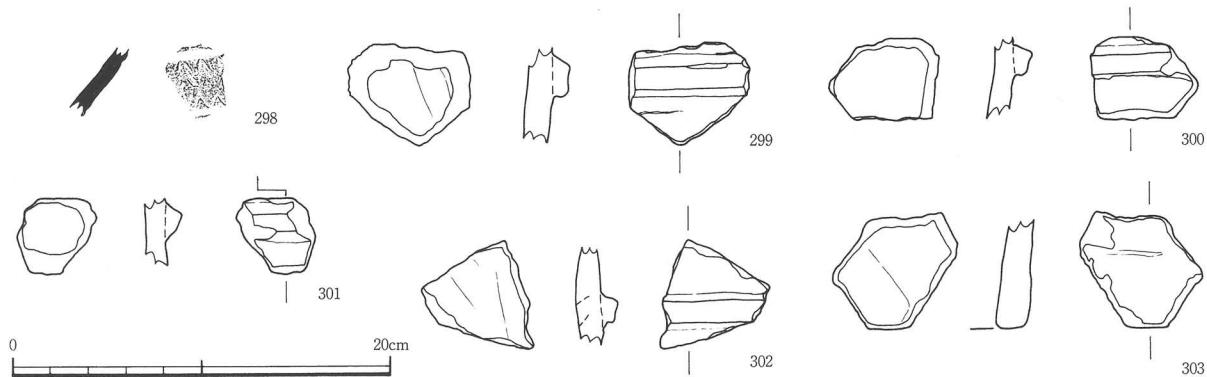
周溝は、検出面が削平を受けていたものと推定され浅い。東周溝幅約0.7m、深さ約0.1m、西周溝幅約1.8m、深さ約0.25m、南周溝幅約0.9m、深さ約0.25mを測る。埋土は、地点によって堆積状況に違いが認められ、1層から3層に分けることが出来る。比較的土砂の堆積状況がわかる西周溝においては、埋土は凹レンズ状に堆積し、上層には灰褐色の砂質土、下層には橙色砂質土が堆積している。

周溝内から出土した古墳に関係する遺物は、埴輪、須恵器などであるが、極めて少ない。埴輪は円筒埴輪、須恵器は器台の小片である。

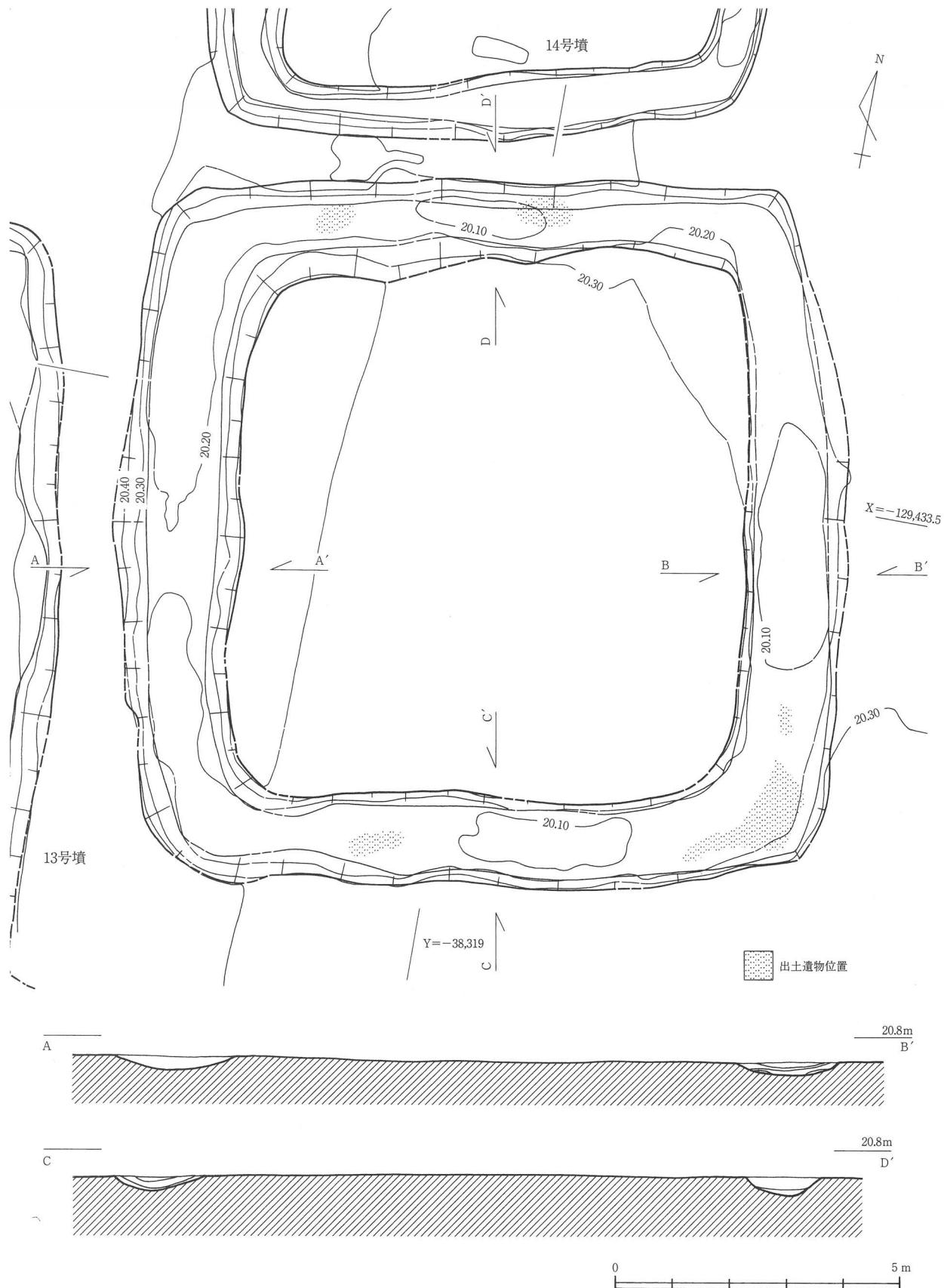
(奥)

出土遺物

土器 (第52図、図版52) 298は器台の杯部口縁部下の小片と推定される。残存部は、斜めに



第52図 14号墳出土遺物



第53図 15号墳平面・断面図

内弯気味に下り、残存部の外面に上下に突帶と沈線とによって区画し、内部に2本の波状文を施す。残存高約3.6cmを測る。
(奥)

埴輪（第52図、図版54） 299から303は、すべて円筒埴輪片である。299から302は体部小片であり、摩滅にもより外面・内面調整とも不明瞭だが、302で外面にヨコハケの痕跡がわずかに認められる。内面調整は、299・301・302で斜め方向のユビナデが認められる。突帶の断面形状は下辺がややつぶれた台形を呈するものが多いが、299はやや幅広で扁平である。303は底部片である。小片で外面・内面調整とも摩滅により不明である。底部径も復元し得ない。色調・焼成は、299・301が淡黄色・軟質系、300・302・303が褐色・軟質系である。
(小浜)

16. 15号墳（第53・54図、図版21・22-1~4）

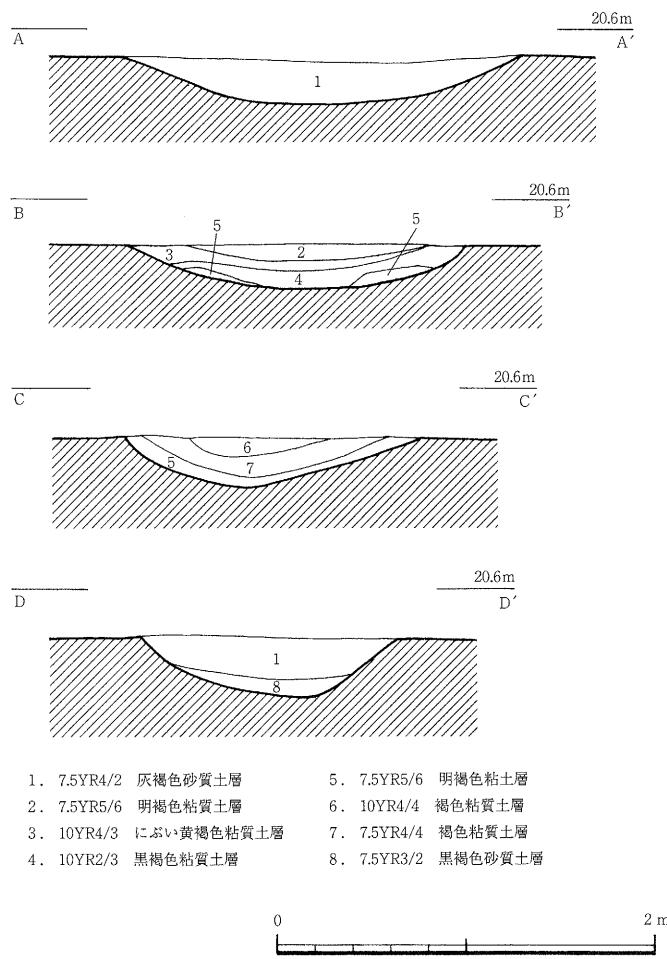
古墳は、B、C地区に存在し、X=-129,435、Y=-38,319付近を中心に検出した。古墳は、西側を13号墳、南側を23墳、北側を14号墳に囲まれている。古墳より東側の調査区内においては全く古墳を検出しなかった。

周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西約8.7m、南北約9.4m、全長東西約12.7m、南北約12.3mを測る。方位はN-7°-Wである。

周溝は、検出面が削平を受けていたものと推定され浅い。東周溝幅約1.8m、深さ約0.2m、西周溝幅約2.1m、深さ約0.25m、南周溝幅約1.6m、深さ約0.2m、北周溝幅約1.3m、深さ約0.3mを測る。埋土は、地点によって若干の違いはあるものの、上層には褐色系の砂質土ないしは粘質土、下層には黒褐色系の粘質土ないしは砂質土が凹レンズに近い形で堆積している地点が多い。また、部分的に墳丘の盛土と推定される明褐色砂質土が墳丘裾部付近に堆積しているのが認められる。

遺物は、周溝下層上面からほとんどが出土している。下層からのものは極めて少ない。遺物出土地点は、周溝中央部を中心に出土し、東南辺部、南周溝中央部西、北周溝中央より東西付近に集中している。

周溝内から出土した古墳に関係する遺物は、埴輪、須恵器などである。ほ



第54図 15号墳周溝土層断面図

とんどの埴輪は小片で出土したことから、後世に墳丘を壊した際、墳丘に配置していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝上層に投げ込まれたものと推定される。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪の種類は、家の一部、不明が4点ある。

初期須恵器は、埴輪の中に混じって壺、甕などが出土している。図中の遺物の他に高杯、高杯蓋、大型甕片などがある。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀末と推定される須恵器などが出土している。これら周溝内上層の遺物から古墳時代後期末以降まで周溝が存在している可能性がある。
(奥)

出土遺物

土器 (第55図、図版47・48・52・53) 304は須恵器甕で、口縁部から肩部まで残存している。口縁部と肩部の界から外側に大きく開く。口縁端部をナデによって面を持たせ、その外面下約1.5cmの箇所に断面三角形に近い突帯を有している。肩部は外側に大きく開く。口縁外面と口縁端部内面は回転ナデ、内面は指オサエの後ナデ、肩部外面は平行タタキ、内面は縦方向のナデによって仕上げている。口径23.6cm前後、残存高約12.2cmを測る。

305は、須恵器直口壺で、口縁部のみ残存している。口縁部と肩部の界から外反気味に開く。口縁端部は断面三角形に近い。外面の口縁端部から約3.5cmから4.2cm付近に2条の沈線を施す。口径17.1cm前後、残存高約9.1cmを測る。

306は須恵器短頸壺である。口縁部と肩部の界から開き気味に短く立ち上がり、端部は三角形に近い。肩部の0.5cm上方に断面三角形の突帯を巡らす。口縁内外面と肩部外面は回転ナデ、肩部内面は同心円と推定されるタタキの後ナデによって仕上げている。口径15.8cm前後、残存高約4.75cmを測る。

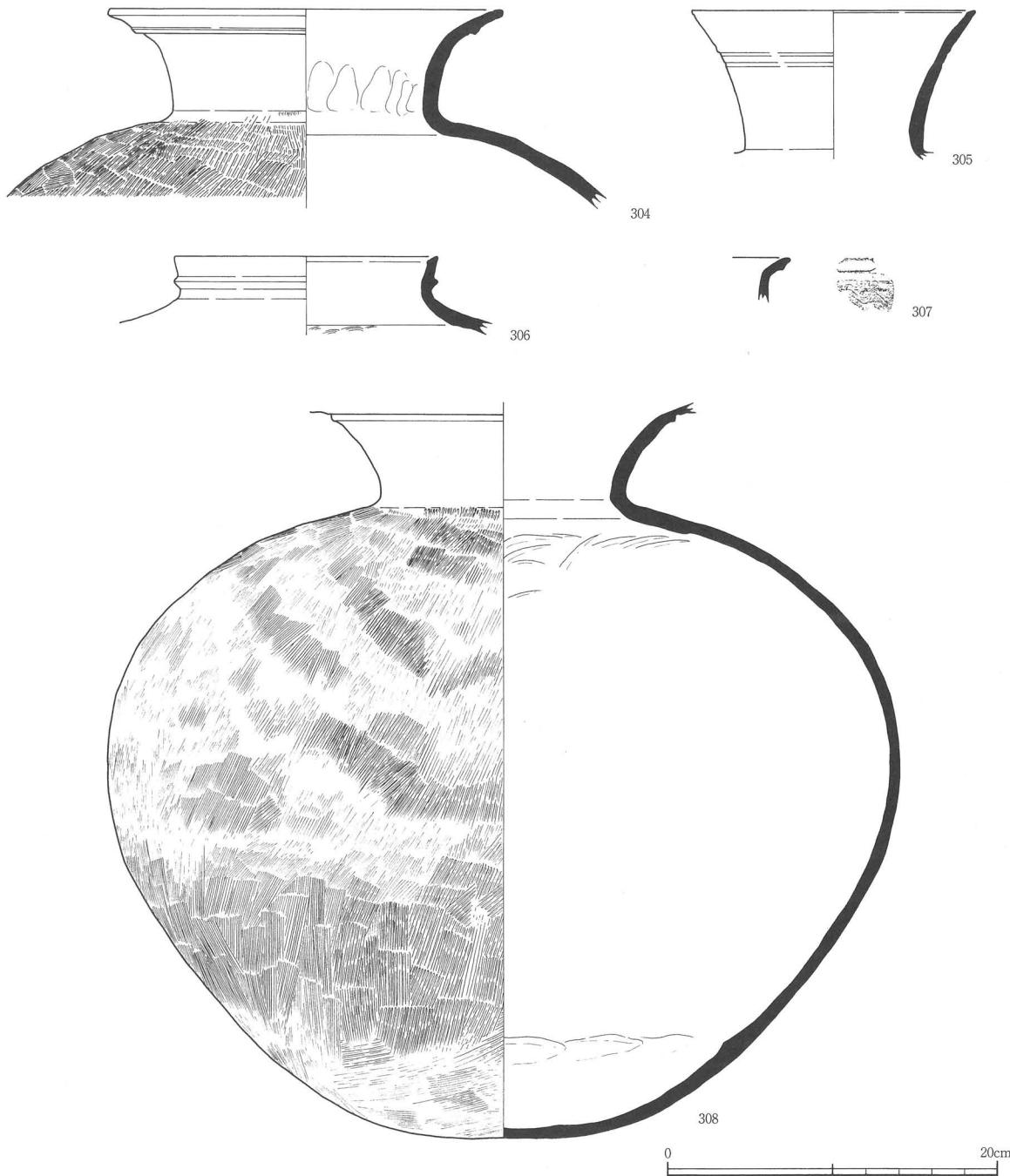
308は、須恵器壺である。口縁端部が欠失している。口縁部は、口縁部と肩部の界から外側に大きく開く。口縁端部外面下に断面三角形の突帯を有する。体部は、体部最大径が体部のほぼ中央に存在し、形状は橢円形に近く、底部はやや丸みを帯びる。口縁部内外面とも回転ナデ。体部外面は、平行タタキ、内面の頸部の界付近はタタキ、そこから底部付近まではタタキの後ナデ、底部はナデによって仕上げている。残存高約44.9cm、体部最大径48.3cm前後を測る。
(奥)

埴輪 (第56~59図、図版66~68) 309から335・341から361は円筒埴輪、336から340は朝顔形円筒埴輪、362から366はヘラ記号を有する資料、367から372は形象埴輪である。

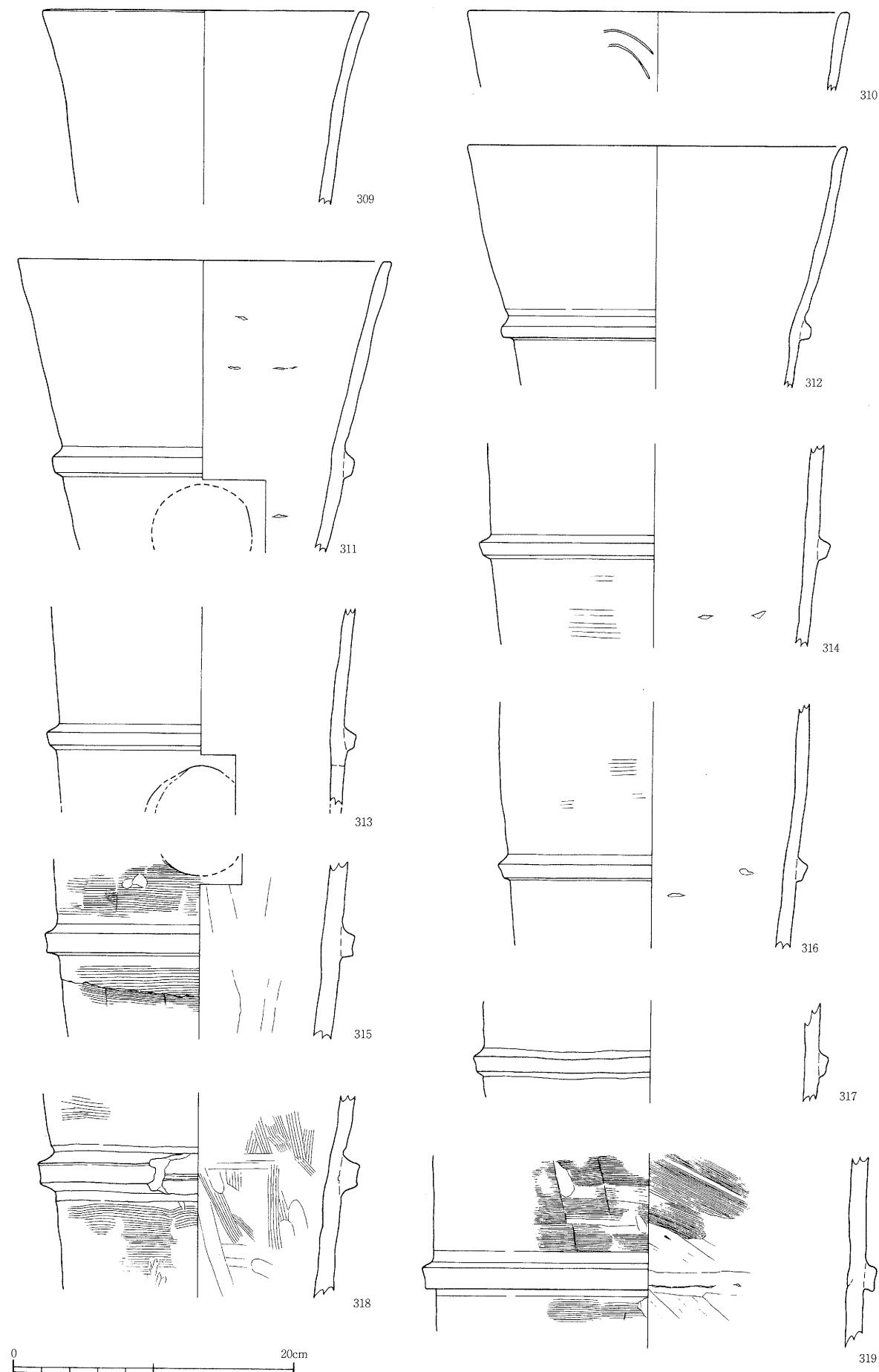
309から312、341、342は、口縁部片および口縁部を含む資料である。309から312は、すべて摩滅により外面・内面調整が不明である。また、いずれも外側に大きく開くプロポーションであり、口縁端部の面は水平かわずかに外反する。口縁部高は、311で14.7cm、312で13.4cmであり、309で13.8cm以上を測る。口縁部径は、309が23.0cmとやや小さいが、そのほかは27.0cm前後で近似している。311では、下段に円形透かしの一部が残存している。310・312においては、外面に黒斑が認められる。色調・焼成は、いずれも褐色・軟質系である。341・342は、ともに外面調整にヨコハ

ケ、内面調整にナナメハケを施しており、色調・焼成は褐色・硬質系である。口縁部の形態は、309から312も含めて341のみほぼ直立する形態をとる。また、342では口縁端部のヨコナデが外側・内面に幅広く及んでおり、特徴的である。

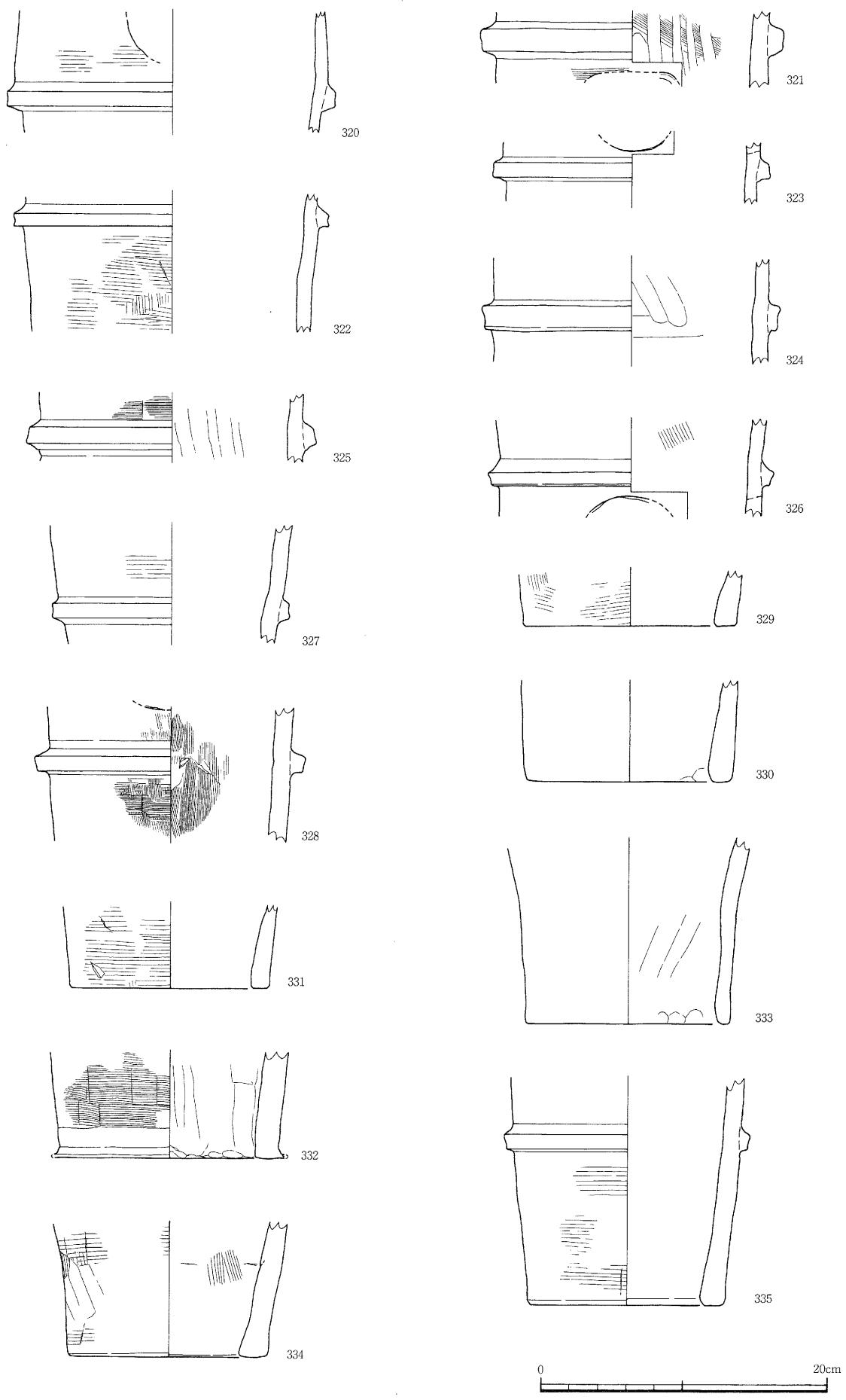
313から328、343から358は、体部片である。摩滅により調整不明なものも多いが、外面調整はヨコハケあるいはB種ヨコハケであり、内面調整はタテ・ナナメハケおよび縦・斜め方向のユビナデである。外面にB種ヨコハケが用いられている場合は、315・319のように同一段に少なくとも2周以上ハケ目工具が巡らされている。318では、突帯剥離面に1条の沈線がみられるが、これは突帯設定時の割付ラインであり、突帯設定技法のひとつである。突帯の断面形状は、突帯上辺が下辺より突出する台形状かやや扁平なM字状を呈するものが多い。



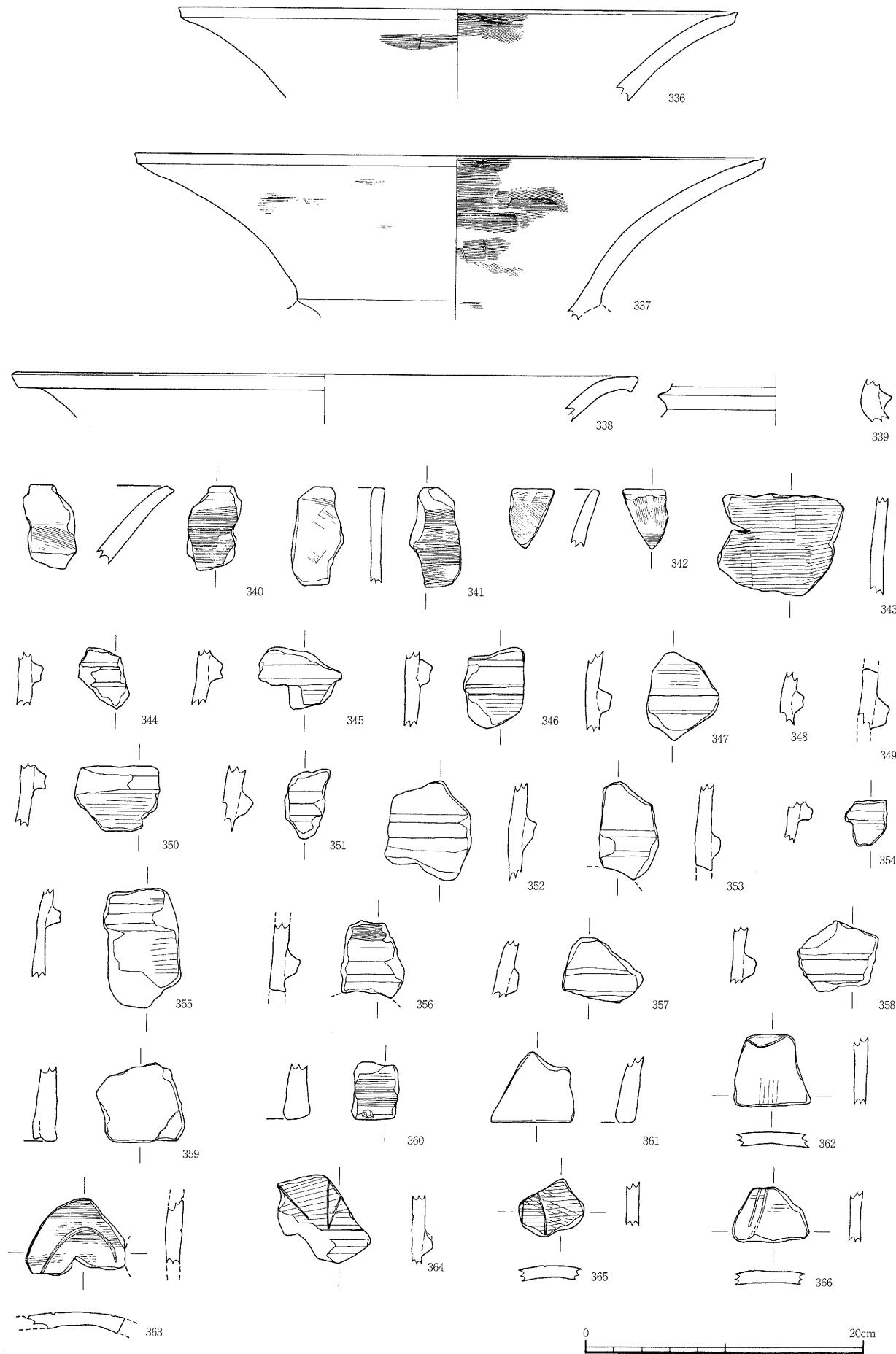
第55図 15号墳出土遺物 1



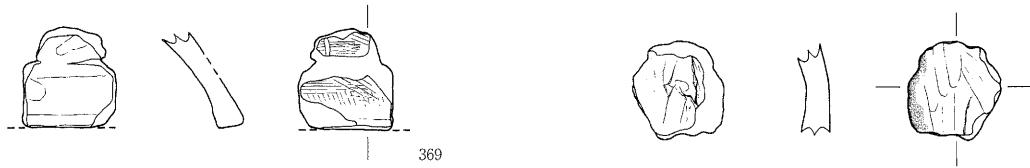
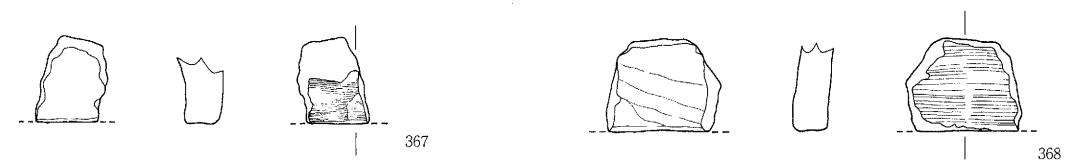
第56図 15号墳出土遺物 2



第57図 15号墳出土遺物 3

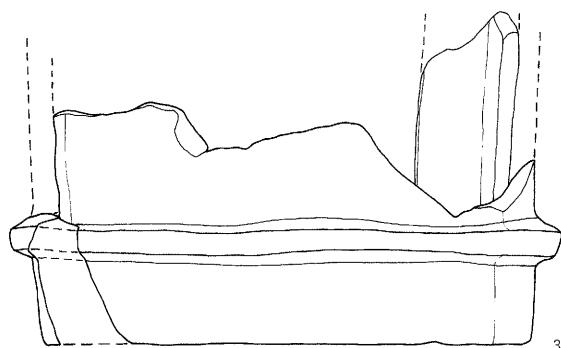
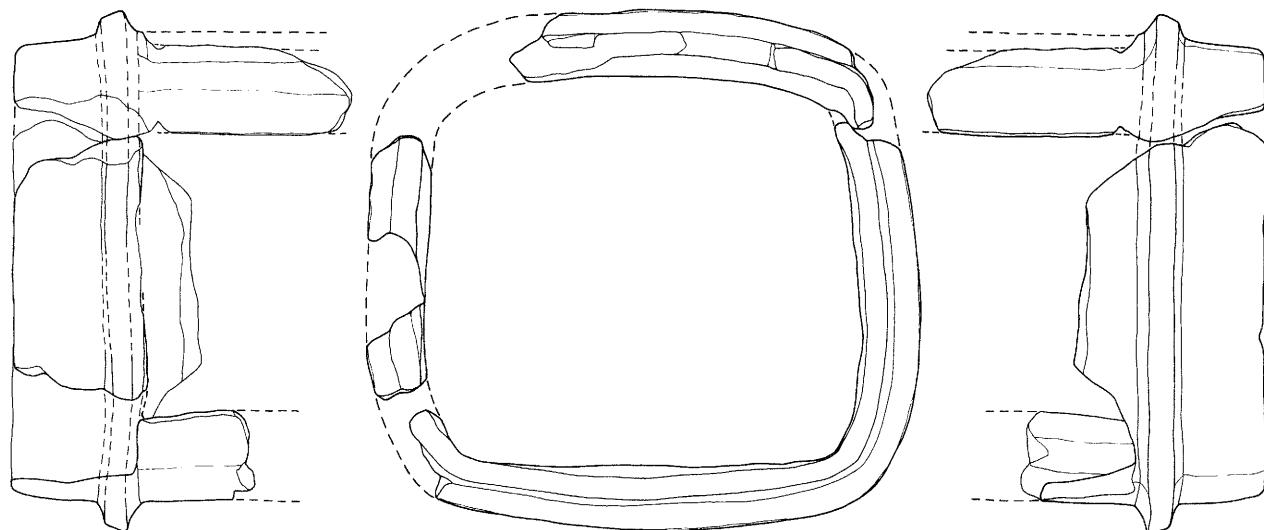
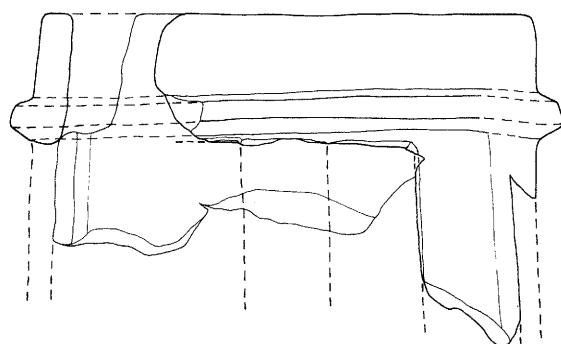


第58図 15号墳出土遺物 4



371

0 20cm



372

第59図 15号墳出土遺物 5

体部径をみると、全体的に推定で19.0cmから22.0cm前後の小型円筒埴輪の範疇に属するものである。唯一319のみ30.5cm前後を測り、中型円筒埴輪の範疇だが、他の出土資料がすべて小型円筒埴輪であることを考慮すると、残存度が悪いために復元誤差が大きく生じた可能性が高い。316・322・327・343・344において、黒斑が認められる。色調・焼成は、黒斑が認められるものや調整の残存度が悪いものはすべて褐色・軟質系であり、一方で調整が明瞭に残る315・318・319・321・328など褐色・硬質系あるいは須恵質化したものが多く認められる。また、344から358で図示した突帯小片資料では、突帯の突出度や幅、色調、焼成等が異なる、さまざまなタイプが上記以外に出土していることを示している。

329から335、359から361は、底部片である。摩滅により調整不明なものも認められるが、外面調整はB種ヨコハケ、内面調整はタテハケあるいは縦・斜め方向のユビナデである。B種ヨコハケは、いずれも底部下端近くから丁寧に施されており、332では少なくとも2周以上巡らされている。なお、332ではB種ヨコハケ後、底部下端から2cmの範囲をヨコナデ整形している。底部径は、329から335ではすべて推定で13.6cmから14.4cmの間にまとまっており、近似している。また、331・334においては、黒斑が認められる。色調・焼成は、332が須恵質化しているが、その他は褐色・軟質系である。

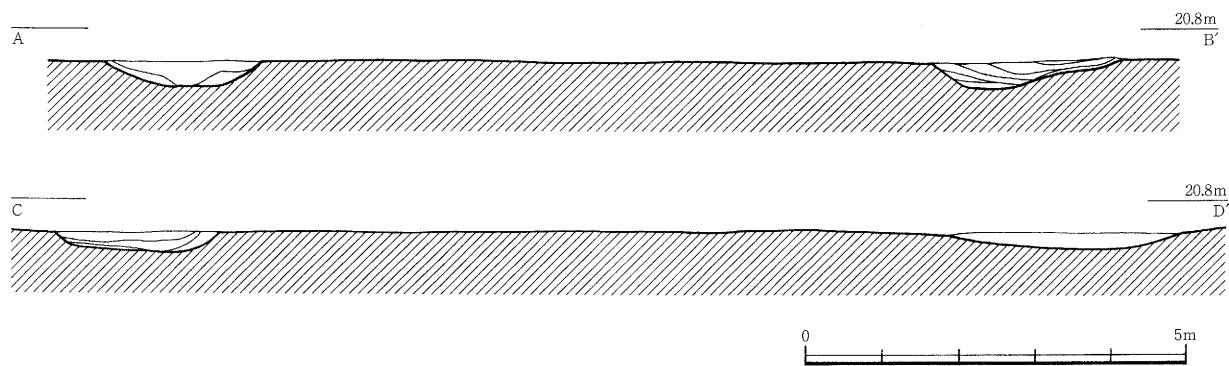
336から340は、朝顔形円筒埴輪の頸部から口縁部にかけての資料である。調整は、摩滅により不明な部分が多いが、外面調整はヨコハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケである。口縁部径は、推定で336が40.0cm、337が44.4cm、338が45.0cmであり、ほぼ同大である。339の頸部では突帯径が17.0cmであり、口縁部片と同一固体であれば、頸部から口縁部にかけてかなり広がるプロポーションとなる。色調・焼成は、褐色・硬質系が主体を占め、336はかなり須恵質化している。

362から366はヘラ記号を有する資料である。いずれも小片資料であり、ヘラ記号全体を知ることはできない。曲線や直線を用いた単純なものばかりであり、2条の円弧状線を用いたものが多い。363では大小の円弧線を山形に配する。366では2条の曲線を平行させている。調整、断面形状などから、すべて円筒埴輪片であると考えられる。

形象埴輪と考えられる資料のうち、367から371はいずれも小片であり、具体的な形態がまったくわからないものである。372は、家形埴輪である。一辺27.6cmから29.0cmの、ほぼ正方形にちかい平面プランである。下部の裾廻りおよび壁材の一部しか残存しておらず、上部については不明である。しかし、正方形にちかい平面プランから、屋根の構造はおそらく切妻造か寄棟造になるであろう。裾廻りの突帯までの高さは約5.5cm、最大残存高17.6cmである。壁部分の文様・調整などは、有無を含め摩滅により不明である。入り口、窓になるとされる部分が少なくとも3ヶ所認められる。色調・焼成は、円筒埴輪で多く認められた褐色・軟質系である。 (小浜)

17. 16号墳（第60・61図、図版22-5・6）

古墳は、B、C地区に存在し、X=-129,452、Y=-38,326付近を中心に検出した。古墳は、東側を23号墳、南側を17墳、北側を13号墳の周溝を共有している。



第60図 16号墳平面・断面図

周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西約8.7m、南北約9.5mを測る。全長は、周溝を上記の古墳と共有しているため長い。東西約13.0m（推定11.9m前後）、南北約14.8m（推定13.1m前後）を測る。方位はN-15°-Wである。

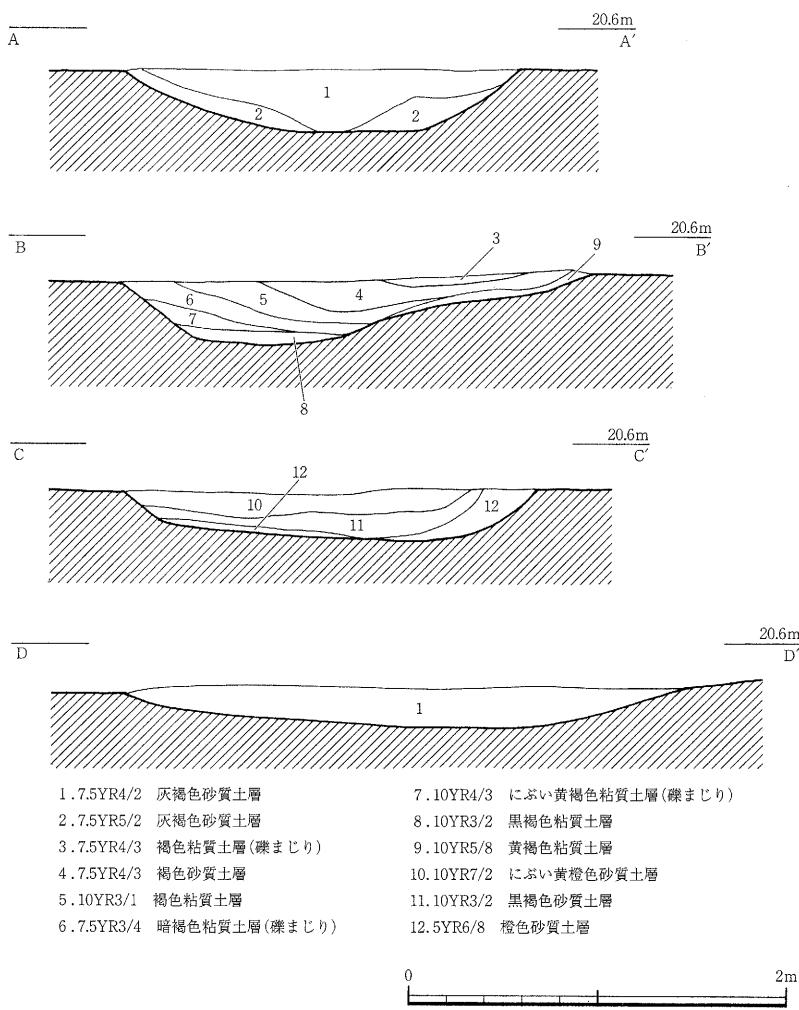
調査当初は、周溝の切り合い関係から古墳の築造の前後関係が解明できるものと考えて、土層断面観察を十分に行つたが、土層の明確な切り合い関係が認められず、また最上層の埋土にもほぼ同時期の遺物が出土すること。また、先に存在していた古墳の周溝を埋めて、新たに古墳を造営すると考えにくうことなどから、古墳築造の前後関係

はあるものの、周溝を共有していたものと、現在の所、判断している。

東周溝は、23号墳の西周溝と共有しているため、幅が約2.5mと長い。しかし本来の周溝の幅は、断面の形状および両周溝の平面形の形状から、1.6m前後と推定される。深さ約0.35mを測る。西周溝は幅約2.1m、深さ約0.25mを測る。南周溝は、17号墳の北周溝と共有しているため、幅が約2.2mと長い。本来の周溝の幅は、断面の形状および両周溝の平面形の形状から、1.5m前後と推定している。深さ約0.3mを測る。北周溝は、13号墳の南周溝と共有しているため、幅が約3.0mと長い。本来の周溝の幅は、断面の形状および両周溝の平面形の形状から、2m前後と推定している。深さ約0.2mを測る。

周溝の埋土は、地点によって若干の違いはあるものの、上層には褐色系の砂質土ないしは粘質土、下層には黒褐色系の粘質土ないしは砂質土がレンズ状に堆積している地点が多く認められる。

周溝内から出土した古墳に関する遺物のほとんどは、埴輪で須恵器は1点のみである。埴輪の種類は円筒埴輪、朝顔形埴輪で量は少ない。また、古墳に伴わない遺物として、周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀末と推定される須恵器などが出土地している。これら周溝内上



第61図 16号墳周溝土層断面図

層の遺物から古墳時代後期末以降まで周溝が存在していた可能性がある。

(奥)

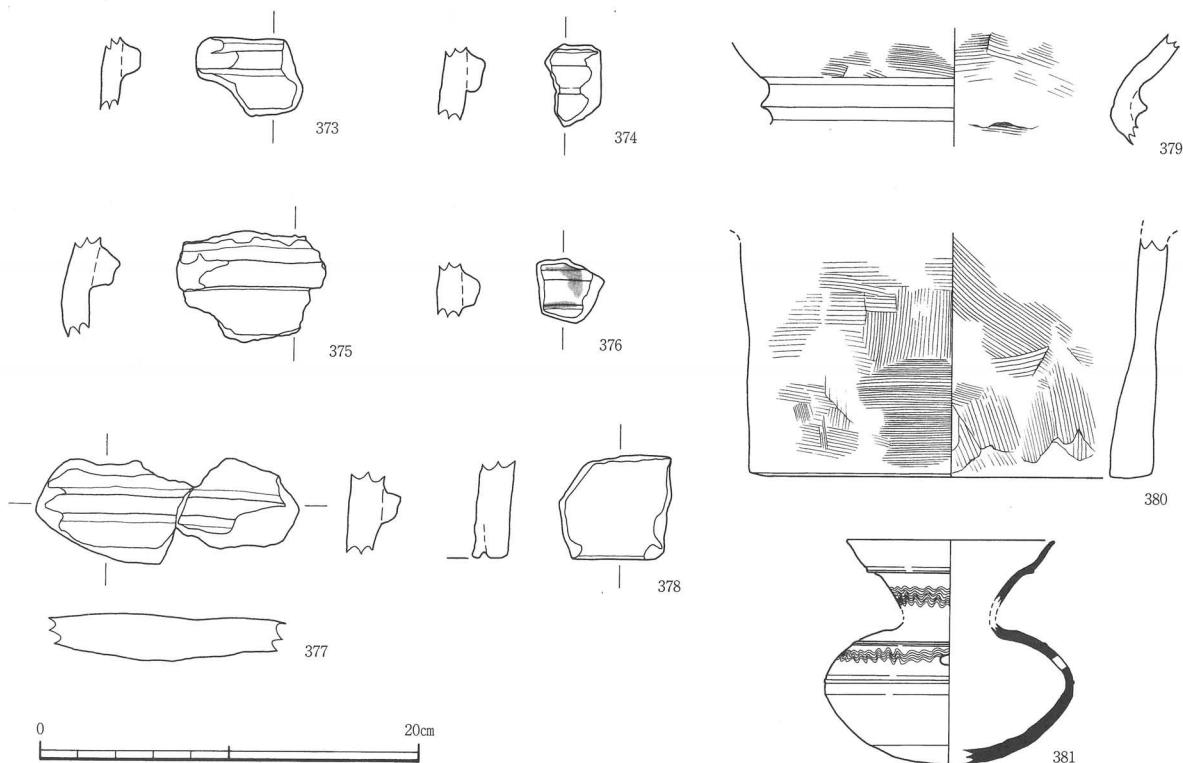
出土遺物

土器 (第62図、図版48) 381は須恵器腺である。頸部と体部の界、底部が欠損している。口縁部はいわゆる二重口縁の形態を呈す。口縁部と頸部の界には断面三角形の突帯を巡らし、そこから口縁端部にかけて、内弯気味に外側に開く。口縁端部は丸みを持つ。体部の形状はいわゆるそろばん型を呈し、外面の体部のほぼ中央およびそこから約2cm上に、角張る突帯を有し区画する。その内部に均整な波状文を施し、斜めに1個の円孔を空ける。頸部は頸部と体部の界が欠損しているが、体部の界から口縁部にかけて大きく開き、その中央部外面に波状文を施す。調整は、内外面とも回転ナデであるが、底部外面は手持ちヘラケズリの後ナデによって仕上げている。口縁径10.9cm前後、器高13.2cm前後と推定される。

(奥)

埴輪 (第62図、図版69) 373から378・380は円筒埴輪、379は朝顔形円筒埴輪である。

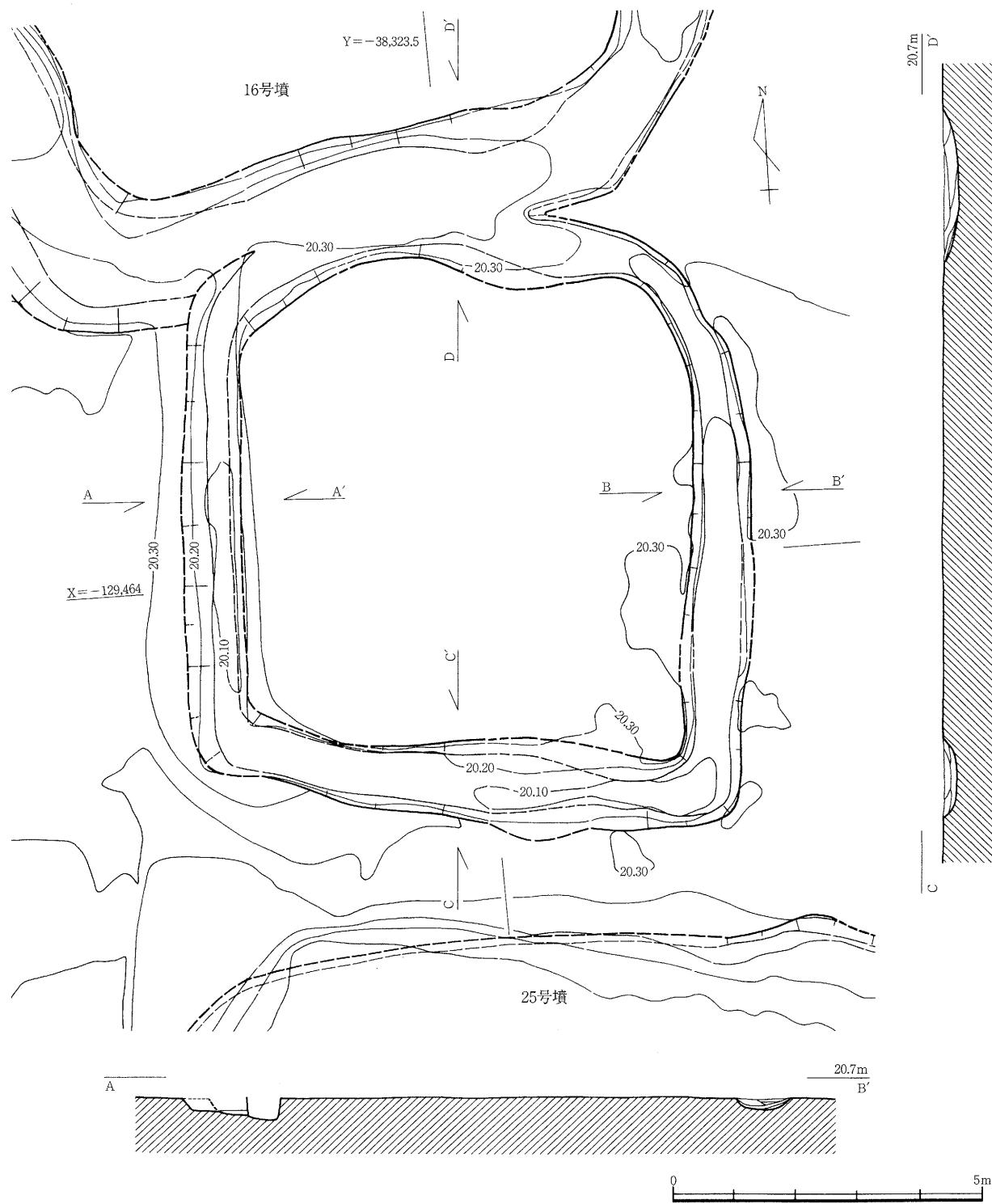
373から377は体部の小片である。すべて摩滅がひどく、外面・内面調整とも不明である。突帯の断面形状はさまざまであり、台形(373)、やや幅広で扁平(374・376)、M字状(375・377)などがある。ただし、断面形状が同じものでも、色調や焼成が異なっており、別個体であると考えられる。378・380は底部片である。378は、摩滅のため外面・内面調整等不明である。底部端の接合痕から、粘土紐ではなく、粘土板を基底部に用いたことがわかる。380は、外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケ、内面調整にナナメハケを施している。外面調整のヨコハケは、静止痕が明瞭ではなくB種ヨコハケとは断定できない。外面・内面調整とも底部下端からハケ目工具を当て、丁寧に行われているのが特徴である。底部径は、21.4cmと推定できる。また、残存



第62図 16号墳出土遺物

高から、底部高は13.0cm以上であることがいえる。とともに、わずかに外傾しながら立ち上がるプロポーションであるが、380は上部の器厚が1cm前後なのに対して、底部下端の器厚が2.3cmと2倍以上厚くなっている。色調・焼成は、褐色・軟質系が多いなか、淡黄色・軟質系(376)、須恵質(375)などもあり、バリエーションが認められる。

379は、朝顔形埴輪の頸部にあたる。外面調整にヨコハケ、内面調整にヨコ・ナナメハケを施している。色調・焼成は、円筒埴輪で最も多い褐色・軟質系である。
(小浜)



第63図 17号墳平面・断面図

18. 17号墳（第63・64図、図版23・24-1～4）

古墳は、B、C地区に存在し、X=-129,463、Y=-38,323.5付近を中心に検出した。南側をほぼ接するように25号墳が存在し、北側は、北周溝を16号墳の南周溝と共有している。また、古墳西側は、府営住宅建設時の埋設管により削平を受け、西周溝の底部のみを確認している。

周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西約7.3m、南北約7.65m、全長東西約8.8m以上（推定9.2m）、南北約11.5m以下（推定9.8m）を測る。方位はN-6°-Wである。

東周溝幅約0.9m、深さ約0.15m、西周溝は、前述したように削平を受けており不明であるが、古墳平面の形状などから、幅1.0m、深さ0.3m前後と推定される。南周溝幅約1.3m、深さ約0.2m、北周溝は、16号墳の南周溝と共有しているため、幅が約2.5mと長い。しかし本来の周溝幅は、断面の形状および両周溝の平面形の形状から、0.7m前後と推定される。深さ約0.2mを測る。

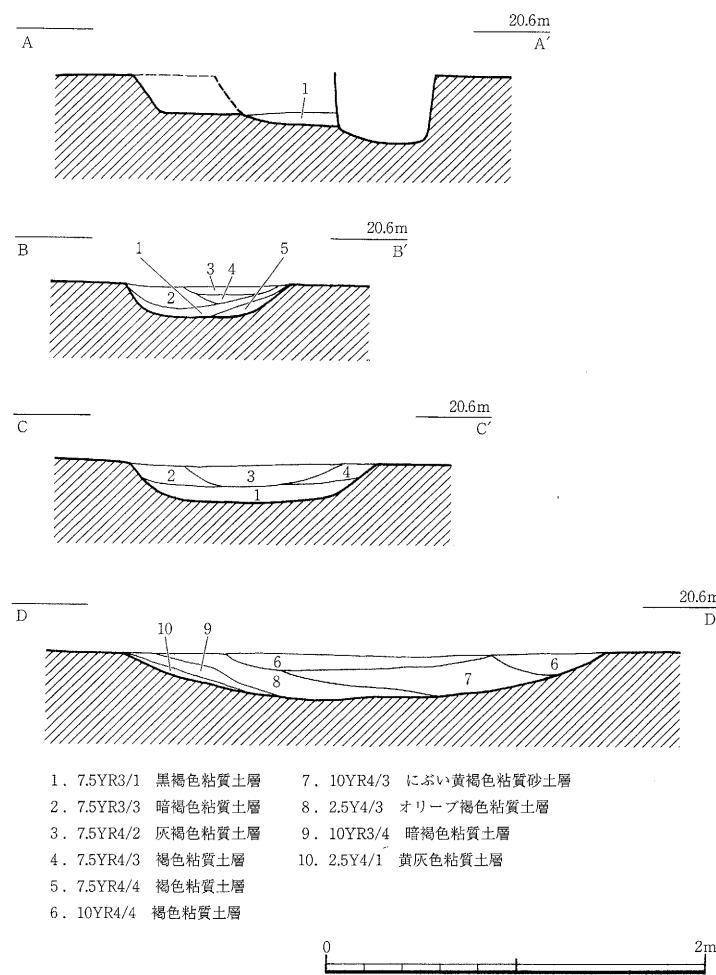
周溝埋土は、地点によっては若干の違いはあるものの、上層には褐色系の粘質土、下層には黒褐色系の粘質土が凹レンズに近い形で堆積している地点が多い。また、部分的に墳丘の盛土と推定される黄灰色粘質土が墳丘裾部付近に堆積しているのが認められる。

周溝内から出土した古墳に関係する遺物は、埴輪、須恵器などであるが量は少ない。ほとんどの埴輪は小片で出土したことから、後世に墳丘を壊した際、墳丘に配置していた埴輪を壊し、埋没直前の周溝上層に投げ込まれたものと推定される。

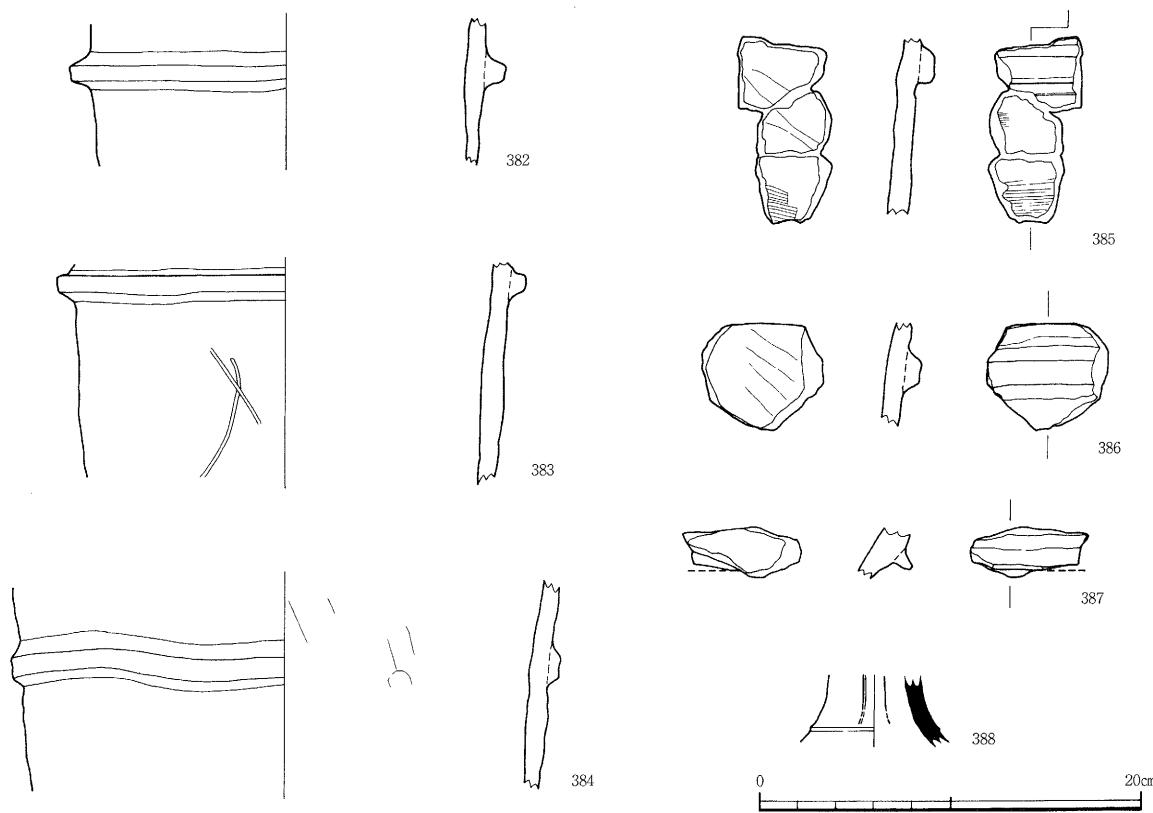
埴輪の器種は、円筒埴輪、朝顔形埴輪である。初期須恵器は、埴輪の中に混じって出土し、図化した遺物の他に壺、大型甕片などがある。

古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後半から末と推定される須恵器甕片が出土している。

これら周溝内上層の遺物から古墳時代後期末以降まで周溝が存在していた可能性がある。（奥）



第64図 17号墳周溝土層断面図



第65図 17号墳出土遺物

出土遺物

土器（第65図、図版53） 388は、須恵器高杯脚部と推定される小片である。裾部と脚柱部の界には、緩やかな突帯を有する。脚柱部には小片であるため形状は不明であるが、透かし窓が認められる。
(奥)

埴輪（第65図、図版69） 382から386は円筒埴輪、387は朝顔形埴輪である。

382から386は、すべて体部片である。とくに382から384は、残存度から反転復元できる破片である。この3点は、摩滅により外面・内面調整ともほとんど不明であるが、384の内面調整のみ縦方向のユビナデが観察できる。また、383は、×字状のヘラ記号が認められる。体部径は、それぞれ382が20.0cmから21.0cm、383が22.0cmから23.2cm、384が26.6cmから28.8cmであり、小型（382・383）と中型（384）が存在する。突帯の断面形状は、小型がしっかりとした台形、中型が幅広で扁平な台形と、明確に分かれる。色調・焼成は、3点とも淡黄色・軟質系である。385・386は、体部の小片である。385は、外面調整にヨコハケ、内面調整にヨコハケおよび斜め方向のユビナデを施している。ほぼ外面全体に赤彩が認められる。386は、外面調整は摩滅により不明であるが、内面調整は385と同様斜め方向のユビナデである。突帯の断面形状は、やや幅広の扁平な台形である。色調・焼成は、ともに褐色・軟質系である。

387は、朝顔部の擬口縁部にあたる。残存度が悪く、摩滅もひどいため、外面・内面調整とも不明である。色調・焼成は、褐色・軟質系である。
(小浜)

19. 18号墳（第66図、図版24—5・6）

古墳は、B、D地区で検出した。古墳の東側には19号墳、西側には6m前後離れて28号墳、南側には古墳が存在しない空閑域、北側は6m前後離れて9号墳が存在する。古墳の中心は、X=-129,462.8、Y=-38,357.2付近にある。古墳は、検出面および後世の遺構などによって削平を受けていたため、残存状態は極めて悪く、東周溝、西周溝の墳丘側などが欠失している。

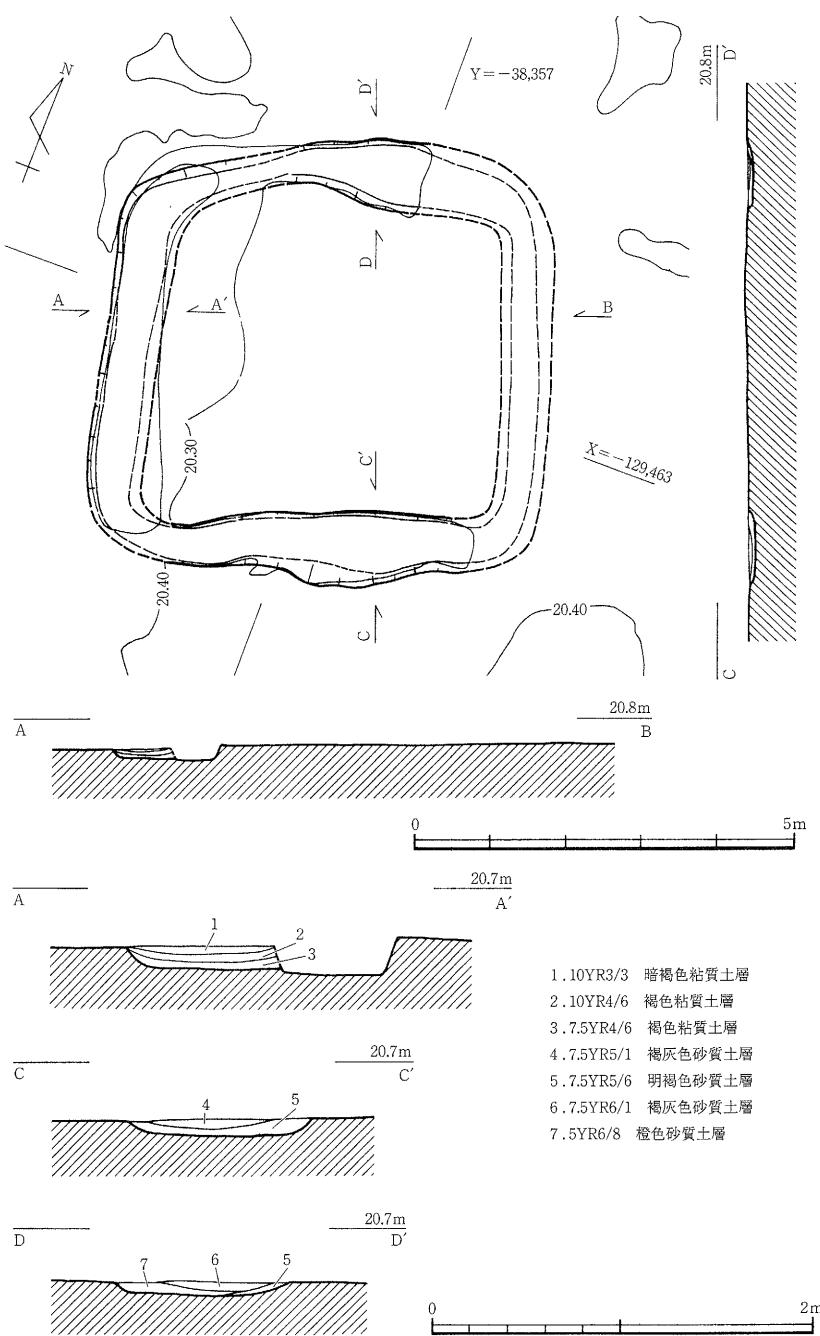
墳丘は、平面形では周溝の形状から隅丸方形に近い形を呈していたものと推定される。また、東西長は東周溝および西周溝の墳丘側が欠失しているため不明の点が多いが、古墳の形状から4.4m前後と推定される。南北長4.3mを測る。全長の東西長は前述したことにより5.2m以上（推定5.9m）、南北長5.6mを測る。方位はN-20°-Wである。

周溝の深さは、検出面が削平を受けていたため浅い。東周溝は欠失しているため計測値は不明であるが、古墳の平面の形状から幅は0.6m前後と推定される。西周溝幅0.7m前後、深さ0.1m前後、南周溝幅約1.0m、深さ約0.1m、北周溝幅約0.9m、深さ約0.1mを測る。

周溝の埋土は、地点ごとに色調および土質が異なっているが、ほぼ凹レンズ状に堆積している。

古墳に伴う遺物としては、大型甕片と極少量の円筒埴輪片が出土した。大型甕は、図化出来たのは口縁部下から体部上部であるが、周溝の南西辺付近で集中して出土している。

古墳に伴わない遺物として、周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後



第66図 18号墳平面・断面図

半から末と推定される須恵器甕片が出土している。これら周溝内上層の遺物から古墳時代後期末以降まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

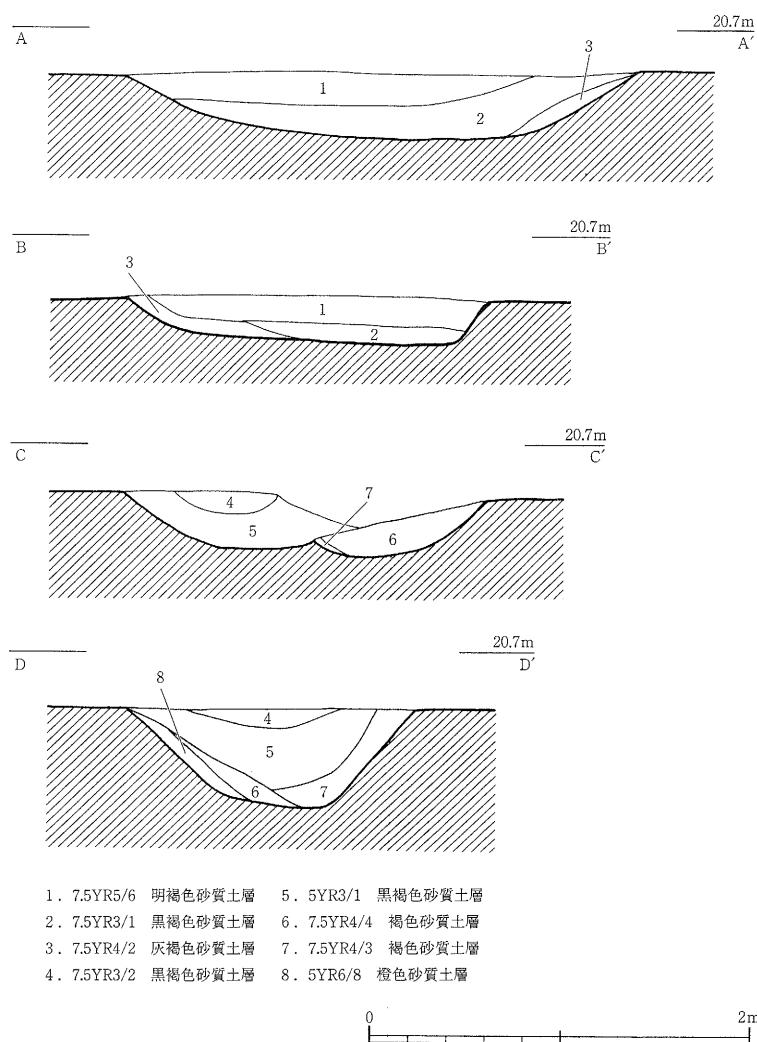
出土遺物

土器 (第68図) 390は、須恵器大甕の口縁部付近から肩部と推定されるものである。図化出来た部分以外にも周辺から多数出土したが、形状がわかるのはこの部分だけである。口縁部は、欠失しているが、残存部の形状から口縁部と体部の界から外側に大きく開くものと推定される。肩部は大きく開く。口縁部は、内外面とも回転ナデ、肩部は内外面ともナデによって仕上げている。頸部径28.1cm前後、残存高9.05cmを測る。
(奥)

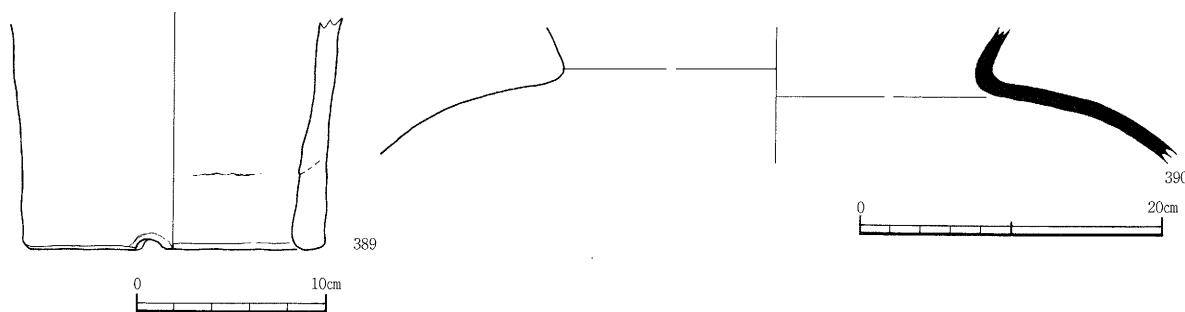
埴輪 (第68図、図版69) 389は、円筒埴輪である。底部片で、外面・内面調整とも摩滅により不明である。底部径は推定で16.0cm、残存高から底部高は12.4cm以上である。下端に指圧痕が認められる。胎土は、3mmから4mmの砂粒を多く含み、色調・焼成は淡黄色・軟質系である。
(小浜)

20. 19号墳 (第67・69図、図版25)

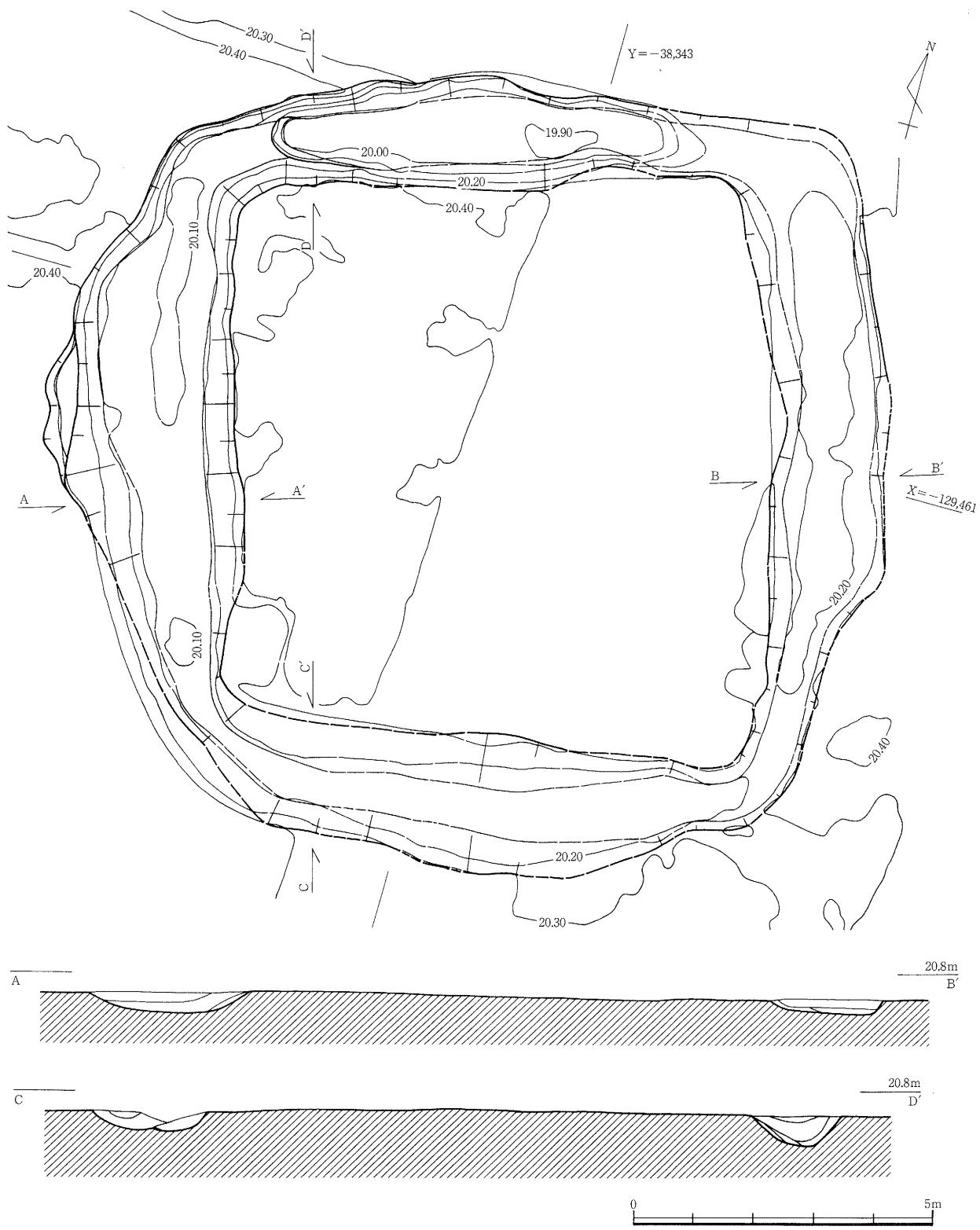
古墳は、B地区で検出した。古墳の南東側から北側にかけて幅7m前後を測る古墳が全く存在しない空閑地が巡り、西側には18号墳、南西側には20号墳が存在する。



第67図 19号墳周溝土層断面図



第68図 18号墳出土遺物



第69図 19号墳平面・断面図

古墳の中心は、 $X = -129,462$ 、 $Y = -38,343$ 付近にある。墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約8.9m、南北長約9.1m、全長は、東西長13.5m、南北長13.5mを測る。方位はN-15°-Wである。

周溝（第67図）は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.9m、深さ約0.2m、西周溝幅約2.7m、深さ約0.35m、南周溝幅約1.9m、深さ約0.35m、北周溝幅約1.5m、深さ約0.5mを測

る。周溝の埋土は、上層には明褐色ないしは黒褐色系の砂質土、中層から下層にかけては黒褐色系の粘質土ないしは砂質粘土がほぼ凹レンズ状に堆積し、また、墳丘肩部には墳丘の盛土と推定される土砂が認められる。

古墳に伴う遺物としては、須恵器杯蓋、須恵器壺口縁部、図化は出来なかったが須恵器大型甕体部片、埴輪は、少量の円筒埴輪片および不明形象埴輪片が周溝内から出土している。

古墳に伴わない遺物として、周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後半から末と推定される須恵器甕片が出土している。これら周溝内上層の遺物から古墳時代後期末以降まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

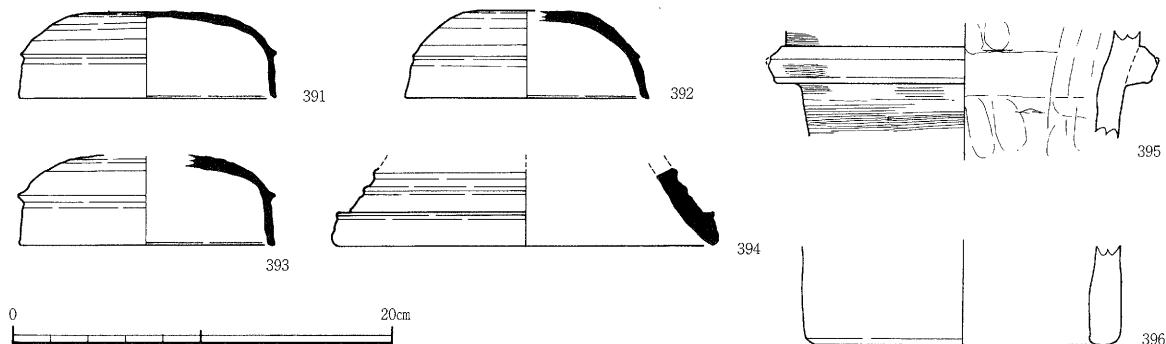
出土遺物

土器 (第70図、図版48・53) 391から393は須恵器杯蓋である。391・393の口縁部は、口縁端部から稜部にかけてやや内傾気味に立ち上がり、端部は角張る。天井部は392に比べ平らに近い。391は口径約13.5cm、器高約4.6cm、393は口径約13.4cm、残存高4.8cmを測る。392は391・393に比べ全体に丸みを持ち、器高は高い。口縁部は、稜部から口縁端部にかけて外側に開き、端部は角張る。口径約12.8cm、残存高約4.65cmを測る。

394は須恵器脚付壺の脚部と推定される小片である。脚部は断面三角形の端部を持つ。脚端部からほぼ直線的に内傾し、上部に2条の突帯を有する。欠損部には、形状不明であるが透し孔が認められる。脚径約19.9cm、残存高約4.1cmを測る。
(奥)

埴輪 (第70図、図版69) 395・396は、ともに円筒埴輪である。395は体部片で、外面調整にヨコハケ、内面調整に縦方向のユビナデを施している。残存度が悪く、ヨコハケの静止痕は認められない。突帯は、下端の貼り付けが弱く、上面には貼り付け時のナデの条線が明瞭に残る。体部径は、推定で16.4cmから18.8cmである。焼成は須恵質である。

396は、底部片である。摩滅がひどく、外面・内面調整とも不明である。底部径は、推定で16.8cmである。胎土は粗く、色調・焼成は淡黄色・軟質系である。また、実測図は掲載していないが、突帯部片がある。円筒埴輪の体部あるいは形象埴輪の基部にあたる破片である。突帯貼り付け時のナデが強く、上部の面が反り上がる。上面下端の稜線は明瞭ではなく、丸くなっている。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。
(小浜)

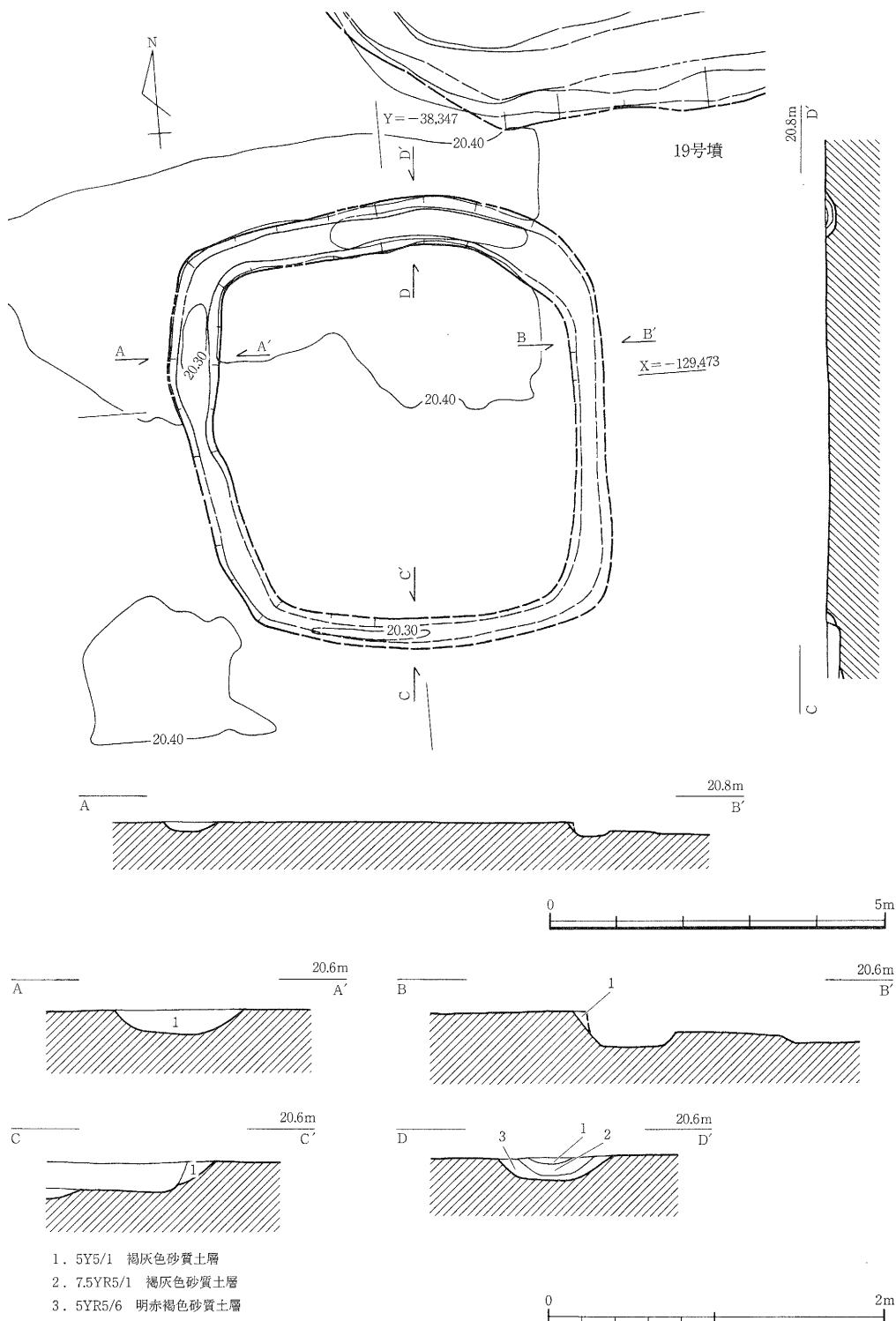


第70図 19号墳出土遺物

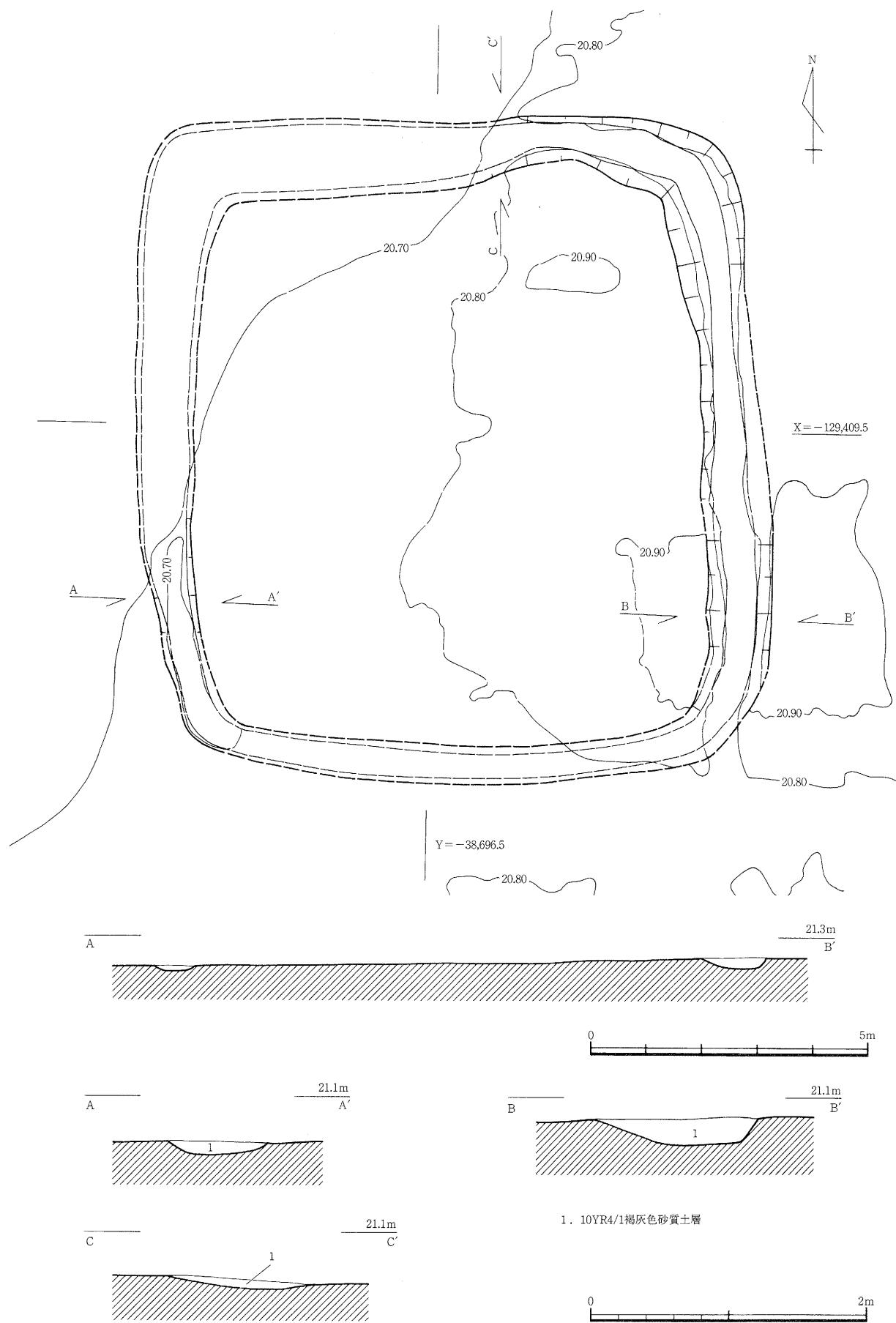
21. 20号墳（第71図、図版25-1・26-1～3）

B地区に存在し、X=-129,473.6、Y=-38,347付近を中心として検出した。古墳は、北側を19号墳、南側を古墳が全く存在しない空閑地とを分ける区画溝と推定される溝と切り合って存在する。古墳と溝との新旧関係は、土層断面観察の結果、溝が新しい。

墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約5.3m、南北長約5.5m、周溝を含めた全長は、東側を近世の攪乱、南側を区画溝によって削平され不明であるが、他の箇所の状況から



第71図 20号墳平面・断面図



第72図 21号墳平面・断面図

東西長6.1m、南北長6.7m前後と推定される。方位はN—3°—Eである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、西周溝幅約0.8m、深さ約0.15m、北周溝幅約0.7m、深さ約0.15mを測る。周溝の埋土は、1層で褐灰色砂質土が堆積している。

遺物は、弥生時代後期の土器が数点出土している。 (奥)

22. 21号墳 (第72図、図版26—4・27)

A、F地区に存在し、X=−129,409.7、Y=−38,396付近を中心に検出した。古墳は、東北側を22号墳、東南側を38号墳、南側は幅約8mの空閑地を挟み南東側を2号墳、南西側を1号墳、北側と西側は古墳が全く存在しない空閑地となっている。

古墳は、北西側から南西側にかけて奈良時代と推定される溝、南側を近代の構造物によって削平を受け、欠失している。残存している周溝の形状から、墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約9.2m、南北長10m前後、全長は、東西長約11.3m、南北長約12m前後と推定される。方位はN—1°—Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.2m、深さ約0.2m、西周溝は周溝南側の一部のみが残存し、幅約0.7m、深さ約0.1m、北周溝幅約1.0m、深さ約0.05mを測る。なお、南周溝は欠失している。周溝の埋土は、1層で褐灰色砂質土が堆積している。

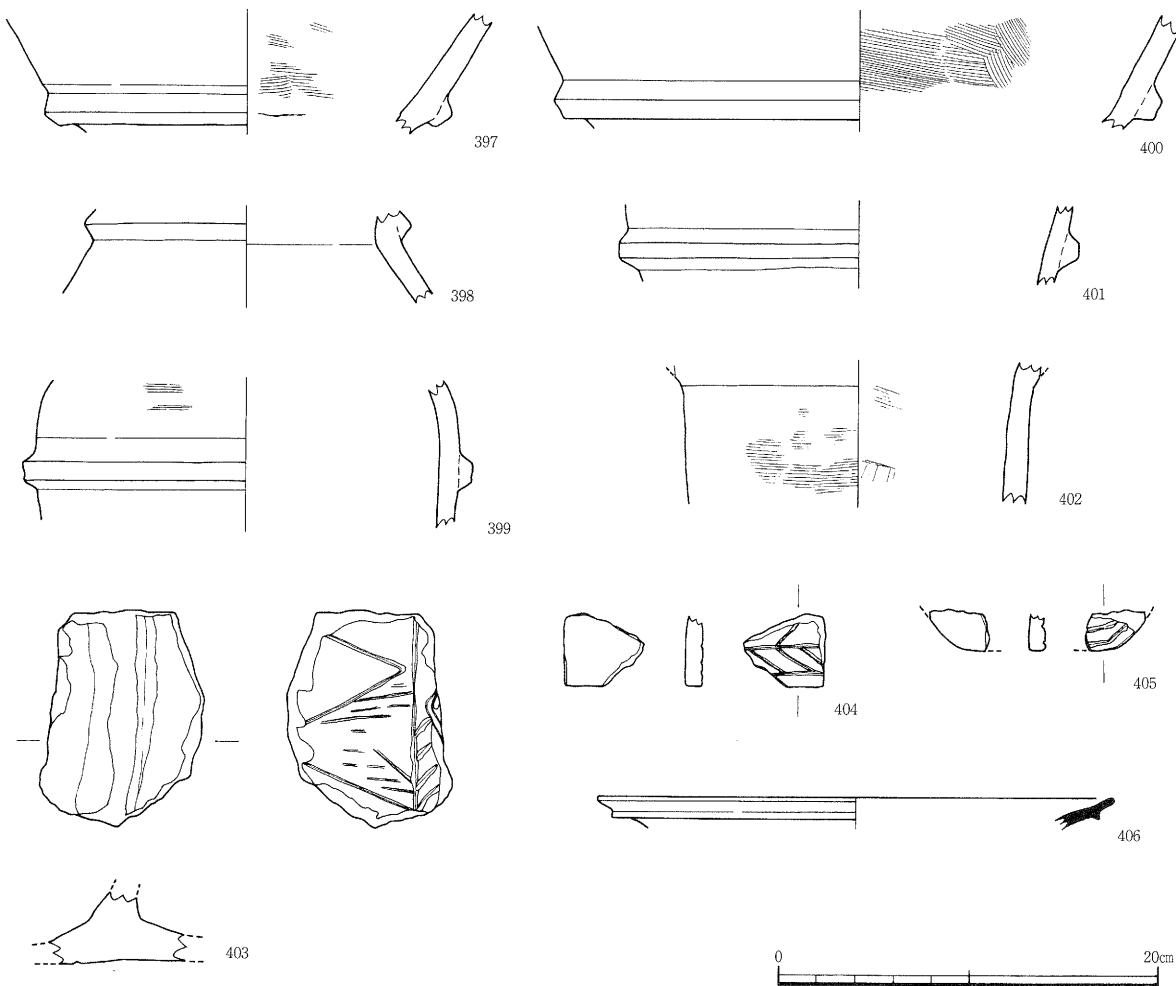
周溝内から出土した遺物は、埴輪は、少量であるが、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪として盾、不明製品が各1点出土している。須恵器は、甕の口縁部と推定される小片がある。 (奥)

出土遺物

土器 (第73図、図版53) 406は、須恵器甕の口縁端部と推定される小片である。口縁は外側に大きく開き、口縁端部は丸みをもつ。口縁端部下約1cm付近には、断面三角形の突帯を巡らす。口径27cm前後、残存高1.7cmを測る。 (奥)

埴輪 (第73図、図版69) 397から400は朝顔形円筒埴輪、401・402は円筒埴輪、403から405は形象埴輪である。397・400は、朝顔部の口縁部段である。ともに外面調整は摩滅により不明であるが、内面調整はヨコハケおよびナナメハケである。突帯の断面形状は台形である。ともに口縁部を欠き、口縁部径は不明であるが、397は30cm程度の小型、400は40cmの中型と推測される。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。398・399は肩部にあたる。398は、摩滅により外面・内面調整とも不明であるが、399は外面にわずかにヨコハケが観察できる。突帯の断面形状はM字形である。朝顔形円筒埴輪片は、色調・焼成が淡黄色・軟質系である。

401・402は、体部片である。401は、外面・内面調整とも摩滅により不明である。突帯の断面形状は、台形である。体部径は、20.6cmから22.6cmである。402は、外面調整にヨコハケ、内面調整にタテ・ナナメハケを施している。外面のヨコハケは、切り合いか認められる。また、外面にはわずかに赤彩が認められる。体部径は、17.6cmから18.4cmである。色調・焼成は、ともに淡黄色・軟質系である。これら2点は、厳密には円筒埴輪片とせざるを得ないが、胎土・色調・焼成や体部径などから、上記の朝顔形円筒埴輪の、それぞれ中型・小型と同一個体になる破片である。



第73図 21号墳出土遺物

可能性が高いと考えられる。

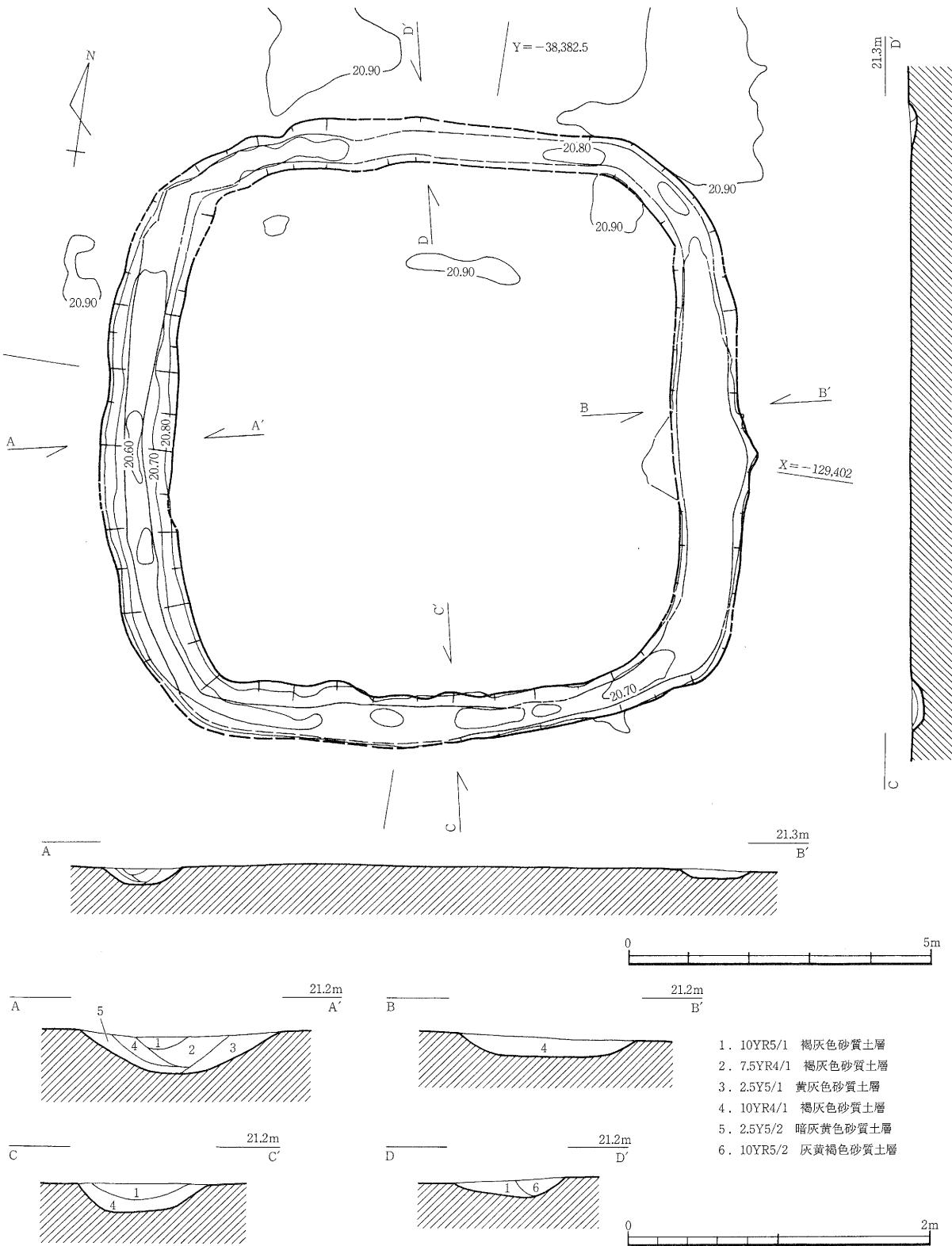
403は、盾形埴輪の一部である。外面に大小二個の三角形と直線文で構成された文様を、三角形の頂点を外側に向けて連続させる、5世紀代通有のタイプである。404・405は接合し、同一個体である。綾杉文を裾部に巡らせることから、草摺形埴輪などの武具を型取った形象埴輪であると考えられる。色調・焼成は、朝顔形円筒埴輪と異なり、褐色・軟質系である。
(小浜)

23. 22号墳（第74図、図版28—1～5）

A地区に存在し、X=−129,402、Y=−38,383付近を中心に検出した。古墳は、幅約4mの空閑地を挟み東北側を39号墳、南西側には21号墳が存在する。東北側から北西側は、古墳が全く存在しない空閑地となっている。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約8.2m、南北長約8.85m、全長は、東西長約10.7m、南北長約10.5mを測る。方位はN−11°−Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.15m、深さ約0.15m、西周溝幅約1.3m、深さ約0.3m、南周溝幅約0.9m、深さ約0.2m、北周溝幅約0.7m、深さ約0.1mを測る。周溝の埋土は、1層の箇所も存在するが、大半は凹レンズ状に堆積している。上層には褐灰色系の砂質土、下層には褐灰色系ないしは暗灰黄色系の砂質土が堆積している。



第74図 22号墳平面・断面図

22号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内からは、極少量の円筒埴輪、鎌と推定される鉄製品、また古墳内に存在する後世の遺構から須恵器杯蓋が出土している。 (奥)

出土遺物

土器 (第75図) 407は須恵器杯蓋の小片で、天井部のほとんどが欠損している。口縁端部から稜部にかけてやや直立気味に立ち上がり、端部は断面三角形を呈し、内面に緩やかな沈線が認

められる。稜部は断面三角形を呈する。天井部は大半が欠損しているが、残存部の形状から丸みを持つものと推定される。調整は、稜部のやや上を除き、天井部外面のほとんどは、回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ナデによって仕上げている。口径約12.0cm、残存高約3.55cmを測る。

(奥)

埴輪（第75図、図版69） 408・409は、ともに円筒埴輪である。408は、体部片であり、外面調整に一次タテハケ、二次ヨコハケを、内面調整にタテハケを施している。外面一次調整のハケ目工具と比べ、外面二次・内面調整の工具は、工具のハケ目が粗いのが特徴である。突帯の断面形状は、しっかりとした方形であるが、やや上端の貼り付けが雑である。上段に円形透かしの一部が残存する。体部径は、推定で21.4cmから22.6cmである。色調・焼成は、褐色・硬質系である。409は底部片である。外面・内面調整とも、摩滅により不明である。底部の下端から上方にかけてほぼ直立し、器厚は2cm前後と均一である。底部径は、推定で18.4cmである。色調・焼成は、褐色・軟質系である。

(小浜)

鉄製品（第76図） 406は鉄鎌で、把手先の部分を約0.7cm程度折り曲げ、全体にアールを描く。全長約19.2cm、把手最大幅約3.1cm、刀部最大幅約2.5cm、最大厚さ約0.4cmを測る。

(奥)

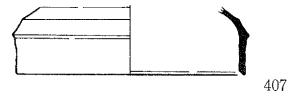
24. 23号墳（第77図、図版29・30）

C地区に存在し、X=-129,447、Y=-38,316.2付近を中心として検出した。古墳の墳丘自体は切り合わないが、西周溝と古墳西側に存在する16号墳の東周溝とが溝を共有している。南東側には24号墳、南側には東西幅約10mの古墳が存在しない空閑地がある。北側は15号墳と接し、東側から北東側にかけては、古墳が全く存在しない空閑地が広がる。

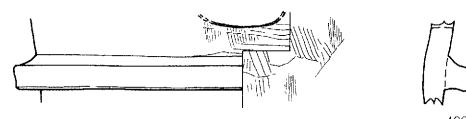
墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約7.7m、南北長約8.1m、全長は、東西長が16号墳の東周溝と西周溝を共有しているため約11.2mと長い。南北長約10.3mを測る。方位はN-15°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.1m、深さ約0.2m、南周溝幅約0.25m、深さ約0.2m、北周溝幅約1.0m、深さ約0.1mを測る。

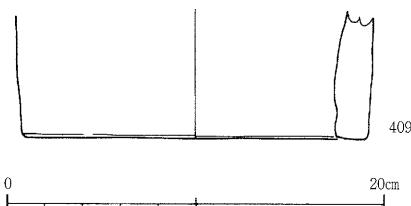
西周溝について
は、16号墳の東



407



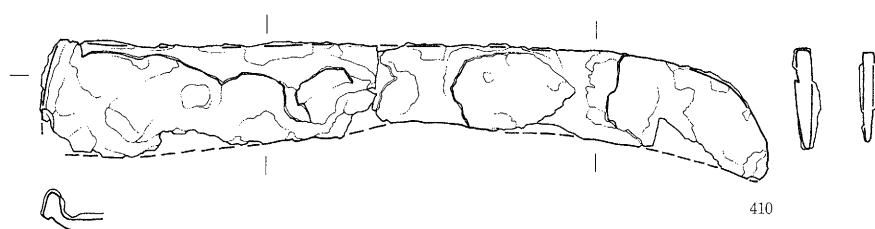
408



409

0 20cm

第75図 22号墳出土遺物1

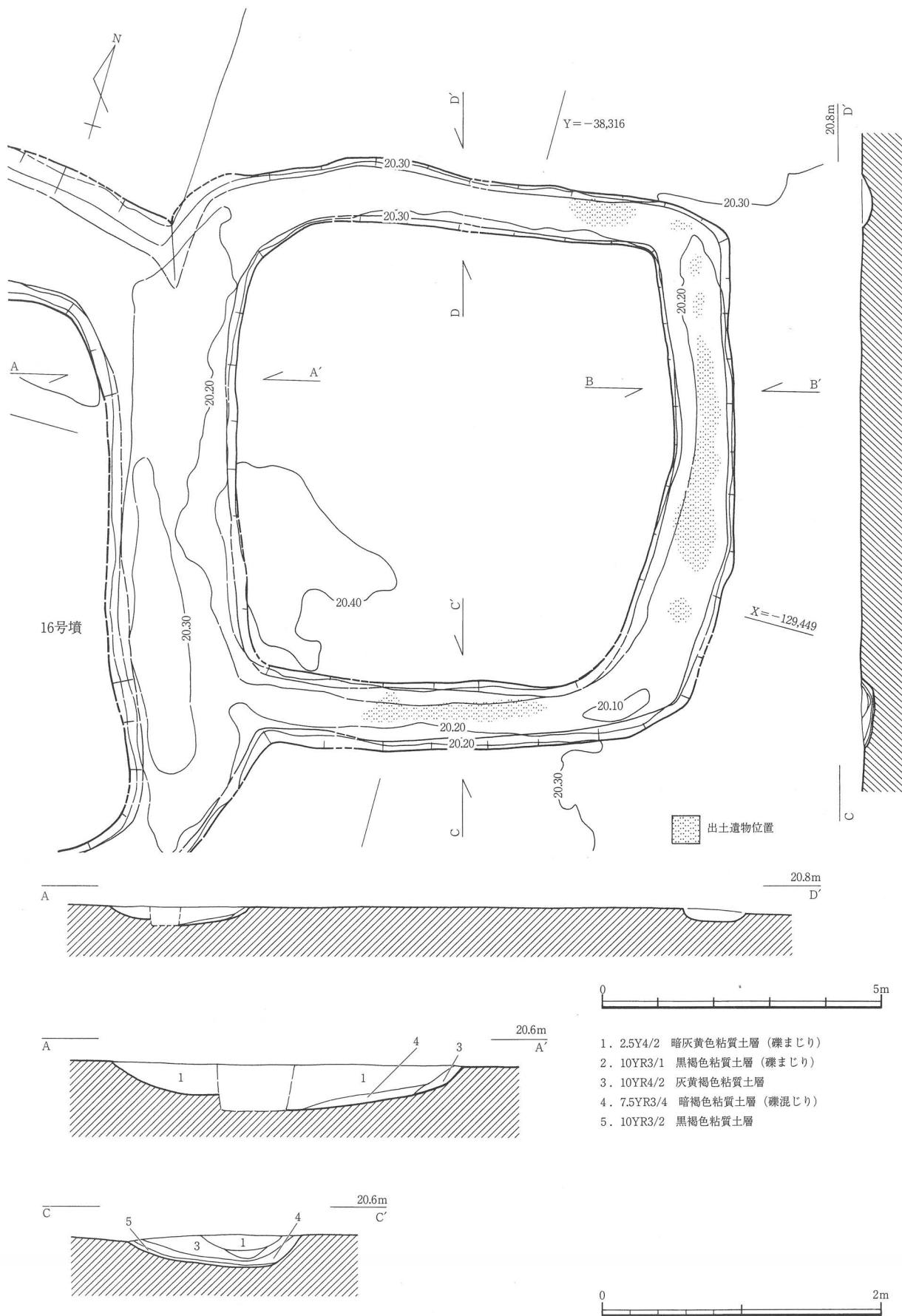


410



10cm

第76図 22号墳出土遺物2



第77図 23号墳平面・断面図

周溝と溝を共有していたため幅約1.6mと長く、深さ約0.3mを測る。周溝の埋土は、土層観察畦が設定出来なかった箇所もあるが、大半は凹レンズ状に堆積していたものと推定される。上層には暗灰黄色系の粘質砂土、下層には暗褐灰色系ないしは黒褐色系の粘質土が堆積している。

23号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、多量の埴輪片が北周溝東側から東周溝、南周溝にかけて、周溝中央部周辺に帶状に出土した。埴輪の種類は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で、形象埴輪の種類は家、家と推定される破片、不明製品の2点である。また、須恵器大甕の破片が東側周溝の中央部から出土している。当初は埋葬主体の棺として使用されたものとして考えていたが、出土位置などから供獻土器として配置していた可能性も捨てきれない。これらの破片に混在して須恵器無蓋高杯、杯身、壺などが出土している。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後半から奈良時代に比定される須恵器などが出でた。これら周溝内上層の遺物から7世紀前半まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

出土遺物

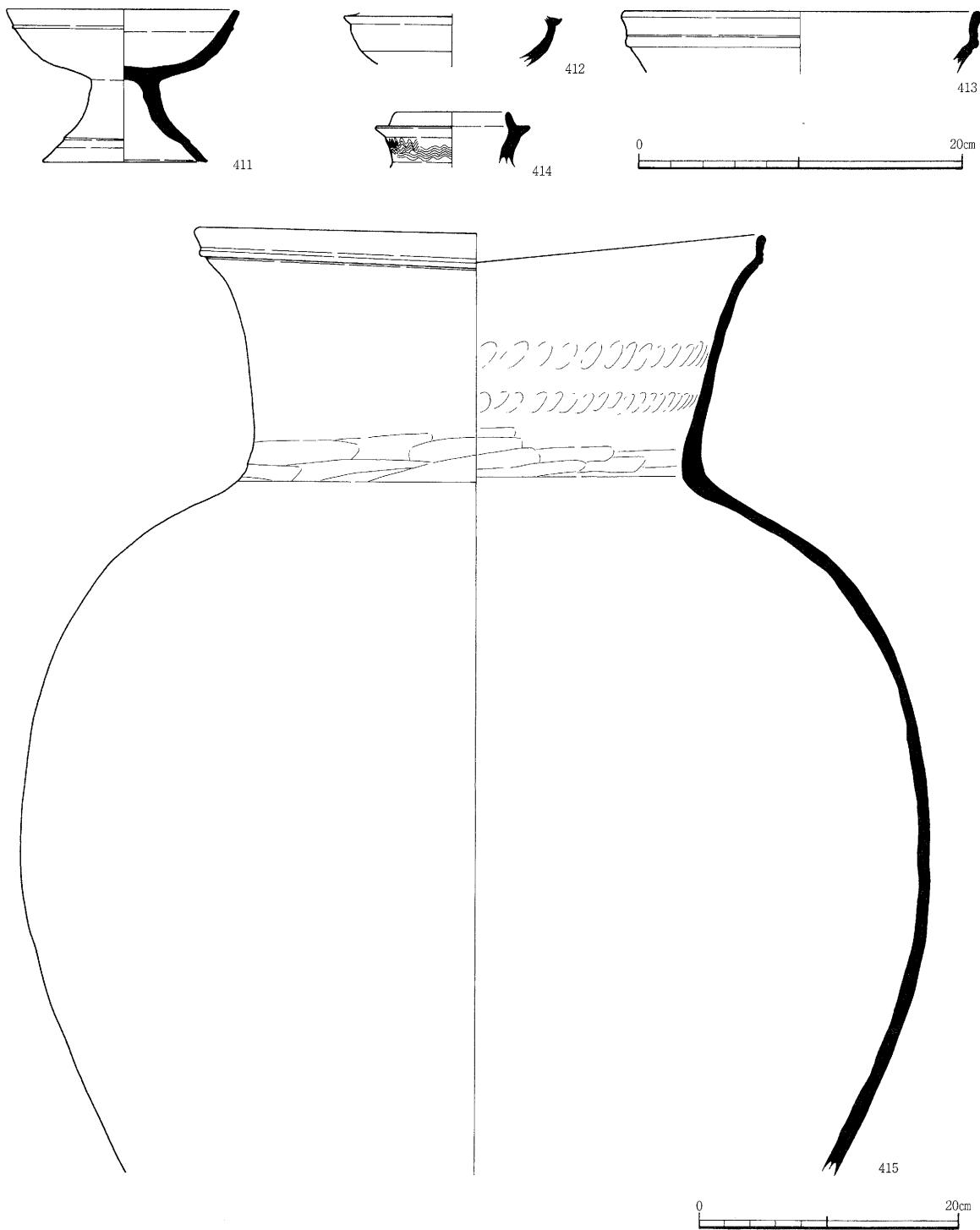
土器（第78図、図版48・53） 411は須恵器無蓋高杯である。杯部は底部から口縁部にかけて内弯し、端部は角張る。口縁部と体底部の界に断面三角形の突帯を有する。脚部は、脚底から内弯気味に斜めに延び、杯底部に至る。脚底部は断面三角形に近い。脚部外面の脚裾部と脚柱部を分ける地点には断面三角形に近い緩やかな突帯を有する。調整については、杯部内面と外面の口縁端部から約2.5cmまでは回転ナデ、そこから約3.9cmまでは回転ヘラケズリ、残りはナデによって仕上げている。脚部については、脚部と杯部の界から約2.5cmまでは、縦方向のナデ、残りは回転ナデによって仕上げている。口径約14.3cm、脚径約10.0cm、器高約9.7cmを測る。

412は須恵器杯身と推定される小片で、口縁部、底部が欠失している。受部は断面三角形を呈し外方向に張り出す。体部は内弯している。内面と外面の上部は回転ナデ、下部は手持ちヘラケズリの後ナデによって仕上げている。受部径13.4cm前後、残存高約3.2cmを測る。

413は須恵器壺の口縁部の小片である。口縁部はいわゆる二重口縁で、断面「く」の字形を呈する。屈曲部は丸みを持ち、そこから外反し直立気味に口縁端部に至る。端部は丸い。口径21.9cm前後、残存高約3.9cmを測る。

414は、須恵器蓋付壺の口縁部の小片である。受部は断面三角形を呈し、大きく外側に張り出す。受部から口縁端部にかけて斜めに直線的に延び、端部は丸い。頸部は受部から内弯気味に斜めに下る。頸部外面に波状文を施す。調整は内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径6.8cm前後、残存高約3.5cmを測る。

415は、須恵器大甕である。口縁部は、いわゆる二重口縁の形態を示し、「く」の字形に屈曲している、焼け歪みのため本来の形状は不明であるが、頸部との界は丸みを持つ段を有し、やや外反し直立気味に立ち上がる。口縁部から頸部と体部の界はやや外反し斜めに下る。体部は、底部が欠損しているため不明な点もあるが、最大径はやや上部に存在し、胴長である。頸部との界か



第78図 23号墳出土遺物1

ら最大径付近まで「なで」形で下る。調整は、口縁部は回転ナデ、頸部外面は上部は縦方向のナデ、下部は横方向のナデ、内面の中央付近は指抑え痕跡が認められる。そこから体部の界までは横方向のナデによって仕上げる。体部は、粘土を輪積みした後、ナデによって仕上げている。口径約43.3cm、頸部径約36.1cm、最大径約72.5cm、残存高約74.5cmを測る。なお、遺物復元中に体部上部において、焼成中に焼け歪みを起こし、破損した箇所が認められた。
(奥)

埴輪（第79～82図、図版70・71） 416から439は円筒埴輪、440から443・448・449は朝顔形円筒埴輪、444から446はヘラ記号を有する資料、447・450は形象埴輪である。

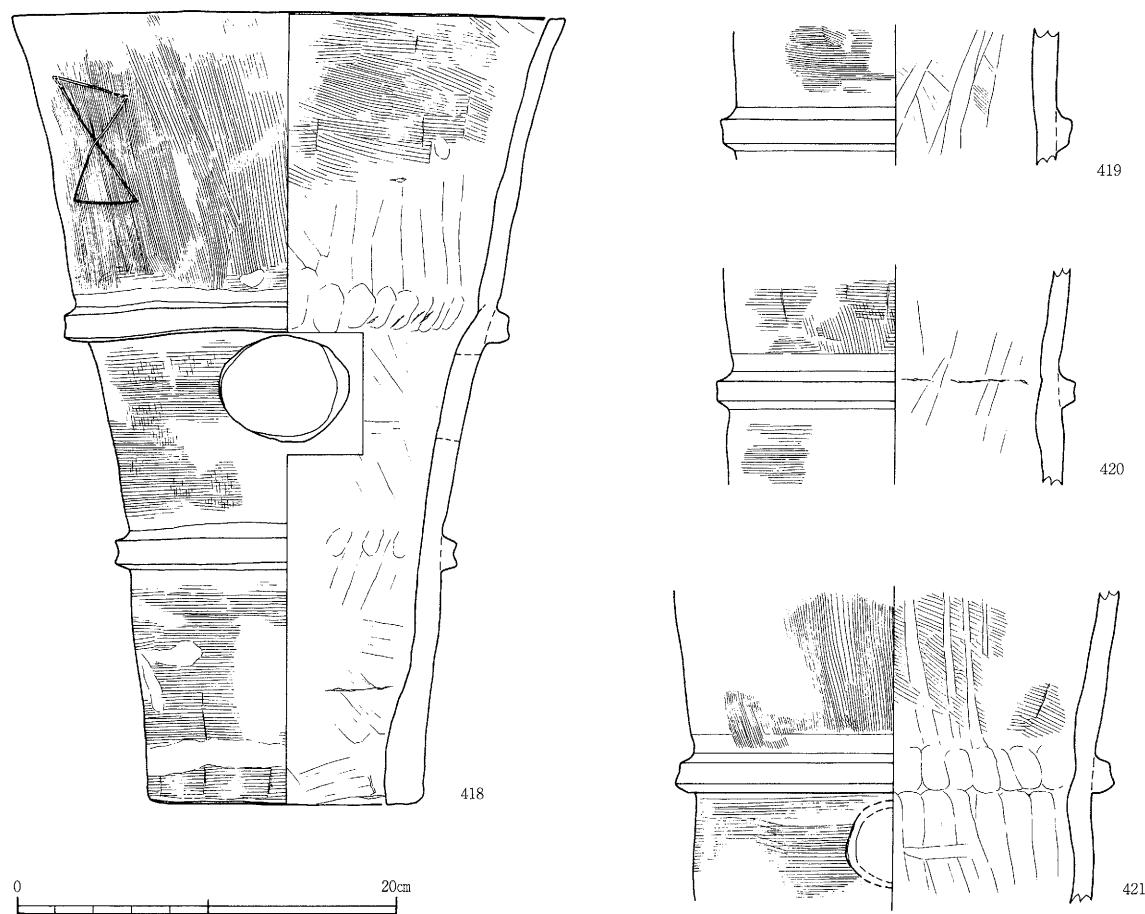
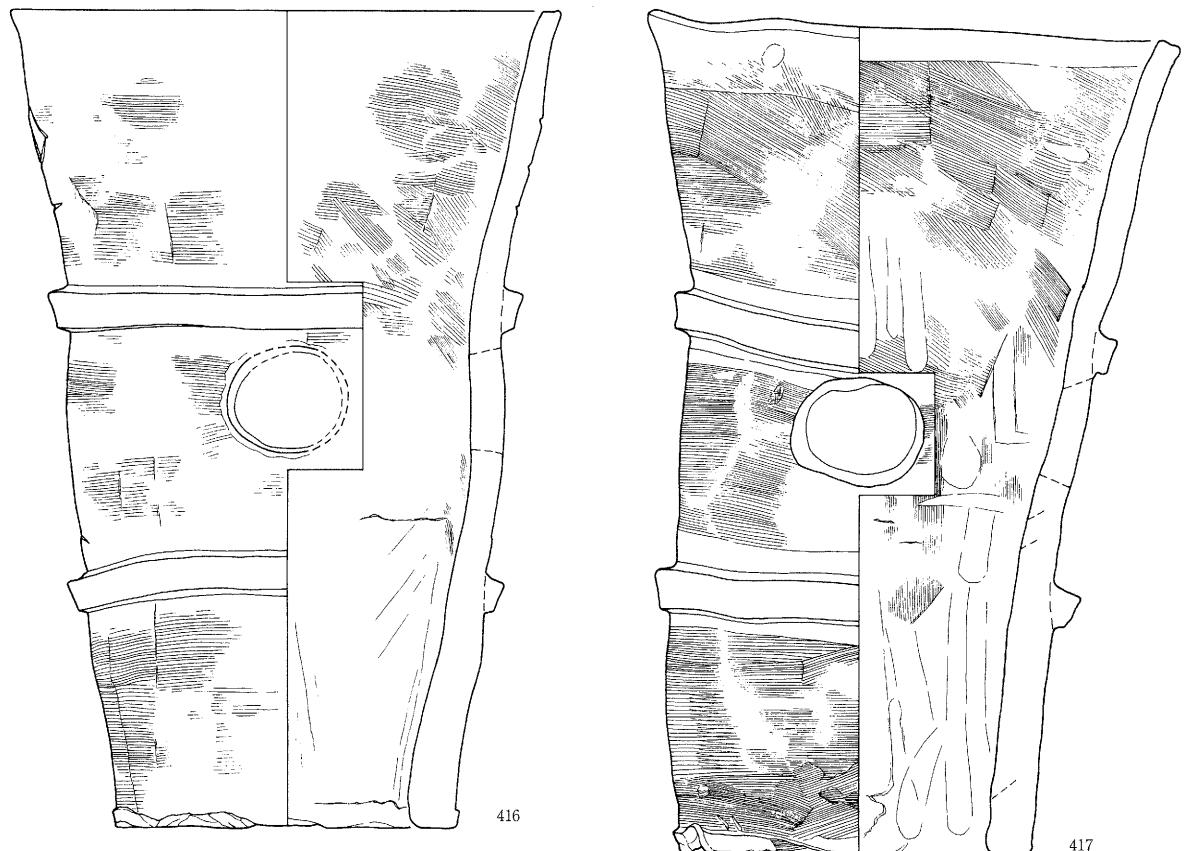
416から418は、完形復元資料である。いずれも2条3段構成で、底部から口縁部にかけて外側に開きながら立ち上がるプロポーションである。2段目に円形透かしを穿孔している。口縁部の外面調整は、3点とも様相が異なる。また、いずれも焼けひずみで変形が生じており、図面上では若干修正して図示している。

416は、器高42.5cm、底部高12.2cmから13.5cm、突帯間隔14.0cmから15.3cm、口縁部高16.0cm、底部径18.0cm、口縁部径29.2cmを測る。外面調整は、各段ともB種ヨコハケであり、内面調整は下半がユビナデ、上半がナナメハケである。417は、器高42.8cm、底部高13.2cmから13.9cm、突帯間隔13.6cmから14.8cm、口縁部高16.0cmから17.0cm、底部径18.8cm、口縁部径28.2cmを測る。外面調整は、ハケ目工具の静止痕を部分的にもつ雜なヨコハケであり、口縁部では急傾斜でらせん状に巡らせている。内面調整は、416と同様、下半がユビナデ、上半がナナメハケである。418は、器高41.9cm、底部高13.3cm、突帯間隔11.9cmから12.4cm、口縁部高16.1cmから16.6cm、底部径14.6cm、口縁部径25.8cmを測る。外面調整は、2段目まではハケ目工具の静止痕を部分的にもつ丁寧なヨコハケであり、口縁部は一次調整のタテハケのみである。内面調整は、口縁部下半までがユビナデであり、口縁部上半はナナメハケである。また、2条目突帯直上内面では、小工程の乾燥単位と思われる接合痕が認められ、ユビオサエによる整形痕も見られる。口縁端部は、いずれも幅2cm近くを広くヨコナデ整形しており、外面・内面調整はその際に消されている。417の口縁端部は、外面が丸みを帯び、わずかに肥厚する。

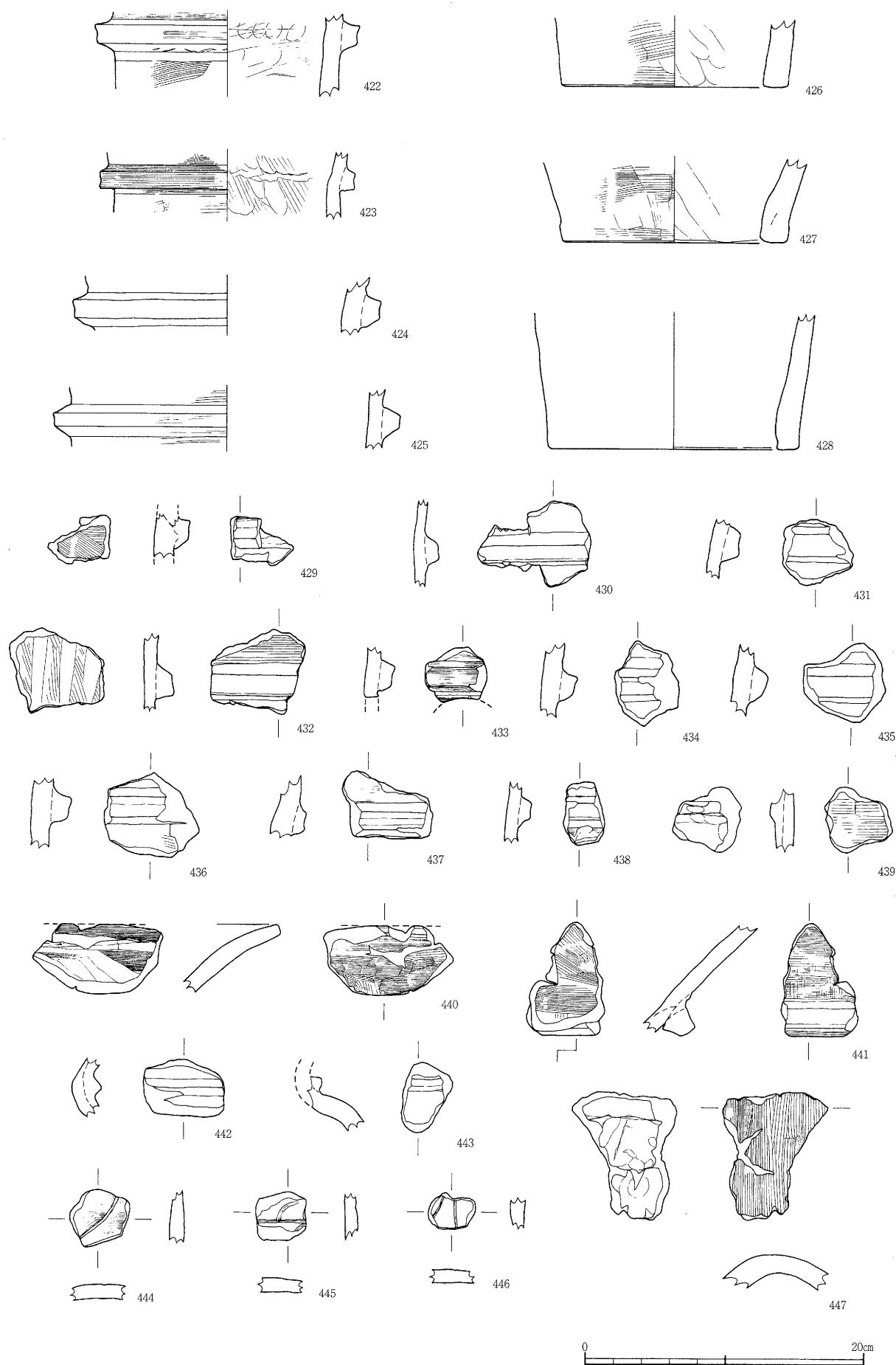
418は、口縁部段に三角形を上下に対称的に組み合わせたヘラ記号を有している。円形透かしが、3点とも突帯間の上半に偏って穿孔されており、特徴的である。突帯の断面形状は、416・417はかなり幅広の扁平な方形であり、418はM字状を呈している。色調・焼成は、416が褐色・軟質系であり、417・418は褐色・硬質系である。

419から425、429から439は、体部片である。摩滅により調整不明の資料も多いが、外面調整はヨコハケあるいはB種ヨコハケであり、内面調整はナナメハケのうち縦方向のユビナデを施す例が多い。420は、突帯裏面において粘土紐の接合痕が認められ、ここを境に傾斜が変換している。これは、418で認められたのと同様に、小工程の乾燥単位ではないかと考えられる。421は、下段にヨコハケで円形透かしがあり、上段にタテハケを施していることから、上述の418と同じタイプのものであろう。体部径は、16.0cmから18.5cm前後のものと20.5cmから22.0cm前後のものに分けられるが、大きく外開するプロポーションの23号墳の円筒埴輪では、どちらも小型円筒埴輪の範疇に属するものと考えられる。419から425では、突帯の断面形状はしっかりと突出したM字状を呈する。色調・焼成は、419から421が須恵質であり、422から424が褐色・軟質系である。429から439で図示した突帯小片資料では、突帯の突出度や幅、色調、焼成等が異なるさまざまなタイプが上記以外に出土していることを示している。とくに、429は突帯剥離部のポジ・ネガ面が凹凸でかみ合うようになっており、特徴ある突帯の貼り付け方法である。

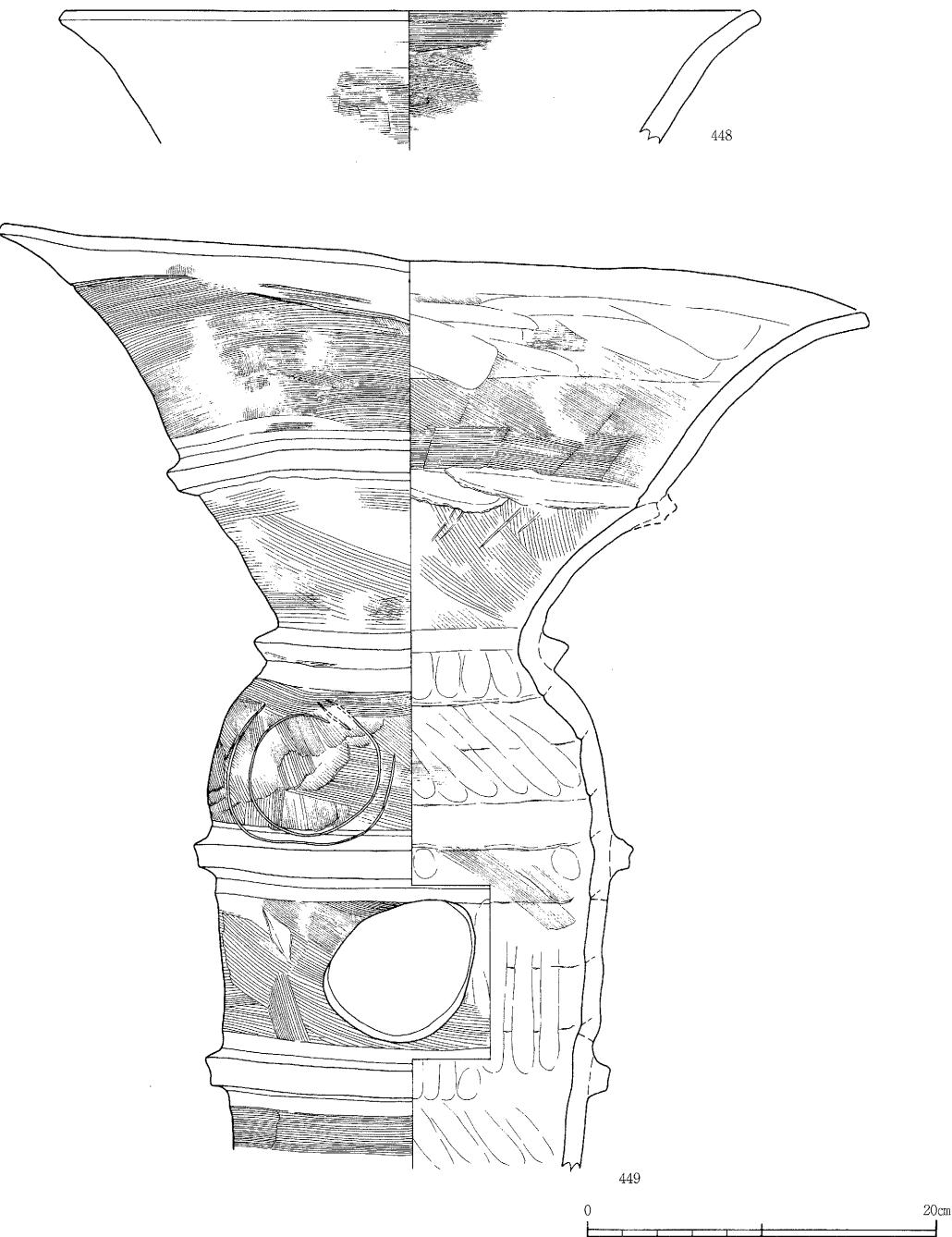
426から428は、底部片である。426・427では、外面調整はB種ヨコハケ、内面調整は斜め方向



第79図 23号墳出土遺物 2



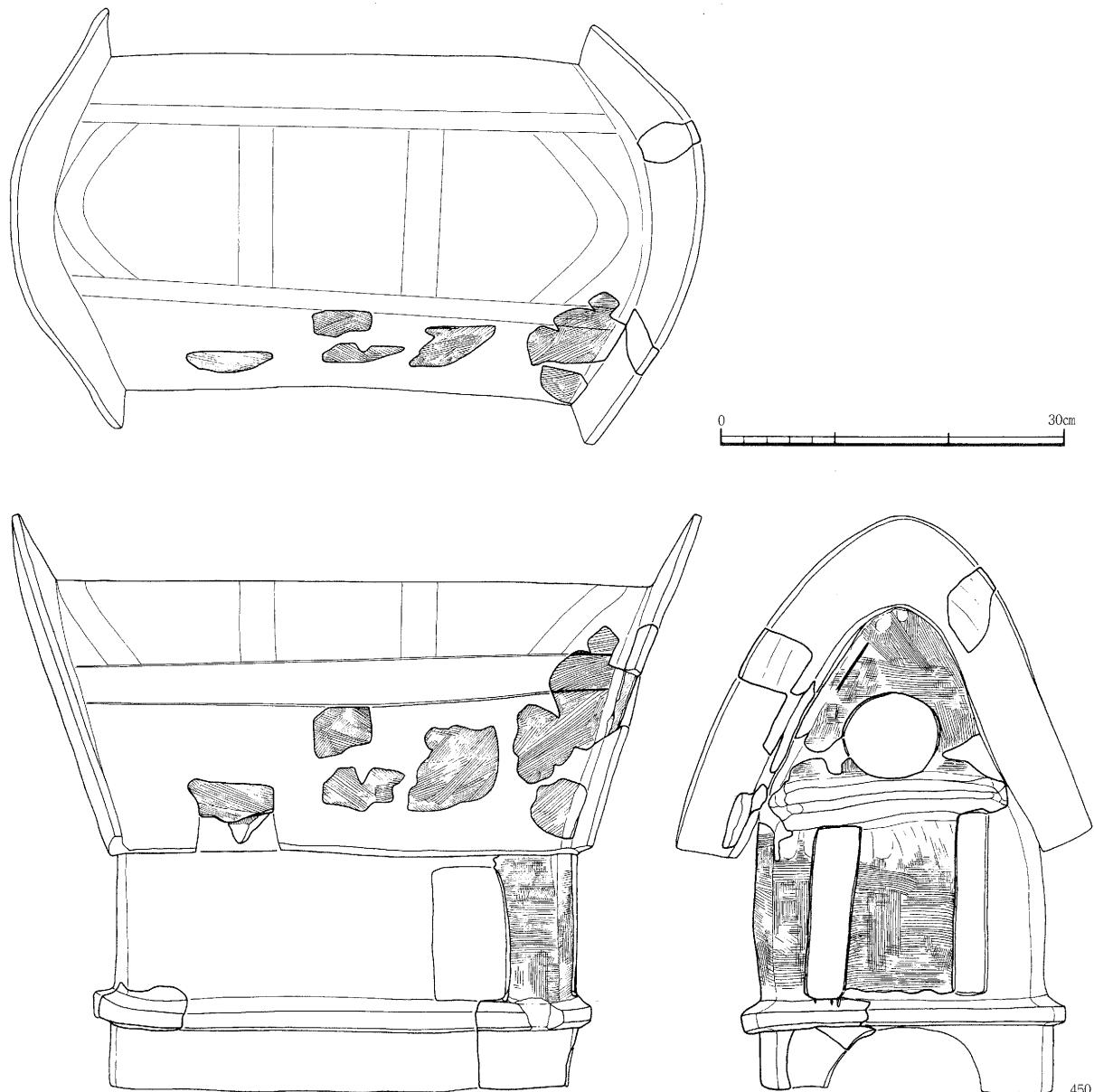
第80図 23号墳出土遺物 3



第81図 23号墳出土遺物 4

のユビナデを施している。どちらもB種ヨコハケを底部下端から丁寧に行っており、少なくとも2周以上をらせん状に巡らせている。底部の立ち上がりは、ほぼ直立するか、わずかに外反する。底部径は、16.0cmから18.0cmである。色調・焼成は、426が黄褐色・硬質系であり、427・428は褐色・軟質系である。須恵質の体部に対応する底部は出土していない。

449は朝顔形円筒埴輪で、体部上半から口縁部にかけての復元資料である。朝顔部分は、かなり焼けひずみが生じている。口縁部径49.6cm、頸部突帯径18.0cm、体部径21.5cm前後、残存高51.7cmである。体部の突帯間隔は12.4cmである。外面調整は、静止痕の不明瞭なヨコハケを主体としている。しかし、かなり急傾斜のらせん状にヨコハケを巡らせたり、ヨコハケ後に部分的にタテ・



第82図 23号墳出土遺物 5

ナナメハケを施したりしており、かなり雑な調整である。内面調整は、体部が縦方向のユビナデ、肩部が斜め方向のユビナデ、朝顔部分がナナメ・ヨコハケである。内面調整のヨコハケは、外面調整のヨコハケと異なり、静止痕をもつ比較的丁寧な調整である。また、内面は全面にわたって粘土紐の接合痕をナデ等で消しきれておらず、顯著にみられる。粘土紐の単位は、約3.0cmから3.5cmである。円形透かしが、肩部直下の段に対向して穿孔されている。また、その円形透かしは、不整円形で、突帶間隔いっぱいにわたっている。長径約9.3cm、短径約7.5cmである。肩部には、二重の円を描いたヘラ記号が認められる。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

440・441・448は、口縁部片であり、448は径39.4cmを測る。442・443は、頸部付近の資料である。色調・焼成は、449と異なり、褐色・軟質系である。

444から446は、いずれも小片であり、曲線あるいは直線の一部が残るのみである。円筒埴輪片で、ヘラ記号の一部であると考えているが、445・446は綾杉文様の一部分とも見て取れ、形象埴輪

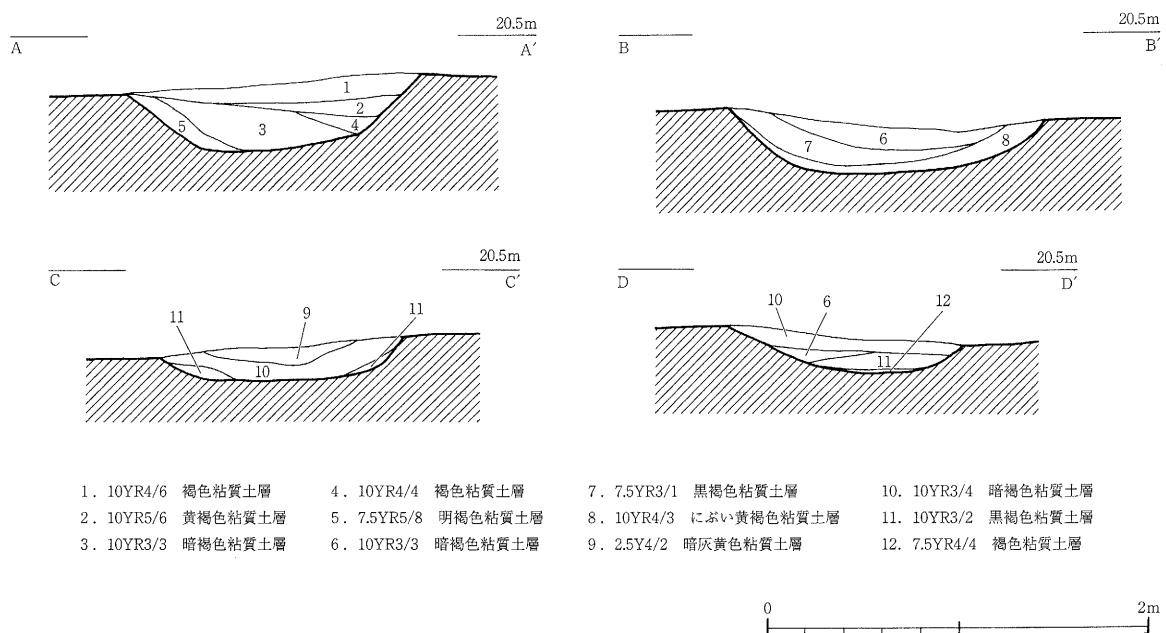
の残片である可能性も残る。

447は、復元径10cm強の円筒形になるもので、外面には深いタテハケ、内面は雑なユビナデを施す。これらの調整や形態のほか、粘土紐の一単位も大きく、円筒埴輪とは異なることから、形象埴輪であると思われる。下方に向かって径がややすぼまる感があり、動物埴輪の脚部にあたる可能性などが考えられる。450は、家形埴輪である。切妻造である。基部の一部、片方の妻側壁体部から平側壁体部にかけての部分、屋根のごく一部が残存しているのみである。掲載図面は、概要報告作成時に類似資料から復元を試みたものであり、復元根拠が明確なものではない。ただし残存部分から、屋根の棟までの高さは約44.8cm、切妻屋根の先端までの高さは約50.8cm、裾廻り突帶までの高さ約6.0cmから7.0cmである。妻側の裾には透かしの一部が残存している。また、妻側には梁を表す突帶が貼り付けられており、その下には幅3.0cmから4.0cm、長さ15.0cmから16.0cmほどの長方形の開口部が二箇所、ほぼ左右対称の位置に設けられている。おそらく入り口部分にあたると考えられる。さらに、平側にも少なくとも一箇所に開口部が設けられている。壁体部はヨコハケ・タテハケで調整しており、屋根部はナナメハケで調整している。また、屋根部上半には棟と平行する2条の平行線を刻んでいる。色調・焼成は、褐色・軟質系である。(小浜)

25. 24号墳（第83・84図、図版31）

C地区に存在し、X = -129,458.5、Y = -38,304.2付近を中心として検出した。古墳の北側から東南側にかけては、古墳が全く存在しない空閑地が広がる。北西側から南西側は、幅4mから10mを測る空閑地を挟み、北西側に23号墳、西北側に16号墳、西側には17号墳、南西側に25号墳が取り囲んでいる。また、南東側には、幅約5mの空閑地を挟み26号墳が存在する。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約7.0m、南北長約7.9m、全長は、東西長約10.1m、南北長約10.4mを測る。方位はN-26°-Wである。



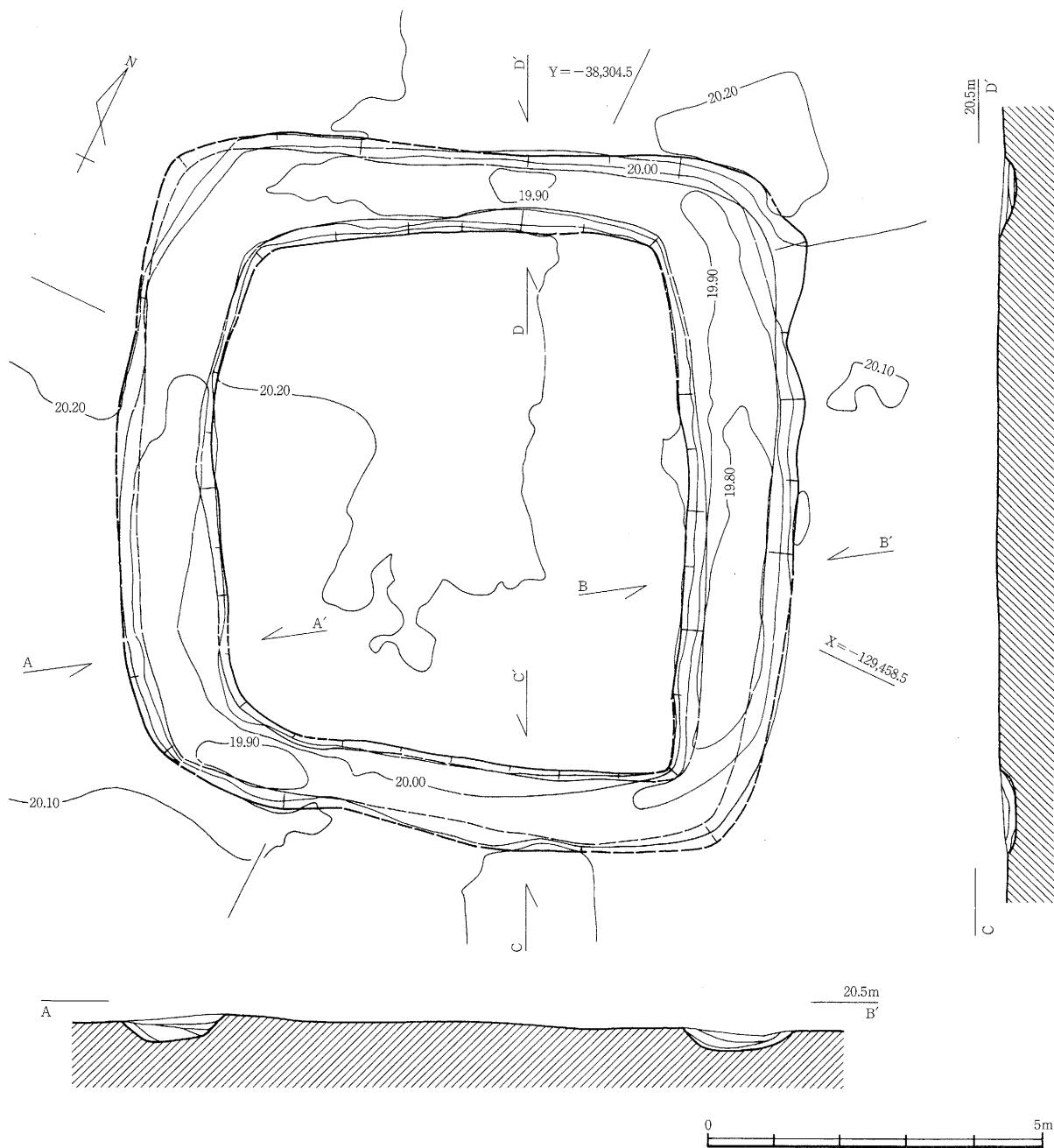
第83図 24号墳周溝土層断面図

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.7m、深さ約0.3m、西周溝幅約1.6m、深さ約0.4m、南周溝幅約1.3m、深さ約0.2m、北周溝幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。周溝の埋土は、地点によって埋土の質、色調が異なっているが、大半は凹レンズ状に堆積している。

24号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、埴輪片が出土した。埴輪の種類は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形状不明の形象埴輪である。また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀後半から7世紀初頭に比定される須恵器などが出土した。これら周溝内上層の遺物から7世紀前半まで周溝が存在していた可能性がある。
(奥)

出土遺物

埴輪（第85・86図、図版72・73） 451から470は円筒埴輪、471・472は朝顔形円筒埴輪、473



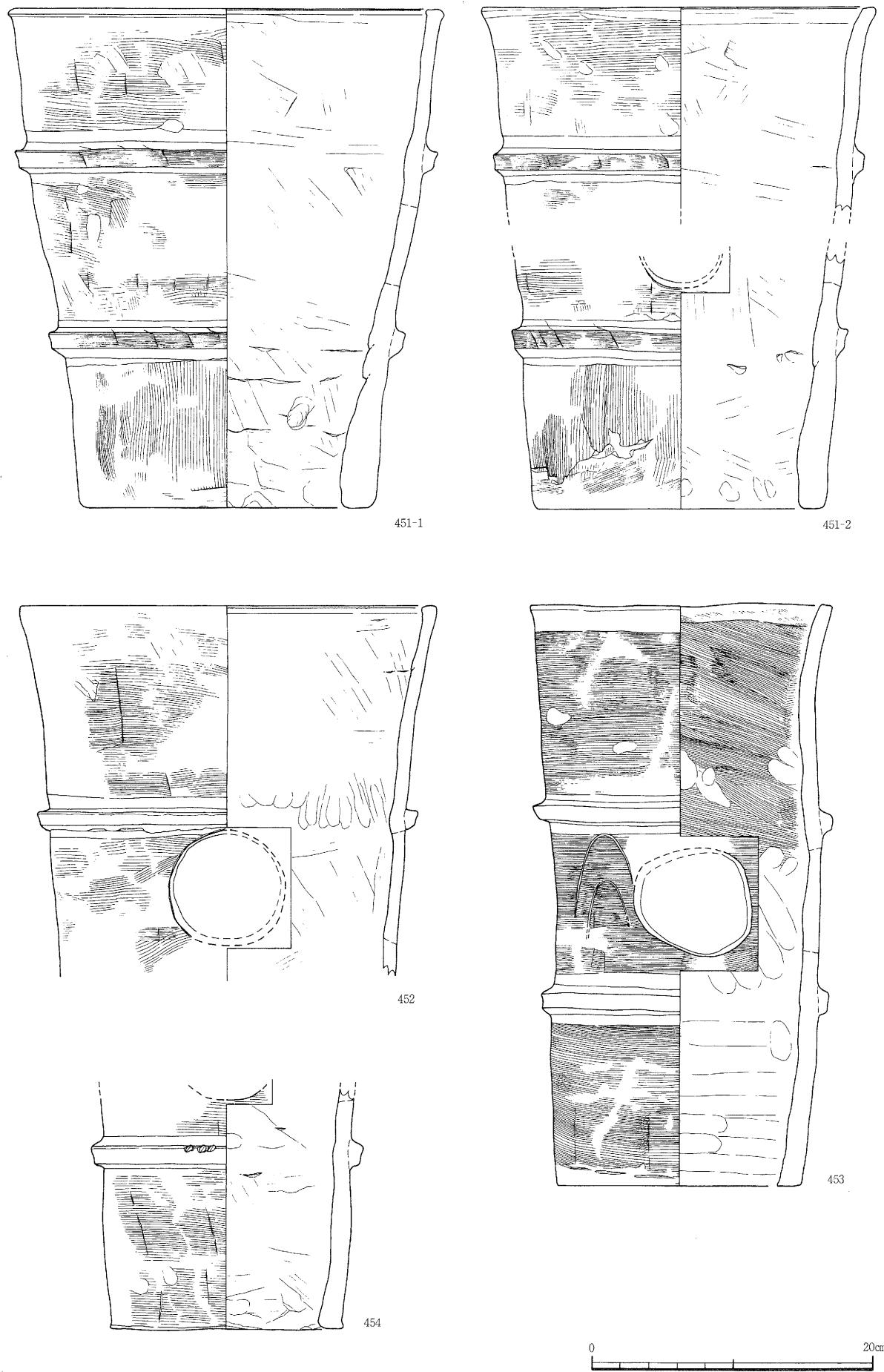
第84図 24号墳平面・断面図

は形象埴輪である。

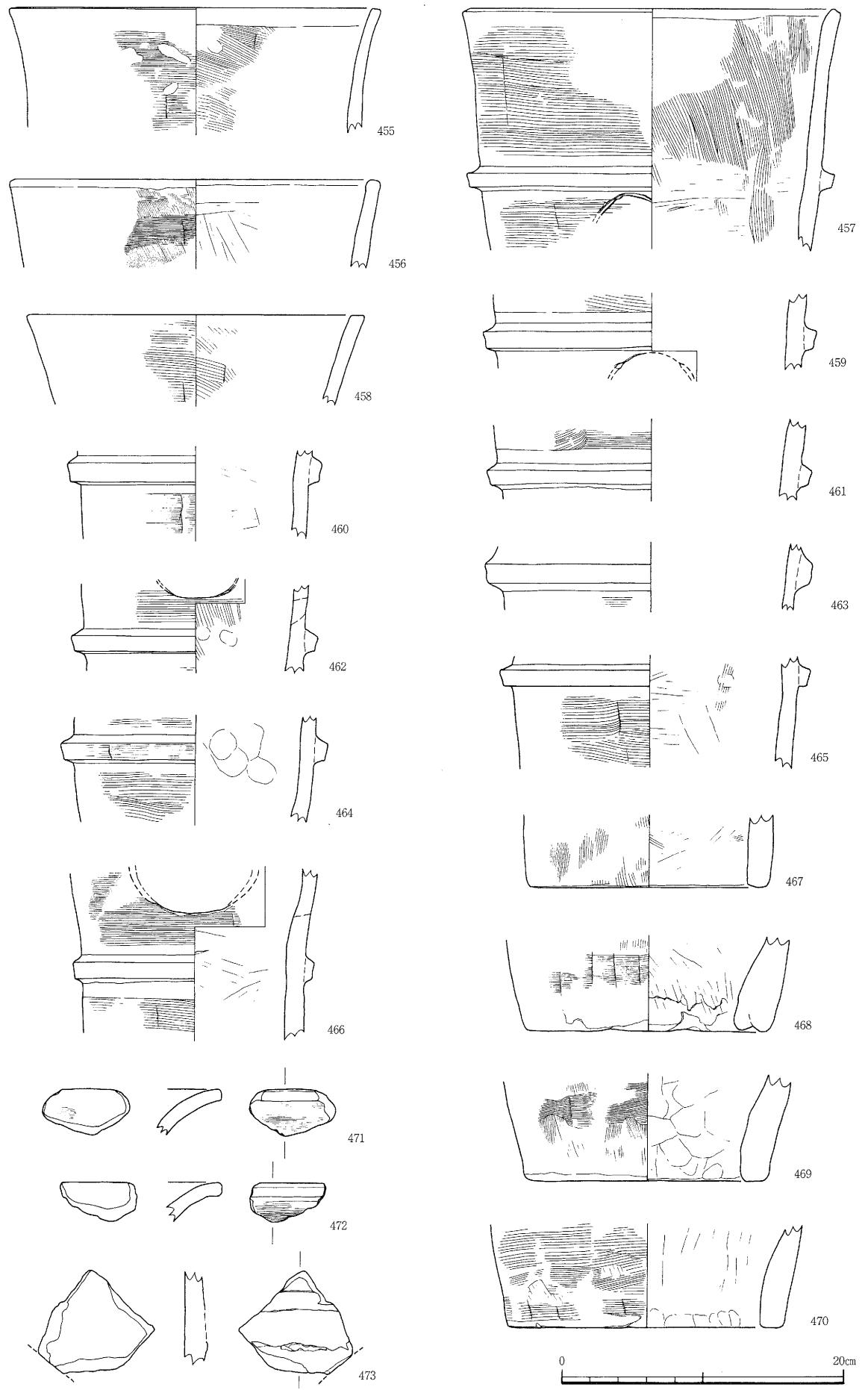
451および453は、底部から口縁部まで残存する資料である。とくに451は、観察する箇所によって底部の器厚やその立ち上がり、口縁部の形態が一見別個体のように捉えられがちな資料であり、同一個体内で生じる形態差を示すため、あえて別面から図化した二つの図を掲載した。ともに2条3段構成であり、2段目に円形透かしを対面に穿孔している。器高は、451が35.9cm、453が41.5cm前後であり、器高から2種の規格が存在していることが窺える。底部高、突帯間隔、口縁部高の各段ごとにみると、451は11.9cm、12.9cm、11.1cm、453は13.1cm、13.3cm、15.1cm前後であることから、突帯貼り付け時に生じる誤差を考慮しても、口縁部高に大きな差があるといえる。底部、体部、口縁部各段の径は、451が20.0cm、23.8cmから27.4cm、30.8cm、453が17.2cm、18.7cmから19.1cm、21.4cmであり、前者はかなり開き気味に立ち上がるプロポーションなのに対し、後者はほぼ直立するプロポーションである。また、両者の差は外面・内面調整にも現れている。外面調整は、ハケ目工具の静止痕を器面に対して垂直にもつB種ヨコハケが基本であるが、451の底部外面は一次調整タテハケのみとなっている。内面調整は、451が板状工具による斜め方向のナデ、453がユビナデ後2段目以高にヨコ・ナナメハケを施している。453は1段目の底部内面は粘土紐痕跡を消さない雑な調整である。突帯の断面形状はともにやや扁平な台形状を呈するが、453は雑な貼り付けで波打っている。また、451は突帯上面にも静止痕をもつヨコハケで調整している。453は、2条の円弧を上下に並べたヘラ記号を2段目透かし横に有している。色調・焼成は、451が褐色・軟質系なのに対し、453は須恵質である。

452・455から458は、口縁部片および口縁部を含む資料である。外面調整は、すべてヨコハケあるいは静止痕をもつB種ヨコハケである。内面調整は、452・456が板状工具によるナデ、455・457・458がタテ・ナナメハケである。口縁端部の形態は、452・456がほぼ直立させているのに対し、455・457・458はわずかに外反させており、内面調整でみられた差と対応している。口縁部径は、452が29.6cm、455が26.2cm、456が26.2cm、457が26.8cm、458が23.8cmであるが、458は残存状況が悪い小片資料のため、若干の誤差が生じている可能性が高い。おそらく、451と同様30cm前後のものと、26.5cm前後のものの2つに分けることができよう。口縁部高がわかる資料は少ないが、452が15.4cm、457が12.3cmであり、先に見たように2種が存在する。457は、下段に円弧状のヘラ記号の一部が残存している。色調・調整は、452・456・458が褐色・軟質系、455・456が須恵質である。

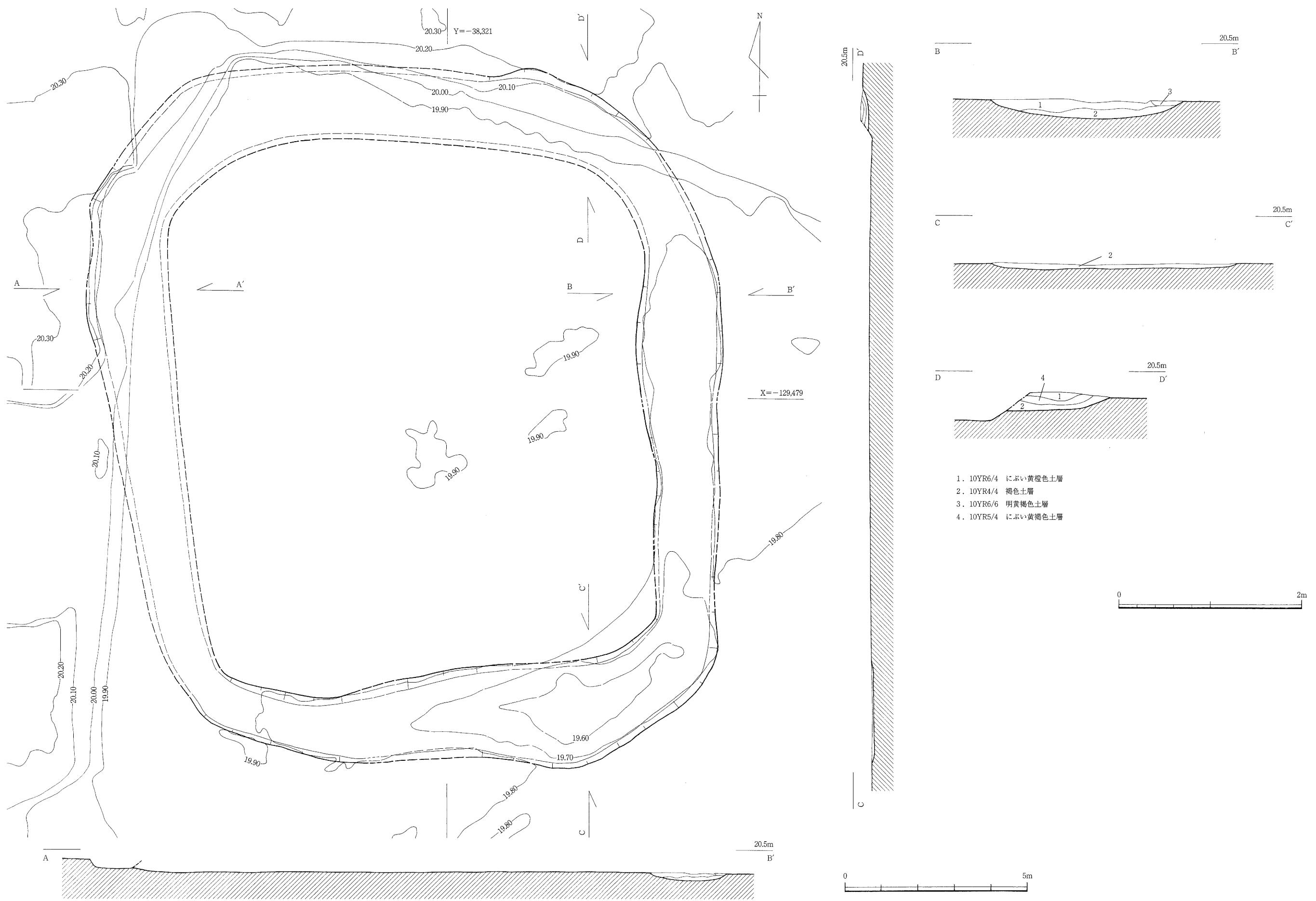
459から466は、体部片である。外面調整は、すべてヨコハケあるいは静止痕をもつB種ヨコハケである。内面調整は、摩滅で不明瞭なものもあるが、工具ナデ・ユビナデによるものが主体を占めている。462のみタテハケである。体部径をみてみると、460・462・464・466が15.8から17.3cmと小さいのに対し、461・463・465は20.0cmから22.0cmとやや大きく、2つに分けることができる。また、小さい一群は、後述する色調、焼成からすべて須恵質である。突帯の断面形状は、すべて台形状を呈している。透かしは、459や先に見た452のように突帯直下に透かし上端がくる例



第85図 24号墳出土遺物 1



第86図 24号墳出土遺物 2



第87図 25号墳平面・断面図

や、466や先に見た453のように突帯間にかなりバランス悪く大きく穿孔している例が認められる。色調・焼成は、459・466が淡黄色・軟質系であるのに対し、その他の体部片はすべて須恵質である。

454・467から470は底部片および底部を含む資料である。外面調整は、467が一次調整タテハケのみである以外は、二次調整にB種ヨコハケを施している。454はB種ヨコハケを少なくとも2周以上巡らせており、工具幅は5.9cm以上あると考えられる。静止痕間隔は、468が1.5cmから2.5cm、470が2.0cmと細かい間隔であるが、それに比べると454は3.5cmから5.0cmとやや広い間隔である。内面調整は、ハケ目状に擦痕を残すものもあるが、すべて工具によるナデが主体を占めている。底部径は、454が16.6cm、467が17.0cm、468が17.0cm、469が17.4cm、470が19.6cmであり、470を除いてほぼ17.0cm前後のものが多い。底部の形態は、ほぼ直立する454・467と、外開き気味に立ち上がる468から470の2種がある。また後者は、加重によるつぶれのためか器厚が2.0cmから3.0cmとかなり厚くなっているのが特徴である。底部高がわかる資料は454のみで、12.5cmを測る。色調・焼成は、すべて褐色・軟質系である。

471・472は、朝顔形円筒埴輪の口縁部である。ともに小片であり、外面・内面にヨコハケを施しているが、詳細は不明である。色調・焼成は、471が褐色・軟質系であり、472が淡黄色・軟質系であることから、別個体であると考えられる。

473は、板状を呈し、1条の沈線とそれに平行する幅2cm程度の突帯状のものが付いていたと思われる剥離痕が認められる。また、透かし様のものがあった痕跡も残存している。器形不明の形象埴輪であろう。色調・焼成は褐色・軟質系である。 (小浜)

26. 25号墳（第87図、図版32）

B、C地区に存在し、X=-129,479、Y=-38,321付近を中心として検出した。古墳の北側には17号墳が存在し、この17号墳を除く周囲には、古墳が全く存在しない空閑地が広がる。

古墳は、近代の大規模な撲乱坑によって、削平を受け、古墳の北東側から南西側の大半が欠失している。残存していた箇所の形状から、墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長12.7m、南北長14.5m前後と推定される。全長は、東西長約17.4m、南北長18.9m前後を測り、今回の調査で検出した古墳の中では、最も規模が大きい。方位はN-5°-Wである。

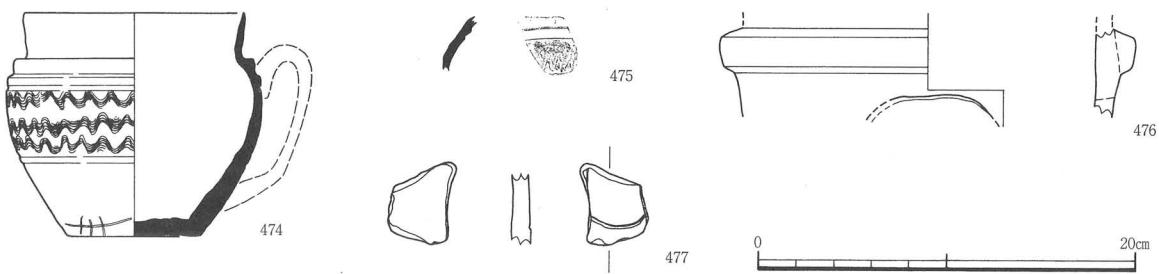
周溝は、前述したように削平を受け欠失した箇所が多く、規模を確認したのは、東周溝一部のみであった。周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約2.1m、深さ約0.2m、周溝の埋土は、確認した地点は少ないが、凹レンズ状に堆積している。

25号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、須恵器把手付鉢、壺口縁片、微量の円筒埴輪片が出土した。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器が出土している。(奥)

出土遺物

土器（第88図、図版48・53） 474は、須恵器把手付鉢である。口縁部は体部の界からやや外



第88図 25号墳出土遺物

方に直線的に延び、端部は断面三角形に近い。口縁部と体部の界から下約1.3cmの間には、2段からなる突帯が認められる。突帯は上段が断面三角形、下段が断面四角形に近い形を呈する。体部の最大径は、体部上方に存在し、そこからやや内弯氣味に内側に斜め方向に下る。底部は中央部が約1mm程度上がる。外面の体部下半を2条の沈線によって区切り、突帯下の間を区切り、その内に3条の波状文を施す。外面の底部よりやや上部にはヘラ記号が認められる。内面底部付近から外面体部下半までを回転ナデ、底部をナデによって仕上げている。把手は、欠損している。口径11.6cmと推定され、器高11.8cmを測る。

(奥)

埴輪（第88図、図版73） 476・477は、ともに円筒埴輪である。476は、体部片である。外面・内面調整とも、摩滅により不明である。1段目に円形透かしの一部が残存している。突帯の断面形状は、やや幅広の扁平な台形を呈する。体部径は19.6cmである。色調・焼成は、褐色・軟質系である。

477は、ヘラ記号を有する破片であり、おそらく円筒埴輪の体部片であろう。ヘラ記号は、横方向の円弧状線と縦方向の直線が認められる。色調・焼成は、褐色・軟質系である。 (小浜)

27. 26号墳（第89図、図版33-1）

古墳は、C地区で検出した。古墳の南側の大半は、南側の調査区外、また、北周溝の大半が近世に削平を受け欠失し、検出したのは、古墳の北東辺部と北西辺部の一部のみであった。

古墳は、残存部の形状からX=-129,472、Y=-38,290付近を中心とするものと推定される。方位はN-42°-Wである。

古墳は、南側については調査区外であるため不明であるが、北西側長さ約10m離れて24号墳が存在する。それ以外は、周囲に古墳が全く存在しない空閑地が広がる。

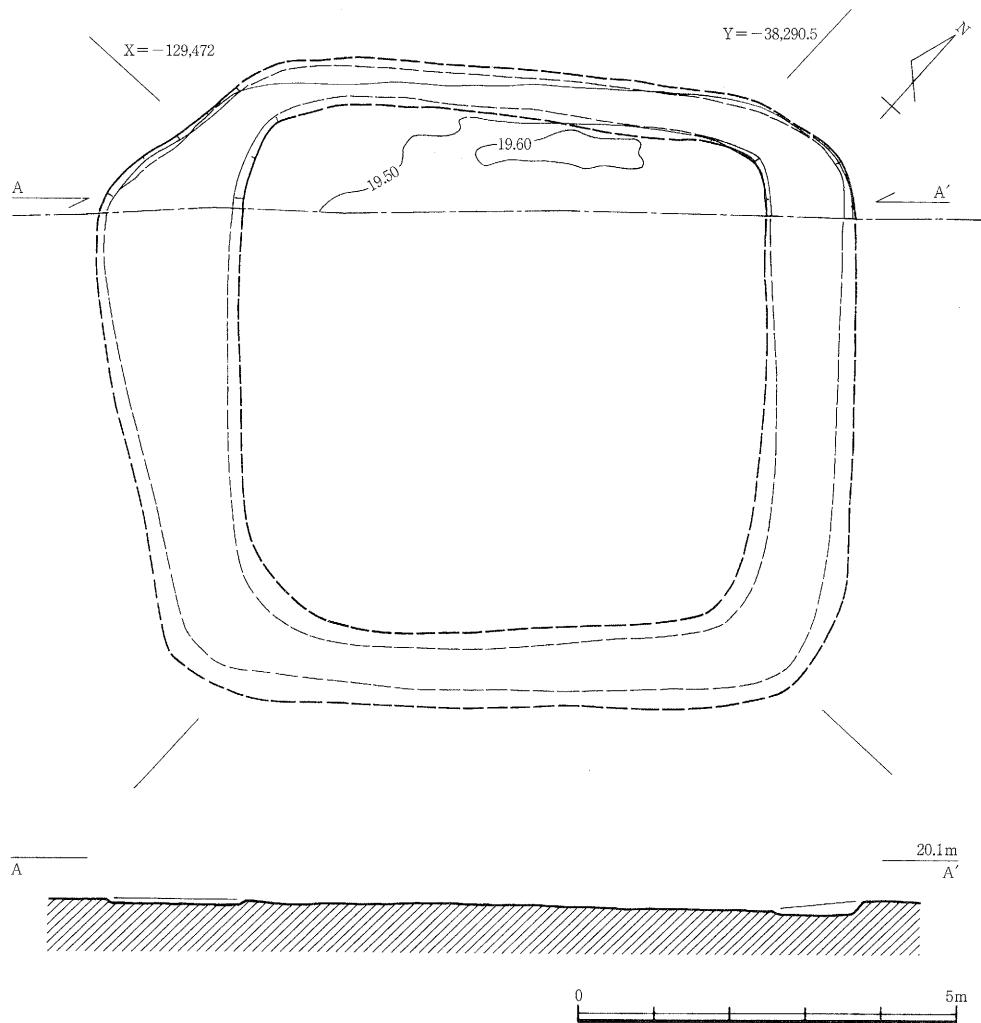
残存していた箇所の形状から、墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、一辺7m前後、全長9.9m前後と推定される。方位はN-42°-Wである。

周溝は、前述したように大半が調査区外および削平を受け欠失した箇所が多く、規模を確認したのは、北東辺部および北西辺部の一部のみであった。東周溝幅約1.3m、深さ約0.2m、西周溝幅約1.9m、深さ約0.1mを測る。周溝内からは、全く遺物が出土しなかった。

(奥)

28. 27号墳（第90図、図版33-3・34-1～5）

D地区に存在し、X=-129,452、Y=-38,377.6付近を中心として検出した。古墳の東側には2m程度離れて9号墳、西側は、西周溝と古墳西側に存在する29号墳の東周溝と溝の大半を共有



第89図 26号墳平面・断面図

している。南側には28号墳、北側には7号墳が接するように位置する。

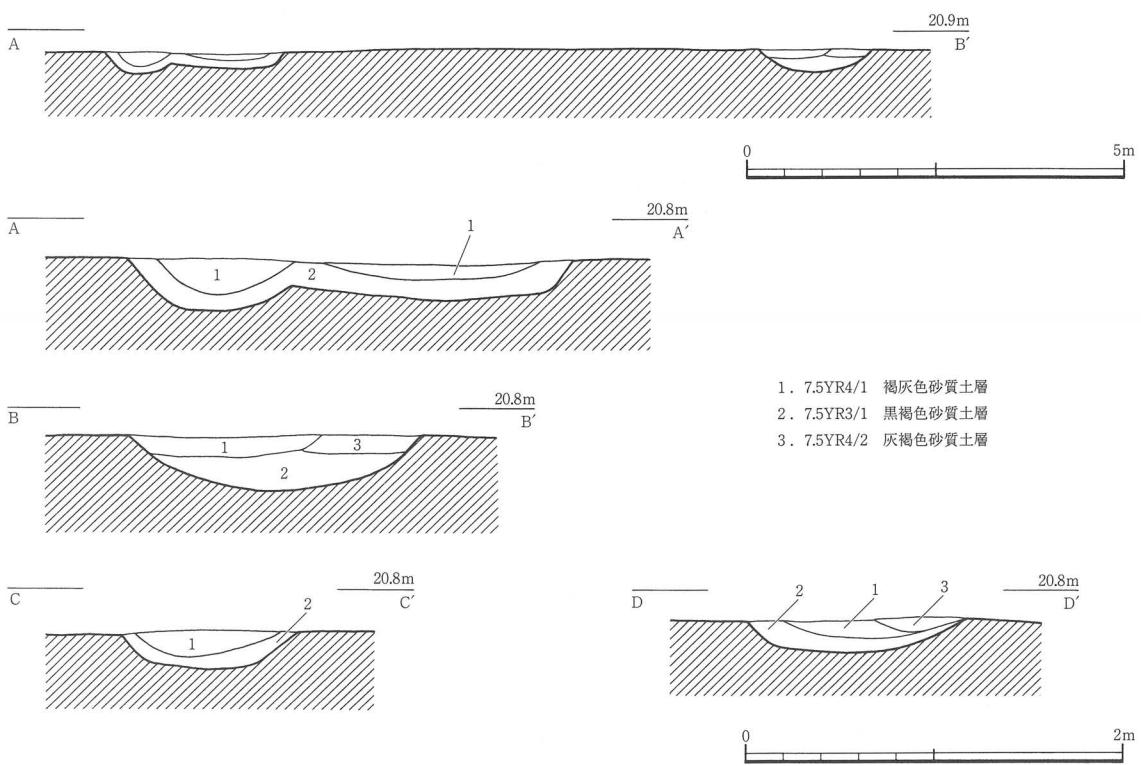
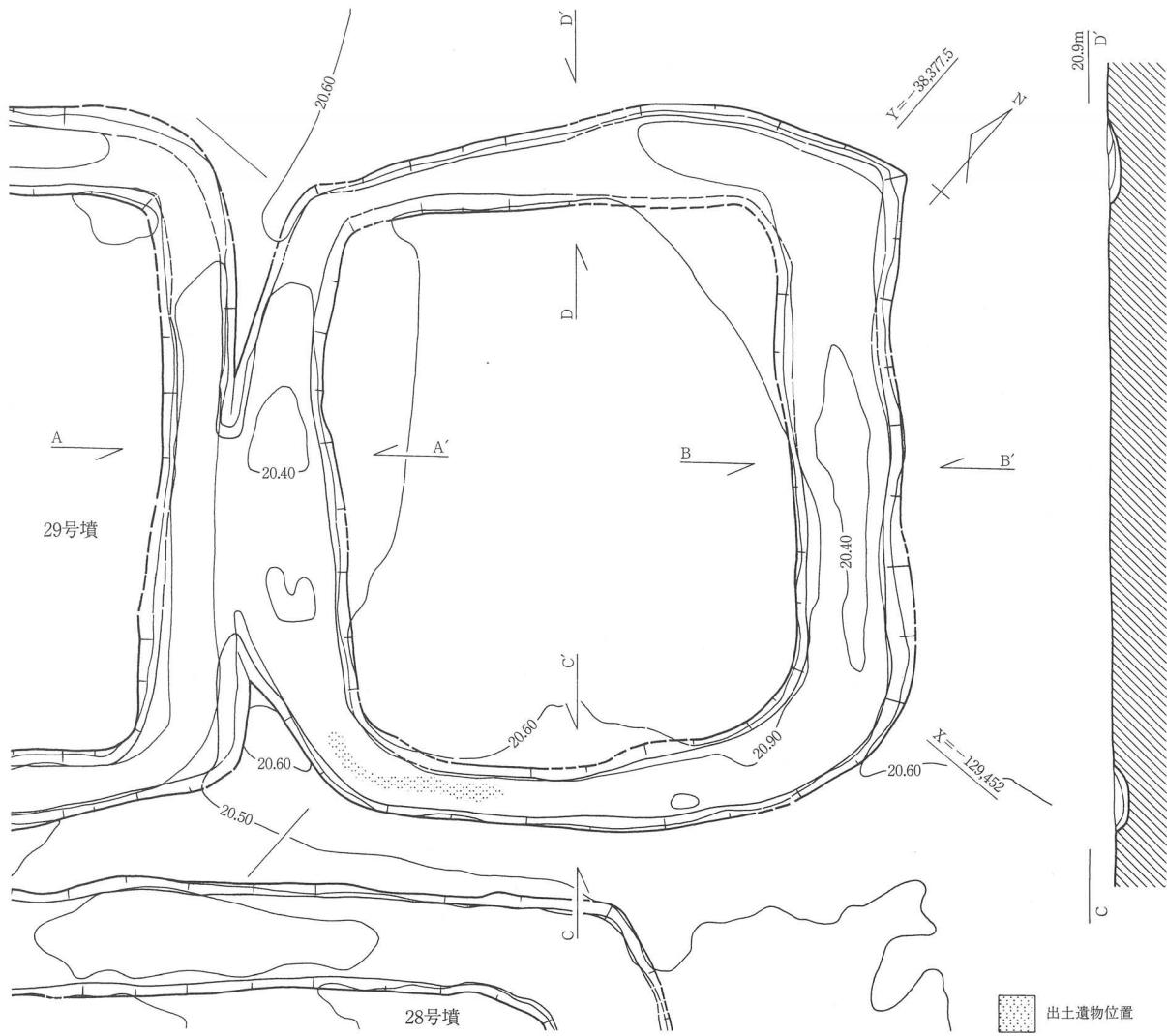
墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約6.2m、南北長約7.7m、全長は、東西長約9.0m、南北長約9.6mを測る。方位はN-41°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.5m、深さ約0.3m、南周溝幅約0.9m、深さ約0.2m、北周溝幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。西周溝は、29号墳の東周溝と溝の大半を共有しているため不明な点が多いが、断面の形状から幅1.7m前後、深さ約0.2mを測る。周溝の埋土は、凹レンズ状に堆積し、上層には褐灰色砂質土、下層には黒褐色砂質土が堆積している。

27号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、須恵器、少量の埴輪片が出土した。須恵器は、無蓋高杯、把手付鉢、直口壺、壺などである。埴輪の種類は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪である。形象埴輪は家の一部、不明が1点ある。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、7世紀前半と推定される須恵器、土師器などが出土した。これら周溝内上層の遺物から7世紀前半まで周溝が存在していた可能性がある。

(奥)



第90図 27号墳平面・断面図

出土遺物

土器（第91図、図版49・53） 478は、須恵器無蓋高杯である。杯部は、いわゆる2重口縁の形状に近い形を呈する。脚柱部の界から斜め上方に大きく開き、口縁部に至る。口縁部と底部の界には断面三角形に近い稜を持つ。そこから口縁部外面は内弯気味に上方に開き端部は丸い。口縁部内面の口縁から3分の1付近で「く」の字形に屈曲する。脚部は、杯部と脚部の界から脚裾部に向かって開き気味に内弯する。脚柱部と脚裾部の界には明瞭な段を有する。脚柱部には三角形の透かし窓が三箇所に施されている。脚裾部は、脚柱部の界から外側に大きく開き、脚端部から上方約0.8mm付近で断面三角形に近い鋭い稜を持ち、そこから内側に屈曲する。脚端部は丸い。調整は、最終的に回転ナデによって仕上げている。口径約14.6cm、脚径約10.95cm、器高約12.7cmを測る。

479は須恵器直口壺である。底部を欠損している。口縁部は、口縁部と体部の界から外上方に外反気味に開き、端部は丸い。体部は、体部最大径が体部のほぼ中央にあり丸い。口縁部外面には、口縁端部から約1.2cmと約2.6cm付近に沈線を施し、口縁部と体部の界と2本目の沈線、2本目の沈線と1本目の沈線によって区切り、その内に13条前後の波状文を施している。体部上半には9条前後の波状文の後、体部上半から肩部にかけて3条の沈線が施されている。口縁部から体部上半の内外面は、回転ナデ、体部下半の外面は、手持ちヘラケズリの後ナデ、内面はナデによって仕上げている。口径13.2cm前後、残存高20.0cmを測る。

481は、須恵器把手付鉢である。把手の部分は欠失し、口縁端部内面は欠損している。口縁端部付近は直立気味に短く立つが、体部全体は丸みを持つ。底部の大部分は欠損しているが平底に近いものと推定される。外面体部中央付近には緩やかな突帶によって区画された内部に7条からなる波状文を施している。体部外面下半は、ヘラケズリの後ナデ、他の箇所は回転ナデによって仕上げている。口径6.4cm前後、残存高5.5cmを測る。

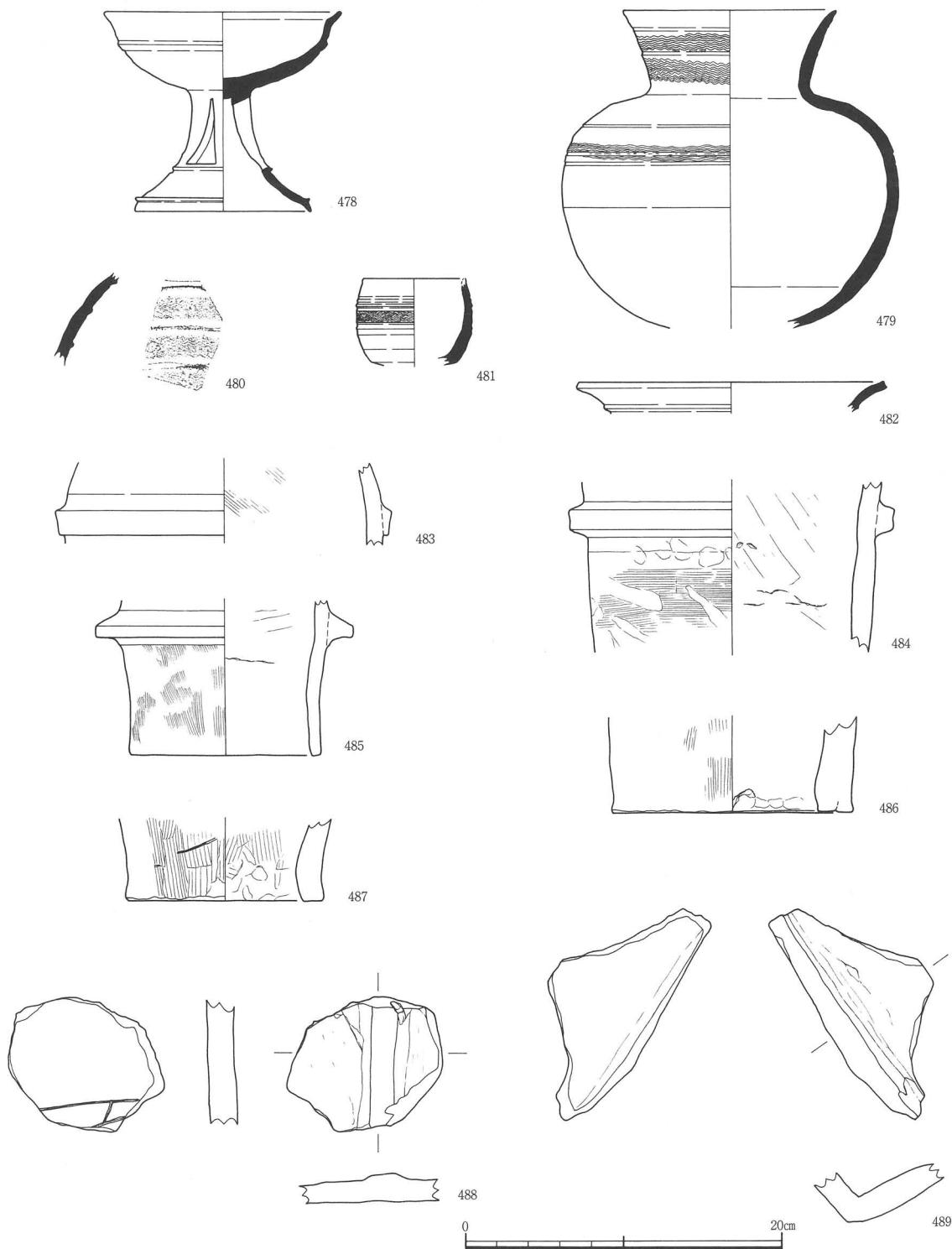
482は、須恵器壺の口縁部と推定されるものである。口縁端部は断面四角形に近い。口縁端部から外反気味に大きく内傾する。欠損部付近に突帶を巡らしている。回転ナデによって仕上げている。口径19.2cm前後、残存高2.0cmを測る。
(奥)

埴輪（第91図、図版73） 484・486・487は円筒埴輪、483は朝顔形円筒埴輪、485・488・489は形象埴輪である。

484は体部片である。外面調整にヨコハケ、内縁調整に斜め方向のユビナデを施している。外面のヨコハケ残存部は少ないが、静止痕は確認できない。また、外面には一次調整のユビナデが強かったために器面に跡がくぼみ、ヨコハケ工具が当たっていない箇所が所々に観察される。突帶の断面形状は、しっかりととした台形状を呈し、上面はわずかに凹む。体部径は、推定で17.2cmから19.0cmである。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

486・487は底部片である。外面調整はともにタテハケである。487は下端から丁寧に施している。内面調整は487にタテハケが認められるが、486は摩滅により不明である。とくに487は、ハ

ケ目が粗く特徴的で、外面・内面調整とも同一のハケ目工具を用いている可能性が高い。工具幅は1.5cm以上である。また、487は左下がりの直線状沈線が認められ、ヘラ記号の一部とも考えられる。上記2点の底部から体部へのプロポーションは、端部から一度わずかに内傾してから直立あるいは外反しながら立ち上がる。ただし、加重によるつぶれはなく、それぞれの器厚は異なるものの、器厚は底端部から体部にかけて大きく変わることはない。底部径は、486が15.4cm、487が12.6cmと推定でき、ともに小型である。色調・焼成は、ともに褐色・軟質系である。



第91図 27号墳出土遺物

483は、朝顔形円筒埴輪の肩部にあたる。外面調整は摩滅により不明であるが、内面調整はナナメハケを施している。突帯の断面形状は、幅広で扁平な台形状を呈している。体部径は、推定で20.0cmである。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。

485は、径や突帯などの特徴から形象埴輪の基部にあたると考えられる。外面調整はやや細い条線のタテハケ、内面調整はユビナデと思われるが、大半は摩滅により不明である。器厚は、7mmから9mmと薄く、底端部に近づくほど薄いという特徴がある。突帯の断面形状は、高く突出した台形状で、上部は傾斜が強く、逆に下部は直線的に器壁に当たる。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。488は、板状部分の片面に直線が3本組み合わさった文様が認められ、反対面には折れた突帯状のものが張り付いて残っている。おそらく円筒部と接続する部分の一部であろうと考えられる。円筒部と文様板とを接合する盾形埴輪などの形象埴輪であるとも考えられるが、厳密には不明である。489は、家形埴輪で、屋根と破風に該当する部分と考えられる。調整や文様は、摩滅により認められない。488・489の色調・焼成は、485と異なり、ともに褐色・軟質系である。

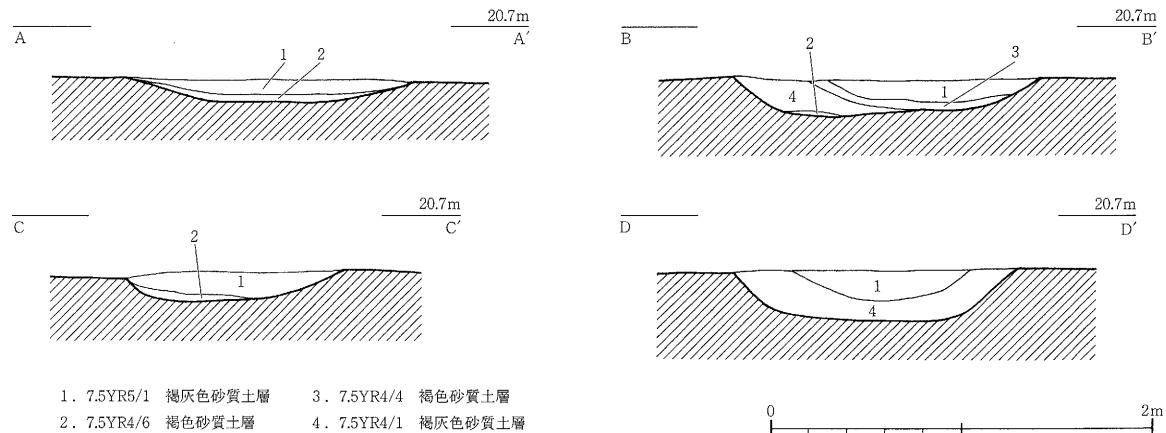
(小浜)

29. 28号墳（第92・93図、図版34-6・35-1～4）

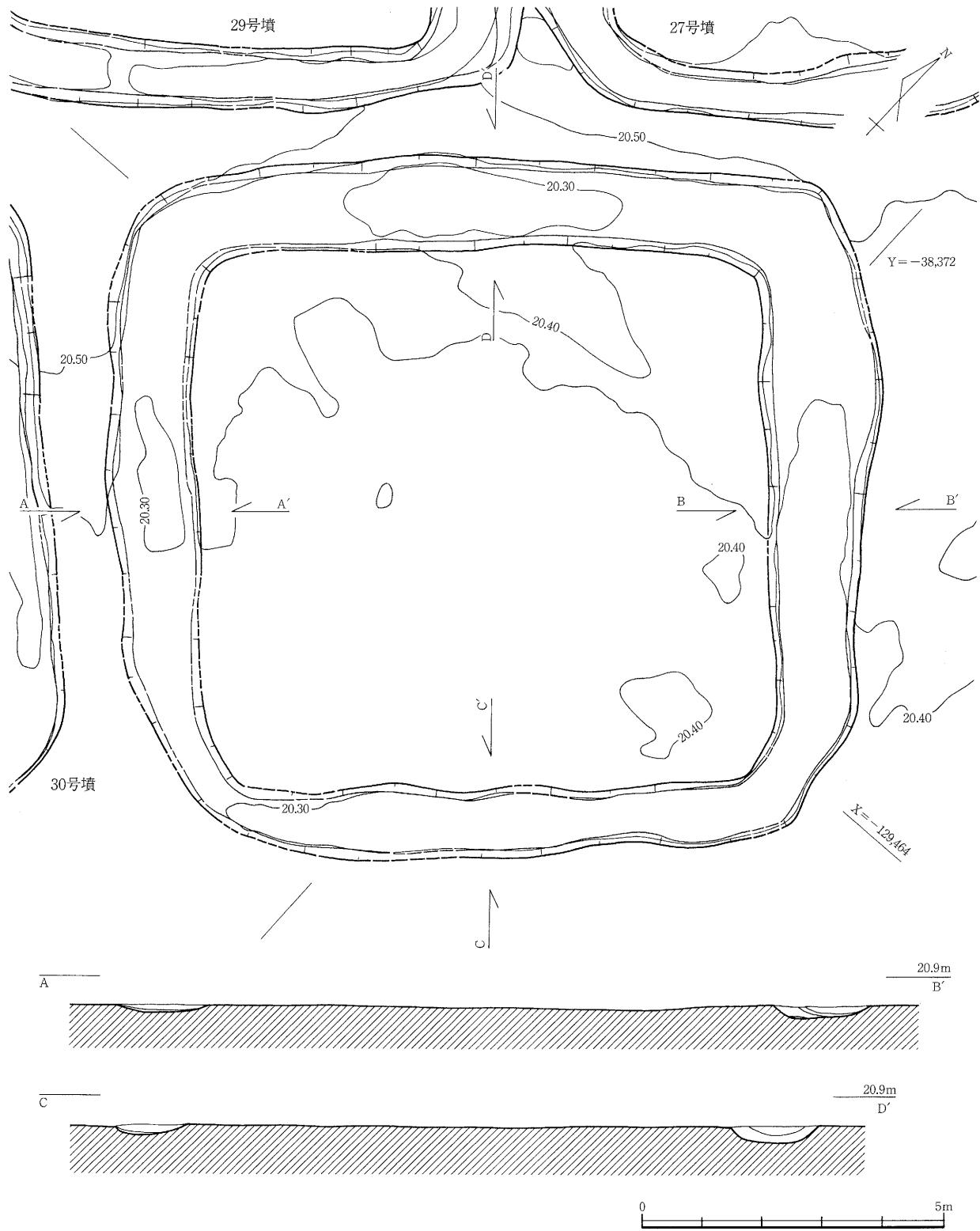
D地区に存在し、X=-129,464、Y=-38,374付近を中心として検出した。古墳の東側は、幅約4mの古墳が存在しない空閑地を挟み、北側に9号墳、南側に18号墳が存在する。南西側には30号墳、北側には27号墳、北西側には29号墳が接するように存在する。南側は古墳が全く存在しない空閑地とを分ける区画溝と推定される溝が接している。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約9.4m、南北長約9.0m、全長は、東西長約12.5m、南北長約11.8mを測る。方位はN-42°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝幅約1.6m、深さ約0.2m、西周溝幅約1.5m、深さ約0.1m、南周溝幅約1.2m、深さ約0.1m、北周溝幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。周溝の埋土は、凹レンズ状に近い形状で堆積し、上層には褐色砂質土、下層には褐灰色砂質土が堆積している。



第92図 28号墳周溝土層断面図



第93図 28号墳平面・断面図

28号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、須恵器、円筒埴輪片が出土した。須恵器は、甕、驥などである。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器が出土している。(奥)出土遺物

土器 (第94図、図版49) 490は須恵器甕で、口縁部から体部中央付近まで残存している。口

縁部は、体部と口縁部の界からやや外側に開き、口縁端部下からさらに大きく開く。口縁端部は角張り、その下約1.5cm付近に断面三角形の突帯を有する。体部は口縁部の界から外側に内弯氣味に開く。口縁部は回転ナデ、体部外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキの後ナデによって仕上げている。口径約23.4cm、残存高約18.4cmを測る。 (奥)

491は須恵器腺で、底部が欠損している。口縁部は、いわゆる二重口縁の形態を呈し、頸部の界から外側に内弯氣味に延び、端部は丸い。頸部と口縁部の界には緩やかな沈線を施す。頸部は体部の界付近は細く、口縁部の界に向かって外反氣味に大きく開く。頸部外面には2本の均整な波状文を施す。体部は焼け歪みが認められ、体部上部は大きく張り出す。体部外面の最大径上半には2条からなる波状文を施す。調整は、頸部と体部の界周辺は貼付けの後ナデ、後は回転ナデによって仕上げている。口径約7.4cm、残存高約10.1cmを測る。 (奥)

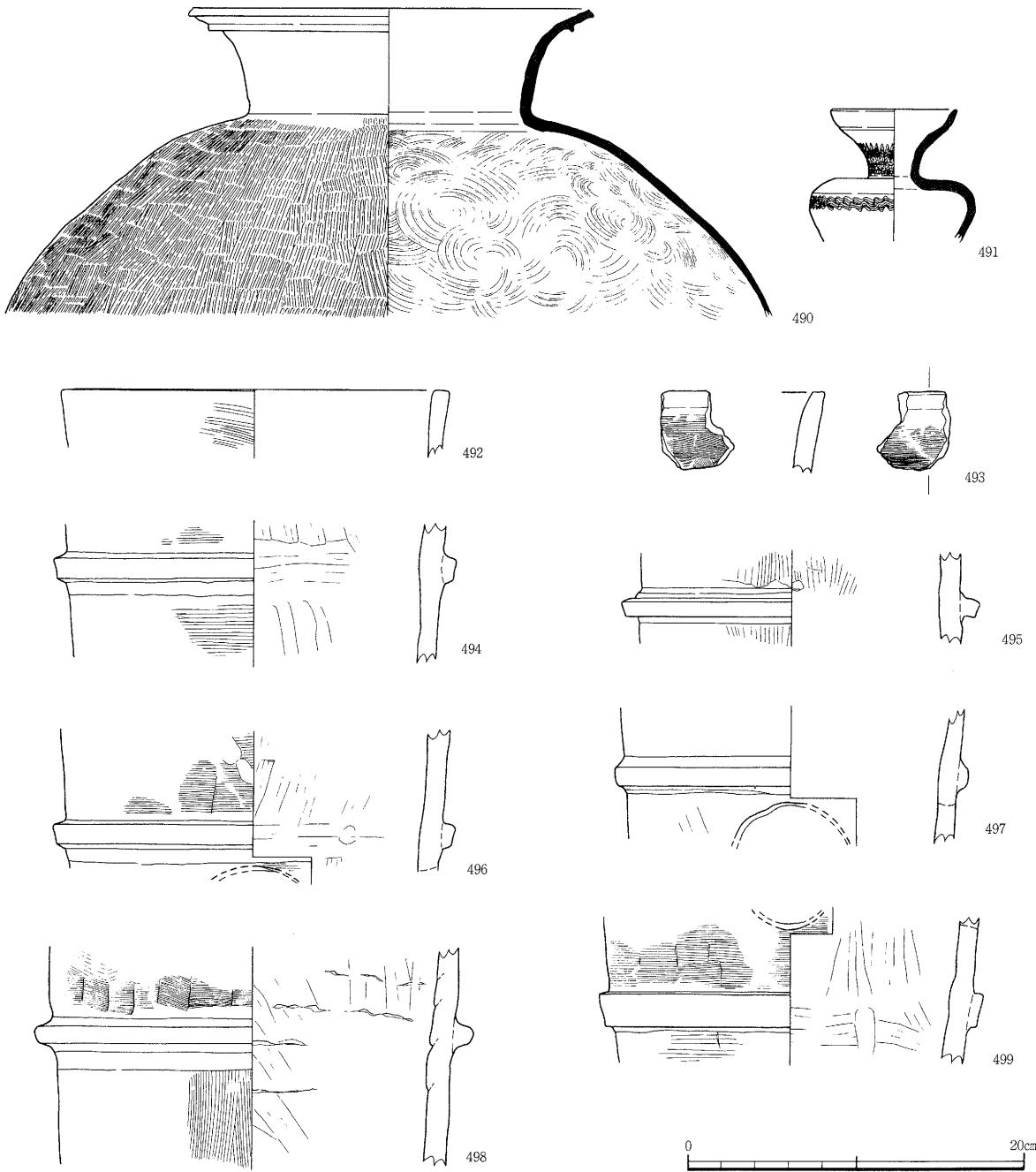
埴輪 (第94図、図版73) 492から499は、すべて円筒埴輪である。

492・493は口縁部片である。492は、外面調整にヨコハケを施している。ハケ目は、隣接する27号墳の487と同様に粗いのが特徴である。内面調整は、ユビナデと思われるが、摩滅により不明瞭である。プロポーションはほぼ直立するものと思われ、端部はヨコハケを切った丁寧なヨコナデによって調整されており、端面は平坦な面をもっている。口縁部径は、推定で23.2cmである。493は、外面調整にヨコハケ、内面調整にヨコ・ナナメハケを施している。ハケ目の粗密は492と異なり、外・内面とも密である。端部は492と同様、外面・内面のハケ調整の後に丁寧なヨコナデによって調整されているが、ヨコナデが強く行われたために端部はややすぼまった形状になっている。端面は平坦な面をもっている。やや外反するプロポーションになると思われる。色調・焼成は、ともに褐色・硬質系である。

494から499は体部片である。外面調整は、タテハケの495、縦方向のユビナデがわずかに見られるが摩滅で不明瞭な497を除いて、ヨコハケを施している。ただし、498は下段には一次タテハケ調整のみである。内面調整は、タテハケの495、摩滅で不明の497を除いて、板状工具による縦・斜め方向のナデを施している。494・496・499は、その後に突帯部分の内面に、同じく板状工具による横方向のナデを施している。外面調整のヨコハケは、496・498・499においてはハケ目工具の静止痕が認められるB種ヨコハケであり、498では2周以上、499では3周以上巡らされていることが確実である。観察しうるハケ目工具の幅は、498で2.1cm、499で1.7cmと狭く、これに対して496は5.7cm以上ある可能性がある。

495は、前述したように、外面・内面調整ともタテハケであり、他と異なる。しかもハケ目は、口縁部片の492と同様に粗く、特徴的である。これに対し、他のヨコハケは条線が密なものが多いが、498の下段のタテハケは495と同様に粗い。静止痕間隔については、間隔が長い箇所もあると思われるが、約1.5cmから2.5cmとかなり細かい間隔の部分が多く認められる。体部径は、494が21.6cmから22.8cm、495が20.0cm、496が22.0cmから23.2cm、497が19.4cmから20.4cm、498が23.0cmから24.4cm、499が20.4cmから22.4cmと推定され、495・497が他と比べてやや小さく、ほぼ外面・内

面調整差と対応する。色調・焼成は、495が褐色・硬質系、497が褐色・軟質系であるのみで、あとの体部片は須恵質である。これも、外面・内面調整差と合致している。透かしは、496・497・499に円形透かしの一部が残存している。透かしの位置は特定できない。しかし、総持寺古墳群の出土埴輪がすべて2条3段であり、透かしはすべて2段目に穿たれている可能性が高い。この前提で499をみると、透かしを有する段とその下段の外面調整がヨコハケであることから、底部は外面調整にヨコハケを施していることになる。これに対し、498は透かしを有する段は判明していないが、下段は外面調整に一次タテハケのみを施していることから、この段が底部1段目および2段目にあたると考えられる。つまり、同じ須恵質埴輪の一群にも、少なくとも2タイプ存在することが明らかである。突帯の断面形状は、多様である。外面・内面調整差に対応するよう



第94図 28号墳出土遺物

に、495が高く突出した方形、497が低くつぶれた扁平な台形状を呈するなど他と大きく異なるが、それ以外の須恵質埴輪においても494・496はやや低い台形、498はやや不整形ながら高く突出した台形状、499は幅広で低い長方形とバラエティーに富んでいる。これは、同じ須恵質埴輪でも、底部1段目の外面調整が一次タテハケのものと二次ヨコハケのものとの違いと対応関係は認められない。

(小浜)

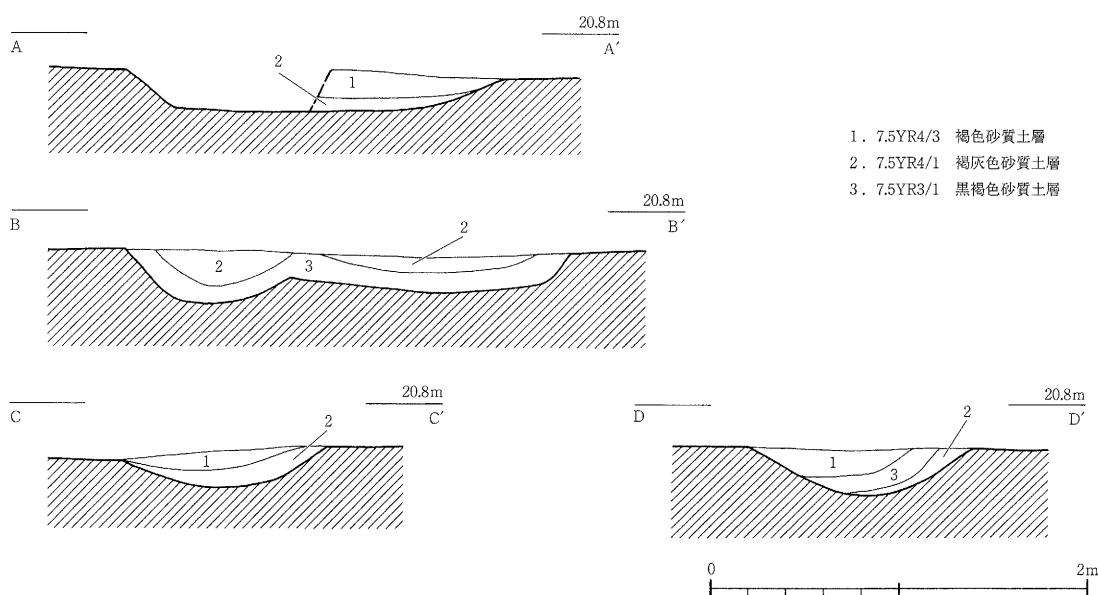
30. 29号墳（第95～97図、図版35-5～7・36）

D地区に存在し、X=-129,458、Y=-38,385付近を中心として検出した。東側は、東周溝と古墳東側に存在する27号墳の西周溝、西側は、西周溝と古墳西側に存在する31号墳の東周溝と溝の大半を共有している。南東側には28号墳、南西側には30号墳が接するように位置する。北側は古墳が全く存在しない空閑地が存在する。

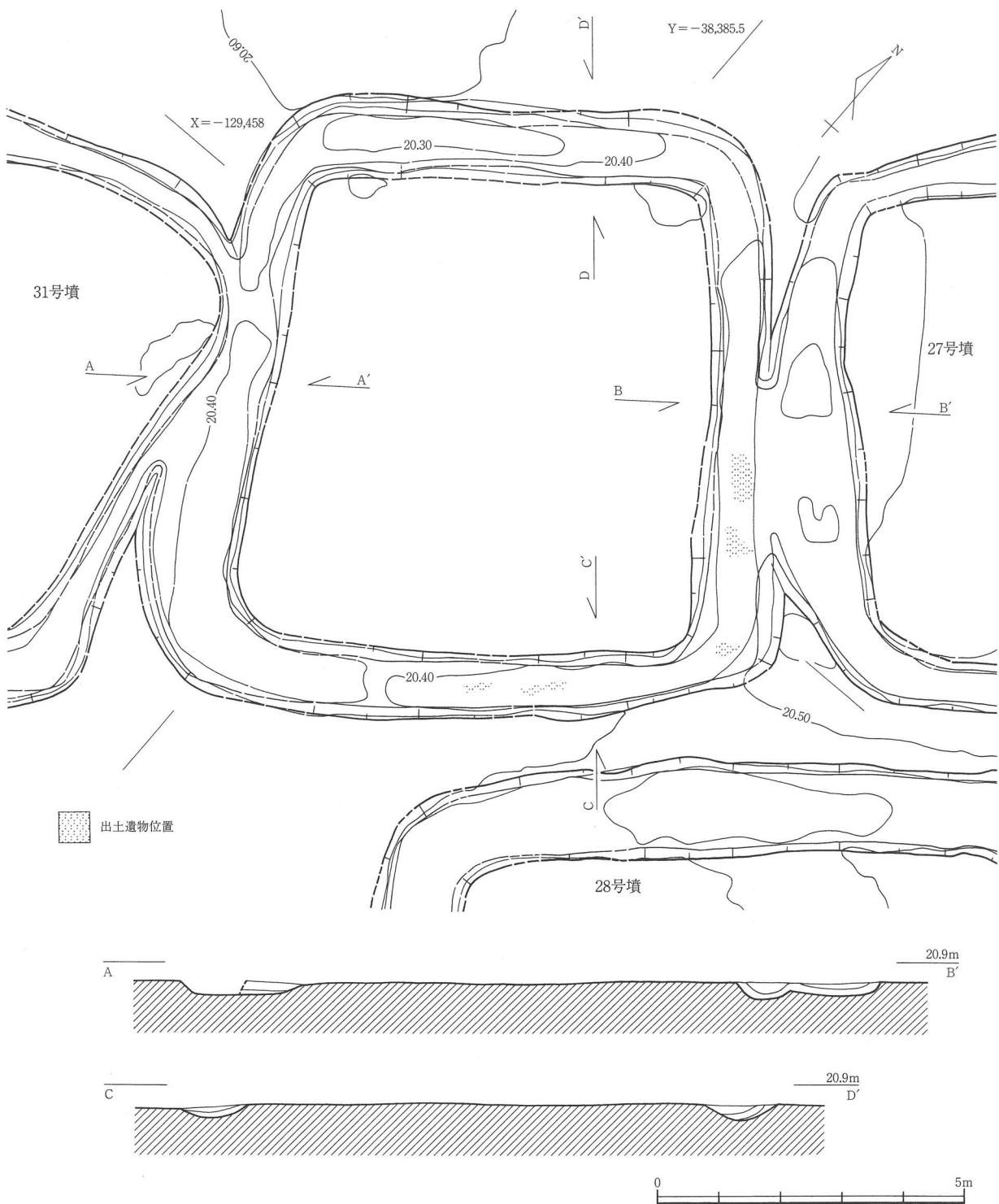
墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約7.0m、南北長約7.7m、全長は、東西長は、東側に27号墳の西周溝、西側に31号墳の東周溝と溝を共有しているため8.3mから10.3m、南北長約9.9mを測る。方位はN-36°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝は溝の断面の形状から幅1m前後、深さ約0.3m、西周溝は溝の断面の形状から1.4m前後、深さ約0.2mと推定される。南周溝幅約0.9m、深さ約0.2m、北周溝幅1.2m、深さ約0.2mを測る。周溝の埋土は、凹レンズ状に堆積し、各地点によって色調が異なるが、基本的には上層に褐色砂質土、下層に黒褐色砂質土が堆積している。

29号墳に伴うと推定される遺物は東周溝中央部から南周溝にかけて、溝中央部付近に散在して出土した（第97図）。出土した遺物は、須恵器壺5個体、須恵器高杯脚部、須恵器鉢、須恵器甕、埴輪として円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土している。形象埴輪は、家形埴輪1点、不明1点である。特に、27号墳の周溝と共有する東周溝の中央付近において、家形埴輪（522）



第95図 29号墳周溝土層断面図



第96図 29号墳平面・断面図

と須恵器壺（506）が出土した（第98・100図、図版49・74）。いずれも周溝の底部から0.1m程度浮いていた。家形埴輪は、妻側の約3分の1が横位で出土し、墳丘に対して直交して屋根を南に、裾部を北にしていた。家形埴輪の下には須恵器壺の体部が溝中央部に正立した状況で出土し、その周囲には同一個体の破片が散乱していた。口縁部の破片は南にやや離れて出土している。

この状況から、須恵器壺は、出土状況における家形埴輪との前後関係、出土位置などから、墳丘からの転落とは言い切れず、供獻土器として周溝内に置かれていた可能性も考えられる。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から弥生時代後期の土器、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器などが出土した。これら周溝内上層の遺物から7世紀初頭までは、周溝が存在していた可能性がある。(奥)

出土遺物

土器(第98図、図版49・53)

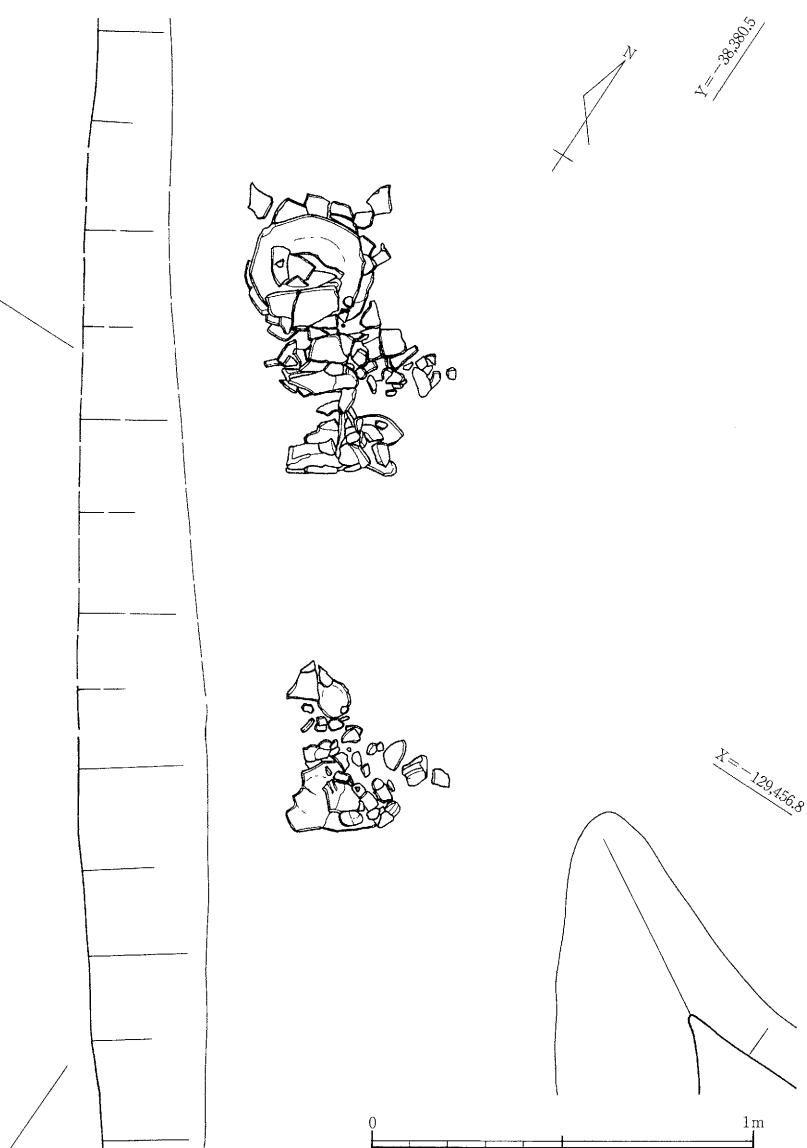
500は須恵器壺の口縁部の破片である。口縁部は二重口縁に近い形を呈し、口縁部と頸部の界に断面三角形の凸帯を2個所に巡らしている。口縁部は内弯気味に直立し、端部は角張る。口縁部中央付近には2から3条の波状文を施している。頸部は口縁部の界から大きく「く」の字状に屈曲しその中央付近の外面に口縁部と同様な波状文を施している。調整は、内外面とも回転ナデによって仕上げている。口縁径16.3cm前後、残存高約4.9cmを測る。

501は、須恵器壺の口縁部の小片である。口縁は欠損部から外側に外反気味に開き、端部は丸みを帯びる。外面の口縁端部直下には緩やかな沈線、口縁欠損部よりやや上部に断面三角形の凸帯を巡らして区画し、内部に波状文を施す。調整は、内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径11.5cm前後、残存高約4.8cmを測る。

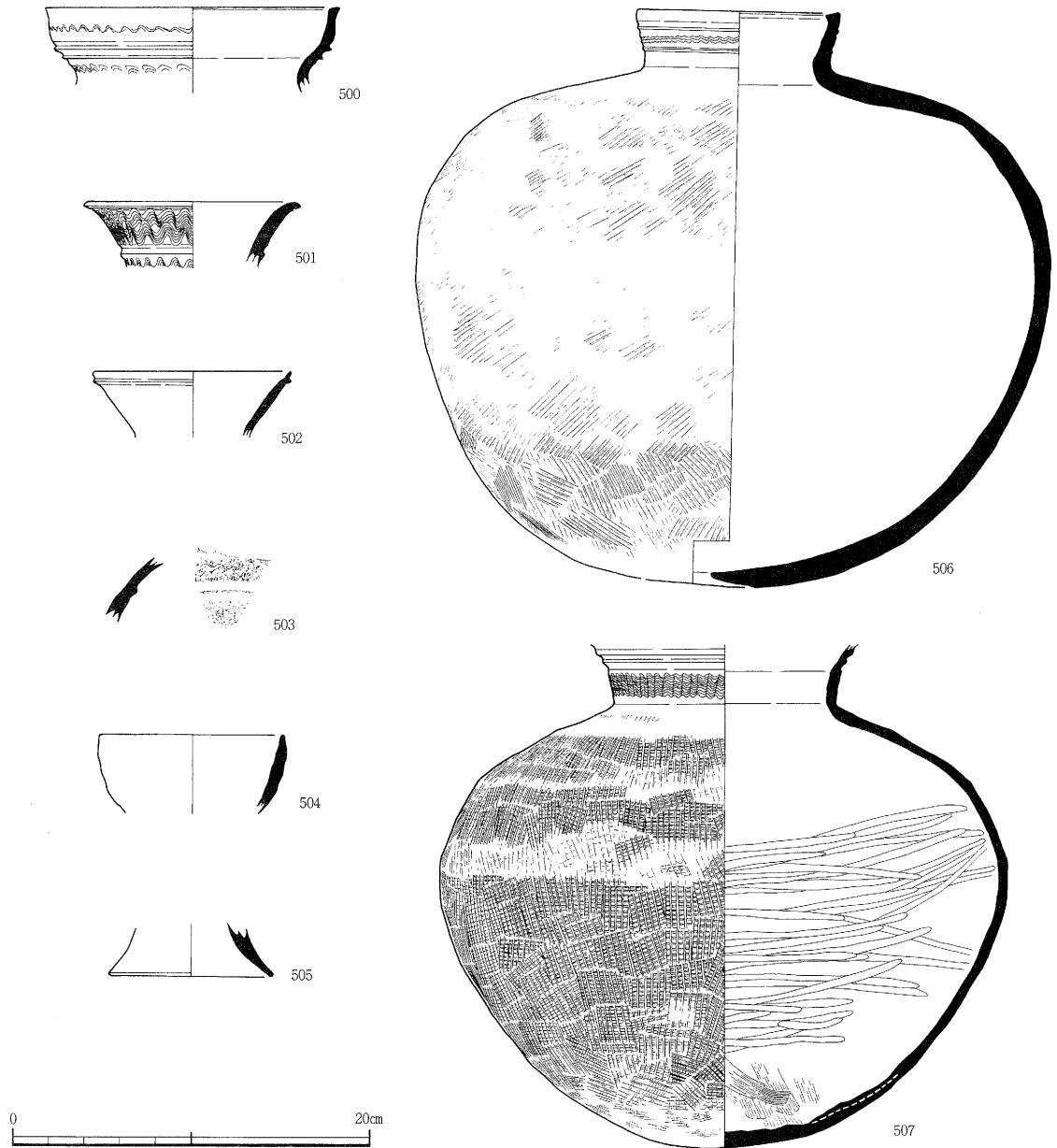
502は、須恵器壺の口縁部の小片である。口縁部と体部の界から外側に大きく開き直線的に伸びる。口縁端部は丸味を帯びる。口縁端部直下には、断面の形状が丸い凸帯を巡らす。調整は、内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径11.0cm前後、残存高約3.7cmを測る。

504は須恵器鉢の小片で、底部が欠損している。口縁端部は丸く、口縁端部から底部に向かって内弯気味にやや斜めに下る。調整は回転ナデによって仕上げている。口径10.1cm前後、残存高約4.5cmを測る。

505は、須恵器高杯の脚裾部と推定されるものである。脚底部は断面三角形に近く、中央付近



第97図 29号墳東周溝遺物出土状況図



第98図 29号墳出土遺物 1

に、緩やかな沈線が認められる。そこから斜めに外反気味に上部に延びる。調整は内外面とも回転ナデによって仕上げている。底径8.9cm前後、残存高約4.5cmを測る。

506は須恵器壺である。口縁は短く、口縁部と体部の界から内弯気味に立ち上がり、端部は角張る。口縁部外面の2個所に断面三角形に近い緩やかな凸帯を巡らし区画し、その内部に波状文を施す。体部の肩部は大きく張り出し、体部最大径はやや上部に存在する。底部は丸い。底部底には、外側から開けられたと推定される約2cmを測る穿孔が認められる。調整は、口縁部内外面とも回転ナデ、体部外面肩部の上部付近は平行タタキの後丁寧なナデ消し、肩部下から体部下までは平行タタキの後ナデ、底部付近は平行タタキ、体部内面はナデによって仕上げている。口径約11.1cm、体部最大径約37.4cm、器高32.7cmを測る。

507は須恵器甕で、口縁端部付近が欠損している。口縁部は端部付近が欠損しているため、不明な点もあるが、残存部の形状から、体部の界から外反気味に開き口縁端部に至るものと推定さ

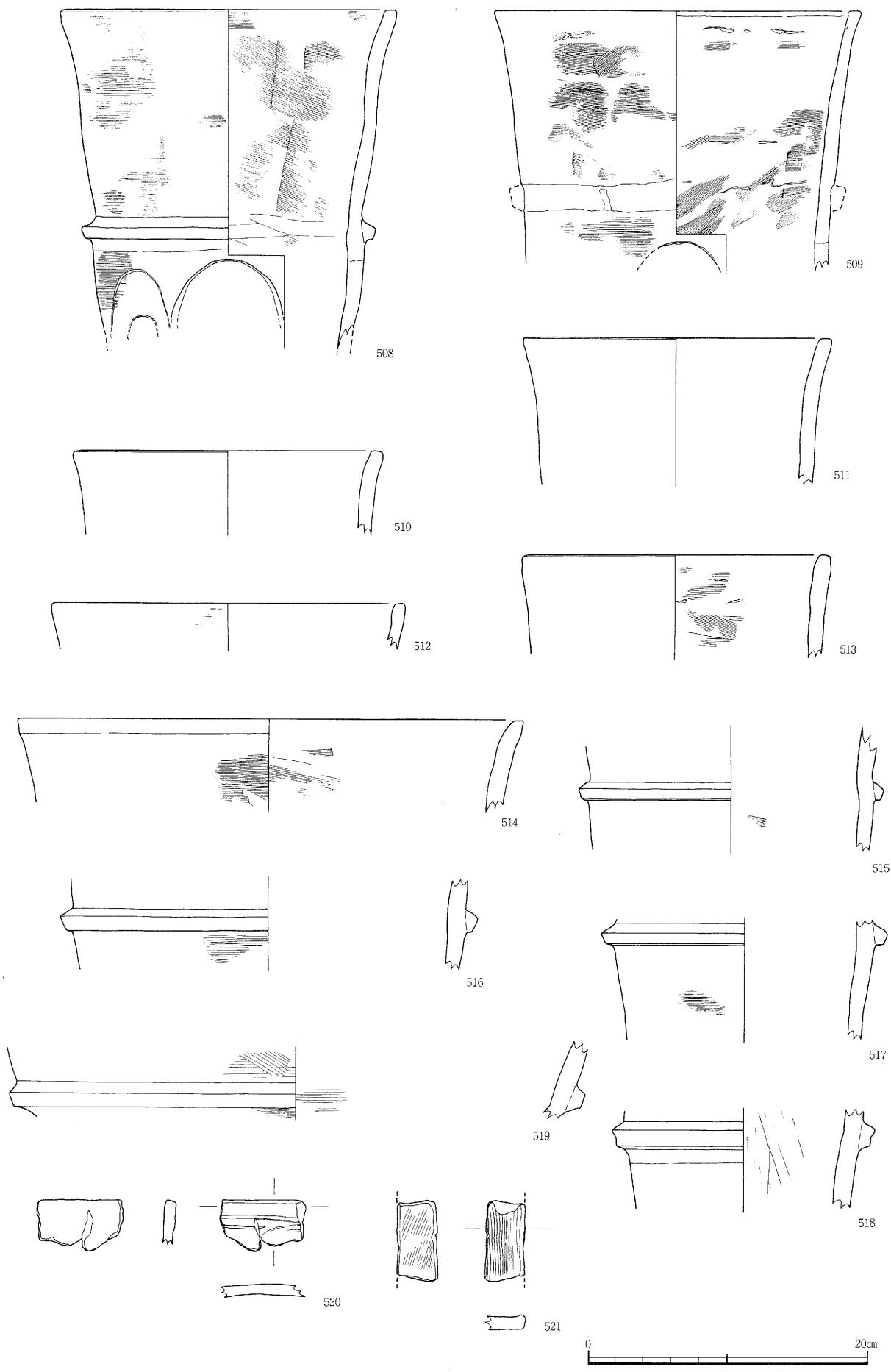
れる。残存部上部に断面三角形の凸帯を2条巡らし、その下と体部の界の間に均整な波状文を施す。体部の形状はいわゆるそろばん型に近く、底部は丸い。口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は口縁部の界から肩部上部付近は格子目タタキの後ナデ、そこから底部付近までは格子目タタキで、一部にナデ消しが認められる。底部付近は格子目タタキの後ナデ消しが行われている。内面は上部が回転ナデ、中央付近から底部付近にかけて、ヘラミガキ状にみえるヘラ状工具によるナデ、底部は板状工具によるナデによって仕上げている。頸部径約12.4cm、体部最大径約31.9cm、残存高約28.5cmを測る。

(奥)

埴輪（第99・100図、図版74） 508から518は円筒埴輪、519は朝顔形円筒埴輪、521・522は形象埴輪である。

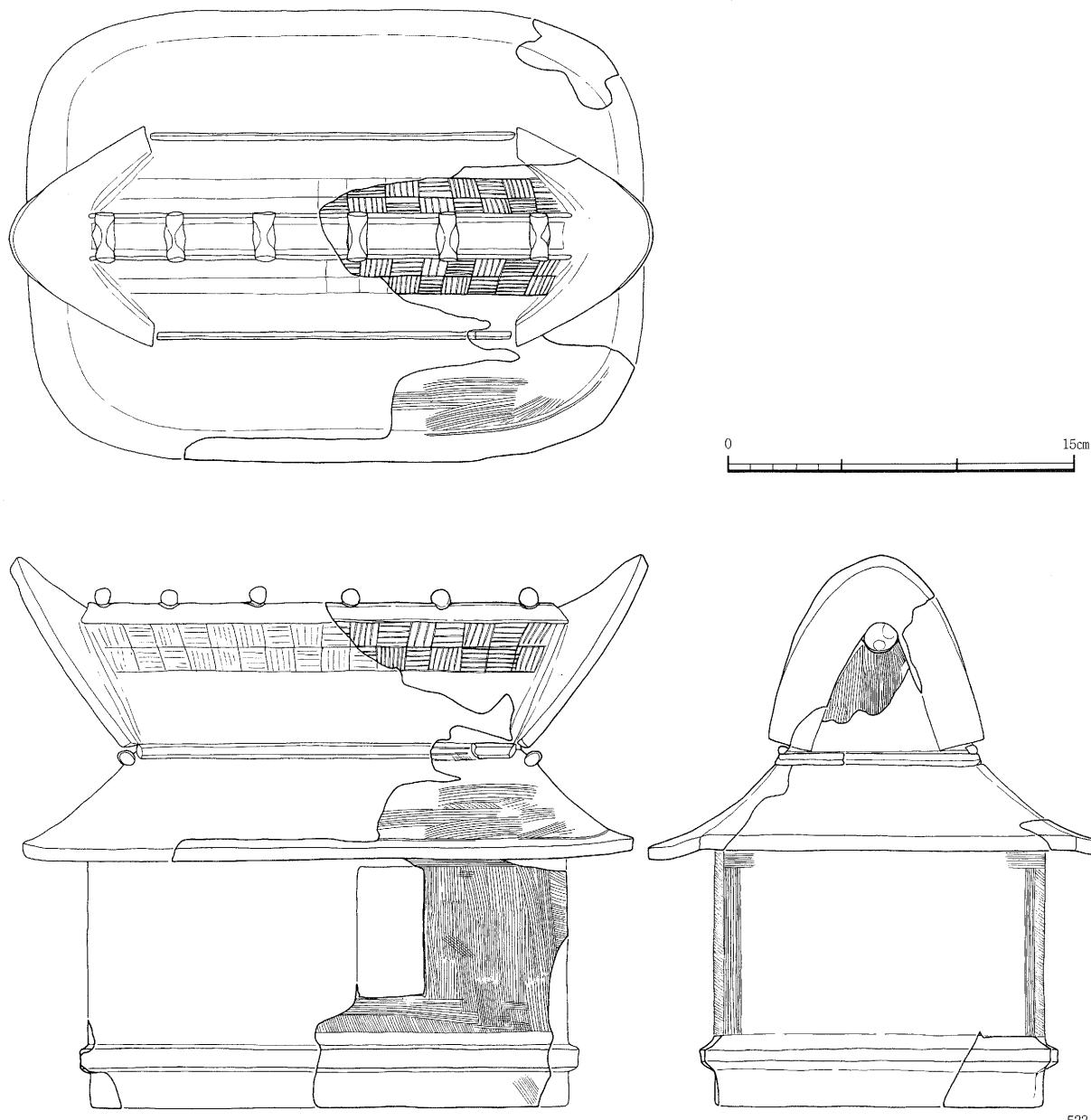
508・509は、口縁部を含む上部2段分が残る資料である。508は、外面調整にヨコハケ、内面調整にナナメハケを施す。ともにハケは口縁端部まで丁寧に行っている。外面・内面調整後の端部のヨコナデ調整は行われていない。外面のヨコハケには摩滅の影響もありハケ目工具の静止痕は認められないが、内面ナナメハケには静止痕が数箇所認められる。下段には円形透かしの一部が残存しており、その横には二重の半円弧状のヘラ記号が認められる。口縁部径は推定で24.0cm、体部径は下段で18.2cmから19.2cmである。口縁部高は、15.5cm前後である。プロポーションは、やや開き気味に立ち上がり、口縁部付近ではさらに外反する。端部は平坦面をもつ。突帶の断面形状は、台形状を呈する。509は、外面調整にヨコハケ、内面調整にナナメ・ヨコハケを施している。外面は、部分的にナナメハケをヨコハケ後に施している。ハケ目工具の静止痕が、摩滅により不明瞭ながら外面・内面とも部分的に観察できる。外面・内面調整後に端部のヨコナデ調整が行なわれている。下段には円形透かしの一部が残存している。口縁部径は推定で26.0cm、体部径は下段で21.8cmである。口縁部高は、13.5cm前後である。プロポーションは、508と同様やや開き気味に立ち上がる。端部は平坦面をもつ。突帶は剥離してしまっている。色調・焼成は、ともに褐色・軟質系であり、焼成はかなり不良である。

510から514は、口縁部片である。外面調整は基本的にヨコハケを施すと思われるが、摩滅により不明な資料（510・511・513）が多い。内面調整もヨコ・ナナメハケであると思われるが、摩滅により不明な資料（510・511・512）が多い。口縁部の形態は、全体的に見れば508・509と同様わずかに外反しているが、端部のヨコナデ調整の違いによって微妙な違いが認められる。つまり、同じ器厚のまま外反する510・511のほか、512のように端部直下の広い範囲を強くヨコナデしたためにわずかに内弯気味になっているものや、513・514のように端部をつまみあげるようなヨコナデによって端部の器厚がすぼまるものがある。端部の上面は、すべて平坦になっている。色調・焼成は、514が褐色・硬質系であるほかは、すべて褐色・軟質系で、かなり焼成は不良である。口縁部径は、推定で510が22.2cm、511が22.0cm、512が25.0cm、513が22.0cm、514が36.0cmとなる。508・509を含め、大半が口縁部径22.0cmから26.0cmの範疇で収まる小型の円筒埴輪であるが、514のみ径が大きく中型と推測される。残存部が少なく、ひずみによる誤算の可能性も残



第99図 29号墳出土遺物 2

るが、前述したように色調・焼成が514のみ異なることを考慮すると、中型円筒埴輪である可能性は高い。515から518は、体部片である。調整については摩滅により不明瞭なものが多いが、基本的に外面調整はヨコハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケである。ただし、518のみ外面・内面調整ともナデによる。このことは、後述するように色調・焼成が518のみ異なることと対応する。体部径は、515が19.8cmから20.8cm、516が27.0cmから28.2cm、517が16.6cmから18.8cm、518が15.2cmから17.0cmであることから、515・517・518は小型円筒埴輪、516のみ中型円筒埴輪である。突帶の断面形状は、515から517が上辺の貼り付けが強いために上辺の傾斜がきつく、下辺が直角気味に器壁と接続する、ややゆがんだ台形状を呈している。これに対し、518はM字形で異なるが、これについても調整や色調・焼成の違いと対応する。色調・焼成については、515から517は褐色・軟質系で、かなり焼成不良である。518は、全体としては褐色・硬質系の範疇に入るが、外



第100図 29号墳出土遺物 3

面・断面はほぼ須恵質化している。

519は、朝顔形埴輪の擬口縁部にあたる。外面調整はヨコハケのちナナメハケ、内面調整はヨコハケである。このハケ目は粗く、隣接する27・28号墳出土資料の一部にも見られたのと同様である。赤色顔料が塗布された痕跡が認められる。色調・焼成は褐色・硬質系である。

520は、外面・内面ともナデ調整である。口縁端部付近の外面に、口縁に平行して2本の沈線が刻まれている。横断面はわずかに内弯しており、円筒状の器形になるようである。形象埴輪の可能性もあり、外面・内面調整は上記で見た円筒埴輪片の調整と異なるが、色調・焼成は褐色・軟質系で、其伴の円筒・朝顔形埴輪片と同一であることから、円筒埴輪の口縁部で、2本の沈線はヘラ記号の一部と捉えることもできる。

521は、形象埴輪の一部と考えられる。板状の破片であり、両面ともハケ目が見られる。一長側辺のみ面をもって生きており、縁部幅約5mmが一方に肥厚しているようである。他の3辺は破面である。家形埴輪の入り口や窓部分にあたるとも考えられるが、不明である。

522は、家形埴輪である。平屋建物で屋根は入母屋造である。残存状態は良くないが、一方の妻側および付近が裾部から破風形・屋根まで残存している。長辺側に入り口部分が一箇所存在することが確実である。1997年の概要報告時に復元を試みているが、規模等の復元データは他の類例からの援用であり、厳密ではない。かろうじて、裾部から屋根の棟までの高さが約44.0cmと計測しうる。壁部分はまずタテ・ナナメハケを、その後にヨコハケ、最後に丁寧なタテハケを施して表現している。入母屋部分はナナメハケの後にヨコハケを施して表現しており、切妻部の屋根には網代が表現されている。裾部から3.5cm上には平突帯が巡らされている。屋根の棟上には断面円形の檼魚木が約6cm間隔で並べられている。屋根と身舎とは一体作りである。 (小浜)

31. 30号墳（第101・102図、図版37-1～5）

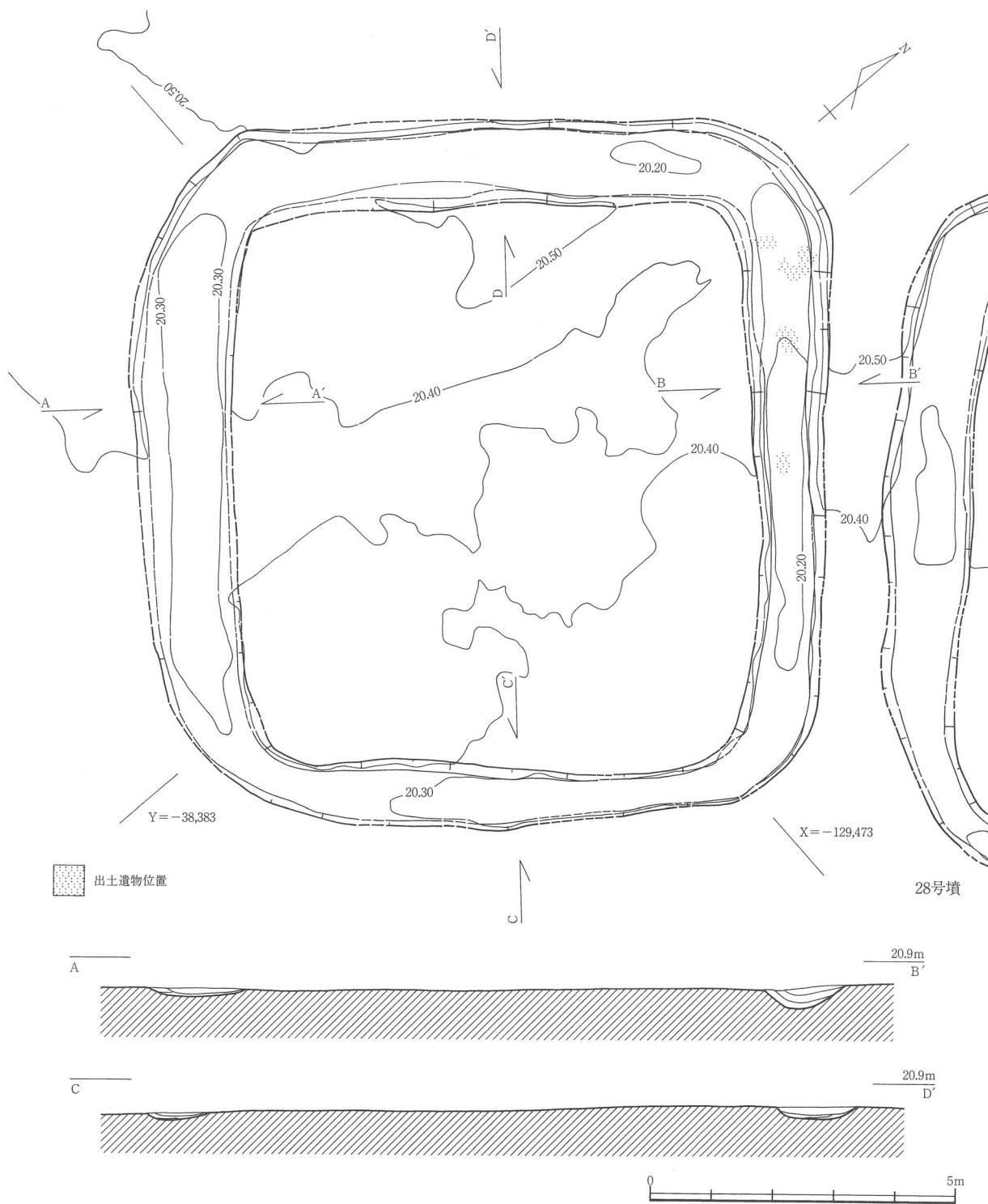
D地区に存在し、X=-129,472.5、Y=-38,383.6付近を中心として検出した。東側は、28号墳、北側を29号墳、北西側を31号墳、南側を34号墳と接している。南東側は、区画溝を伴う空閑地帯、南西側に空閑地が存在する。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、東西長約8.5m、南北長約9.2m、全長は、東西長約11.2m、南北長約11.6を測る。方位はN-49°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝は幅約1.3m前後、深さ約0.3m、西周溝は幅約1.6m、深さ約0.1mと推定される。南周溝幅約1.0m、深さ約0.1m、北周溝幅1.3m、深さ約0.2mを測る。周溝の埋土は、凹レンズ状に堆積し、各地点により若干色調が異なるが、基本的には黒褐色系ないしは褐色系の砂質土が堆積している。

30号墳に伴うと推定される遺物は少ないが東周溝に点在して、周溝中央部付近上層付近から出土している。出土した遺物は、須恵器壺口縁部片、埴輪として円筒埴輪、朝顔形埴輪、形状不明の形象埴輪などが出土している。

また、古墳に伴わない遺物として周溝内上層内から、6世紀末と推定される須恵器、土師器な



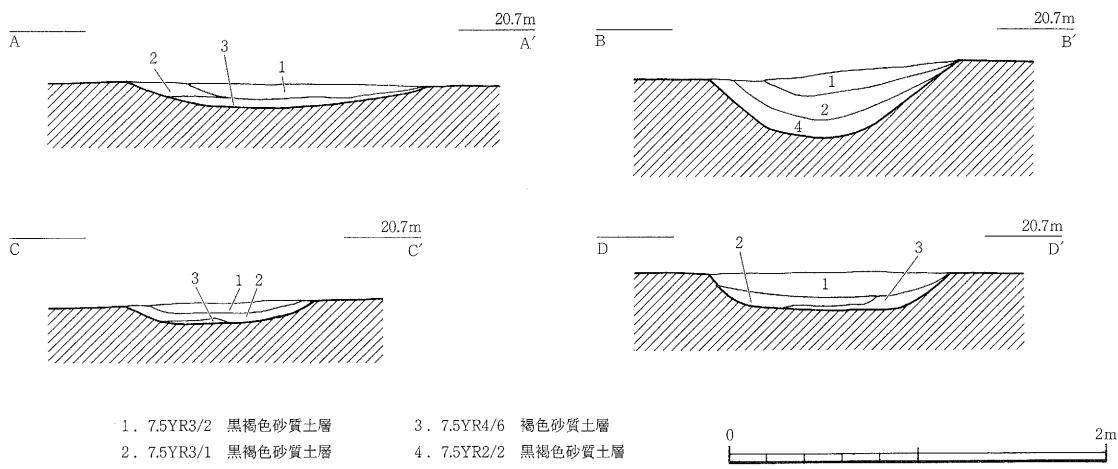
第101図 30号墳平面・断面図

どが出土した。

これら周溝内上層の遺物から6世紀末までは、周溝が存在していた可能性がある。 (奥)

出土遺物

土器 (第103図、図版53) 529は、須恵器壺の口縁部と推定される破片である。口縁端部は断面三角形に近く、端部外面下に若干垂れ下がる、突帯を巡らす。口縁端部から体部界にかけて外反気味に下る。頸部には、3段の突帯により区画し、文様帶を作り、波状文を施している。内外



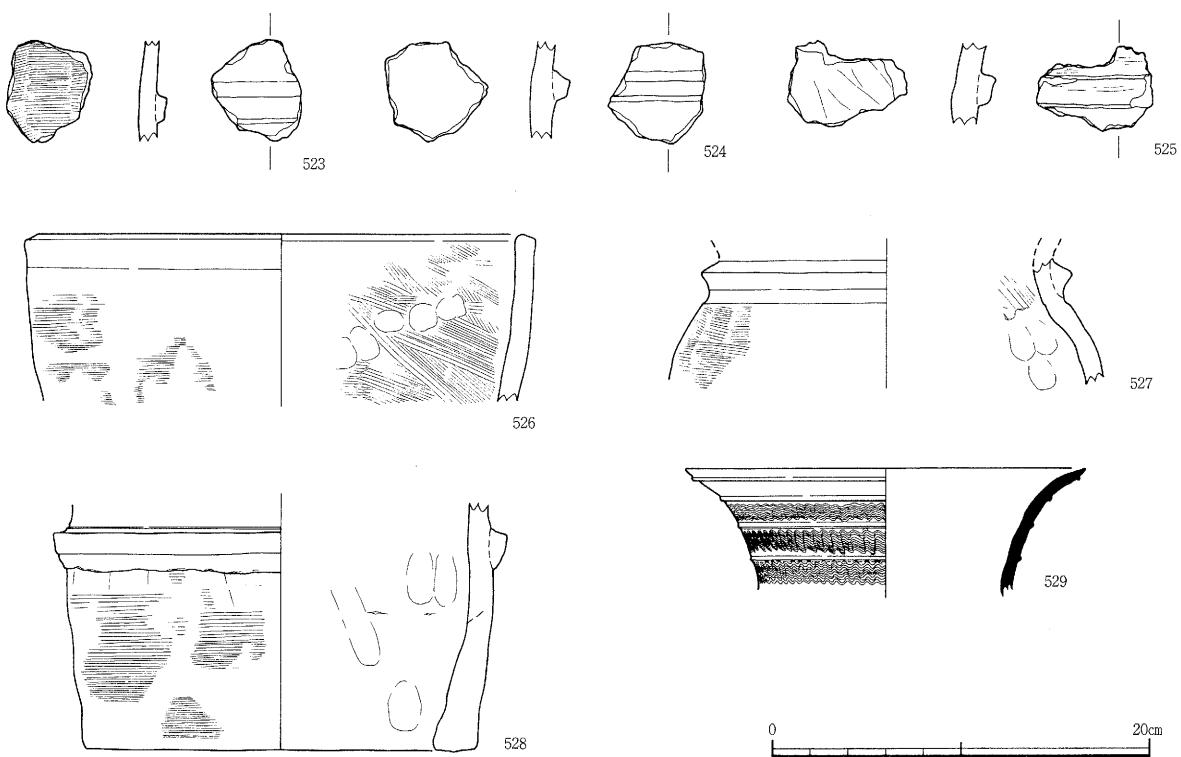
第102図 30号墳周溝土層断面図

面共回転ナデによって仕上げている。口径21.1cm前後、残存高約6.9cmを測る。(奥)

埴輪（第103図、図版75） 523から526・528は円筒埴輪、527は朝顔形円筒埴輪である。

523から525は、体部の小片である。523は、外面調整は摩滅により不明であるが、内面調整は丁寧なヨコハケを施している。突帯の断面形状は、かなり低い台形状を呈しており、下端の貼り付けは十分でない。524は、外面・内面調整とも摩滅により不明である。突帯の断面形状は、やや幅が細く高い台形状を呈している。525は、外面には突帯貼り付け時のナデ条線が認められるのみで、調整は不明である。内面調整は、斜め方向のユビナデである。突帯の断面形状はM字状で、下端の貼り付けは十分でない。色調・焼成は、523が淡黄色・軟質系、524が褐色・軟質系、525が須恵質と、三者三様である。

526は、口縁部片である。外面調整は、所々で剥離しているが、ヨコハケを施しているのがわかる。しかし、ヨコハケ残存部分が多くないため、静止痕の有無などは確認できない。内面調整は、ナナメハケを何重にも密に施しており、部分的にユビオサエやユビナデも行っている。口縁端部は、上面がくぼんでおり、ヨコナデをわずかに内面までまたがって行っていることが、内面ナナメハケとの切り合いから確実である。わずかに内弯気味に立ち上がるプロポーションであると思われる。口縁部径は、推定で27.0cmである。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。528は、底部片である。外面調整は一次調整に板ナデもしくはタテハケ、二次調整にヨコハケを施しており、内面調整はナナメ方向のユビナデである。外面のヨコハケ調整は、残存部が少ないが、底部下端から丁寧に行われたと推測される。底部径は、推定で21.0cmである。端部の器厚は2.4cmで、上方の器厚（1.0cmから1.5cm）よりもかなり厚くなっているが、この場合は上方からの加重がかかったためであることが断面から窺える。このため、底部高は約11.0cmであるが、本来はもう少し高い設定があったものと考えられる。突帯は、やや上面下端がつぶれた台形状の断面形状であり、下端の貼り付けは雑である。また、突帯上部には、突帯と平行して幅1mm程度の凹線が巡っている。このことから、2段目以上の突帯設定にL字状工具が用いられた可能性も考えられる。色調・焼成は、褐色・軟質系である。



第103図 30号墳出土遺物

527は、朝顔形円筒埴輪の肩部にあたる。外面調整はヨコハケ、内面調整は肩部にユビナデ、ユビオサエ、頸部以上にナナメハケを施している。残存部分が少なく、外面ヨコハケの静止痕の有無は確認できない。頸部突帶径は推定で19.6cmであり、肩部下端径が約24cm前後と考えられることから、肩部から頸部にかけての湾曲度は大きくない。突帶部分には、塗布された赤色顔料が残存している。色調・焼成は、褐色・硬質系である。
(小浜)

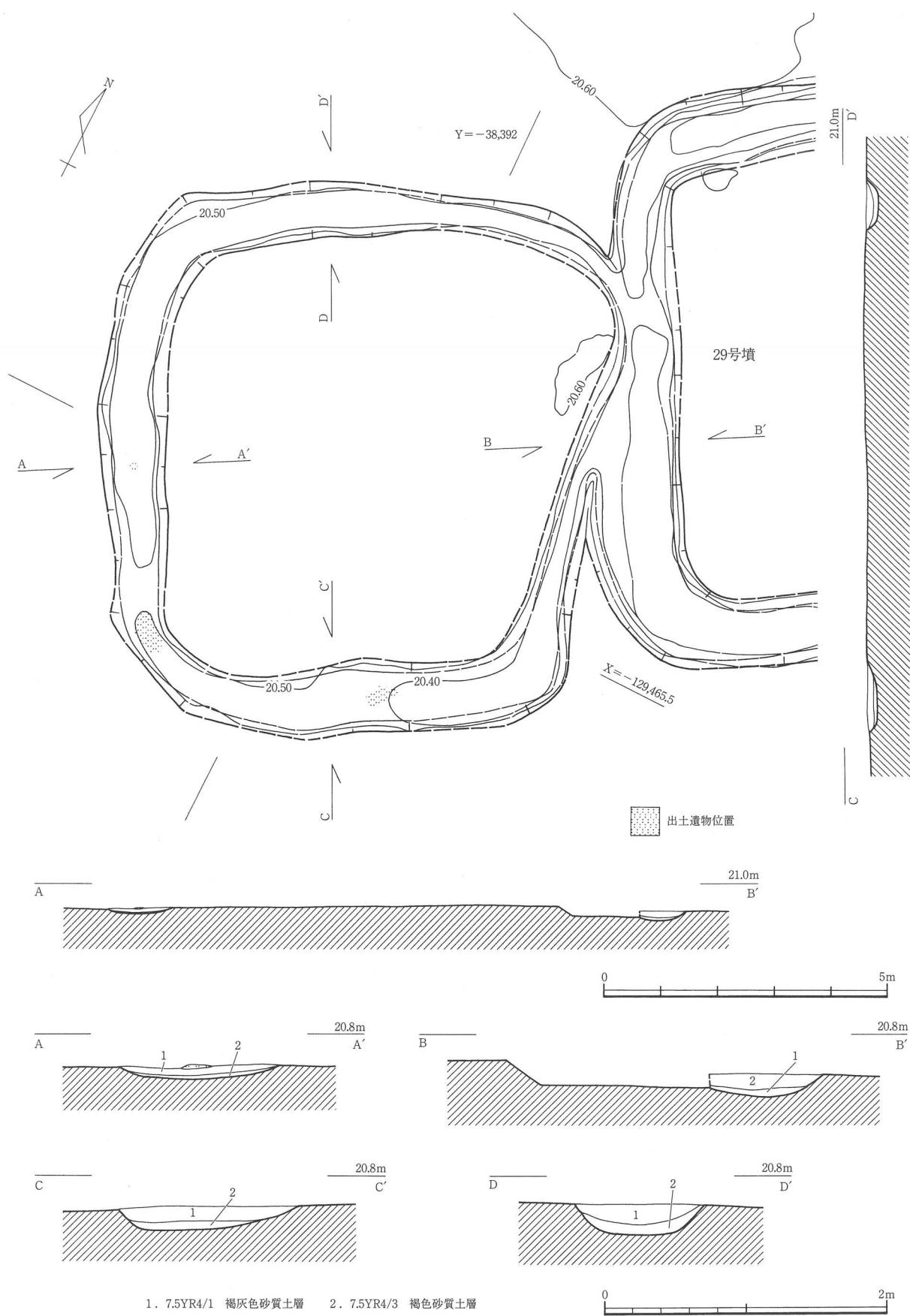
32. 31号墳（第104図、図版37-1・38-1～4）

D地区に存在し、X=-129,464、Y=-38,392付近を中心として検出した。古墳の東側は近世の削平により欠失しているが、位置関係から東周溝と古墳東側に存在する29号墳の西周溝と溝の大半を共有しているものと推定される。西側には33号墳、南側には30号墳、北側には32号墳が接するように位置する。

墳丘は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈していたものと推定され、東西長7m前後、南北長約7.6m、全長は、東西長については、古墳の東側が、近世の削平により欠失していること、東周溝と古墳東側に存在する29号墳の西周溝と溝の大半を共有しているものと推定されることから、東西長は9.3m前後、南北長約9.6mを測る。方位はN-18°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、西周溝幅約1.1m、深さ約0.1m、南周溝幅約1.5m、深さ約0.15m、北周溝幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。なお、東周溝については、削平されているため不明である。周溝の埋土は、褐灰色砂質土が凹レンズ状に堆積している。

31号墳に伴うと推定される遺物としては、周溝内上層から、埴輪片が出土した。埴輪の種類は、円筒埴輪、形象埴輪である。形象埴輪の種類は、鶏の一部2個体、不明が1点ある。また、古墳



第104図 31号墳平面・断面図

に伴わない遺物として、周溝内上層内から弥生時代後期の土器が出土している。 (奥)

出土遺物

埴輪（第105図、図版75） 530から538は円筒埴輪、539から541は形象埴輪である。

530・531は、口縁部片である。ともに、外面調整はヨコハケ、内面調整は板状工具による斜め方向のナデを施している。ヨコハケは、摩滅によって不明瞭なこともあります、ハケ目工具の静止痕は確認できない。また、端部の最終ヨコナデ調整でかすれているが、上端まで丁寧にヨコハケを施していることが観察できる。口縁部内面の板状工具による調整は、他の古墳ではありませんみられない特徴である。

口縁部径は、推定で530が22.0cm、531が22.2cmと、ほぼ同じである。端部上面は、わずかに凹面を形成している。色調・焼成は、褐色・軟質系である。

532から535は、体部片である。外面・内面調整は、533は摩滅により不明であるが、532は外面に一次タテハケを顕著に残したヨコハケ、内面に板状工具による斜め方向のナデを施している。これに対し、534・535は、外面にヨコハケ、内面に斜め方向のユビナデを施している。ヨコハケのハケ目の粗密は、532に比べて粗い。3点とも外面調整のヨコハケには、ハケ目工具の静止痕が認められる。この外面・内面の調整差は、法量とも対応関係が認められる。すなわち、体部径は532が18.2cmから19.6cm、533が19.6cmから20.8cmと小型なのに対し、534は25.4cmから27.0cm、535は24.8cmから25.8cmと中型になる。突帯の断面形状は、533がしっかりした台形状を呈するのに対し、534・535はやや低い台形である。また、534は突帯上面をわずかに凹面にしており、535は突帯下端の貼り付けが不十分である。

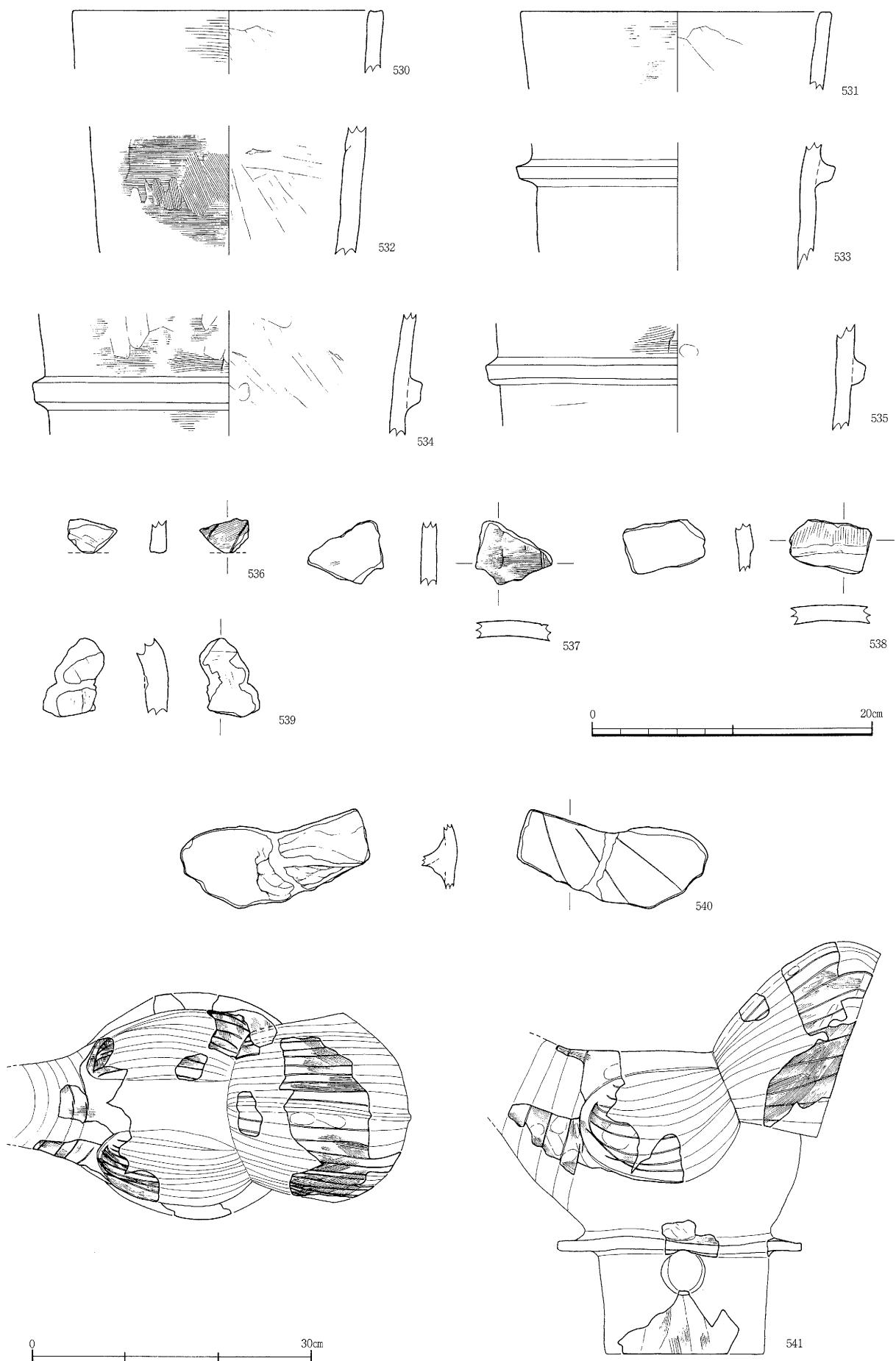
色調・焼成は、532・533が褐色・軟質系、534・535が褐色・硬質系であり、先にみた調整や法量による差と対応する。

536・537は、ともにヘラ記号を有する。536は2条の平行直線、537は1条の直線が認められる。外面調整にヨコハケ、内面調整にユビナデを施しており、おそらく円筒埴輪片であろう。

538は、タテハケを施した部分と器壁が薄くなった部分が認められる破片で、横断面の状況から円筒形になると考えられる。外面調整が一次タテハケのみの円筒埴輪底部および1条目突帯の剥離部分に相当する可能性がある。色調・焼成は、褐色・軟質系である。

539は外面・内面調整とも不定方向のナデを施しており、器壁が厚く、内弯する形状である。調整や器壁の厚さから朝顔形円筒埴輪の肩部とは異なると考えられることから、不明形象埴輪であろう。色調・焼成は、淡黄色・軟質系である。

540・541は、鶏形埴輪である。540は、鶏形埴輪の羽にあたる。外面に3条の線刻があり、内面には本体部分と剥離した帶状破面が残っている。色調・焼成は褐色・軟質系であり、後述する541とは異なるため、541とは別個体であろう。541は、基底部の裾および突帯部分、頸部直下から尾羽にかけて一部分が残存している。脚は見つかっていないが、基底部の突帯上面に、脚の剥離脱落したような痕跡がわずかに認められる。色調・焼成は淡黄色・軟質系である。 (小浜)

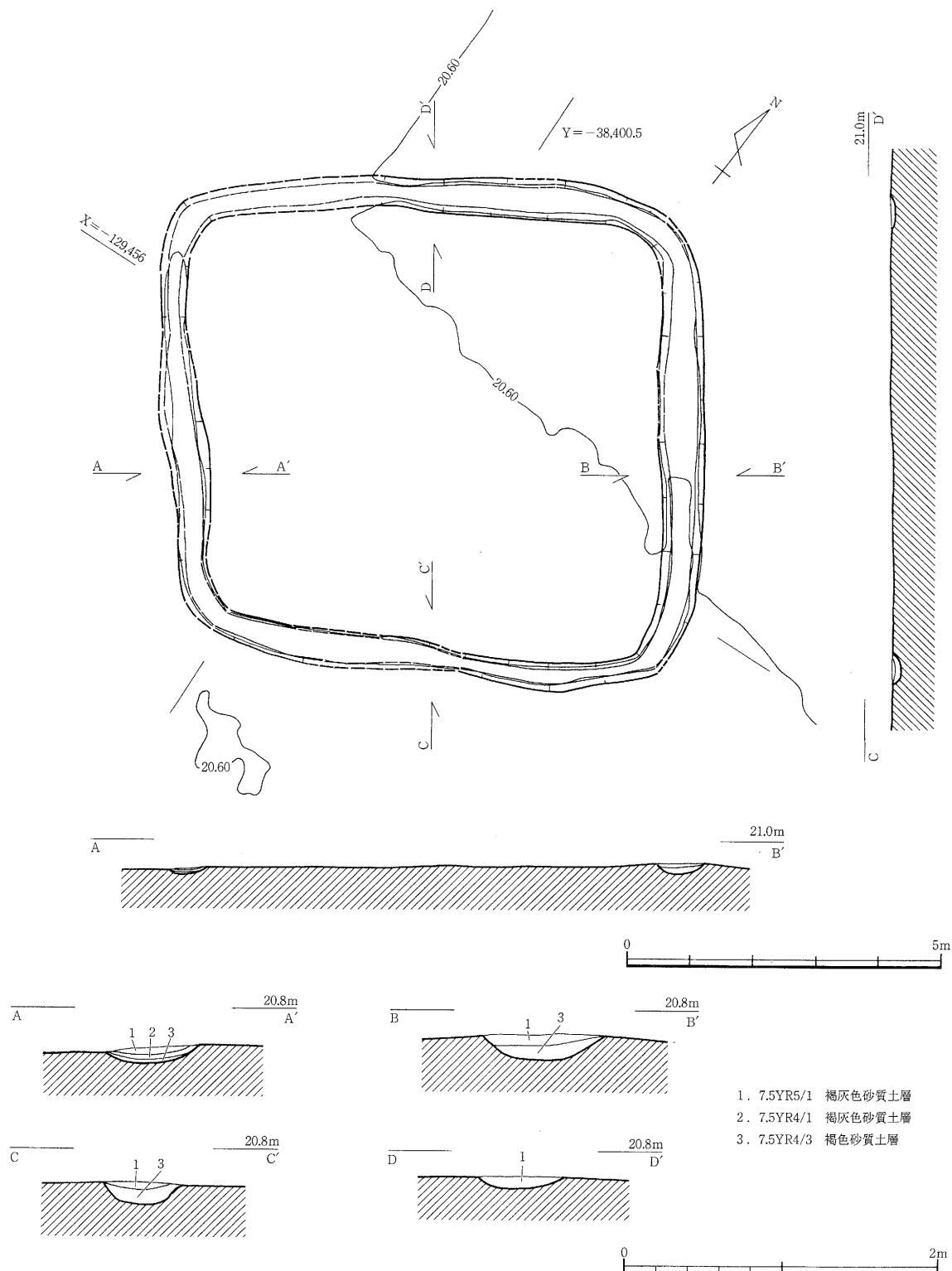


第105図 31号墳出土遺物

33. 32号墳（第106図、図版38—5・6、39—1～4）

D地区とE地区に存在し、X=−129,456、Y=−38,399.1付近を中心として検出した。古墳は、南東側に2m離れて31号墳と隣接し、南西側は約7mの空閑地を隔てて36号墳が存在する。西北・北東方向には広い空閑地を設ける。

墳丘は、隅丸方形を呈し、東西長7.1m、南北長6.8m、周溝を含めた全長は、東西長8.5m、南

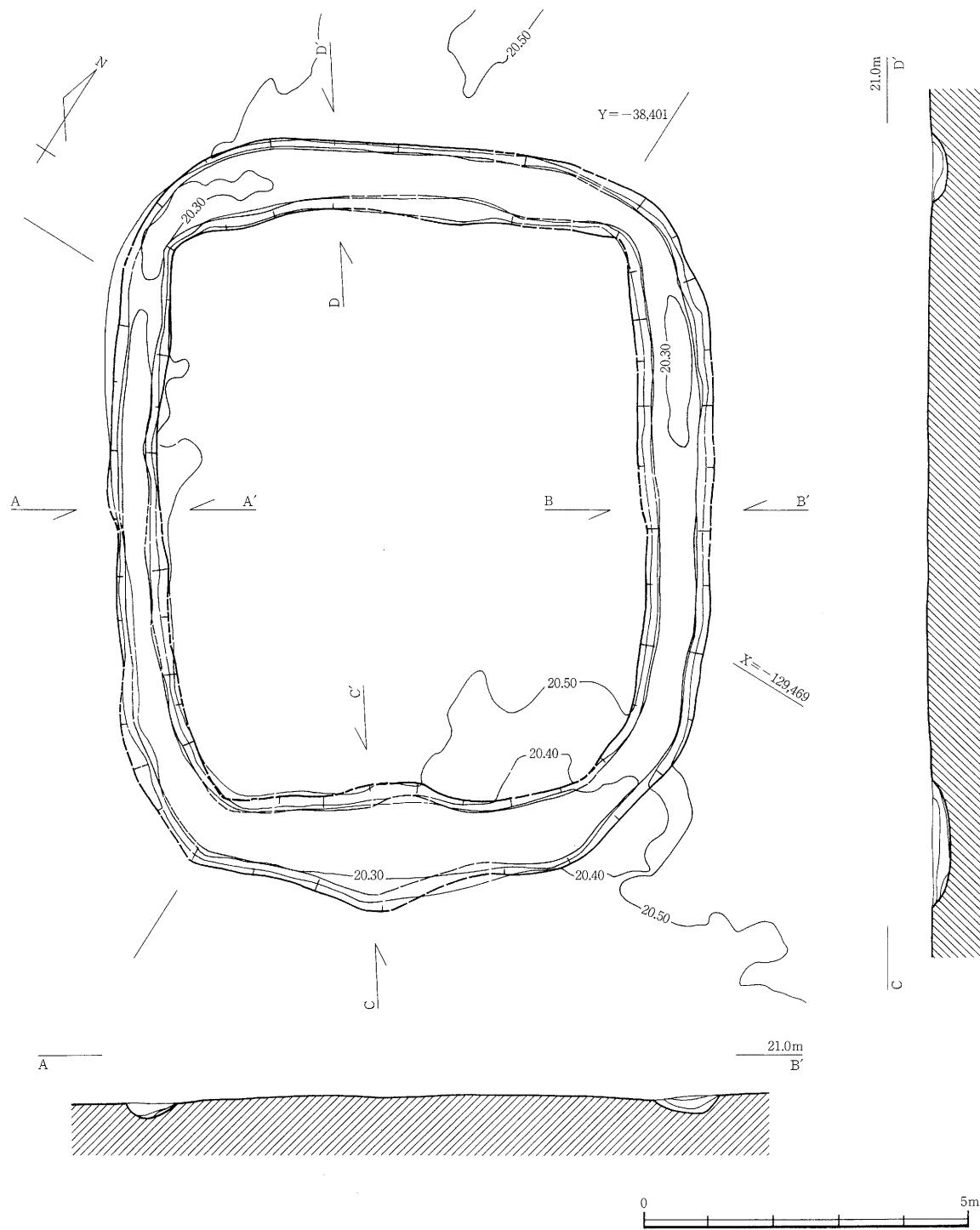


第106図 32号墳平面・断面図

北長7.8mを測る。方位はN-32°-Wである。

周溝は、断面が浅い「U」字状を呈し、東周溝幅0.8m、深さ0.2m、西周溝幅0.6m、深さ0.1m、南周溝幅0.5m、深さ0.1m、北周溝幅0.6m、深さ0.1mを測る。北西コーナー一部から北周溝の一部は削平され検出することができた。本来周溝底が浅かったものと考えられる。周溝の埋土は、北周溝で褐灰色砂質土の単層、その他の周溝では最上層に褐灰色砂質土が観察された。2層以上の土層が観察される周溝は、単純なレンズ状堆積を示し、その状況から墳丘崩壊土等を区別することができなかった。遺物は出土しなかった。

(山上)



第107図 33号墳平面・断面図

34. 33号墳（第107・109図、図版39-5・6、40-1～5）

D地区とE地区に存在し、X=-129,469.3、Y=-38,401.2付近を中心として検出した。古墳は、北東側に31号墳、北西側に36号墳と隣接し、南西側は5mの空閑地を隔てて37号墳が存在する。南東側には35号墳までの間に広い空閑地を設ける。

墳丘は、隅丸方形を呈し、東西長7.4m、南北長8.7m、周溝を含めた全長は、東西長9.2m、南北長10.3mを測る。方位はN-31°-Wである。

周溝は、断面が浅い「U」字状を呈し、東周溝幅1.0m、深さ0.2m、西周溝幅0.8m、深さ0.3m、南周溝幅2.0m、深さ0.3m、北周溝幅1.0m、深さ0.2mを測る。周溝の埋土は、基本的に3層に分けることができ、上層、中層は褐灰色砂質土、黒褐色砂質土が観察され、最下層には褐色砂質土あるいは暗褐色砂質土が堆積する。

遺物は周溝から、弥生土器、須恵器、埴輪、瓦器、青磁等が出土した。当古墳に係わる遺物としては、第108図に示す円筒埴輪をはじめ、埴輪の小片が少量出土した。（山上）

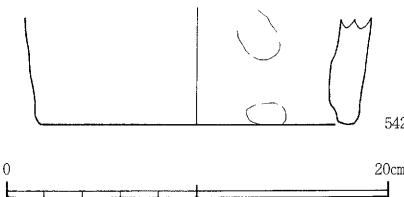
出土遺物

埴輪（第108図、図版75） 542は、円筒埴輪の底部片である。摩滅により焼成はほとんど不明であるが、内面調整はユビナデが施された痕跡がわずかに認められる。底部径は、推定で17.0cmである。胎土は粗く、5mm以上の砂粒を含む。色調・焼成は、褐色・軟質系である。（小浜）

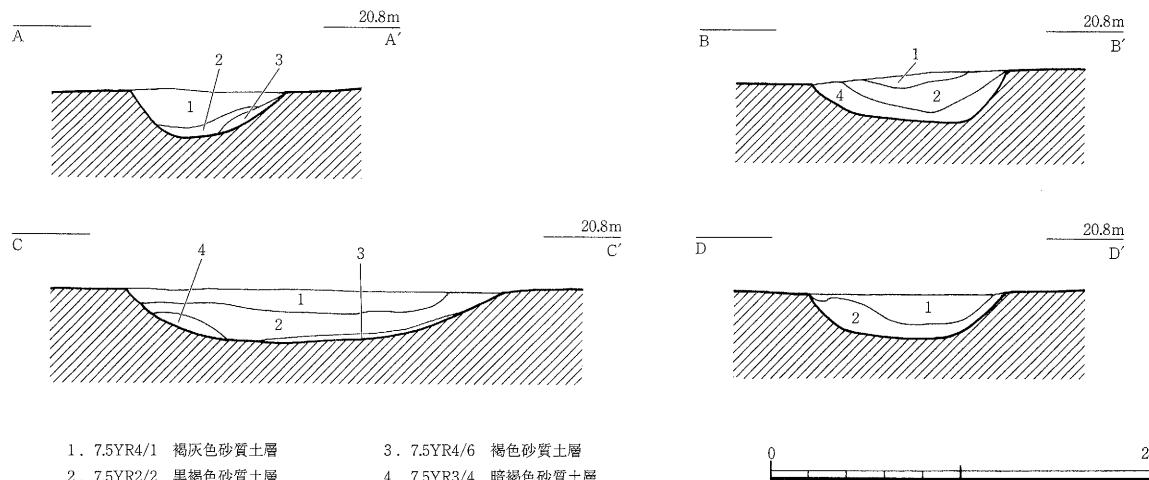
35. 34号墳（第110図、図版40-6・41-1～4）

D地区に存在し、X=-129,486.7、Y=-38,380付近を中心として検出した。東側は、区画溝を伴う古墳が全く存在しない空閑地帯、西側を35号墳、北東側を約3m離れて30号墳、北西側を古墳が全く存在しない空閑地。南東側は、古墳が全く存在しない空閑地、南西側は調査区外となっている。

古墳は、地山面が削平を受けたものと推定され、周溝の北東辺部から北西辺部、南西辺部、東周溝中央部から



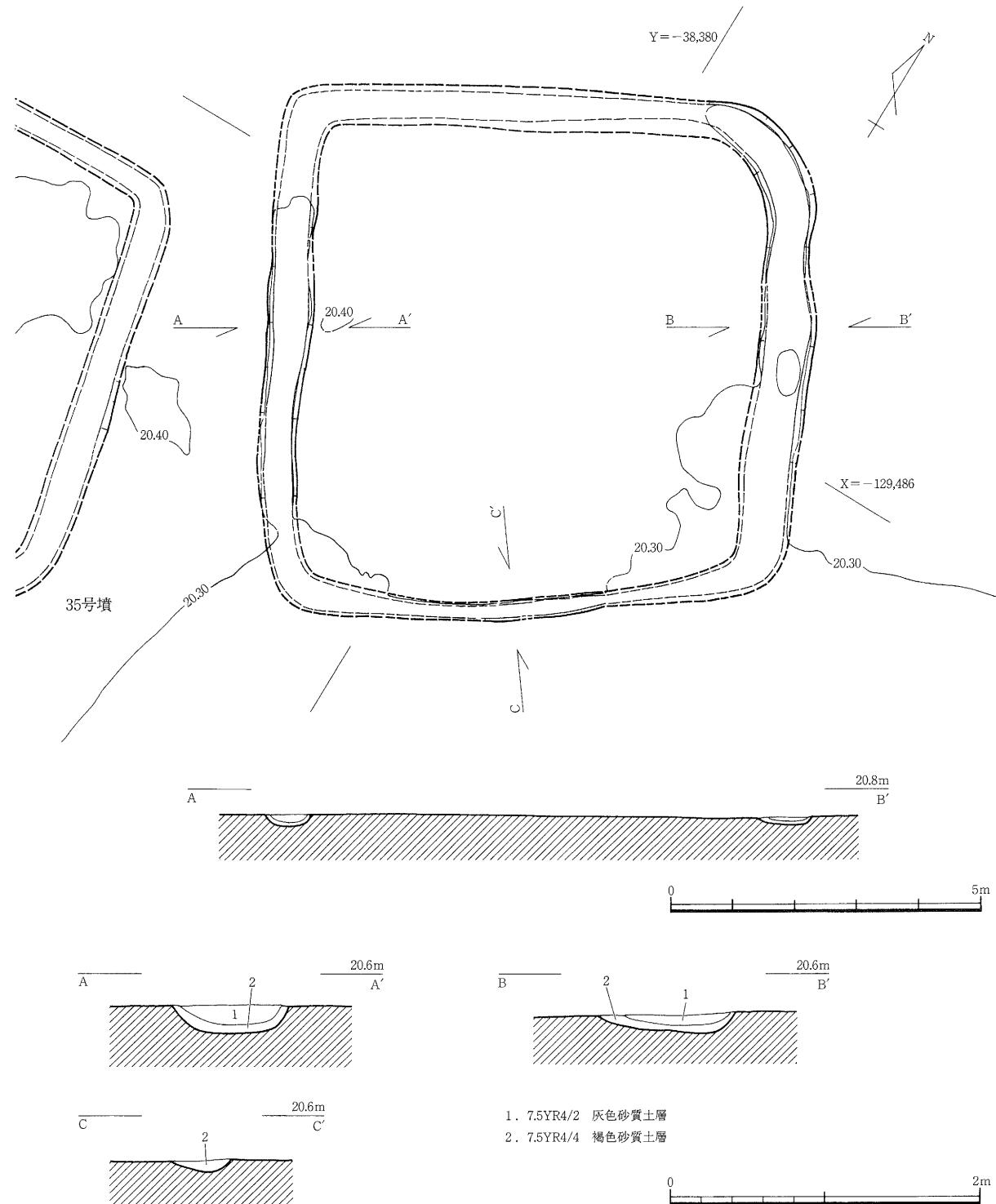
第108図 33号墳出土遺物



第109図 33号墳周溝土層断面図

南周溝中央付近にかけて欠失している。残存していた周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、東西長約7.2m、南北長7.5m前後、全長は、東西長約8.7m、南北長8.6m前後と推定される。方位はN-31°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、東周溝は幅約0.9m、深さ約0.1m、西周溝幅約0.7m、深さ約0.2m、南周溝幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。北周溝については欠失しているため不明であるが、周囲の周溝の形状から0.7m前後と推定される。周溝の埋土は、凹レンズ状に堆積し、



第110図 34号墳平面・断面図

上層に灰色砂質土、下層に褐色砂質土が堆積している。

遺物は全く出土しなかった。(奥)

36. 35号墳（第111図、図版40-6・41-5）

D地区に存在し、古墳の約2分の1は、南の調査区外にある。古墳は形状から、X=-129,491、Y=-38,389.5付近が中心と推定される。東側は、34号墳、北側は、古墳が全く存在しない空閑地、西側と南側は、調査区外となっている。

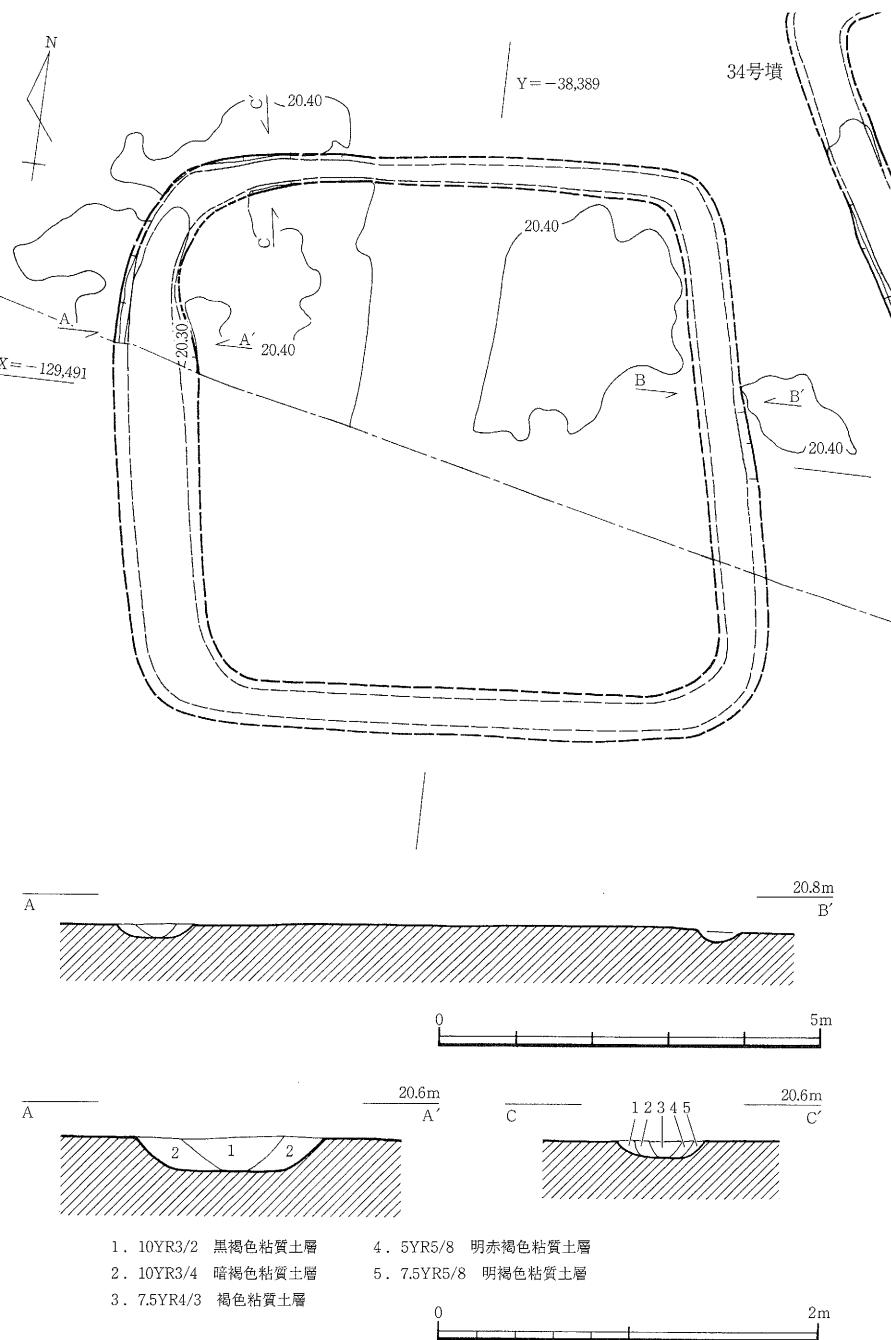
古墳は、地山面が削平を受けたものと推定され、北周溝の中央部から北西辺部、東周溝中央部付近の東肩部の周溝のみ残存していた。残存していた周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、一辺6.5m前後、古墳の全長は8.2m前後を測るものと推定している。

方位はN-10°-W

である。

周溝は断面「U」字形に近い形を呈し、西周溝幅約1.0m、深さ約0.2m、北周溝幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。東周溝については大半が欠失しているため不明であるが、周囲の周溝の形状から0.6m前後と推定される。なお、南周溝は、調査区外にあるため不明である。

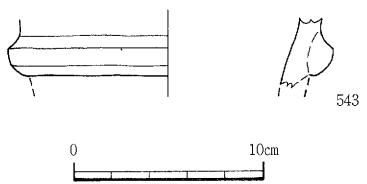
周溝の埋土は、凹レンズ状に褐色系の粘質土が堆積している。出土した遺物は、円筒埴輪の小片が一片出土しているのみで、他のものはなかった。(奥)



第111図 35号墳平面・断面図

出土遺物（第112図、図版75）

埴輪543は、円筒埴輪の体部片である。外面・内面調整とも摩滅により不明である。体部径は、推定で14.8cmから16.0cmである。突帯の断面形状は、台形状だが、摩滅により不明瞭である。また、突帯面下部の稜線があまく、下端の貼り付けも雑な部分が残る。色調・焼成は、褐色・軟質系である。



第112図 35号墳出土遺物

(小浜)

37. 36号墳（第113図、図版42-1）

E地区に存在し、X=-129,465、Y=-38,409.3付近を中心として検出した。古墳は、南東側に33号墳と隣接し、北東側に6mの空閑地を隔てて32号墳、北側には42号墳が存在する。他の方向には古墳が検出されず、37号墳と伴に西端に位置する古墳と考えられる。

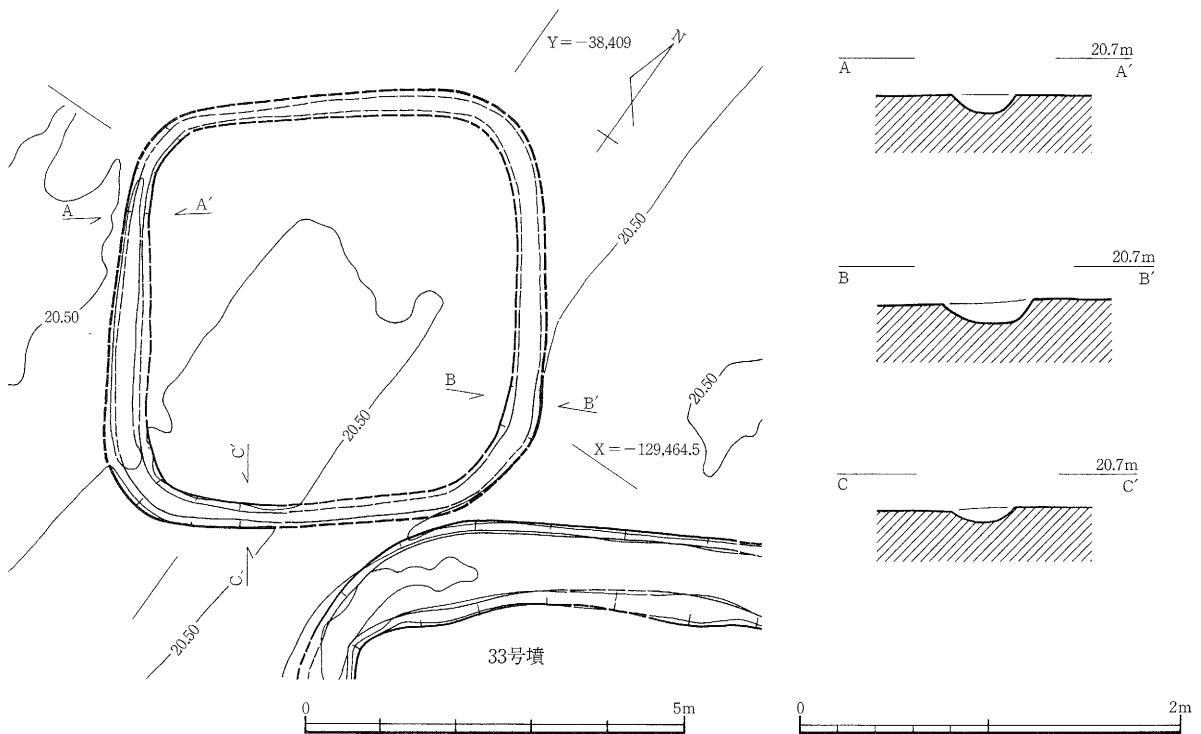
墳丘は、隅丸方形を呈し、東西長4.8m、南北長5.0m、周溝を含めた全長は、東西長5.7m、南北長5.6mを測る。方位はN-35°-Wである。

周溝は、断面が浅い「U」字状を呈し、東周溝幅0.5m、深さ0.1m、西周溝幅0.3m、深さ0.1m、南周溝幅0.3m、深さ0.1m、北周溝推定幅0.3mを測る。北周溝、東周溝の北半部、西周溝および南周溝の一部は大きく削平を受けていた。遺物はほとんど出土しなかった。

(山上)

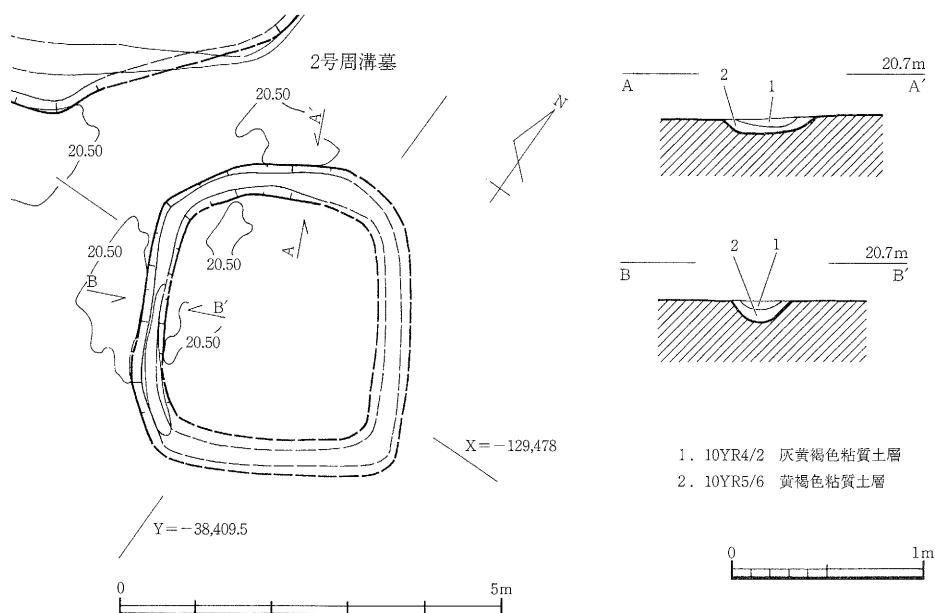
38. 37号墳（第114図、図版42-2）

E地区に存在し、X=-129,478.1、Y=-38,409.7付近を中心として検出した。古墳は、北東側に5mの空閑地を隔てて33号墳が存在する。他の方向には古墳が検出されず、西端に位置する古墳と考えられる。



第113図 36号墳平面・断面図

墳丘は、東側の削平が著しく、約2分の1を欠く。隅丸方形を呈すると考えられ、推定ではあるが、東西長2.8m、南北長3.2m、周溝を含めた全長は、東西長3.6m、南北長4.1mを測る。方位はN-35°-Wである。



第114図 37号墳平面・断面図

周溝は、北周溝および西周溝が残存する。断面は浅い「U」字状を呈し、西周溝幅0.3m、深さ0.1m、北周溝幅0.5m、深さ約0.1m前後を測る。周溝の埋土は、2層に分けることができ、上層は灰黄褐色粘質土、下層は黄褐色粘質土が堆積する。

遺物は須恵器壺の小片が周溝から出土した。

(山上) 第115図 37号墳出土遺物

出土遺物

土器（第115図、図版53）544は、須恵器壺の口縁部と推定される小片である。口縁端部は丸く、口縁端部から体部にかけて内傾し直線的に下る。口縁下部に緩やかな突帯により区画し、文様帯を作り、細やかな波状文を施している。内外面共回転ナデによって仕上げている。口径11.2cm前後、残存高約3.1cmを測る。

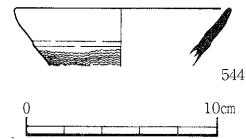
(奥)

39. 38号墳（第116図、図版42-3・43-1・2）

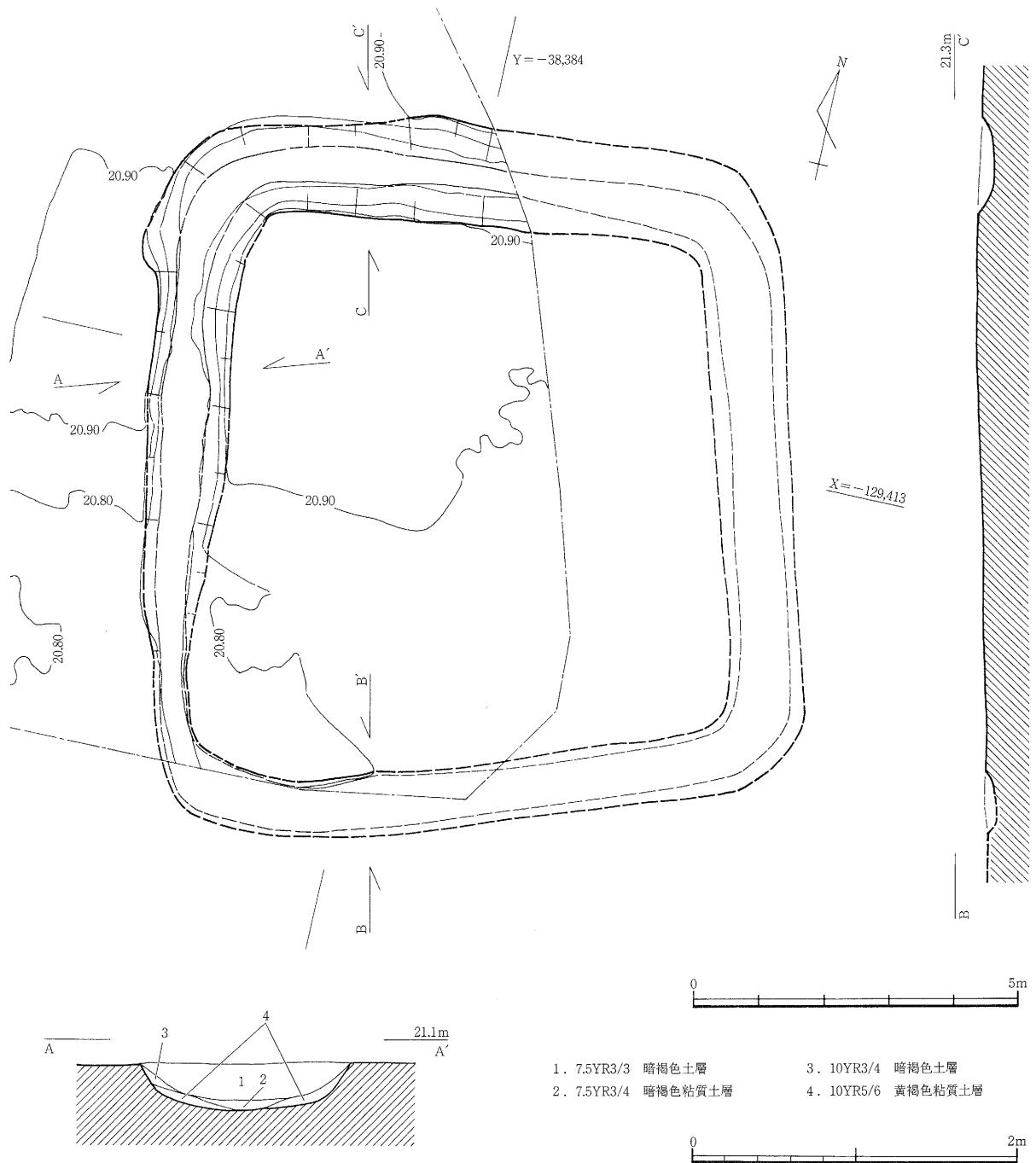
F地区に存在し、X=-129,414、Y=-38,383付近を中心として検出した。古墳は、北側に22号墳、西側に21号墳、南側に4号墳が隣接する。東側は調査区外に伸び、遺構の続きを検出することができなかったが、周辺の古墳配置から考えて5号墳が東側に隣接すると考えられる。

墳丘は、東側の2分の1が調査区外に伸びるため、詳細を明らかにできないが、隅丸方形を呈すると考えられる。東西長5.7m以上、南北長8.6m、周溝を含めた全長は、東西長6.4m以上、南北長10.3m以上を測り、復元すると東西長9.9m、南北長11.0mを測ると考えられる。方位はN-12°-Wである。

周溝は、北周溝および西周溝が残存する。断面は浅い「U」字状を呈し、西周溝幅1.3m、深さ0.3m、北周溝幅1.5m、深さ0.2mを測る。周溝の埋土は、基本的に上下2層に分けることができ、下層は周溝が開口していた段階での堆積で、暗褐色粘質土・黄褐色粘質土が観察される。上



10cm



第116図 38号墳平面・断面図

層は一時に堆積したかのような暗褐色土の単層である。

遺物の多くは、上層の堆積層から出土した。この堆積層は後世の開発等で墳丘が削平された際の堆積と考えることができる。

周溝から出土した古墳に関係する遺物は、第117図に示す須恵器高杯、甕、壺および第118図に示す円筒埴輪、形象埴輪が出土した。形象埴輪の内訳は、草摺形1点、不明1点である。

古墳に伴わない遺物として弥生土器、6世紀後半や奈良時代の須恵器等が出土した。(山上)

出土遺物

土器(第117図、図版49・50) 545・546は須恵器有蓋高杯蓋である。545は、全体的に丸みを

持つ形状で、口縁端部はやや丸みを持つ。端部から内弯気味に斜め上方に延び稜部に至る。稜部は断面三角形に近い形を呈する。天井部は、丸みを持ち、頂部につまみを持つ。つまみは天井部の界から、外反気味に上方に延び、端部は丸い。端部から中央部に向かって内弯気味に下る。調整は天井部外面の稜部よりやや上まで回転ヘラケズリ、残りは回転ナデによって仕上げる。口径約11.9cm、つまみ径約3.4cm、器高約7.8cmを測る。

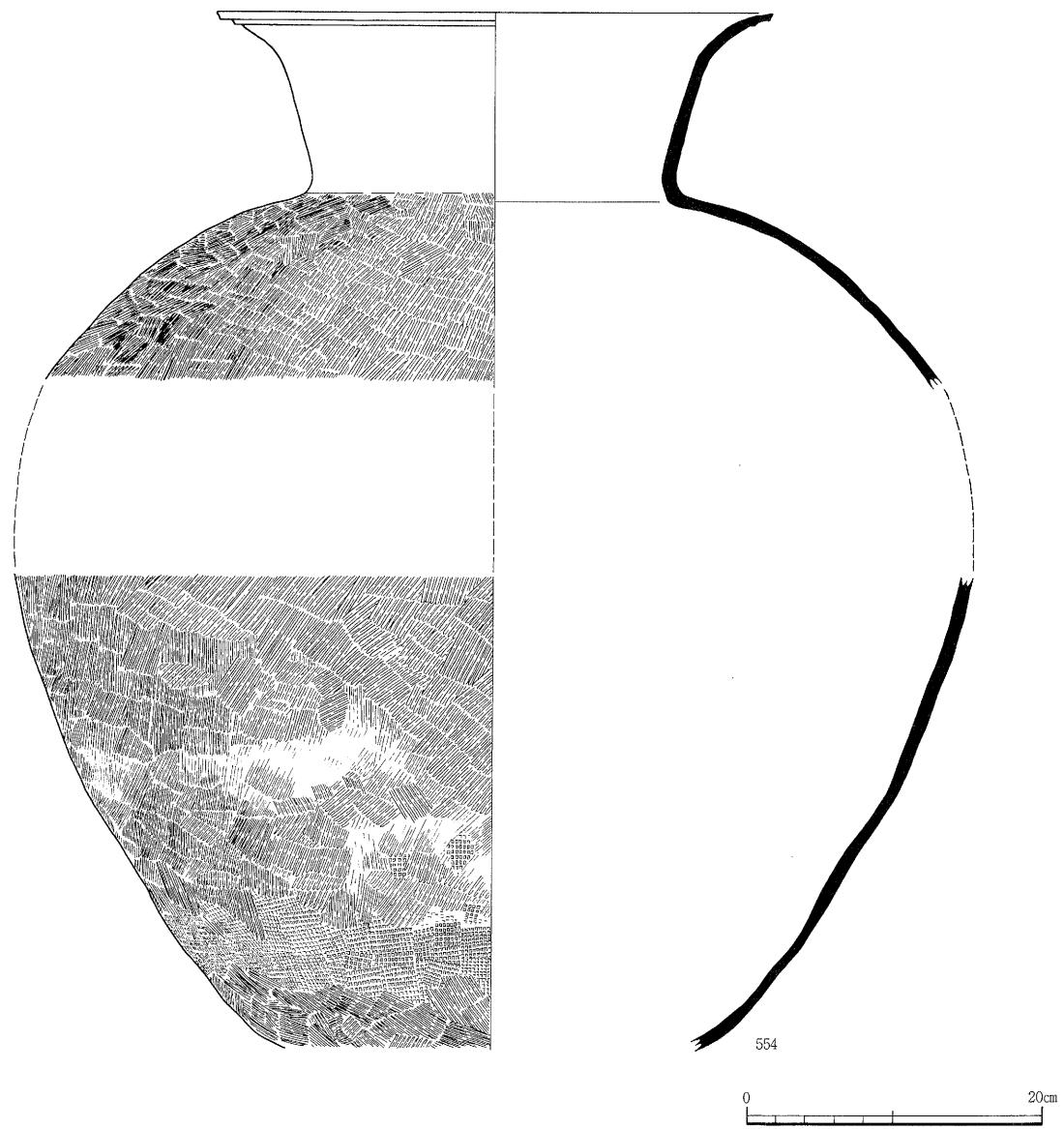
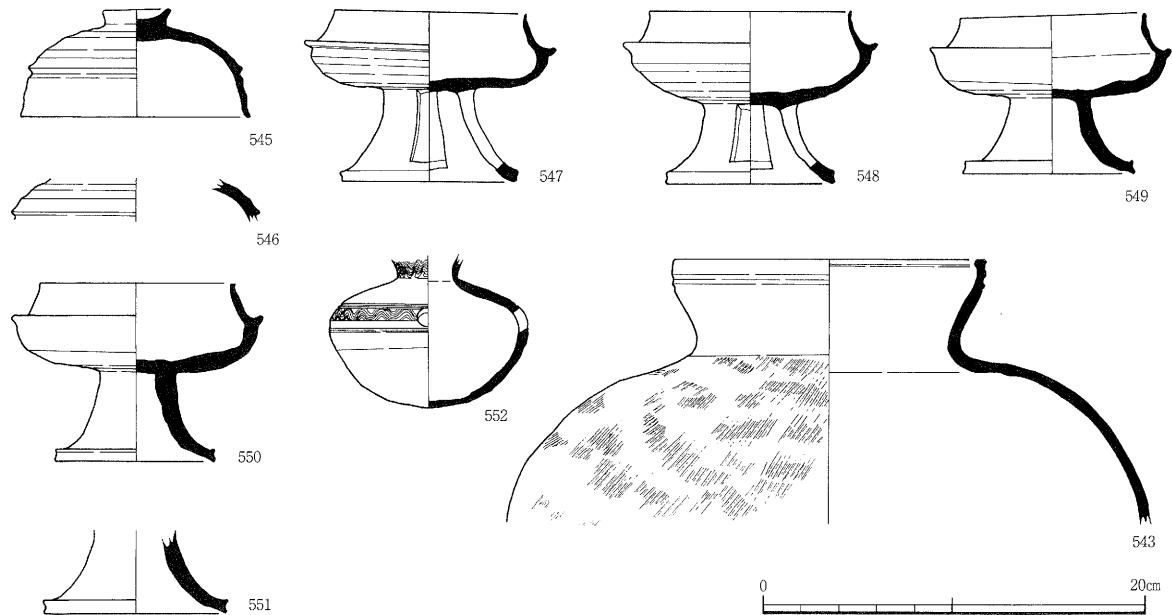
547から551は須恵器有蓋高杯である。547の杯受部の形状は、断面三角形に近くやや上方に延びる。受部から口縁端部にかけて外反気味に斜めに延び、端部は細くやや面を持つ。体部は浅く、底部は平らに近い。脚部は、脚底から外反気味に斜めに延び、体底部に至る。脚底部は角張り、中央部がやや窪む。脚部柱部の4方向に台形に近い透かし孔を開けている。調整は、杯部外面の受部下から脚部付近まで回転ヘラケズリ、残りは回転ナデによって仕上げている。口径約10.0cm、脚径約8.9cm、器高約9.1cmを測る。548は、形状は547と似ているが、体部がやや深く、脚部もやや短い。口径約10.6cm、脚径約8.6cm、器高約9.3cmを測る。549・550は、形状は547・548と似ているが脚部に透かし孔がないものである。549の口縁端部は細く丸みを持つが、550は角張り、その中央部に緩やかな沈線を持つ。脚部については549は短く、550は長い。549は口径約9.6cm、脚径約8.9cm、器高約8.6cm、550は口径約9.9cm、脚径約8.3cm、器高約9.5cmを測る。

552は須恵器瞭で、口縁部が欠損している。頸部は外反気味に外上方に延び、外面に波状文を施す。体部は最大径がやや上方にあり、いわゆるそろばん型を呈する。外面の最大径付近と約1cm上方に緩やかな沈線を各2本巡らし区画し、内部に波状文を施し、また径約1.2cmの孔が穿れている。外面の体部最大径のやや下までは回転ナデ、その下から底部までは手持ヘラケズリの後ナデ、内面は、底部付近までは回転ナデ、底部はナデによって仕上げている。

553は須恵器壺で口縁部から体部上半まで残存している。口縁部は短く、頸部との界には凹線を巡らす。そこから直立気味に立ち上がる。口縁端部は角張り、凹面を持つ。頸部は口縁部の界から内傾し下る。体部は肩部が張り出す形状を示す。口縁部内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキの後ナデ消し、内面はナデによって仕上げている。口径約16.4cm、残存高約14.1cmを測る。

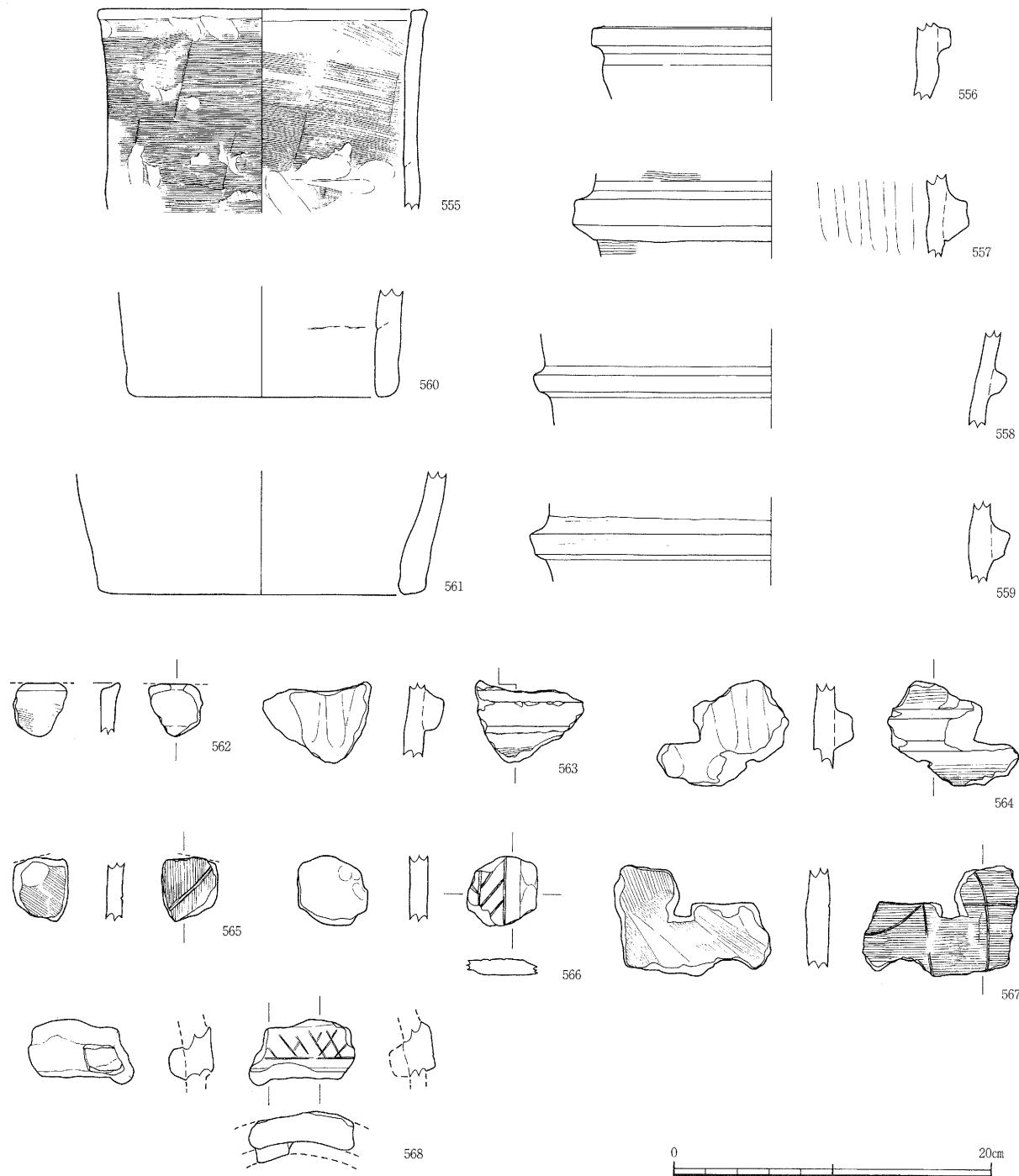
554は須恵器大甕である。体部の最大径付近、底部付近が欠損している。口縁部は体部の界から外反気味に外側に開き、口縁端部約3cm下からさらに大きく開く。端部は角張り、緩やかな凹面を持つ。端部下約1cm付近に断面三角形の凸帯を巡らす。体部上部は内弯し、緩やかに外側に下る。体部下は、やや内弯し斜めに下る。体部の上部及び下部の形状から最大径は上部にあるものと推定される。調整は、口縁部が回転ナデ、体部外面が平行タタキ、内面が同心円タタキの後ナデ消しを行っている。口縁径約38.0cm、残存高70.5cmを測る。 (奥)

埴輪（第118図、図版76） 555から565・567は円筒埴輪、566・568は形象埴輪である。555・562は口縁部片である。555は、外面調整にヨコハケ、内面調整は下方にユビナデ、上方にヨコ・ナナメハケを施している。外面のヨコハケは、ハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケで、下から



第117図 38号墳出土遺物 1

上に向かってらせん状に3周以上巡らされている。工具幅は5.1cm以上あると思われる。端部までヨコハケを行っているが、二次ヨコハケ以前の縦方向のユビナデが所々で認められる。また、内面調整では、下方のナデが上方の粘土紐の継ぎ目でもぐりこみ、その上をハケが切ることから、乾燥の小工程がこの間にあったことが窺える。この粘土紐の継ぎ目あたりの外面でも器面が不自然な膨らみをもっており、この付近でB種ヨコハケが切り合うことからも傍証できる。端部は、指でつまむようにしながら横方向に連続させており、やや肥厚している。端面は、平坦に仕上げられている。口縁部径は、推定で20.8cmである。口縁部高は、12.7cm以上である。色調・焼成は、褐色・硬質系である。562は、残存部が少ない。そのため、外面には端部のヨコナデ痕しか認め



第118図 38号墳出土遺物 2

られない。内面にはナナメハケがわずかに残る。端部は、端面をつまみあげるように強くヨコナデしたために、端面が外傾している。色調・焼成は、淡黄色・軟質系で、555と異なる。

556から559・563・564は、体部片である。調整については、556・558・559が摩滅により不明であるが、その他は外面調整にヨコハケ、内面調整に縦方向のユビナデを施している。

557のヨコハケは、突帶の下にもぐりこんでいるように観察される。この場合、外面二次調整と突帶貼り付けとの前後関係は逆転していることになり、乾燥・粘土紐積み上げの小工程がこの間にあったことが窺える。563では、ハケ目工具の静止痕がわずかに認められる。突帶の断面形状は、ほとんどがしっかりとした台形あるいはM字形を呈するが、563では下端の器壁との貼り付けは雑である。体部径は、556が20.0cmから21.2cm、557が22.0cm、558が27.0cmから29.0cm、559が27.6cmであり、小型・中型の2種が存在している。色調・焼成は、褐色・軟質系(558・559)、褐色・硬質系(563・564)、淡黄色・軟質系(556)、須恵質(557)とバリエーションがあるが、法量との明確な対応関係などは認められない。なお、564は全体としては褐色・硬質系に入るが、ほとんど須恵質化しつつある焼成状態である。また、図を掲載していないが、図版76-901は、褐色・硬質系の突帶部分であり、摩滅を受けているものの、しっかりとした台形状を呈している。

560・561は、底部片である。ともに外面・内面調整とも摩滅により不明である。プロポーションは、560はわずかに開きながら立ち上がるが、561は上方からの加重によりややS字状につぶれ、上方へは開き気味の形状となっている。底部径は、560で16.8cm、561で20.6cmである。ともに残存部分が少ないため、復元径には誤差が大きく含まれるが、小型と中型の2種が存在した可能性も残る。色調・焼成は、ともに褐色・軟質系である。

565・567は、ヘラ記号を有する資料である。565は、両面にハケ目をもった板状の一面にかすかにカーブ状となる1条の沈線が刻まれている。567は、外面にヨコハケ、内面にユビナデおよびナナメハケを施し、横断面が内弯する破片に、直線および曲線を縦・横・斜めに組み合わせたような構成をとっている。記号文のほか、絵画文となる可能性もある。とともに、円筒埴輪の体部片である可能性が高い。

566は、小片であるが、一辺に端面をもち、一面に綾杉文を線刻している。草摺形埴輪であると考えられる。568は、横断面が円弧状になる器壁の厚い破片であり、一面に直線と斜格子文を刻んでいる。縦断面から、上方へはくびれ、下方へはまだ開いていく形状であることがわかる。これは武人埴輪の腰から草摺にかかる部分である可能性があるが、断定はできない。色調・焼成は、ともに淡黄色・軟質系である。

(小浜)

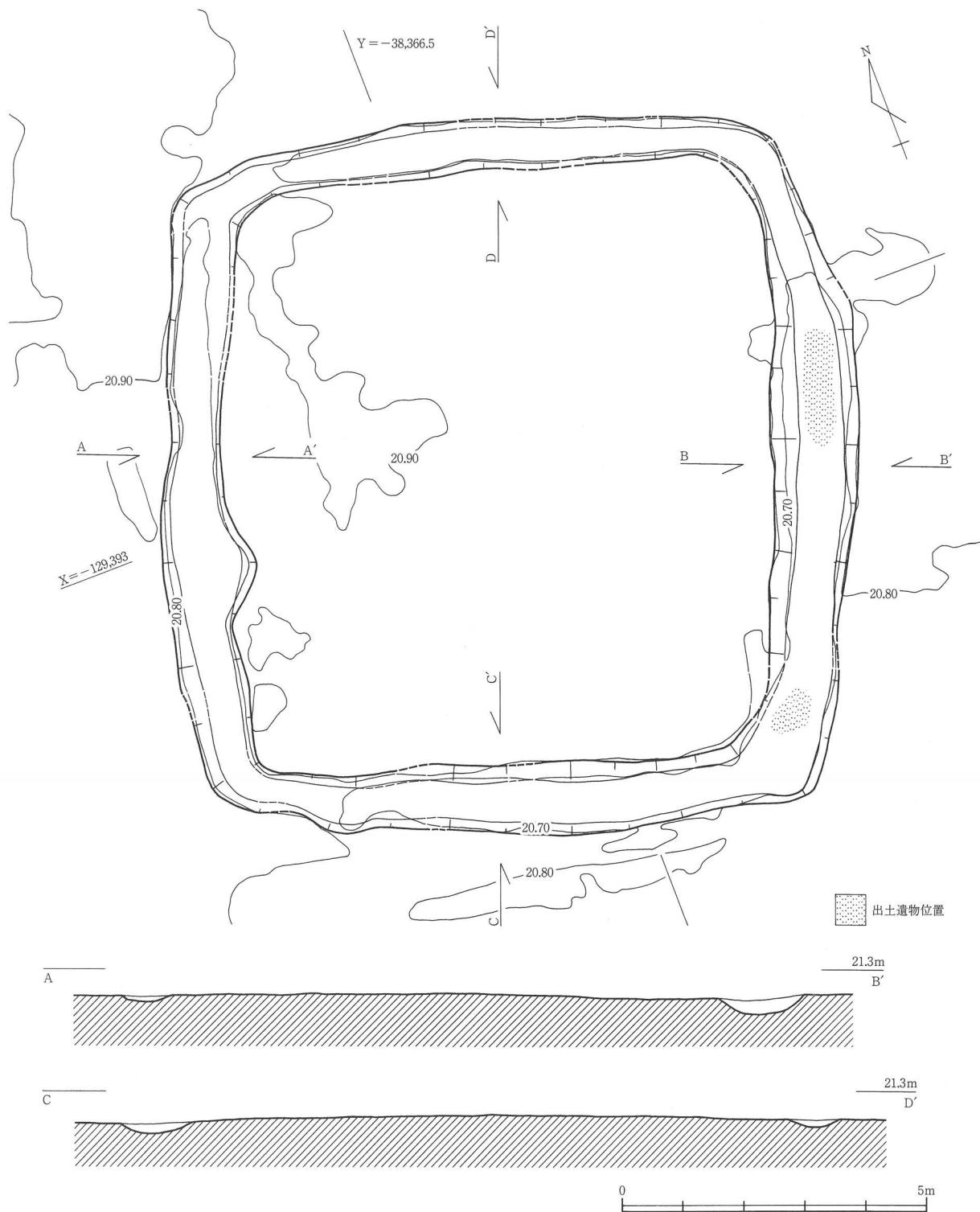
40. 39号墳（第119～121図、図版43-3・44）

H地区のX=-129,394、Y=-38,366.5付近で検出した。南東側に40号墳が位置するが、北側、西側に古墳は確認されない。墳丘部は後代の開発により削平されており、表土と薄く残っていた近世耕作土を除去すると段丘礫層が露出する状況であった。封土は全く残っておらず、周溝のみが確認された。墳丘の平面形はやや南北に長い方形を呈し、東西約9m、南北約9.8m、周溝を

含めた全長は、東西11.3m、南北11.8mを測る。墳丘の主軸はN-20°-Eを示す。

周溝の断面形は地山の段丘礫層が硬かったためか、浅い逆台形を呈し、底面の凹凸が激しい。周溝の幅と深さは遺構検出面で、東周溝1.4m、0.3m、西周溝が0.8m、0.1m、南周溝が1.1m、0.1m、北周溝が1.1m、0.1m前後を測る。周溝の埋土は砂礫混じりの褐灰色土で、やや深い東周溝は粘質土である。

土器は東周溝南部と南周溝東部から多く出土している。土器は供膳土器とされる高杯が5個体



第119図 39号墳平面・断面図

以上出土している。周溝の南東コーナー付近では底面に接するような状態で土師器の高杯(578)や須恵器の高杯(571・572)、杯蓋(569)が出土している。比較的良好な残存状況から、墳丘東南角の裾部で墓前祭祀が行われ、比較的早い時期に周溝内に転落したと考えられる。須恵器は天井に刺突紋をもつ須恵器杯蓋、高杯、把手付鉢、竈、壺などで、初期須恵器段階の特徴を示すものが多い。

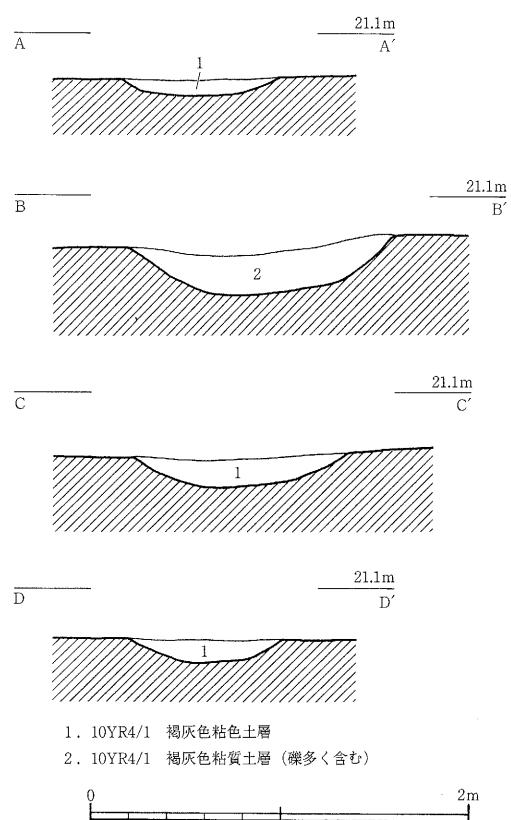
埴輪は東周溝の北部の埋積土上層から小破片の状態で纏まって出土した。円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪と考えられる小片がある。埴輪片は周溝上面の遺構検出面とほぼ同レベルで確認しており、奈良時代頃にこの地域を開発した際に埴輪を意図的に碎き、わずかに残っていた周溝内に投棄したものであろう。やや大きい朝顔形埴輪の口縁部は残存状況が良好で、埋土に突き刺さった様な状態で出土したので、早くに周溝に転落し、放棄されていたと考えられる。

(阿部)

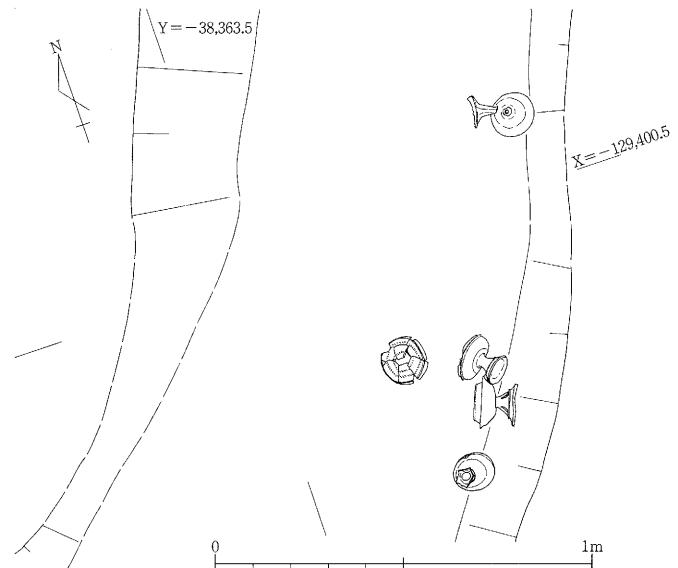
出土遺物

土器（第122図、図版50・51） 569・570は須恵器有蓋高杯蓋である。569は、口縁端部はやや角張り、緩やかな凹面を持つ。口縁端部から外反気味に斜め上方に延び稜部に至る。稜部は断面三角形に近く鋭い。天井部は、内弯し、斜め上方に延びる。天井部のほぼ中央にカキ目を施し、上下を区画しその内部に列点文を施す。頂部につまみを持つと推定されるが欠損している。頂部付近はつまみ貼付け時のナデ、後は回転ナデによって仕上げているが、天井部内面の一部にあて具の痕跡が認められる。口径約11.4cm、残存高約4.4cmを測る。570は、口縁部付近の小片である。569と形態、調整方法が似通っている。口径12.9cm前後、残存高約2.9cmを測る。

571・572は須恵器有蓋高杯である。571は、杯部の口縁端部は断面三角形に近く、内面に凹面を持つ。口縁は口縁端部からやや斜め方向に下り受部に至る。受部は断面三角形に近く外側にや



第120図 39号墳周溝土層断面図



第121図 39号墳東周溝南東コーナー付近遺物出土状況図

や張り出す。体部は、口縁部に比べ浅くやや内弯している。脚部は、杯部の界から外反し、脚底部にいたる。脚底部は、角張り断面三角形に近い。脚柱部と脚裾部の界には凹線が巡る。脚裾部の界から脚柱部の中央付近に3個所の断面三角形の透し孔を開ける。杯部内面から受部下までは回転ナデ、そこから脚柱部付近まで回転ヘラケズリ、脚部周辺はナデ、脚部外面から内面の5分の3は回転ナデ、そこから上はナデによって仕上げている。口径約10.9cm、脚径約10.4cm、器高約11.6cmを測る。572は、杯部の口縁端部は断面三角形に近く、内面に緩やかな凹面を持つ。口縁端部から受部にかけて外反気味に斜めに下る。受部の断面は角張り、やや上方に延びる。受部端には沈線を巡らす。体部は浅く内弯する。脚部は、脚裾部にかけて大きく外反して下る。脚柱部と脚裾部の界には断面三角形に近い凸線によって区画する。そこから脚底部にかけてさらに外反気味に下る。脚底部は角張る。杯部内面から外面の約2分の1は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、脚部は回転ナデによって仕上げている。口径約9.8cm、脚径約8.5cm、器高約9.9cmを測る。

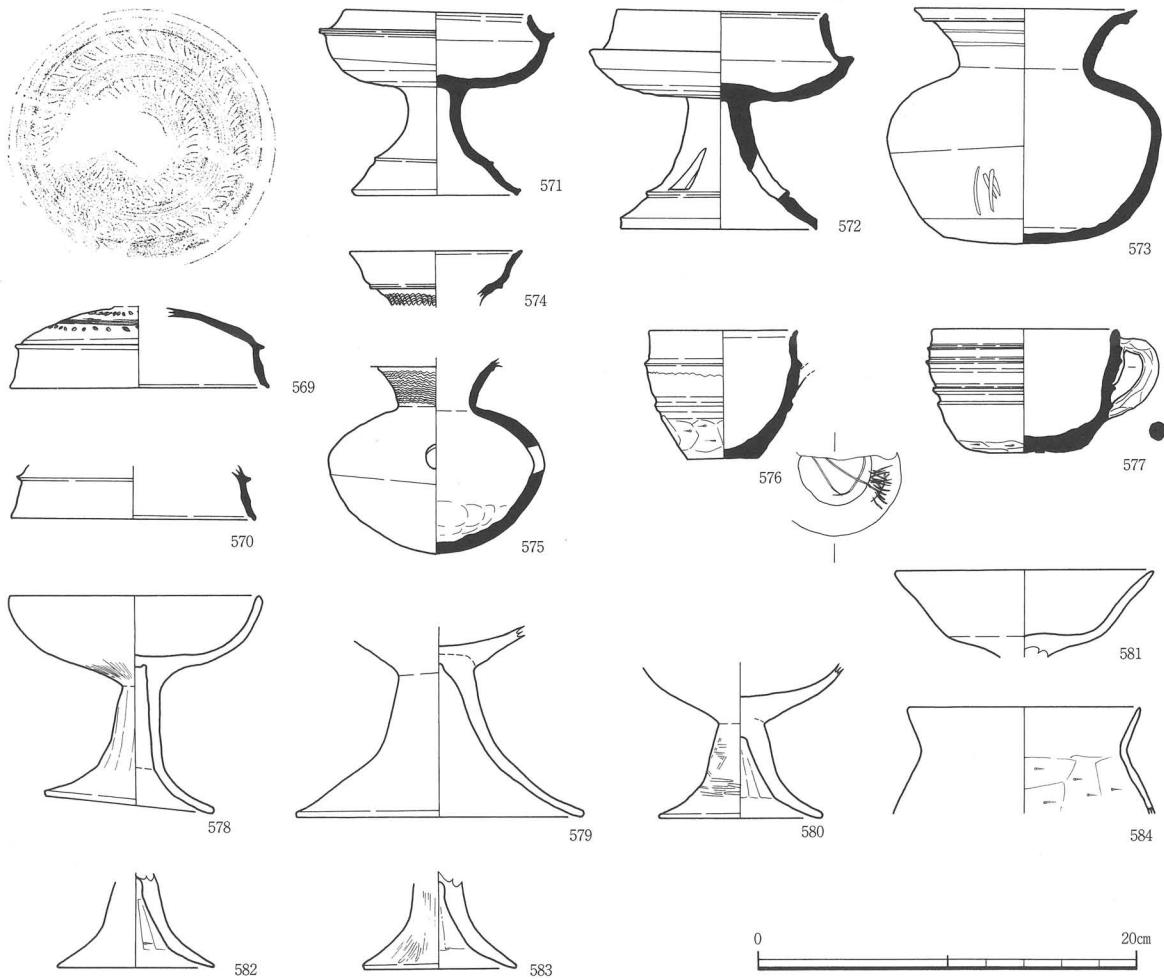
573は須恵器壺である。口縁部は、体部の界から外反気味に開き、口縁端部付近でさらに開く。口縁端部は丸みを持ち、端部外面下には断面三角形の凸帶を巡らす。頸部上部にはヘラミガキ状の沈線を2条巡らす。体部の肩部は張り、最大径は上部にある。底部はやや内弯するが、平らに近い。体部下方には4条からなるヘラミガキ状の沈線による縦方向の文様が認められる。調整は内面の底部付近を除き回転ナデ、底部内面はナデ、外面の口縁部から最大径付近まで回転ナデ、そこから体部下まではナデ、底部外面はヘラケズリの後ナデによって仕上げている。口径11.6cm、器高12.4cmを測る。

574・575は腺である。574は当初575の口縁部と考えていた破片である。しかし頸部径が若干異なることから別のものとした。口縁端部は丸く、端部内面下に緩やかな段を有する。口縁端部から外反気味に内傾し下る。口縁部と頸部の界には丸みを持つ凸帶を有する。頸部外面には均整な波状文を有する。内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径9cm前後、残存高約3cmを測る。575は口縁部が欠損し、頸部下が残存している。頸部と口縁部の界には断面三角形と推定される凸帶を巡らす。頸部は外反気味に内側に斜めに下る。頸部外面には細かい波状文を施す。体部はいわゆるそろばん型を呈する。体部最大径のほぼ中央部に円孔を穿く。頸部外面と体部外面の5分の3は回転ナデ、体部下から底部にかけて手持ちヘラケズリ、頸部内面から体部下までは回転ナデ、底部はナデないしはユビオサエによって仕上げている。体部最大径約11.4cm、残存高約10.4cmを測る。

576・577は須恵器把手付鉢である。576は把手が欠損している。口縁部は体部の界から直立気味に立ち上がり、口縁端部付近で外側にやや開く。端部は丸くおさめ、内面のやや下には緩やかな沈線を巡らす。体部から底部にかけて内弯気味に内傾する。口縁部と体部の界、体部と底部の界には緩やかな凸帶を巡らし区画する。底部は平らである。体部下から底部にかけて意味不明の線刻が刻まれている。内面、外面の口縁部、体部上部は回転ナデ、外面体部下は手持ヘラケズリ、底部はヘラ切りの様な切離し後ナデによって仕上げている。口径約7.8cm、器高約6.8cmを測る。

578から583は、土師器高杯である。578は杯部が丸みをもち、口縁端部は丸い。調整は外面の脚部付近のハケメを除き、内外面ともヨコナデで仕上げている。脚部柱部は細く、杯部の界から外方に直線的に延び脚柱部と脚裾部の界から大きく開く。脚柱部外面は縦方向のナデ、内面にシボリ痕跡が残る。裾部は不明。口径約13.3cm、脚径約8.6cm、器高約11.5cmを測る。579は、脚部と杯部の一部が残存している。脚柱部と脚裾部の界がほとんど認められず、杯部の界から大きく開く。内外面とも剥離のため調整は不明。脚径約15.1cm、残存高約10.1cmを測る。580は脚部と杯部の体部が残存している。杯部は口縁部との界から下が残存している。形状から杯部は、581に酷似しているものと推定される。脚部は、杯部の界から外方に直線的に延び脚柱部と脚裾部の界から大きく開く。杯部内外面とも調整不明。脚部外面はヘラミガキ、内面の脚柱部にシボリ痕跡が残る。脚径約8.5cm、残存高約8.2cmを測る。581は杯部のみ残存し、口縁部と体部の間にあまい稜を有し、口縁端部にかけて外側に直線的に延びる。調整は不明。口径約13.6cm前後、残存高約4.6cmを測る。582・583は同様なタイプで脚柱部のみ残存している。脚柱部と脚裾部の界がほとんど認められず、杯部の界から大きく開く。内面の脚柱部にシボリ痕跡が残る。外面の一部にヘラミガキが残る。582は脚径約8.2cm、残存高約5.1cm、583は脚径約8.0cm、残存高約5.2cmを測る。

584は土師器甕で口縁部から体部上部まで残存している。口縁と体部の界から斜め上方に延び



第122図 39号墳出土遺物 1

る。体部上部は、口縁部の界から外側に内弯気味に緩やかに下る。体部内面にヘラケズリが残る。口径12.3cm前後、残存高約5.6cmを測る。
(奥)

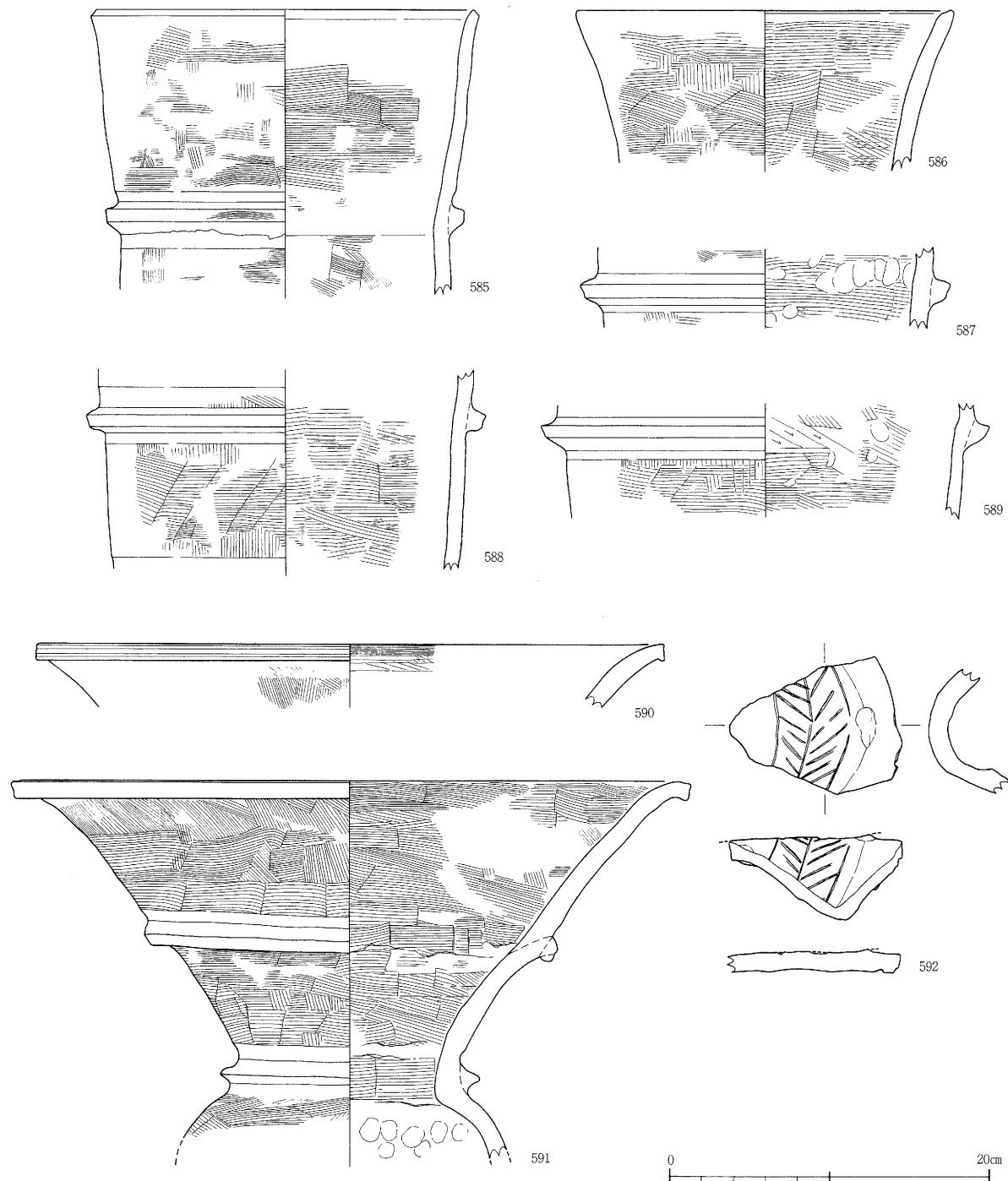
埴輪 (第123図、図版76) 585から589は円筒埴輪、590・591は朝顔形円筒埴輪、592は形象埴輪である。585は、口縁部を有する上部2段分の資料である。外面調整はヨコハケ、内面調整はナナメ・ヨコハケを施している。外面・内面とも、ヨコハケはハケ目工具の静止痕をもつ。工具幅は、2.7cm以上である。外面には、一次タテハケが所々に認められる。このタテハケの条線の粗密はかなり粗く、特徴的である。プロポーションは、下段から口縁部にかけてやや開き気味であり、さらに端部はヨコナデ調整によりさらに外反している。そのため、端面は外側に向いている。法量は、下段の体部径20.6cm、口縁部径24.1cmと推定される。突帯の断面形状は、しっかりとした台形を呈するが、下端の器壁との貼り付けはかなり雑である。色調・焼成は、褐色・軟質系である。586は、口縁部片である。外面調整は、基本的にはヨコハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケである。外面調整のヨコハケは、ハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケであるが、工具の傾きは一定ではなく、ハケ目が交錯している。また、器壁の凹凸の調整は不十分であり、585と同様かなり粗い条線の一次タテハケが残っている。ヨコハケの工具幅は約6.1cm以上あることが観察できる。口縁部径は、推定で23.6cmである。プロポーションは、585以上に大きく外に開く。端部は、指でつまみながらヨコナデ調整しているために端面がくぼみ、かつ外傾している。色調・焼成は、585と異なり、黄褐色・硬質系である。

587から589は、体部片である。すべて、外面調整はヨコハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケを基本的に施している。ただし、589は、内面のヨコ・ナナメハケの前に斜め方向の板状工具によるケズリが行われている。また、外面調整については、587は不明確だが、588・589の外面ヨコハケは、ハケ目工具の静止痕をもつB種ヨコハケであり、しかもその静止痕は右斜めに20°以上傾いている。静止痕の間隔は、588では2.2cm、3.0cm、1.7cm、589では2.0cmと、ともにかなり短い。体部径は推定で、587が20.2から21.0cm、588が21.6cmから23.4cm、589が24.1cmから26.0cmとなり、少しばらつきが認められる。残存部位が何段目にあたるかによって、外開するプロポーションの埴輪では体部径の数値に幅がみられることが想定できることから、他の共伴資料や先に見た口縁部径との関係も合わせて考えると、小型の1種のみである可能性が高い。突帯の断面形状は、587・588はわずかに上面を曲ませた台形状を呈しているが、589は上辺のナデが強いために反り上がっており、下辺の器壁との接続は雑である。色調・焼成は、褐色・硬質系である。

590は朝顔形円筒埴輪の口縁部にあたる。外面調整にタテ・ナナメハケ、内面調整にユビナデのちヨコ・ナナメハケを施している。端部はヨコナデ調整しており、端面にはヨコナデの際の擦痕を明瞭に残している。端面は、外側に垂直の面をもたせている。口縁部径は、推定で39.2cmである。591は、朝顔形円筒埴輪の肩部から口縁部にかけての資料である。外面調整は一次ナナメハケののちに二次ヨコハケ、内面調整は肩部はユビナデおよびユビオサエ、口縁部2段分はヨコ・ナナメハケを施している。外面のヨコハケは、ハケ目工具の静止痕をほぼ垂直にもつB種ヨコハ

ケであり、同一段を少なくとも3周以上巡らせている。口縁部径は推定で42.0cm、頸部径は頸部突帶上の一一番細まった部分で13.8cmである。また、朝顔部分の高さは、18.5cm前後である。口縁端部の面は、外側に垂直に向いているが、590と異なり、凹面を形成している。また、端部はかなり波打っている。色調・焼成は、2点とも褐色・硬質系である。

592は、半円形状にきつく内弯する破片で、凸面に綾杉文を線刻している。綾杉文は、内弯の度合いがきつく部分を境にほぼ左右対称になるカーブを描いており、凸面の綾杉文より外側には帯状の剥離した痕跡が認められる。このことから、家形埴輪の屋根で、破風板との接合が外れた部分の可能性が考えられたが、当古墳群内外での類例もなく、確定はできない。甲冑形・人物埴



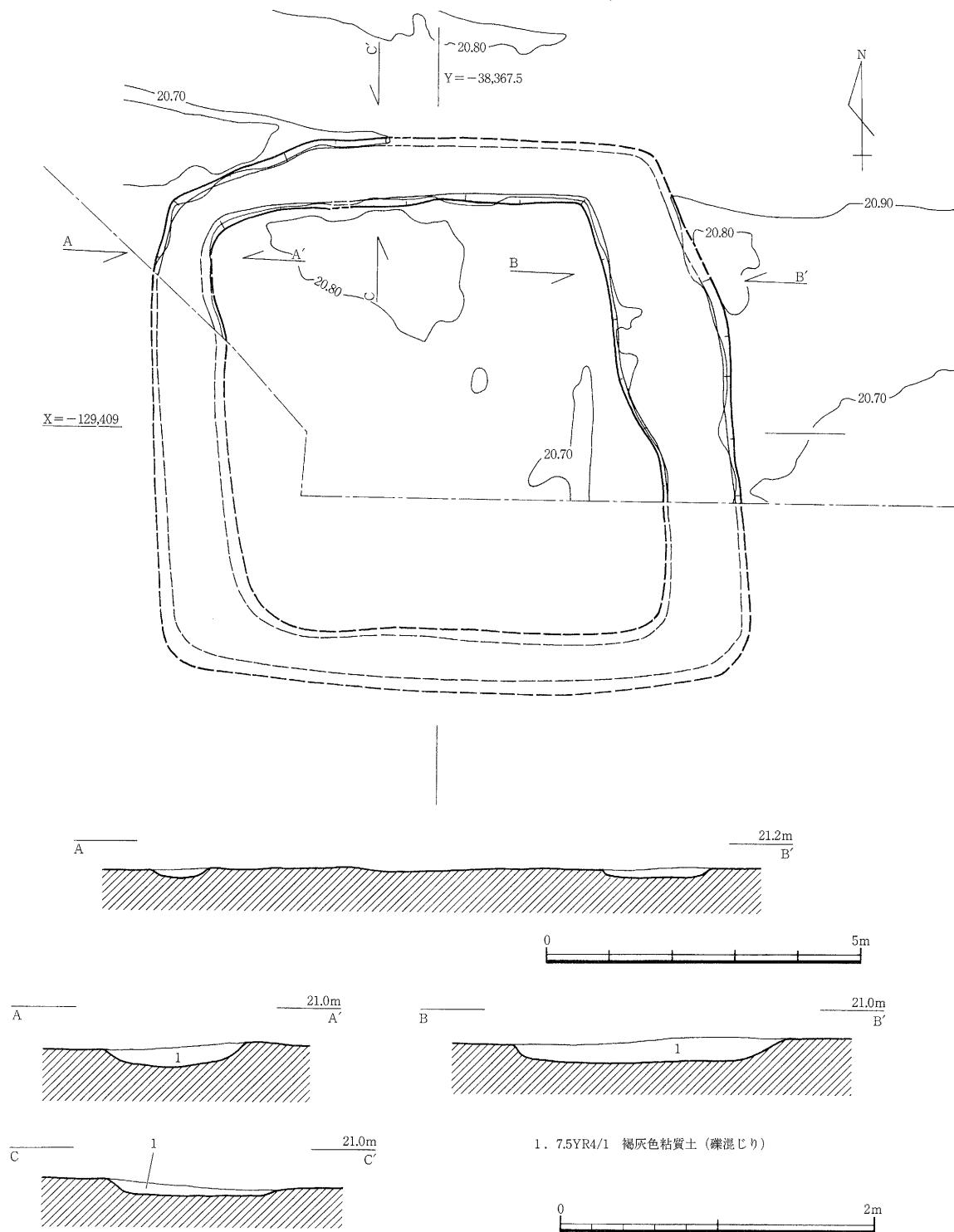
第123図 39号墳出土遺物 2

輪等の一部である可能性も残る。色調・焼成は、円筒・朝顔形円筒埴輪と異なり、淡黄色・軟質系である。

(小浜)

41. 40号墳（第124図、図版45-1）

A・G地区に存在し、X = -129,409、Y = -38,367.5を中心とする地点で検出した。墳丘や周溝は奈良時代以降度々の開発によりほぼ地山面まで削平されている。墳丘部の規模は東西約6.1m、南側は調査範囲外に広がっているが、南北4.5m以上を測る。周溝は北周溝が幅1.1m、深さ



第124図 40号墳平面・断面図

0.1m、東周溝が幅1.7m、深さ0.15mを測る。周溝を含めた古墳の規模は、東西約9m、南北5.5m以上となる。周溝の埋土は褐灰色粘質土である。奈良時代以降の削平が激しく、調査区内で埴輪等の遺物は出土しなかった。

(阿部)

42. 41号墳（第125・126図、図版45-2・3、46-1・2）

I地区のX=-129,347m、Y=-38,344.5mを中心とする位置にあり、39号墳とは北東に約43m離れており、43基が確認されている古墳群の中で最も北に位置する。

この古墳も、墳丘は削平されており、地山の上に中世頃の遺物包含層である褐灰色土が薄く堆積し、その上には近世以降の耕土層が被っていた。墳丘部の西側は地山まで大きく攪乱されていたが、僅かに残っていた周溝西肩から推定すると、東西7.5m前後、南北は北側が調査範囲外に広がっているおり、現況で約4.5mを測る。周溝は逆台形で、幅は1.6mから1.8mを測る。溝底面は地山の礫が露出し、凹凸している。

遺物は攪乱されていなかった東周溝部で埴輪や須恵器が検出された。須恵器は東南のコーナーに近い位置で周溝底に接し、横倒し状態で検出された。残存状況から裾部か墳丘上に供えられたものが、比較的早い段階で周溝に転落し、埋土に覆われたと考えられる。埴輪は39号墳と同じように細かく碎かれた状態で、主に東溝の北側に纏まっていた。遺構検出面とほぼ同じ高さで出土しており、奈良時代頃の開発時に、埴輪を細かく碎き、浅く残っていた周溝に捨てたものと考えられる。須恵器は周溝の南東コーナー付近から南側で検出した。地山に接するものはなく、土砂の堆積が進んだ段階で転落したり、墳丘削平時に壊されたものと考えられる。

調査地の北側は、近世頃に開発された溜池（約1町四方）が掘られていたので、古墳群の広がりを確認する術はない。約200m北で実施された公団住宅の建設に伴う調査（「総持寺遺跡」（財）大阪府文化財調査研究センター1998）では飛鳥時代から中世までの建物跡や土壙墓、溝は検出されているが、古墳は確認されていない。古墳群は広く考えても溜池内で収まることになる。南側の42基と規模や形状、供獻土器、

埴輪に大きな差は読み取れない。

(阿部)

出土遺物

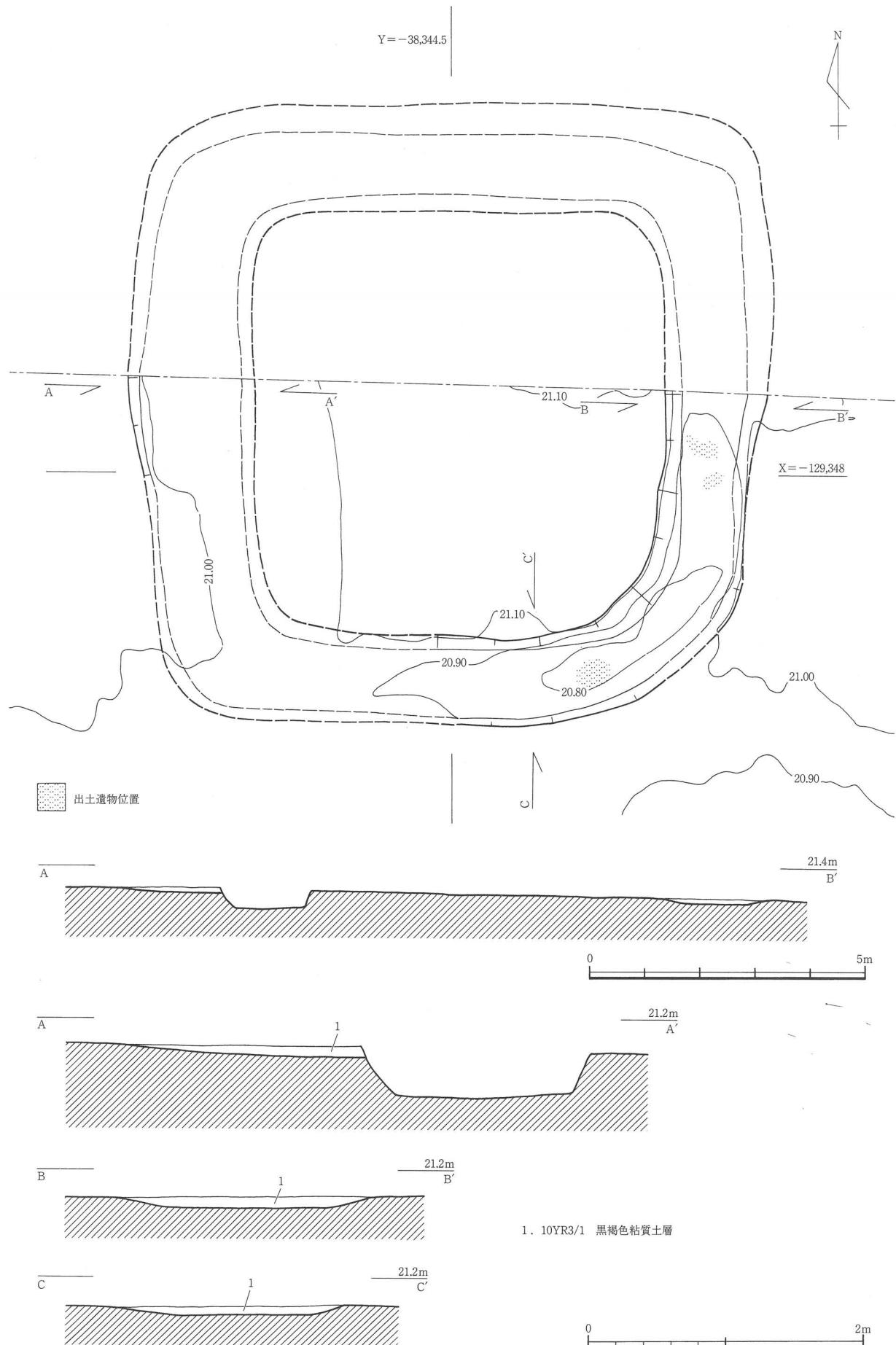
土器（第127図、図版51） 593

から595は須恵器有蓋高杯である。

593は、杯部の受部の形状は断面三角形に近く直線的に延びる。受部から口縁端部にかけて外反気味に斜めに延び、端部は角張る。体部は深く、内弯する。脚部は、脚底から内弯気味に斜めに延び、



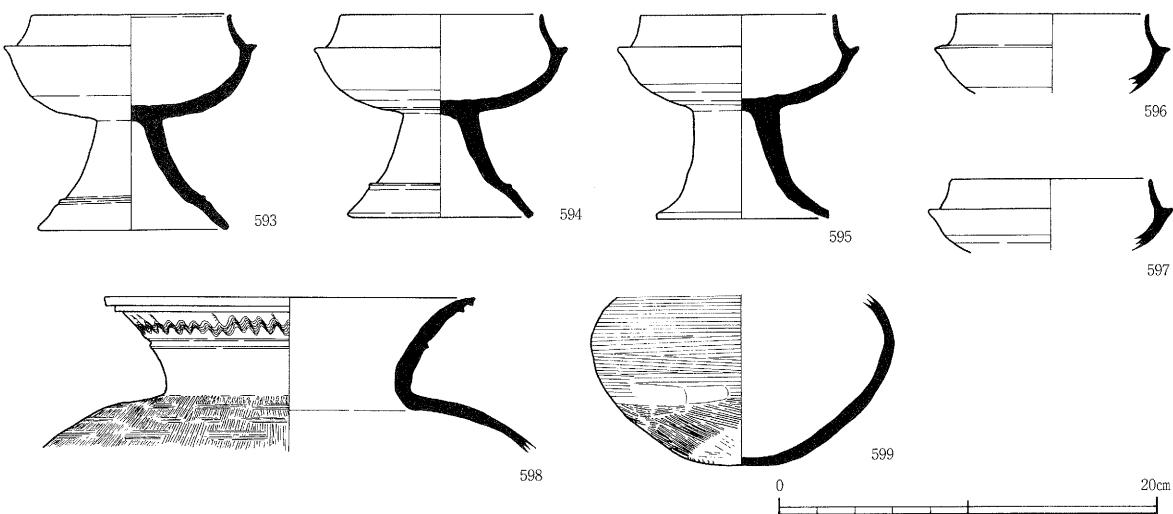
第125図 41号墳東周溝北側遺物出土状況図



第126図 41号墳平面・断面図

底部に至る。脚底部はやや角張る。脚部外面の脚裾部と脚柱部を分ける地点には断面三角形に近い緩やかな凸帯を有する。調整については、杯部内面と外面の口縁端部から3分の2までは回転ナデ、そこから脚柱部までは回転ヘラケズリの後回転ナデ、脚部については、回転ナデによって仕上げている。口径約10.5cm、脚径約9.25cm、器高約10.65cmを測る。594は杯部の受部の形状は断面三角形に近くやや上部に延びる。受部から口縁端部にかけて外反気味に斜めに延び、端部はやや丸みを帶びる。体部は深く、内弯する。脚柱部は、杯部との界から外反気味に外側に延び、脚裾に至る。脚柱部と脚裾部の界には凸帯を有し、裾部とを分ける。脚裾部は脚柱より若干外側に張り出し直線的に延び、脚底部に至る。脚底部は角張る。調整については、杯部内面と外面の口縁端部から3分の2までは回転ナデ、そこから脚柱部付近まで回転ヘラケズリ、脚柱部周辺は、貼付け時のナデ、脚部については、回転ナデによって仕上げている。口径約10.6cm、脚径約9.25cm、器高約10.7cmを測る。595は、杯部の受部の形状は断面三角形に近くやや上部に延びる。受部から口縁端部にかけて外反気味に斜めに延び、端部はやや丸みを帶びる。体部は深く、内弯する。脚柱部は、杯部との界から外反気味に外側に延び、脚裾部に至る。脚裾部は脚柱より若干外側に張り出し直線的に延び、脚底部に至る。脚底部は角張る。調整については、杯部内面と外面の口縁端部から3分の2までは回転ナデ、そこから脚柱部付近まで回転ヘラケズリ、脚柱部周辺は、貼付け時のナデ、脚部については、回転ナデによって仕上げている。口径約10.3cm、脚径約9.1cm、器高約10.7cmを測る。

596は、須恵器有蓋高杯の杯部と推定される小片である。受部は断面三角形に近く、直線的に張り出す。口縁部は受部からやや外反気味に内傾し、口縁端部に至る。口縁端部は丸みを帶びる。体部は残存部の形状から深いものと推定される。調整は、内面と外面の約2分の1が回転ナデ、残りの底部付近が回転ヘラケズリで仕上げる。口径10.4cm前後、残存高約3.8cmを測る。597は、須恵器有蓋高杯の杯部と推定される小片である。受部は断面三角形に近く、直線的に張り出す。口縁部は受部からやや外反気味に内傾し、口縁端部に至る。口縁端部は角張る。体部は残存部の形状から深いものと推定される。調整は、内面と外面の約2分の1が回転ナデ、残りの底部付近



第127図 41号墳出土遺物1

が回転ヘラケズリで仕上げる。口径10.2cm前後、残存高約4.2cmを測る。

598は、須恵器甕の口縁部から体部の上部までの破片である。口縁部は体部と頸部の界から外反氣味に大きく開き、口縁端部に至る。口縁部は角張り、外面直下に断面三角形の凸帯が付く。口縁部外面のほぼ中央部に断面三角形に近い鋭い沈線によって区画し、上部に均整な波状文を施す。体部上部は、形状から体部最大径が体部上部にあるものと推定され、張り出す。調整は、口縁部内外面とも回転ナデ、体部は外面が平行タタキの後カキ目、内面が同心円タタキの後ナデ消しを行っている。口径19.5cm前後、残存高約8.1cmを測る。

599は、須恵器甕の体部の破片である。体部の形状はいわゆるそろばん型を呈している。調整は、外面の底部付近までカキ目、底部は平行タタキで、一部ナデ消しを行っている。内面は過半までは回転ナデ、底部付近はナデによって仕上げている。体部最大径約16.1cm、残存高10.0cmを測る。
(奥)

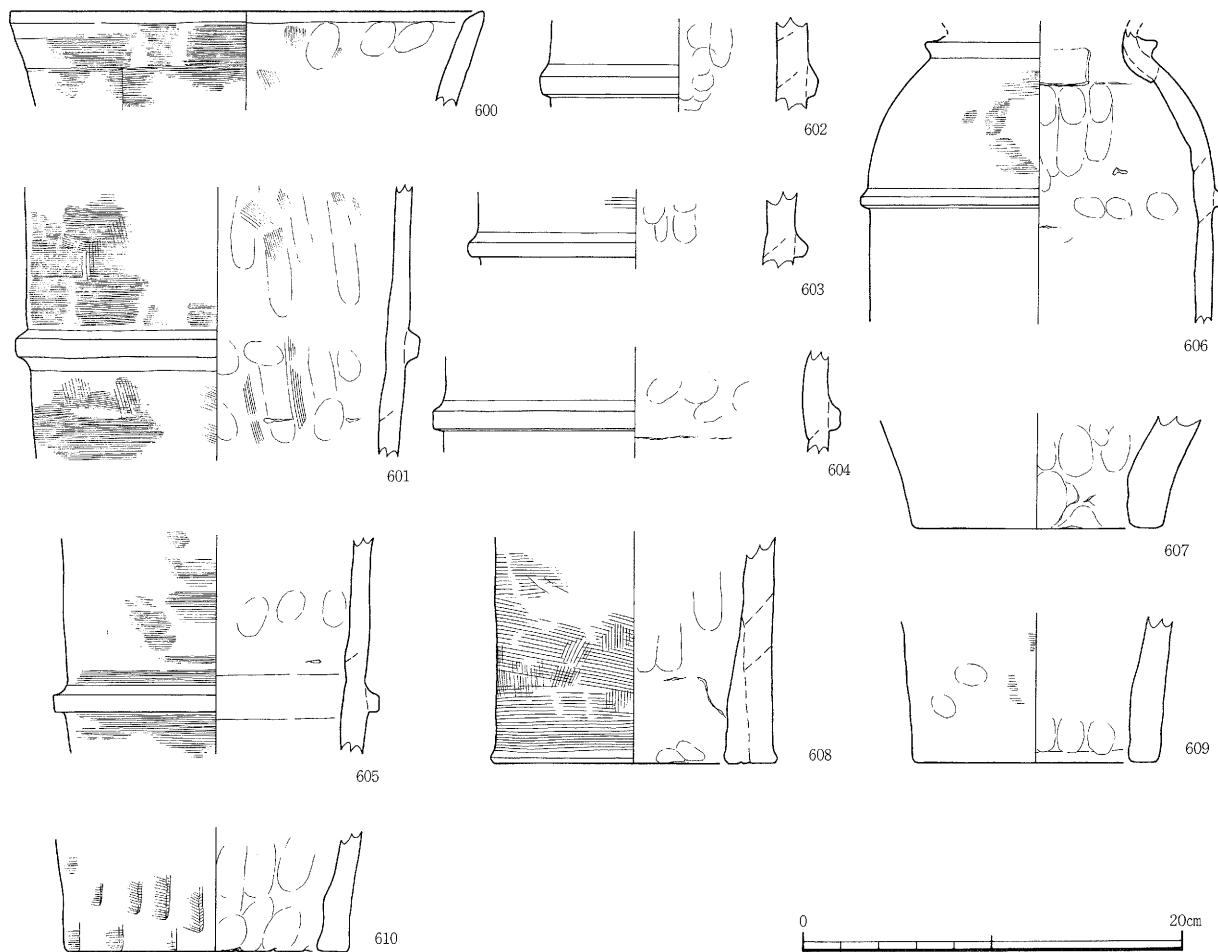
埴輪（第128図、図版77） 600から605・607から610は円筒埴輪、606は朝顔形円筒埴輪である。600は、口縁部片である。外面調整はヨコハケ、内面調整はタテハケおよびユビナデを施している。外面のヨコハケは、ハケ目工具の静止痕を垂直にもつB種ヨコハケであり、少なくとも2周巡らされている。また、外面には残存部分の半分以上に黒斑が認められる。口縁部径は、推定で24.8cmである。口縁部がかなり外開きのプロポーションになると考えられる。端部は、指でつまみあげながらヨコナデ調整をしており、端面は外傾した面をもつ。色調・焼成は、褐色・軟質系である。

601から605は、体部片である。外面調整は、摩滅により不明な資料（602・604）を除いて、ヨコハケを施している。601では、一次タテハケ部分が数箇所で確認できる。内面調整は、すべて縦方向のユビナデを基本的に行っている。ただし、601のみユビナデの後タテ・ナナメハケを部分的に施している。外面のヨコハケは、摩滅の影響もあり、ハケ目工具の静止痕はまったく認められない。601・605は、外面残存部分の半分以上に黒斑が認められる。体部径は、601が19.0cmから20.4cm、602が13.4cm、603が16.8cm、604が20.0cm、605が15.2cmから16.4cmである。数値にはばらつきが多少認められるが、残存部位が少ないために復元径が誤差を大きく含んでいる可能性も多い。すべて小型円筒埴輪の範疇に入るが、小型のなかでもより小型の資料（602・603）は、後述する色調・焼成度合いの違いも認められることから、より小型化した一群が41号墳には存在した可能性も考えられる。突帶間隔の判明する資料はないが、最も残存状態の良好な605から8.8cm以上であると考えられる。突帶の断面形状は、基本的には台形状を呈するが、貼り付け時における上辺のナデが強いために上辺の傾斜がきつく、下辺は逆に直角氣味に器壁と接合する。色調・焼成は、601・604・605が褐色・軟質系、602・603が淡黄色・軟質系である。

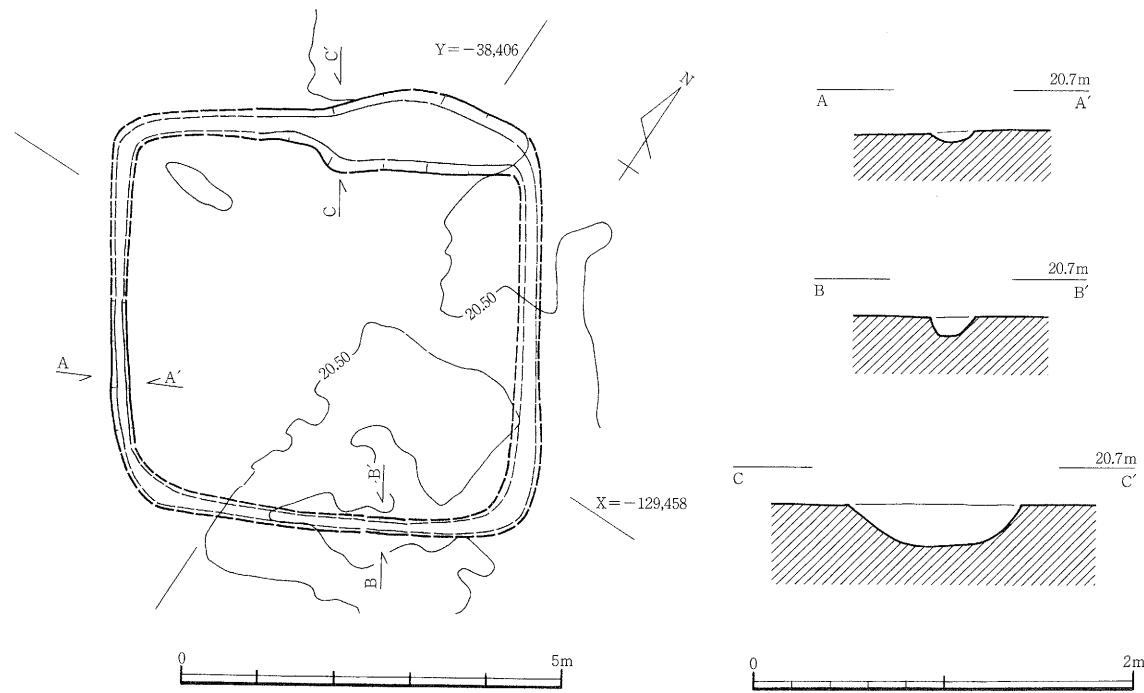
607から610は、底部片である。外面調整は、摩滅により不明な資料（607・609）を除いて、ヨコハケを施している。内面調整は、端部付近をユビオサエ、上方を縦方向にユビナデを行っている。608では、二次ヨコハケ以前の一次タテ・ナナメハケが認められ、ヨコハケはらせん状に下か

ら上に向かって少なくとも2周以上巡らされている。ただし、ハケ目工具の静止痕は、残存部分も小さいため認められない。工具幅は、3.9cm以上である。610は、ハケ目工具の垂直な静止痕が明瞭に残っており、B種ヨコハケである。少なくとも2周以上巡らされていることが確実である。工具幅は、2.5cm以上である。静止痕間隔は、1.5cmから3.0cm前後であり、かなり短い間隔である。608・610は、ともに外面に黒斑を有している。底部径は、推定で607が13.4cm、608が15.0cm、609が12.6cm、610が14.0cmであり、すべて小型円筒埴輪に属する。底部高の判明する資料はないが、最も残存状態の良好な608から、11.9cm以上であると考えられる。底部からの立ち上がりの形態には、バリエーションが認められる。ほぼ直立する608、やや外開きになる609、下端から3cmほど直に立ち上がり、そこから屈曲気味に外開きになる特徴的な607・610がある。この607・610の屈曲は、上方からの加重による影響も考えられるが、端部をきつくユビオサエしながら粘土紐を巻き上げていく製作上のくせに起因する可能性も考えられる。直立する608は、端部付近の器厚が2.8cmで、上方の1.5cmの約2倍厚くなっている。609は、ほぼ均一な器厚である。色調・焼成は、すべて褐色・軟質系である。

606は、朝顔形円筒埴輪の体部から肩・頸部にかけての部分である。外面調整はヨコハケ、内面調整は縦方向のユビナデを施している。頸部内面では、薄い粘土を張り足して補充・補強した痕跡が認められる。体部径は推定で18.0cm、頸部径は突帯直上の一番細くなった部分で推定10.0



第128図 41号墳出土遺物 2



第129図 42号墳平面・断面図

cmである。突帯間隔はわからないが、残存状況から6.5cm以上、肩部の高さ約8.5cmである。色調・焼成は、褐色・軟質系であり、黒斑を有した円筒埴輪片と同じである。
(小浜)

43. 42号墳（第129図、図版46-3）

E地区に存在する。調査後、遺構整理中に溝の配置、周辺の古墳の状況により古墳の可能性があるものとして挙げたものである。古墳は、X = -129,458、Y = -38,406.6付近を中心として検出した。東側は32号墳、北東側、北側、西側にかけては、古墳が全く存在しない空閑地帯が広がる。南西側には36号墳、南側には古墳が存在しない空閑地がある。

古墳は、地山面が削平を受けたものと推定され、北周溝の中央部から北東西辺部付近、西周溝中央部付近から南西辺部の周溝のみ残存していた。残存していた周溝の形状から墳丘は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、一辺5.1m前後、古墳の全長5.5m前後を測るものと推定している。方位はN-33°-Wである。

周溝は、断面「U」字形に近い形を呈し、西周溝幅約0.2m、深さ約0.05m、北周溝幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。遺物は、出土しなかった。
(奥)

44. 43号墳（第130図）

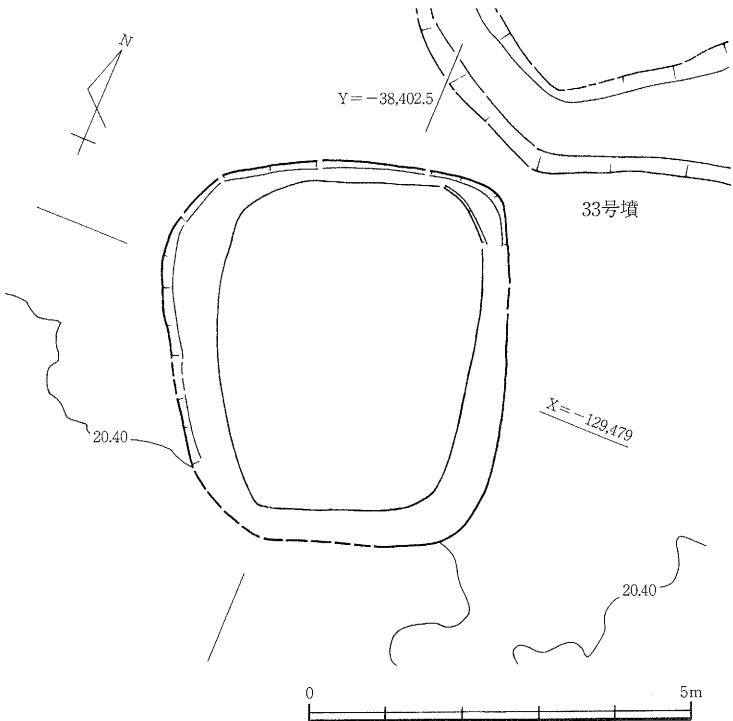
E、D地区に存在する。調査後、遺構整理中に遺構の配置、周辺の古墳の状況により古墳の可能性があるものとして挙げたものである。古墳は、X = -129,479、Y = -38,403付近を中心として検出した。北側に33号墳、西側に約2m離れて37号墳。東側、南側、南西側にかけては、古墳が全く存在しない空閑地帯が広がる。

古墳のD地区に存在する北東辺部、E地区の北西辺部周辺のみ遺構を確認した。古墳は、D地区において、遺構の埋土が地山と同色、同系統であったこと、周辺には後世の遺構が多数検出さ

れたため、それに切り合う遺構の状況が把握出来なかつたことから、古墳と推定される遺構を点線で表した。後に調査を行つたE地区の東辺部において、点線に続く溝状の落込みが存在したことから、整理作業中に遺構の検討を行つた結果、古墳の可能性があるものとして判断した。

古墳は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、古墳の全長5m前後を測るものと推定している。方位はN-20°-Wである。遺物は、出土しなかつた。

(奥)



第130図 43号墳平面図

B、D調査区の南側で検出した。溝は、調査地域の頂部付近を占有し、溝の約2分の1は南の調査区外にある。溝の北側を28号墳、北西側を30号墳、西側を36号墳、北東側を18号墳が存在する。また、東側に存在する20号墳の周溝と一部が切り合い、土層断面観察の結果、溝が古い。溝は、幅0.5m前後、深さ0.15m前後を測る。溝内から出土した遺物は、弥生時代後期の土器のみで、古墳に関係する遺物は全く出土しなかつた。

また、空閑地の形状は、調査区域内の形状から橢円形に近いものと推定され、短辺約29m、長辺40m以上を測る。

空閑地の内部には、古墳に伴う遺構は全く検出されなかつたことから、古墳に伴う何らかの施設であったものと考えている。確証はないが、広場として存在し、墓前祭祀などの古墳に伴う何らかの行事が行われていた可能性が高い。

(奥)

第4章 考 察

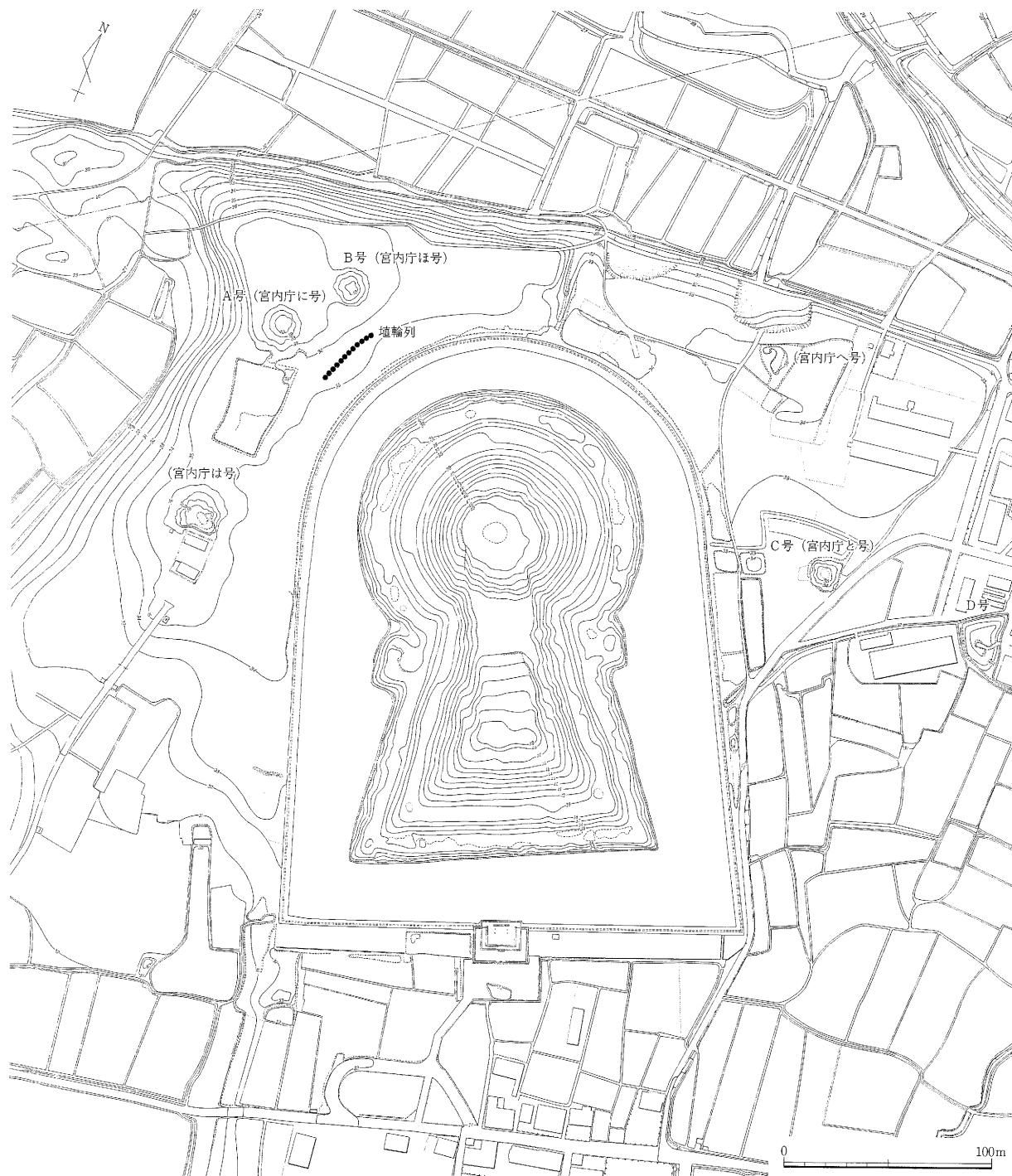
—総持寺古墳群の諸問題—

第1節 太田茶臼山古墳及び陪冢出土の埴輪

小浜 成

1. はじめに

1969年及び1972年、大阪府教育委員会では太田茶臼山古墳（宮内庁比定繼体天皇三嶋藍野陵）周辺における宅地造成工事に伴う発掘調査を行った（第131・132図）。その調査成果の一部は既



第131図 太田茶臼山古墳周辺古墳位置図



第132図 太田茶臼山古墳と宅地造成時の状況（1972年当時）

に報告済である⁽¹⁾が、出土した埴輪の詳細な報告はなされていなかった。太田茶臼山古墳については、現在までに茨木市教育委員会による前方部側外堤の西南部分の調査⁽²⁾のほか、宮内庁書陵部による墳丘内の調査⁽³⁾が行われており、調査成果および埴輪の情報が公表されている（以下、文中では「宮内庁報告」とする）。

今回総持寺古墳群出土埴輪の整理に当たり、太田茶臼山古墳が当該期の盟主墳的存在であり、古墳群形成の契機や埴輪供給問題等に密接な関係があると推測されることから、太田茶臼山古墳とその陪冢から出土した埴輪の整理も併せて行った。ここに、その整理報告を行うものである。

2. 調査の概要

調査内容について、前報告と一部重複をするが、出土埴輪の情報に関する部分を中心に振り返っておきたい。

太田茶臼山古墳では、後円部の北西部の外堤上で埴輪列が発見された（第133図）。周濠外縁から約17m離れた地点であり、周濠外縁ラインと平行することから外堤上をめぐる埴輪列であると考えられている。埴輪列は、ほとんど間隔をおかず樹立しており（第134図）、20数本が確認されている。また、樹立は、布掘りで一斉に据える方法が採られていた（第135図）。なお、その埴輪列からさらに約5m外側の地点に埴輪の出土が伝えられることから、外堤上には埴輪列が二重にめぐる可能性が指摘されている。

陪冢については、計5基の調査を行っている。なお、陪冢の各名称は、一部の古墳について宮内庁による呼称が存在するが、前報告の中で府教委が連続するアルファベット記号で付した呼称も存在している。混乱を避けなければならないが、今回は前報告の遺物に関する追加報告である

という性格上、敢えて府教委の呼称を用いることとし、宮内庁による呼称は必要に応じて併記することとする。

A号陪冢（宮内庁に号）、B号陪冢（宮内庁ほ号）は、宮内庁管理地外の周溝部分の調査を行った（第136・137図）。A号陪冢は径約21mの円墳であり、幅3.5m以上、深さ0.8mの周溝内から円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の破片が出土している。

B号陪冢は径約19m、高さ約4mの造り出し付円墳であり、幅3.5m以上、深さ0.6mから0.8mの周溝内から少量ながら須恵質を含む円筒埴輪片と朝顔形円筒埴輪片が出土している。また、造り出し付近では、人物埴輪の顔部分、馬形埴輪の顔・脚部分、須恵器の器台脚部片等が出土している。

C号陪冢（宮内庁と号）も、宮内庁管理地外の部分の調査であり、当初円墳と考えられたが、予想外に南側で前方部が確認された。前方部前端では葺き石の根石が見つかっている。全長約28m、後円部径18m、高さ約4mの前方後円墳である。前方部の南西部および西側周溝付近を中心に、多量の須恵質を含む円筒埴輪片と人物埴輪の腕部分が出土した（第138図）。

D号陪冢（第139図）は民有地にあり、南北約20m、東西約14m、高さ約3mの長方形墳状をな



第133図 墓輪列検出状況



第134図 墓輪列近景



第135図 墓輪列布掘り確認状況

していたが、周溝痕跡や埴輪片の出土は認められなかった。

E号は、一辺27mの方墳と考えているが、遺物はほとんど出土していない。

3. 太田茶臼山古墳の埴輪（第140～142図、図版77～80）

すべて、埴輪列の原位置資料および削平を受けて周辺に散らばったと考えられる資料であり、太田茶臼山古墳に伴うとほぼ特定してよい資料群である。ただし、埴輪各個体の配列順については、当時の調査平面図が未確認のため、出土位置との対応関係が検証し得ず、明らかにすることができなかった。

611から624、627から635は、埴輪列の原位置および削平により若干離れた位置で検出された底部および底部を含む資料であり、625・626はいずれかの底部資料と同一個体になると思われる体部資料である。636から663は、埴輪列周辺からの出土であり、埴輪列を構成する円筒埴輪の一部であると思われるが、包含層出土の資料や埴輪列に帰属できない二次的移動を生じている資料である。

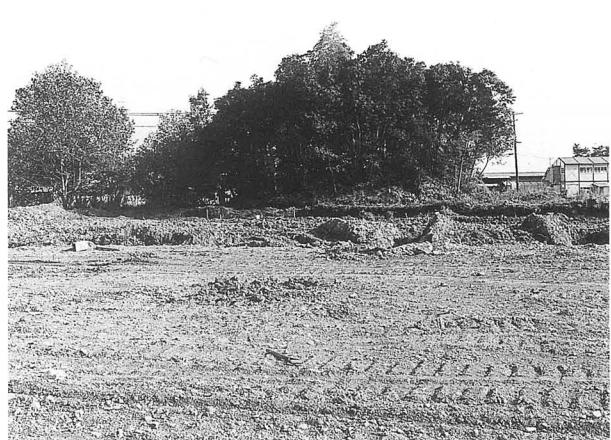
底部から口縁部まで完存する資料はまったくなく、段構成は不明である。全体的なプロポーションについては、比較的残存状況の良い625や627の資料や多数の底部資料から、まったく外側に



第136図 A号陪冢（宮内庁に号）



第137図 B号陪冢（宮内庁ほ号）



第138図 C号陪冢（宮内庁と号）



第139図 D号陪冢（民有地）

開かず、ほぼ直立するプロポーションであることがわかる。

口縁部径については、625の一例しか判明する資料が存在しないが、36.0cmを測る。口縁部高についても、625の資料のみであるが、13.5cmを測る。口縁端部は、625および645から657のうちほとんどが直立形態をとる。端面は水平にするが、調整時の指腹押圧により凹みをわずかにもたらせている。そのほか、上端をややつまみあげたような特徴をもつ645・649・652・653・656、外側にわずかに外反させている657など、バリエーションが認められる。

底部高については、大きく3つに分けて考える必要がある。ひとつは617から624・632・634で、当資料群において最も多く出土しているものである。底部高は9.9cmから11.1cmに収まる。しかし、底部径は半周以上する個体を中心にみてみると、27.5cmから30.0cmのものと33.0cmから36.4cmの大小2種が存在しているようである。残存率が低いために復元値に誤差が生じている場合などを考慮しなくてはならないが、625・626・627・636から641などの体部資料の体部径を参考にするならば、体部においても30.0cm未満のものと35.0cm以上の大きく2種が存在することから、底部高を同じくしながらも底部径に大小2種の規格が存在していた可能性は高い。

もうひとつは、底部高が上述した資料群よりも高いものである。635は底部高が15.1cmを測る。底部径は29.6cmで、先に見た資料群のうち底部径の小さい一群と同じである。このことから、本報告では一例のみであるが、底部高が高い一群の存在も推測される。

さらにもうひとつは、628・629・630・631・633のように底部高が3.1cmから7.8cmとバラツキはあるがかなり低い一群である。これらは、いわゆる低位置突帯と呼んでいるものであり、また底端部の形態に大きな特徴が認められる。

これらは、底部端にさらに不定形断面の突帯をめぐらせていているようであり、貼り付けた接合痕も認められる。また、内側にも突出部分が認められる。これは、加重により内側につぶれ出したものを二次的に整形したものか、あるいは成形時から加重を想定して折り曲げたものか、といったことが資料観察から考えられた。粘土紐を規格枠のように内側に用いたものではなさそうである。宮内庁報告のなかにも認められない資料群であり、外堤上だけに用いられたと考えられる。

突帯間隔は、625・627・636・637から10.2cmから12.0cmの間で収まる。口縁部高と突帯間隔の関係がわかる資料は、625の一例のみであるが、口縁部高13.5cmに対し、下段2段が10.2cm、11.7cmであり、口縁部高が突帯間隔よりも長いといえる。

底部1段目の外面調整についてみると、摩滅により調整不明のものも多数あるが、一次調整タテハケ後に二次調整としてヨコハケを施しているものが多く、620・622・629・640など一次調整タテハケのみ（と思われる）の資料も出土している。また、二次調整のヨコハケについては、体部も含めて外観してみると、ハケ目工具の静止痕を器面につけるB種ヨコハケの611・612・614・618・623・625・626・627・634のほか、ヨコハケのストロークが長く残存部分内で静止痕を観察できない資料や、ヨコハケ後にナナメハケを部分的に施す613・636の資料も存在する。さらに、ヨコハケを同1段に施す回数についてみれば、1周めぐらす618・621・623と、2周あるいは2

周以上めぐらす612・614・617・619・625・626・634・635などが認められる。612は確実に3周めぐらせている。複数めぐらすものは、ハケ目工具の幅が突帯間隔よりもかなり短いもので、突帯間隔に合わせて1周めぐらせているハケ目工具の幅とは明らかに異なっている。工具幅が確認できるものとして、1周の618は8.6cm、623は8.4cm以上であり、2周以上の612は4.7cm以上、625は6.5cm、626は4.8cm、634は4.5cm以上である。

のことから、ハケ目工具としては、1周のみでヨコハケを充填させる8.6cm程度の工具と、2周以上かけてヨコハケを充填させる4.8cm程度と6.5cm程度の工具の、少なくとも3種の工具が用いられていることがわかる。さらに、4.8cm程度の工具を用いた資料はヨコハケを同1段の下半から上半の順に施しているのに対し、6.5cm程度の工具を用いた資料は上半から下半へとヨコハケを施しており、工人（個人）の差を反映している可能性も考えられる。

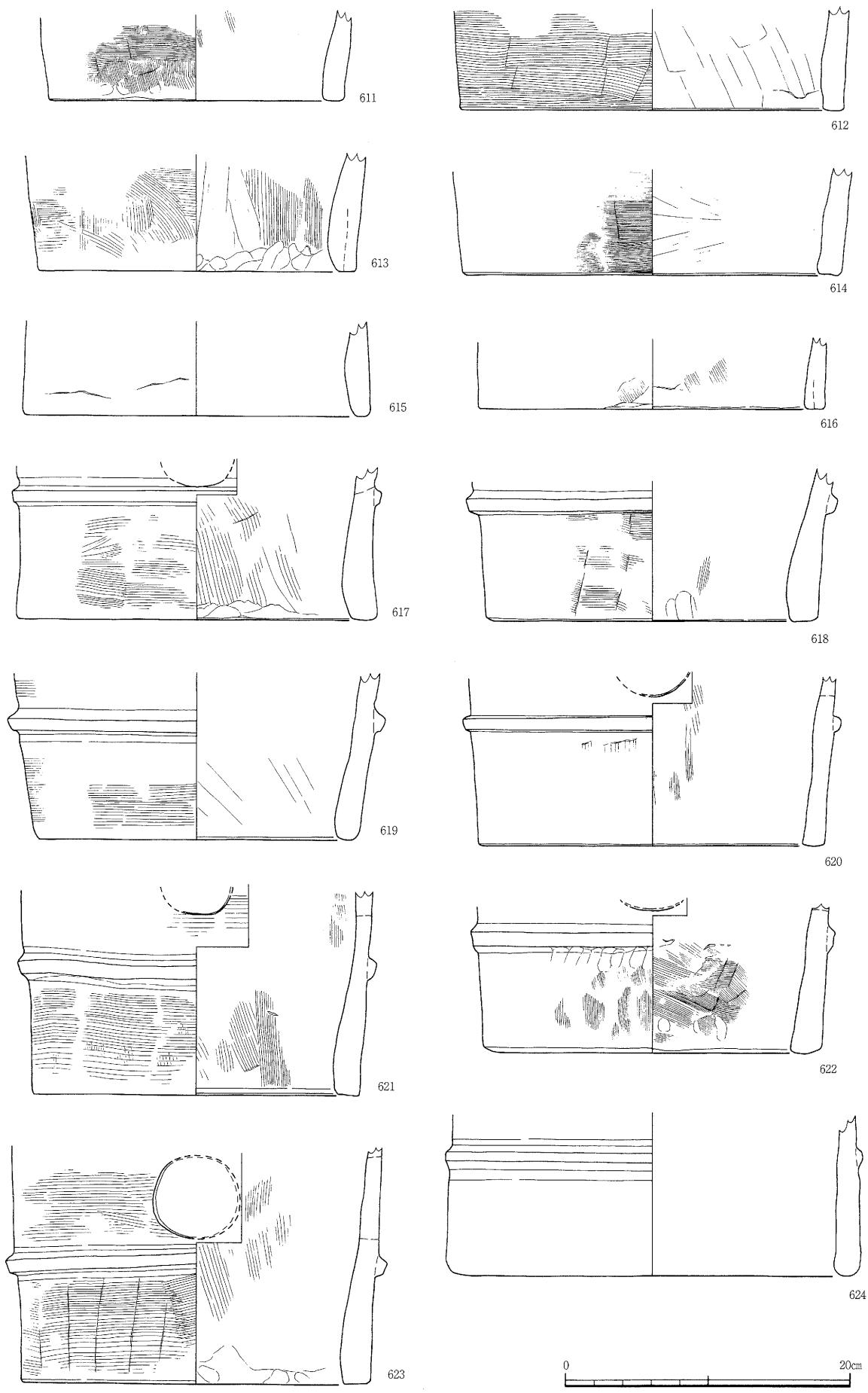
内面調整は、底部・体部の差を問わず、タテハケ調整のものが大半を占め、まれに縦方向のユビナデや不定方向の工具ナデで調整しているものが認められる。637は、残存部の2条目の突帯裏側付近に認められる粘土紐の接合痕を境目として、下半のタテハケが粘土紐の中にもぐり込み、上半は新たなタテハケが始まっている状況が観察できる。このことから、粘土紐積み上げ途中での作業転換の乾燥単位が存在していたことが推測される。

突帯の断面形状は、基本的に台形状を呈するものが多い。そのなかには端面の上辺を強くなでつけるために下辺がつぶれ気味で、扁平な台形状となったものも多く含まれる。また、幅の細い658のような突帯も認められた。

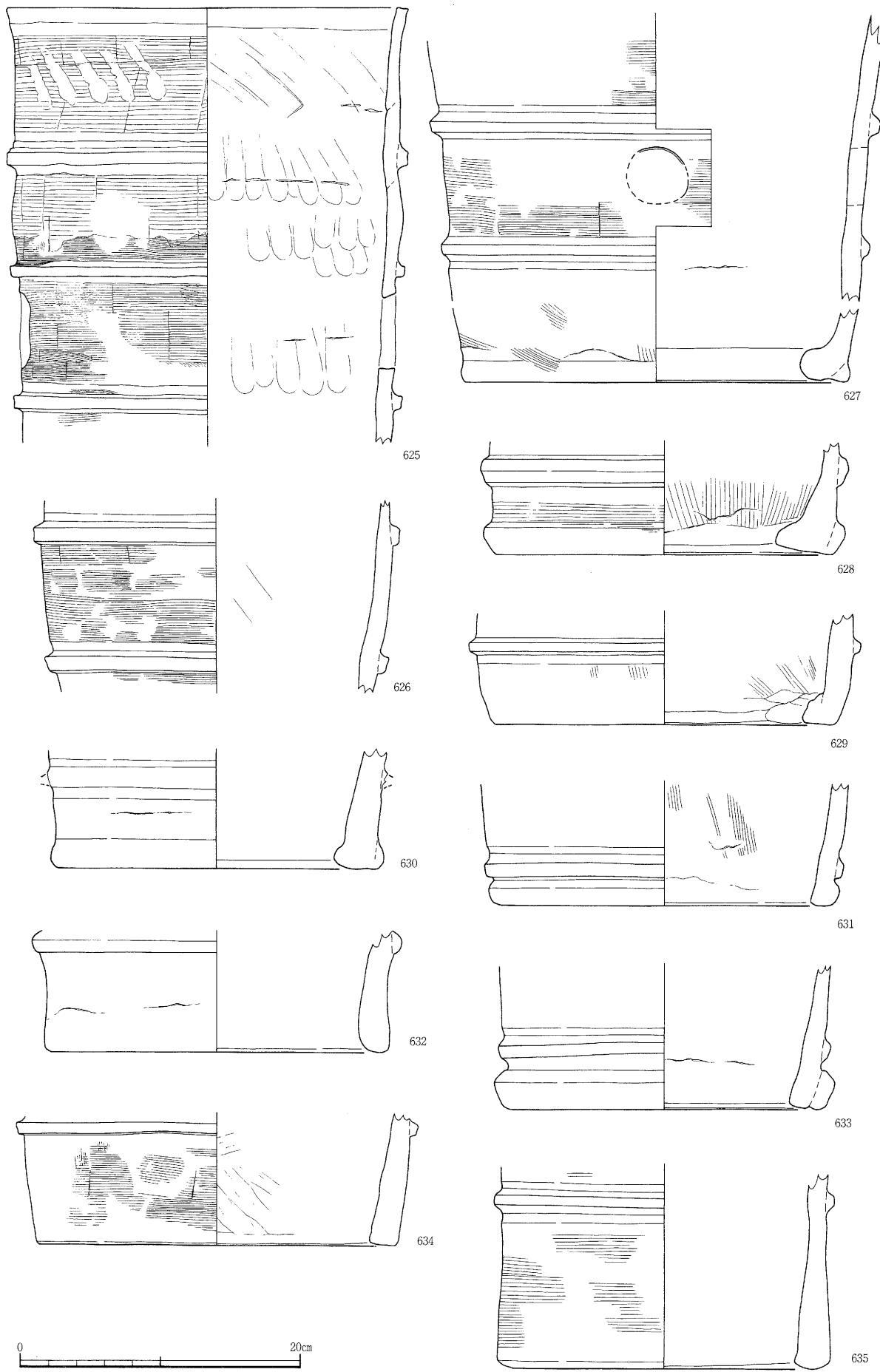
透かしはすべて円形透かしであり、対向位置に1対穿孔されていると考えられる資料のみである。しかし、その穿孔段・位置については、底部から2段目につく617・620・621・622・623・627と口縁部から数えて3段下の段につく625が認められる。これらの状況からは、625の透かしが2段目に該当し、全体構成が3条4段になるか、4段目に該当し、全体構成が5条6段になる可能性が極めて高い。もちろん、3段目に該当し、4条5段になる可能性も残されている。しかし、宮内庁報告によると、全体構成の分かる資料は4条5段であり、2段目と4段目に2個の円形透かしが対向するように穿孔され、2段目と4段目では穿孔方向が直交する。

のことから、宮内庁調査による墳丘内の樹立円筒埴輪と外堤樹立円筒埴輪で、全体構成が異なる可能性も考えられる。また、先に見た底部から2段目に透かしがつくタイプは、宮内庁報告の4条5段に相当するものであり、口縁部から3段下に透かしがつく625のみ異なるタイプになるという想定もできる。この透かし位置がもたらす問題は、太田茶臼山古墳樹立円筒埴輪の規格にも関わる問題である。少なくとも625の資料から、宮内庁報告のタイプと異なるタイプの存在を考慮しなくてはならないであろう。今後の資料の増加を待ちたい。

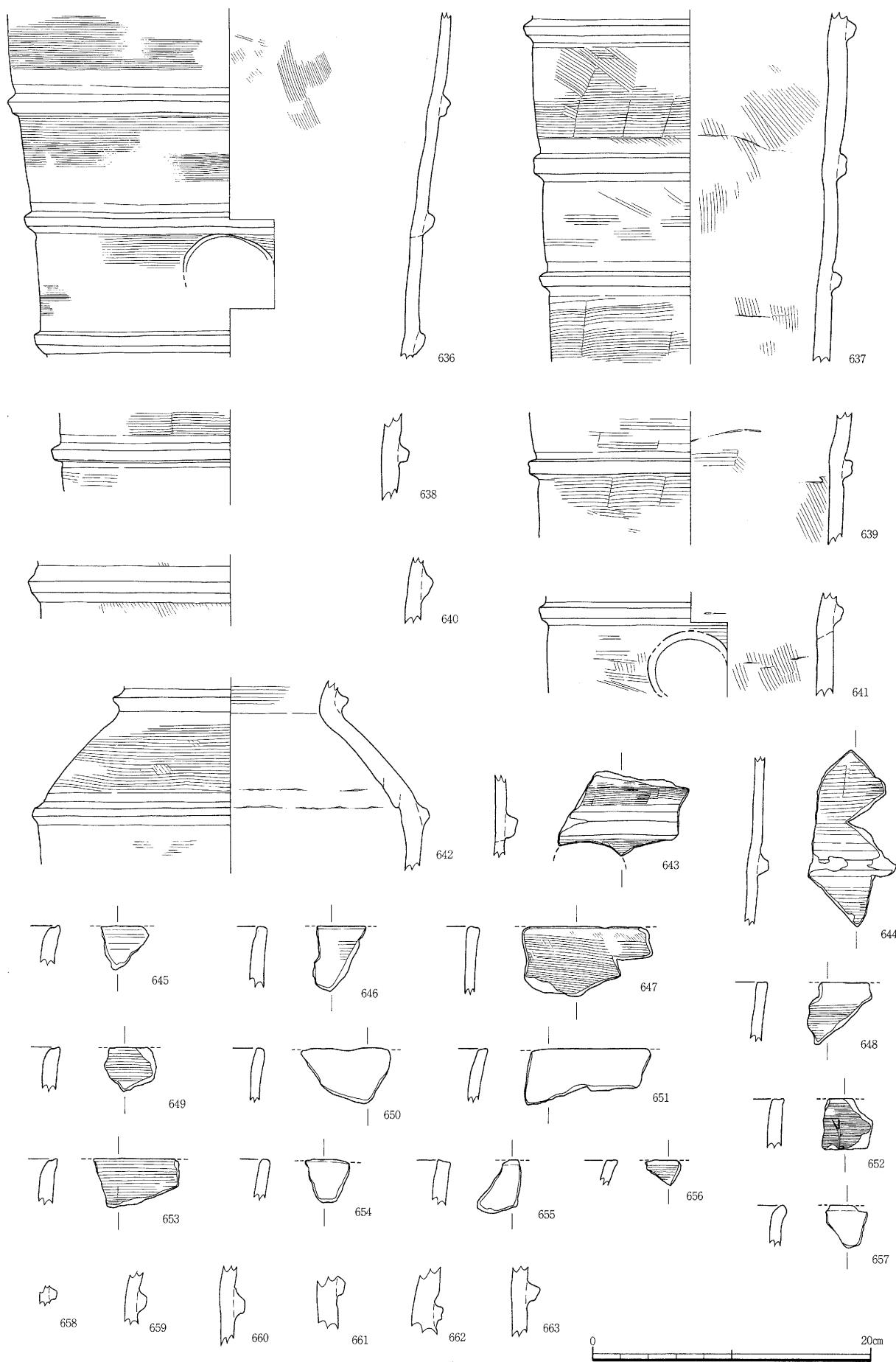
朝顔形円筒埴輪の資料は、642のみである。図化していない破片資料のなかにも朝顔部の資料は確認できなかった。このことから、上部を削平された埴輪列の検出であるため断定はできないが、外堤樹立埴輪列では20本程度の円筒埴輪に1本の割合で朝顔形円筒埴輪が樹立していたこと



第140図 太田茶臼山古墳出土埴輪 1



第141図 太田茶臼山古墳出土埴輪2



第142図 太田茶臼山古墳出土埴輪3

が想定できる。

色調は褐色または黄褐色で、摩滅を受けやすい焼成不良のものが多い。これは、宮内庁報告による焼成良好な円筒埴輪資料と比較しても異なるものであり、差が認められる。焼成窯や焼成時期などの違いなども考えられようが、前述した全体構成の違いや焼成の出来不出来によって樹立位置が意図的に違えられたことも推測できる。

4. 陪冢出土の埴輪（第143～145図、図版80～81）

A・B号陪冢からの出土埴輪は、摩滅を受けた断片的な資料が大半を占めており、また長い保管状況の中でA・B号陪冢各出土資料と特定できないこともあります、整理を断念せざるを得なかつた。そのため、有黒斑の埴輪片など、須恵質よりもより古い様相を示す埴輪の有無が注目されたが、確定はできない。ただし、両陪冢出土と思われる埴輪片の中に、有黒斑と見られるものはほとんど無いように思われる。

C号陪冢からはまとまった埴輪片が出土しており、整理の結果、形態など特徴がある程度わかりうるため、ここにその概要を報告したい。なお、B・C号陪冢では、形象埴輪の存在について先に触れたように前報告に記載があるが、確認できた保管資料のなかでは見い出すことができなかつた。

664から702は、すべてC号陪冢出土埴輪である。

まず、全体の様相がわかる資料について見てみる。669は3条4段構成であり、わずかに外に開きながら立ち上がるプロポーションである。器高は41.4cmを測る。底部高は10.0cm、2段目は10.0cm、3段目は10.9cm、口縁部高は10.5cmであり、各段ともほぼ均一の間隔設定であると考えられる。底部径は19.4cm、口縁部径は26.3cmである。口縁部は直立口縁であり、端面は水平である。底部から2段目に円形透かしを対向位置に一対穿孔している。外面調整は、B種ヨコハケであり、各段とも2周以上、口縁部は3周ヨコハケ工具をめぐらせていている。工具は下から上へと旋回しており、工具幅は5.6cm以上と推測される。3段目には、ヨコハケ後ナナメハケが部分的に施されている。内面調整は、全段通して縦・斜め方向のユビナデである。

670は、最下段はほとんど残存していないが、4段分が確認できる。口縁部径は32.2cmであり、3段分の間隔は下段から10.2cm、9.5cm、口縁部高9.6cmである。669と同様、各段ともほぼ均一の間隔である。外面調整はB種ヨコハケであり、体部2段は2周以上めぐらせてている。下から2段目のヨコハケは、らせん状にヨコハケを施していることが明瞭に観察されるが、そのヨコハケが残存部最下段の突帶の下にもぐっている。つまり、残存部最下段の突帶貼り付け以前に二次調整のヨコハケが施されたことを示しており、あるいは小工程の作業転換がこの付近で行われた可能性も考えられる。さらに、ヨコハケの工具幅は下から2段目で5.0cm、3段目で6.1cmと観察できることからも、同一個体の外面調整に複数の工具が用いられており、先に推測した小工程を境に工具が変更されているといえる。工具を工人個人が持つとすれば、複数の工人が関わっていた可能性も考えられる。

口縁部は直立口縁であり、端面は水平である。また、口縁部には一筆で刻んだ円形のヘラ記号が認められる。円形透かしが下から2段目に穿孔されている。669と同様3条4段であると考えれば2段目に相当するが、法量は669よりもかなり大きいことから、構成段数が異なっている可能性も考えられる。

この法量に関する問題については、資料群全体から今少し詳しく見てみる必要があろう。口縁部径については、665の25.8cm、667の23.0cm、668の27.0cm、669の26.3cmのように25cm前後のものから、666の30.0cmや670の32.2cmのように30.0cmを越える資料も存在する。これに対し、底部径は、675の14.4cmから682の22.2cmまでの間で収まっており、すべて小型円筒埴輪に属する。

底部の立ち上がり形態や全体的なプロポーションは、直立気味に立ち上がるか、やや外に開きながら立ち上がるプロポーションであり、底部径と口縁部径では大きな差があることが推測できる。ただし、670は直立にほぼ立ち上がるプロポーションであり、これに対応すると考えられる底部資料は見当たらない。

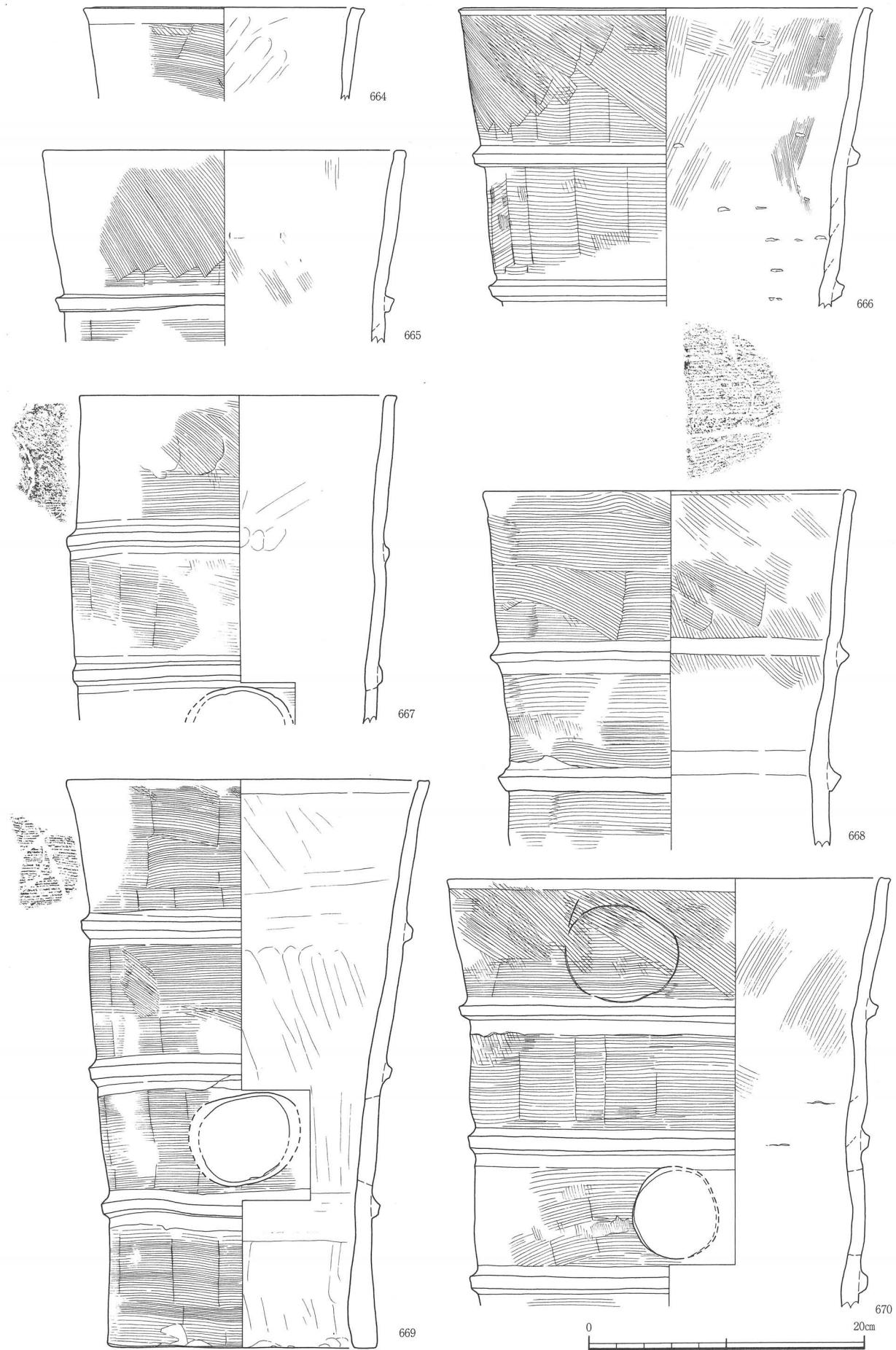
のことから、C号陪冢には669のような3条4段の小型円筒埴輪が基本的に用いられていたと考えられるが、部分的に670のように法量の大きい埴輪もわずかに樹立していた可能性が考えられる。ただし、太田茶臼山古墳外堤がすぐ西側に隣接しているので、何らかの原因による混入の疑いも残る。

次に、先に見た資料も含め、各属性の特徴について見てみることにする。口縁部の形態は直立口縁であり、端部の形態は端面を水平にするが、調整時の指腹押圧により凹みをわずかにもたせている資料が多い。口縁部の外面調整では、B種ヨコハケを主とするが、ナナメハケを施す例も多い。例えば、665ではナナメハケ、666・667・670ではB種ヨコハケのうち上半部を中心にナナメハケを施している。669はヨコハケを3周めぐらせている。また、668はヨコハケを螺旋状にきつくりめぐらすために整然としないハケ調整となっており、底部から体部にかけてのハケ目調整と異なり、整然としたハケ目の規則性が保たれていない。684から702で示した口縁部の小片資料でも、外面調整は大半の685から688・691から702でナナメハケを施しており、そのほかはヨコハケを施している。

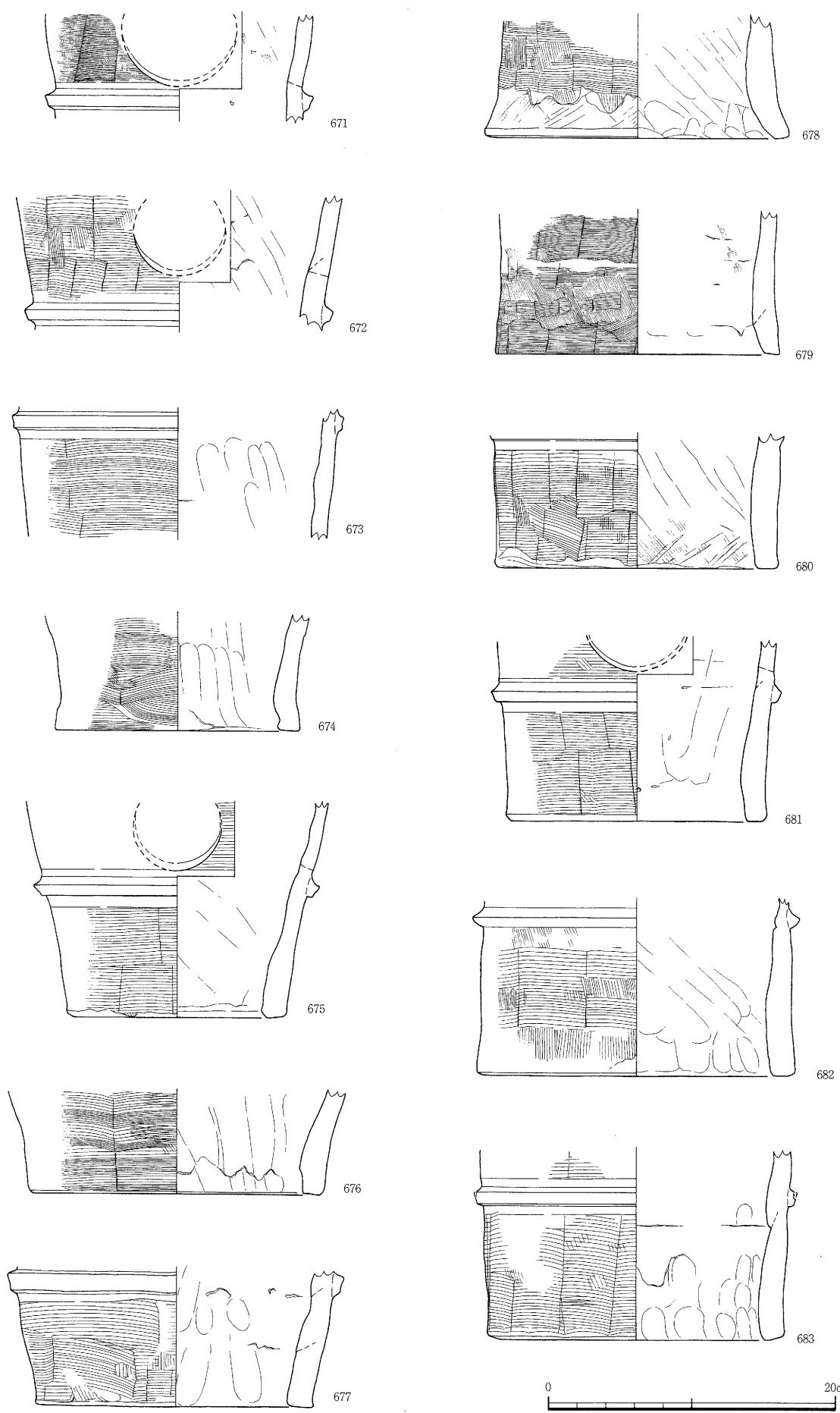
体部は、後述する底部と同様、外面調整はB種ヨコハケを基本としているが、底部よりも雑なヨコハケも観察される。668では、下から1・2段目とも切り合いを持つヨコハケである。

底部は、前述したように径が14.4cmから22.2cmまでの間に収まる小型である。外面調整はすべてB種ヨコハケであり、すべて2周以上ハケ目工具をめぐらせている。また、ヨコハケは底端から丁寧に施している例が多いが、部分的に一次調整タテハケを残すものも見られる。また、682では、底部下端から3.0cmと突堤下1.5cm程度の範囲をまったくヨコハケを施しておらず、底部高の中央部を1周めぐらせているのみである。内面調整は、ほとんどが縦・斜め方向のユビナデである。底部高は、8.7cmから11.0cmの間で収まる。

底部は、ほぼ垂直かわずかに開き気味に立ち上がる。内面調整はナナメハケが主であり、ユビ



第143図 C号陪冢（宮内庁と号）出土埴輪 1



第144図 C号陪冢（宮内庁と号）出土埴輪2